栗毛坂遺跡群

前藤部遺跡

――長野県北佐久郡御代田町前藤部遺跡発掘調査報告書――

1999. 3

㈱オークサ・マテックス
長野県御代田町教育委員会

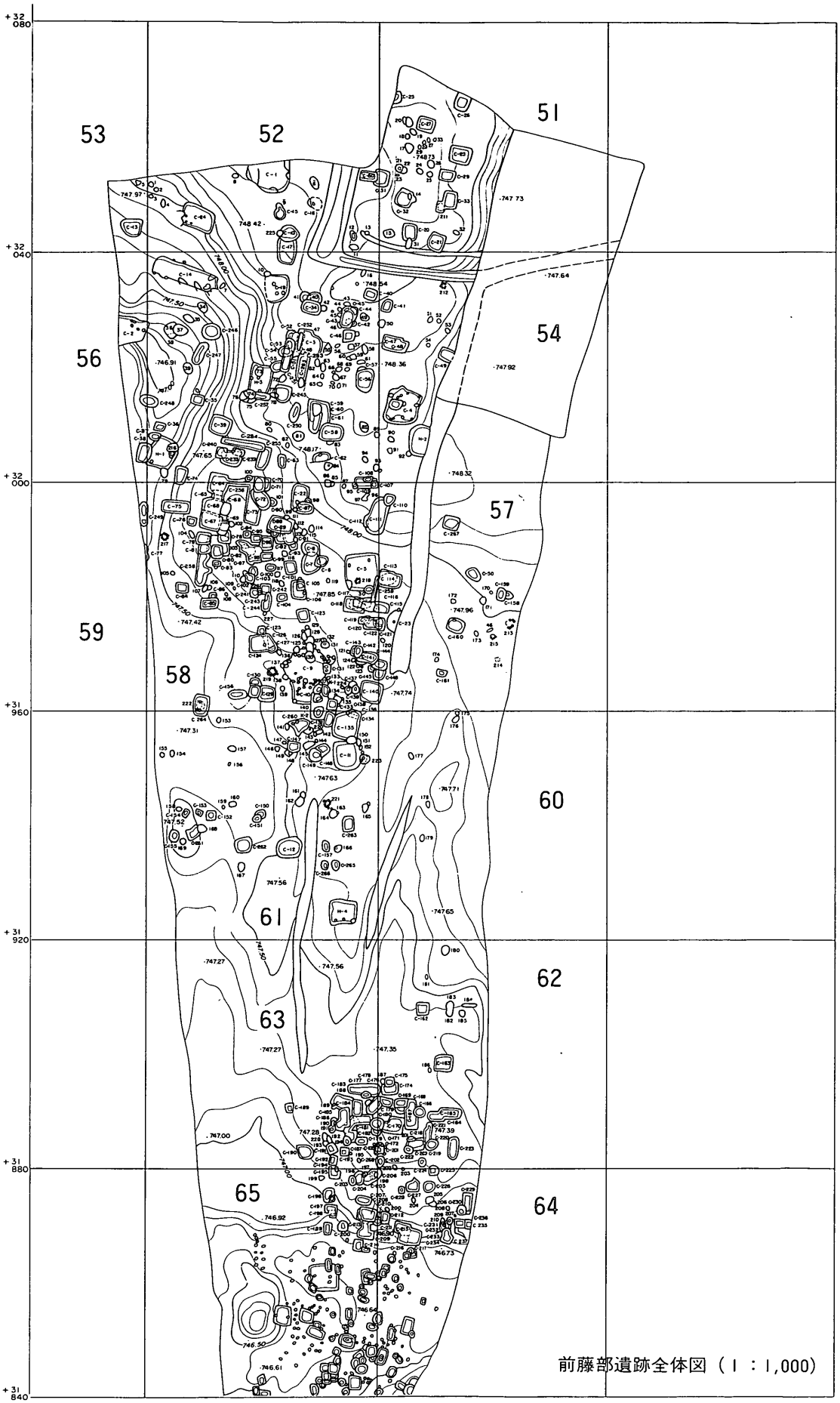
栗毛坂遺跡群

前藤部遺跡

――長野県北佐久郡御代田町前藤部遺跡発掘調査報告書――

1999. 3

㈱オークサ・マテックス
長野県御代田町教育委員会



前藤部遺跡全体図（1：1,000）

解　説

1　本書では、1997年に発掘調査した長野県北佐久郡御代田町前藤部遺跡の発掘調査成果が分かります。

2　遺跡の性格　集落遺跡

3　集落の時期　平安時代　後半　11世紀後半から12世紀前半
中世　室町時代　14世紀後半から15世紀前半　が多い。

4　集落内の遺構　竪穴住居跡、竪穴倉庫跡、掘立柱建物跡、鍛冶炉、土坑（穴）など。
特に竪穴構造の建物が多い。

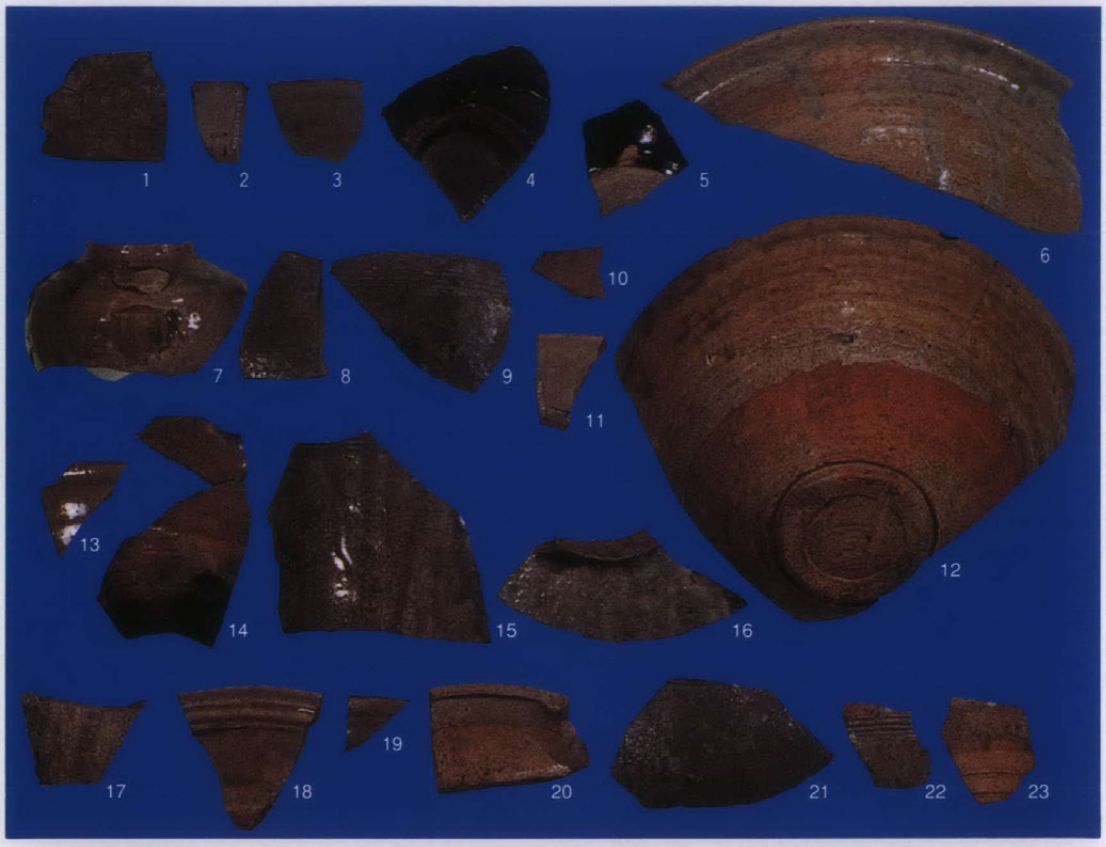
5　出　土　品　平安時代の土器―須恵器、土師器、灰釉陶器、磁器など
中世の土器―素焼きのかわらけ、内耳鍋、陶磁器など
中世の石製品―石臼、茶臼、石擂り鉢、砥石、硯など
中世の鉄製品―小刀、釘、鑿、毛針など
中世の銅製品―刀の鞘の足金物など

6　陶磁器の産地　国産―常滑、古瀬戸、中津川、珠洲など
輸入―中国　龍泉窯系青磁、白磁など

7　遺跡の性格　主な住居に竪穴構造のものを採用していることから城館とは考えられない。しかし、陶器に古瀬戸の瓶子など一般集落にあまり多く見られないものも含まれるため、単純に一般集落と決めつけてしまうこともできない。

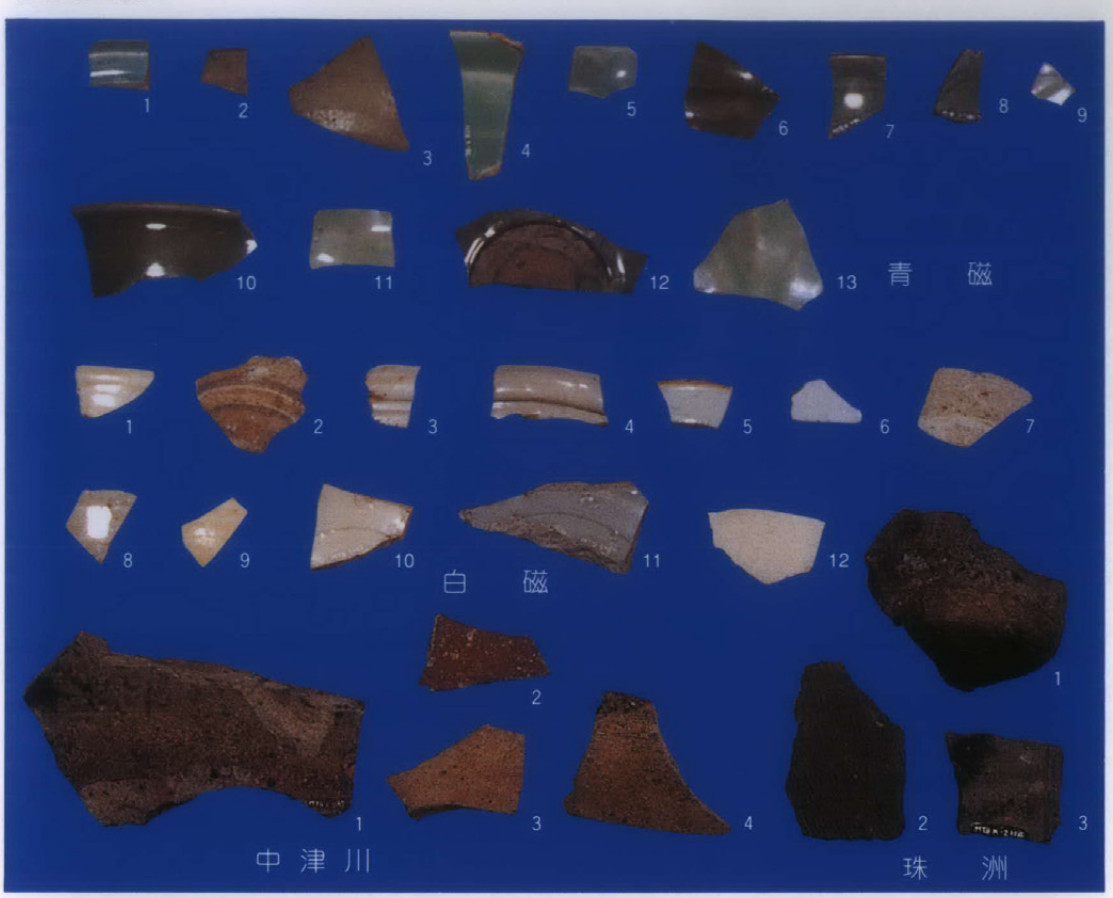
1．空中写真（浅間山を背景に）

2．空中写真（遺跡全景）



1．古瀬戸製品（1：3）

2．古瀬戸製品（1：3）

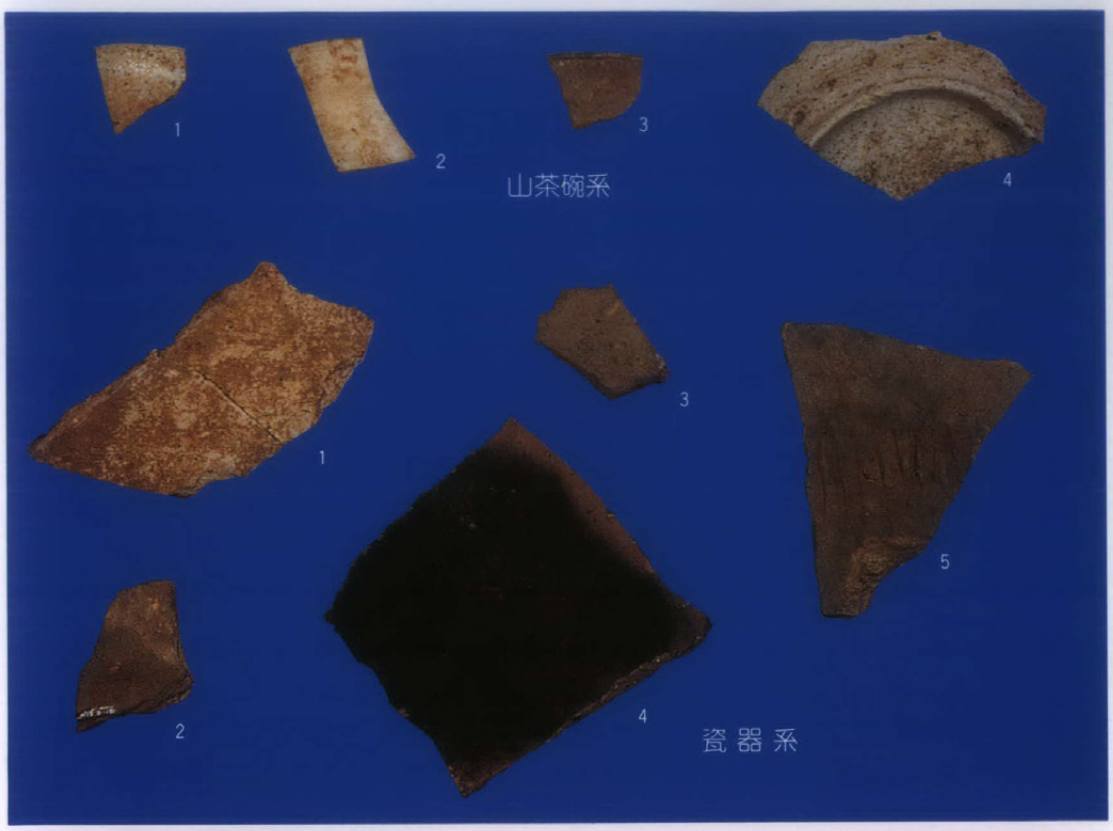


1．青磁・白磁・中津川・珠洲（1：3）

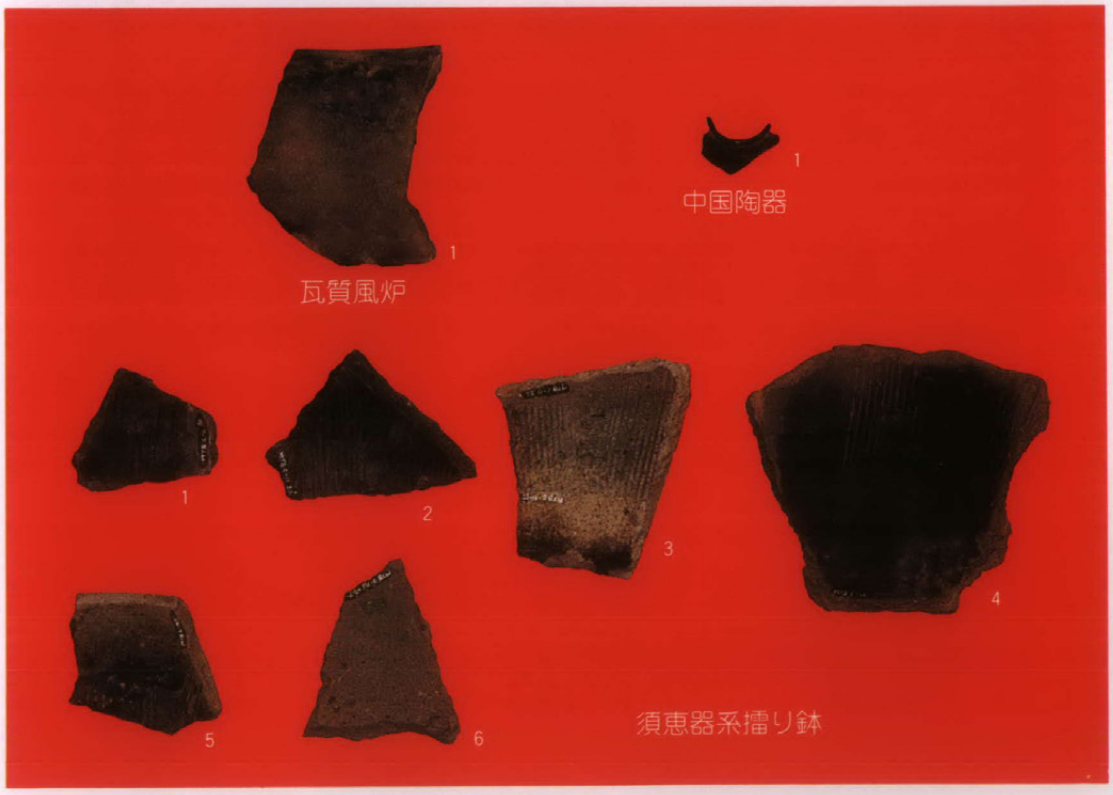
2．常滑製品（1：4）

1．常滑製品（1：4）

2．常滑製品（1：4）

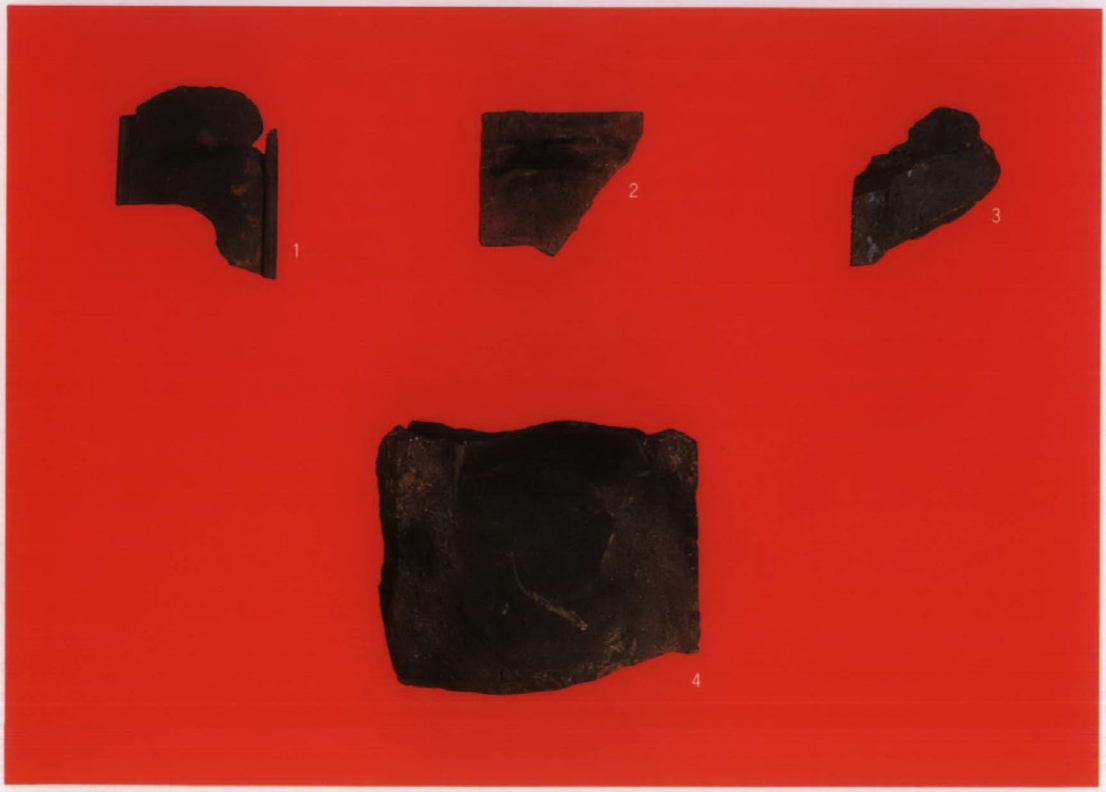


1．山茶碗系・瓷器系製品（1：3）



2．瓦質風炉・中国陶器・須恵器系製品（1：3）

1．銅・鉄製品（1：3）



2．硯　（1：3）

1．砥　石（1：3）

2．砥　石（1：3）

前藤部遺跡出土古瀬戸製品一覧表

番号	検出遺構	産地（窯）	器種	部位	製作年代	備考
1	55・くD	古瀬戸	瓶類	体部	?	
2	55・けF　P.15	古瀬戸	おろし皿	口縁部	13C	
3	57・きE	古瀬戸	平碗	口縁部	14C後～15C前	
4	58・きD	古瀬戸	平碗	底部	14C後	付高台
5	58・きI	古瀬戸	天目茶碗	体部	15C中	
6	62・こJ	古瀬戸	折縁深皿	口縁～底部	14C後	
7	C－100	古瀬戸	水注	口縁部	14C	
8	C－12	古瀬戸	瓶子	肩部	13C	
9	C－12	古瀬戸	瓶子	胴部	13C後	
10	C－128	古瀬戸	平碗	体部	14C後～15C前	
11	C－129	古瀬戸	おろし皿	口縁部	14C	
12	C－15　No.1	古瀬戸	平碗	口縁～底部	14C末～15前	
13	C－156	古瀬戸	平碗	体部	14C後～15C前	
14	C－156	古瀬戸	平碗	体部	14C後～15C前	
15	C－161	古瀬戸	瓶子	体部	14C	
16	C－165	古瀬戸	四耳壺？	肩部	13C	
17	C－17　II区	古瀬戸	瓶類	体部	13C	
18	C－23　No.2	古瀬戸	鉢	口縁部	14C末	後期様式2段階
19	C－241	古瀬戸	平碗	口縁部	14C後～15C前	
20	C－244	古瀬戸	おろし皿	口縁部	15C前	
21	C－262	古瀬戸	瓶子	体部	14C	
22	C－264	古瀬戸	水注	体部	14C前	
23	C－264	古瀬戸	平碗	体部	?	
24	C－27　覆土	古瀬戸	水注？	口縁部	14C	
25	C－4	古瀬戸	瓶類	底部	14C前？	水注か
26	C－40	古瀬戸	天目茶碗	口縁部	14C	
27	C－5　S区	古瀬戸	平碗	口縁部	14C後	
28	C－5　S区	古瀬戸	折縁深皿	口縁～体部	14C後	
29	C－5　S区	古瀬戸	瓶類	体部	13C	
30	C－78	古瀬戸	平碗	口縁部	14C後～15C前	
31	C－78	古瀬戸	平碗	口縁部	14C後～15C前	
32	C－79	古瀬戸	平碗	口縁部	14C後～15C前	
33	C－8	古瀬戸	瓶類	体部	13C	
34	C－80	古瀬戸	瓶子	体部	14C	
35	C－81	古瀬戸	瓶子	体部	14C	
36	C－82	古瀬戸	平碗	体部	14C後～15C前	
37	C－87	古瀬戸	平碗	体部	14C後～15C前	
38	C－87	古瀬戸	平碗	体部	?	
39	C－9	古瀬戸	平碗	口縁部	13C後	
40	D－124	古瀬戸	天目茶碗	体部	?	
41	D－207	古瀬戸	折縁深皿	口縁・底部	14C後	
42	D－21	古瀬戸	おろし皿	体～底部	14C～15C	
43	D－211　配石	古瀬戸	天目茶碗	口縁部	15C中	
44	D－225	古瀬戸	平碗	口縁部	14C後	
45	K－1	古瀬戸	四耳壺	底部	13C	
46	K－1	古瀬戸	鉢	体部	14C～15C	
47	K－2　W	古瀬戸	平碗	口縁部	14C～15C	
48	K－2付近	古瀬戸	平碗か鉢	体部		
49	M－1	古瀬戸	水注	底部	14C	

前藤部遺跡出土青磁製品一覧表

番号	検出遺構	産地（窯）	器種	部位	製作年代	備考
1	C－132	青磁（龍泉窯系）	盤	口縁部	13C	
2	C－202	青磁	碗	口縁部	?	小片のため
3	C－49	青磁	碗	体部	?	
4	C－82	青磁（龍泉窯系）	盤	口縁部	13C	
5	C－87	青磁（龍泉窯系）	碗	口縁部	13C後～14C前	
6	D－134	青磁（龍泉窯系）	碗	口縁部	13C	蓮弁文　I－5b類
7	D－172	青磁	碗	口縁部	14C後～15C前	
8	D－188	青磁（龍泉窯系）	碗	口縁部	12C後	画花文
9	D－191	青磁（龍泉窯系）	碗	口縁部	13C	I－5b類蓮弁文
10	K－1	青磁	碗	口縁部	14C後～15C前	
11	C－11	青磁（龍泉窯系）	碗	体部	13C	I－5b類
12	C－263	青磁（龍泉窯系）	碗	底部	13C	大宰府I－5b類
13	P.2	青磁（龍泉窯系）	碗	体部	13C	I－5b類蓮弁文

前藤部遺跡出土白磁製品一覧表

番号	検出遺構	産地（窯）	器種	部位	製作年代	備考
1	55・あJ	白磁	碗	口縁部	11C後～12C前	II類
2	62・こJ	白磁	碗	底部	11C後～12C前	大宰府IV類
3	C－114	白磁	碗	口縁部	11C後～12C前	大宰府IV類
4	C－164	白磁	碗	口縁部	11C後～12C前	大宰府IV類
5	C－199	白磁	口剝げの皿	口縁部	13C後～14C後	
6	C－217	白磁	碗	体部	?	中世
7	C－41	白磁	碗	体部	11C後～12C前	大宰府IV類
8	C－47北覆土	白磁	碗	体部	11C後～12C前	大宰府IV類
9	C－84	白磁	碗	体部	11C後～12C前	大宰府IV類
10	C－88	白磁	碗	体部	11C後～12C前	大宰府IV類
11	C－9	白磁	碗－鉢？	体部	11C後～12C前	大宰府IV類
12	D－225	白磁	皿	体部	14C後～15C前	

前藤部遺跡出土中津川製品一覧表

番号	検出遺構	産地（窯）	器種	部位	製作年代	備考
1	C－185	中津川	甕	体部	13C後～14C前	
2	C－88	中津川	甕	体部	13C後～14C前	
3	D－116	中津川	甕	体部	13C後～14C前	
4	D－116	中津川	甕	体部	13C後～14C前	

前藤部遺跡出土珠洲製品一覧表

番号	検出遺構	産地（窯）	器種	部位	製作年代	備考
1	C－164	珠洲	壺	体～底部	?	
2	C－47北覆土	珠洲	壺	体部	?	
3	K－2付近	珠洲	擂り鉢	体部	13C後～14C前	

前藤部遺跡出土常滑製品一覧表(1)

番号	検出遺構	産地（窯）	器種	部位	製作年代	備考
1	54・こC	常滑	甕	体部	?	
2	55・あE	常滑	甕	体部	?	
3	55・えB	常滑	甕	体部	?	
4	57・くG	常滑	甕	体部	?	
5	61・おD	常滑	甕	体部	?	
6	63・いJ	常滑	甕	体部	?	
7	C－106	常滑	甕	体部	?	
8	C－115	常滑	甕	底部	?	
9	C－134	常滑	甕	体部	?	
10	C－149	常滑	甕	体部	?	
11	C－15　No.1	常滑	甕	口縁部	14C後	
12	C－162	常滑	甕	体部	?	
13	C－166	常滑	甕	底部	?	
14	C－168	常滑	甕	体部	?	
15	C－170	常滑	甕	体部	?	
16	C－172	常滑	甕	体部	?	
17	C－174	常滑	甕	体部	?	
18	C－174	常滑	甕	体部	?	
19	C－2	常滑	甕	体部	?	
20	C－205	常滑	甕	口縁部	12C後	珍しい
21	C－227　No.1	常滑	甕	底部	?	中世
22	C－233	常滑	甕	体部	?	
23	C－237	常滑	甕	体部	?	
24	C－247	常滑	甕	体部	?	
25	C－26	常滑	甕	体部	?	
26	C－269	常滑	甕	体部	?	
27	C－269	常滑	甕	体部	?	
28	C－27	常滑	甕	体部	?	
29	C－27	常滑	甕	体部	?	
30	C－27	常滑	甕	口縁部	14C後	
31	C－27	常滑	甕	体部	?	
32	C－27	常滑	甕	体部	?	
33	C－27　覆土	常滑	甕	体部	?	
34	C－27　覆土	常滑	甕	体部	?	
35	C－32	常滑	甕	体部	?	
36	C－32	常滑	甕	体部	?	
37	C－4	常滑	甕	体部	?	
38	C－4	常滑	甕	体部	?	
39	C－41	常滑	甕	体部	?	
40	C－47北覆土	常滑	甕	体部	?	
41	C－47北覆土	常滑	甕	体部	?	
42	C－5　S区	常滑	甕	体部	?	
43	C－5　S区	常滑	甕	体部	?	
44	C－62	常滑	甕	口縁部	14C末～15C前	小片のため
45	C－62	常滑	甕	口縁部	14C末～15C前	
46	C－62	常滑	甕	口縁部	14C末～15C前	
47	C－62	常滑	甕	口縁部	14C末～15C前	
48	C－63	常滑	甕	体部	?	
49	C－63	常滑	甕	底部	?	
50	C－66，67	常滑	甕	口縁部	14C後	
51	C－66，67	常滑	甕	口縁部	14C後	
52	C－72	常滑	甕	体部	?	
53	C－79	常滑	甕	体部	?	
54	C－8	常滑	甕	体部	?	
55	C－8	常滑	甕	体部	?	
56	C－8	常滑	甕	体部	?	
57	C－87	常滑	甕	口縁部	14C後	
58	C－9	常滑	甕	体部	?	

前藤部遺跡出土常滑製品一覧表(2)

番号	検出遺構	産地（窯）	器種	部位	製作年代	備考
59	C－9	常滑	甕	口縁部近く	?	
60	C－91	常滑	甕	体部	?	
61	C－6	常滑	甕	体部	?	
62	D－101	常滑	甕	体部	?	
63	D－130	常滑	甕	体部	?	
64	D－140	常滑	甕	口縁部	14C	
65	D－180	常滑	甕	体部	?	
66	D－188	常滑	甕	体部	?	
67	D－188	常滑	甕	体部	?	
68	D－188	常滑	甕	体部	?	
69	D－225	常滑	捏ね鉢	口縁部	14C	
70	D－226	常滑	甕	体部	?	
71	D－226	常滑	甕	体部	?	
72	D－226	常滑	甕	体部	?	
73	D－40	常滑	甕	底部	?	
74	H－4	常滑	甕	口縁部	14C前	
75	表採	常滑	甕	体部	?	
76	表採	常滑	甕	体部	?	
77	表採	常滑	甕	体部	時期不明	
78	C－15　No.1	常滑？	甕	体部	14C後	車輪印刻

前藤部遺跡出土山茶碗系製品一覧表

番号	検出遺構	産地（窯）	器種	部位	製作年代	備考
1	D－188	東海系南部尾張	山茶碗	口縁部	13C前	
2	C－191	東海系南部尾張	山茶碗	口縁部	13C後～14C前	
3	C－188	美濃・瀬戸・中津川	山茶碗系捏ね鉢	口縁部	13C後	
4	C－227　No.2	美濃・瀬戸・中津川	山茶碗系捏ね鉢	底部	13C後	

前藤部遺跡出土瓷器系製品一覧表

番号	検出遺構	産地（窯）	器種	部位	製作年代	備考
1	C－200	瓷器系	甕	体部	中世	
2	C－208	瓷器系	甕	体部	中世	
3	D－191	瓷器系	甕	体部	中世	
4	D－40	瓷器系	甕	体部	中世	
5	C－185	瓷器系	瓶	体部	中世	

前藤部遺跡出土中国産陶器一覧表

番号	検出遺構	産地（窯）	器種	部位	製作年代	備考
1	C－132	中国陶器	薬入れ	口縁部	中世　14C以降	

前藤部遺跡出土瓦質土器一覧表

番号	検出遺構	産地（窯）	器種	部位	製作年代	備考
1	58・おJ	瓦質	風炉	口縁・体部	中世　15C	

前藤部遺跡出土在地産須恵器系擂り鉢一覧表

番号	検出遺構	産地（窯）	器種	部位	製作年代	備考
1	C－11　S区	在地産須恵器系	擂り鉢	体部	14C	内耳とつくり同じ
2	C－11　S区	在地産須恵器系	擂り鉢	体部	14C	内耳とつくり同じ
3	C－11　S区	在地産須恵器系	擂り鉢	体部	14C	
4	C－12	在地産須恵器系	擂り鉢	体～底部	14C後～15C前	
5	C－149	在地産須恵器系	擂り鉢	体～底部	13C後	
6	D－213　No.1	在地産須恵器系	擂り鉢	体部	14C	

例　　言

1　長野県北佐久郡御代田町所在の前藤部遺跡の発掘調査報告書である。

2　本発掘調査は、株式会社オークサ・マテックスの委託を受け、御代田町教育委員会が実施した。

3　本発掘調査の概要については、第Ⅰ章に記してある。

4　本発掘調査報告書作成の作業分担は以下のとおりである。

◎　遺物復原　　神蔵惇子、砂連尾恵美子、中込輝子
◎　遺物実測　　鳥居　亮、神蔵惇子、砂連尾恵美子、中込輝子
◎　遺物拓本　　神蔵惇子、砂連尾恵美子、中込輝子
◎　遺物トレース　　鳥居　亮、砂連尾恵美子、神蔵惇子、中込輝子
◎　遺構トレース　　鳥居　亮、砂連尾恵美子、神蔵惇子、中込輝子
◎　遺構写真撮影　　堤　隆、小山岳夫
◎　遺物写真撮影　　小山岳夫
◎　遺物観察表作成　小山岳夫
◎　版組み　　小山岳夫

5　本書に掲載した空中写真は、㈱朝日航洋が撮影したものである。

6　本書の執筆分担については、文責を目次に明記した。なお、獣骨に関する分析では群馬県立大間々高校教諭 宮崎重雄先生から玉稿を賜った。

7　本書の編集は、御代田町教育委員会の責任のもとに、小山岳夫が行った。

8　本調査・本報告書作成に際し、陶磁器の分類等で長野県埋蔵文化財センター市川隆之氏から絶大なご援助を賜った。

また、以下の方々から貴重な御助言・御配慮を得た。御芳名を記して厚く御礼申し上げる次第である。

（順不同・敬称略）

桐原健、山下誠一、花岡弘、臼田武正、寺島俊郎、村田健二、浅野晴樹、伊藤敏行、百瀬長秀

凡　　例

1　遺構の略称　古代（平安時代）の竪穴住居跡　―　H

中世の竪穴遺構（住居・倉庫等を含む）　―　C

土　　坑（中世主体）　―　D

鍛　冶　炉（中世）　―　K

溝　状　遺　構（時期不明）　―　M

2　挿図の縮尺

竪穴住居跡・竪穴遺構・土坑＝１：80

土器＝１：４。　金属器・石器＝１：１（釘）、１：３（刀子・硯・砥石）、

１：４（磨石・凹石・石擂り鉢・石臼・茶臼）。

以上が基本的なものである。これ以外のものも含めて挿図中にその縮尺を明示してある。

3　図版の縮尺

遺構写真の縮尺については統一されていない。

遺物写真の縮尺については、図版中に記した。

4　遺構面積の計測にはプラニメーターを用い、３回の計測の平均値を面積として示した。

5　出土遺物一覧表＜石器＞の法量は、－は不明、（　）が現存値、（　）がない場合は完存値を表す。単位は、cm・gである。

6　遺構の覆土・遺物胎土の色調については、『新版標準土色帖』の表示に基づいて示した。

7　挿図中におけるスクリーントーンは以下のものを表す。

(1)遺構

遺構断面＝斜線　　焼土・炭化物＝網

目　　次

解　説
例　言
凡　例
目　次

Ⅰ．発掘調査の概要……1
　1　発掘調査の概要……3
　　(1)　調査に至る動機……3
　　(2)　発掘調査の概要……3
　　(3)　発掘区の設定と遺構の検出……4
　　(4)　発掘調査日誌……5
Ⅱ．遺跡の環境……7
　1　遺跡の環境……9
　2　層　　序……11
Ⅲ．遺構と遺物……13
　1　遺　　構……15
　　(1)　遺構の分類……15
　　(2)　古代の竪穴住居跡……15
　　1　Ｈ－１号竪穴住居跡……16
　　2　Ｈ－２号竪穴住居跡……17
　　3　Ｈ－３号竪穴住居跡……18
　　4　Ｈ－４号竪穴住居跡……19
　　(3)　中世の竪穴遺構……20
　　1　Ｃ－１～12号竪穴遺構……20
　　2　Ｃ－13～23号竪穴遺構……28
　　3　Ｃ－24～267号竪穴遺構……30
　　(4)　中世の鍛冶関連遺構……75
　　1　Ｋ－１・２号鍛冶炉……75
　　(5)　土　　坑……76

(6) 溝……76
2 遺　物……98
(1) かわらけ……98
(2) 内耳鍋・擂り鉢……98
(3) その他の素焼き製品……98
1 羽釜・円版・羽口……98
(4) 陶 磁 器 ……100
(5) 鉄・銅製品 ……102
1 釘 ……102
2 足金物・柄頭・鑿・刀子・毛針 ……102
(6) 石 製 品 ……102
1 硯 ……102
2 砥　石 ……102
3 磨　石 ……103
4 凹石・石擂り鉢 ……103
5 石臼・茶臼 ……109
(7) 貨　幣 ……111
(8) 人　骨 ……112
(9) 獣　骨 ……112
(10) 貝 ……112
D－152号土坑出土人骨について ……群馬県立大間々高等学校　宮崎重雄　113
御代田町前藤部遺跡出土の獣骨 ……群馬県立大間々高等学校　宮崎重雄　116
3 遺構と遺物のまとめ ……120
IV. 写真図版

I

発掘調査の概要

1　発掘調査の概要

(1)　調査に至る動機

平成８年、長野県北佐久郡御代田町大字御代田　通称小田井地区において、大規模ショッピングセンター建設が計画された。

一方、この地域は古代集落が密集する栗毛坂遺跡群として周知されており、その保護問題が表面化してきた。このため、その原因者である株式会社オークサ・マテックスと、保護部局である御代田町教育委員会の二者において話し合いがもたれ、遺跡群内の前藤部遺跡の緊急発掘調査を実施し、記録保存をはかることとなった。

(2)　発掘調査の概要

1　遺　跡　名　栗毛坂遺跡群前藤部遺跡（まえとうぶいせき）

2　所　在　地　北佐久郡御代田町大字御代田字前藤部

3　発掘期間　（平成８年度）平成９年２月27日～平成９年３月31日
　　（平成９年度）平成９年４月２日～平成９年６月６日

4　整理期間　（平成９年度）平成９年６月９日～平成10年３月31日
　　（平成10年度）平成10年４月８日～平成11年３月31日

5　発掘理由　平成９年度小田井ショッピングセンター建設事業に伴い、栗毛坂遺跡群前藤部遺跡の破壊が予想されるため、緊急発掘調査を実施し記録保存を行う。

6　発掘方針　広大な調査対象区について、居住域・生産域・墓域等全体の検出に努める。

7　費用負担　年度別調査費用は下記のとおり。すべてを㈱オークサ・マテックスが負担した。

平成８年度	3,380,000円
平成９年度	6,900,000円
平成10年度	3,250,000円
合　　計	13,530,000円

8　事　務　局　◎教育次長　土屋和雄（平成８・９年度）、堀籠泰久（平成10年度）
　　◎社会同和教育係長　茂木康生
　　◎社会同和教育係　荻原　浩、堤　隆、小山岳夫

9　調　査　団
　　団　長　柳沢忠良（御代田町教育長）

担当者　堤　隆・小山岳夫（御代田町教育委員会）

調査員　鳥居　亮

作業員　神蔵惇子、砂連尾恵美子、中込輝子、市村公子、甘利和哉、
ポーラ　ゴッドビーヒア、宮沢淳也

シルバー人材センター派遣職員
塩川ヨシ子、浜島みよ子、渡辺ふみ子、山口安子、山岸　修、花房茂治、
古越信一、大井佐一、佐藤つねよ、佐藤まき子、甘利百枝、柳沢悦三、
竹内すぎ、高瀬恵美子、
土屋とめ子

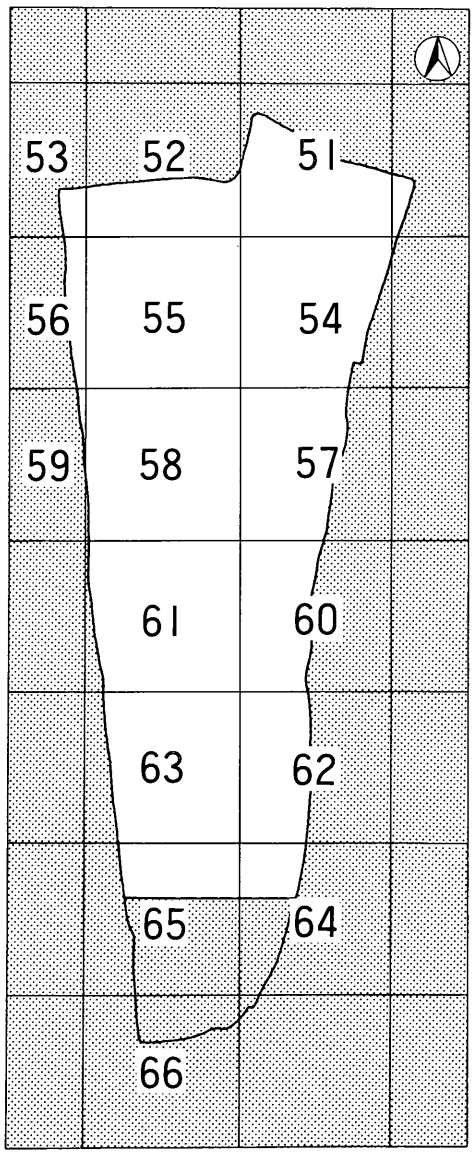
(3)　発掘区の設定と遺構の検出

本調査の発掘区については第１図に示したとおりで、約12,600㎡が該当する。

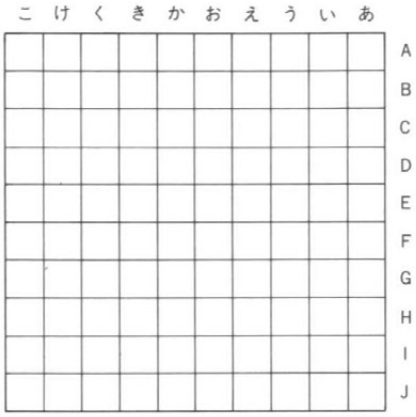
発掘区の区割りについては佐久市の発掘区との整合が図れるよう同一の基準点を用いて40ｍ方眼の大グリッドを設定した。この大グリッドは御代田町分については51から64までである。大グリッド内は遺構測量の都合上さらに４ｍ四方の小グリッドに細分した。小グリッド名はＹ軸については北からＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆ……Ｊ、Ｘ軸については西からあ・い・う・え・お・か……こ、とした。

調査は砂層上において当初から遺構の存在が確実視されたため、試掘を行わずに最初から調査対象区の全面の表土を除去した。砂層上から検出された遺構の概要は第１表のとおりである。

また、砂層上調査終了後、砂層内と砂層下の遺構の有無について、トレンチを幾筋も入れて試掘確認調査を実施したが、明瞭な遺構は検出されなかった。仮にトレンチにかからなかった遺構が存在するとしても後述するように砂の堆積が厚いため、地下遺構には影響がないと判断し、トレンチ掘削終了時に今回の調査を終了とした。



第１図　前藤部遺跡の発掘区と大グリッドの設定　１マス40ｍ四方（１：2,000）



第２図　小グリッドの設定
１マス４ｍ四方（１：800）

第１表　前藤部遺跡の検出遺構数

時期＼遺構	竪穴住居	竪穴遺構	土　坑	溝
平　安	4			
中　世		269	228	
不　明				4
計	4	269	228	4

(4)　発掘調査日誌

（平成８年度）　**平成９年２月27日～平成９年３月31日**

重機による表土除去および一部検出・掘り下げ作業を行った。

プレハブ設営、電話仮設、水道・電気工事も行った。

（平成９年度）　**平成９年４月２日～平成９年６月６日**

発掘作業開始。以後６月６日の調査終了時まで、遺構検出、掘り下げ作業、測量作業、写真撮影の繰り返し。航空測量後、砂層下の遺構確認のため、試掘調査を行い遺構が検出されなかったため発掘調査を終了。

平成９年６月９日～平成10年３月31日

遺構図面および写真の整理作業。出土品の水洗・注記・復原作業等基礎的な作業を行った。

第３図　発掘の風景

平成10年４月８日～平成11年３月31日

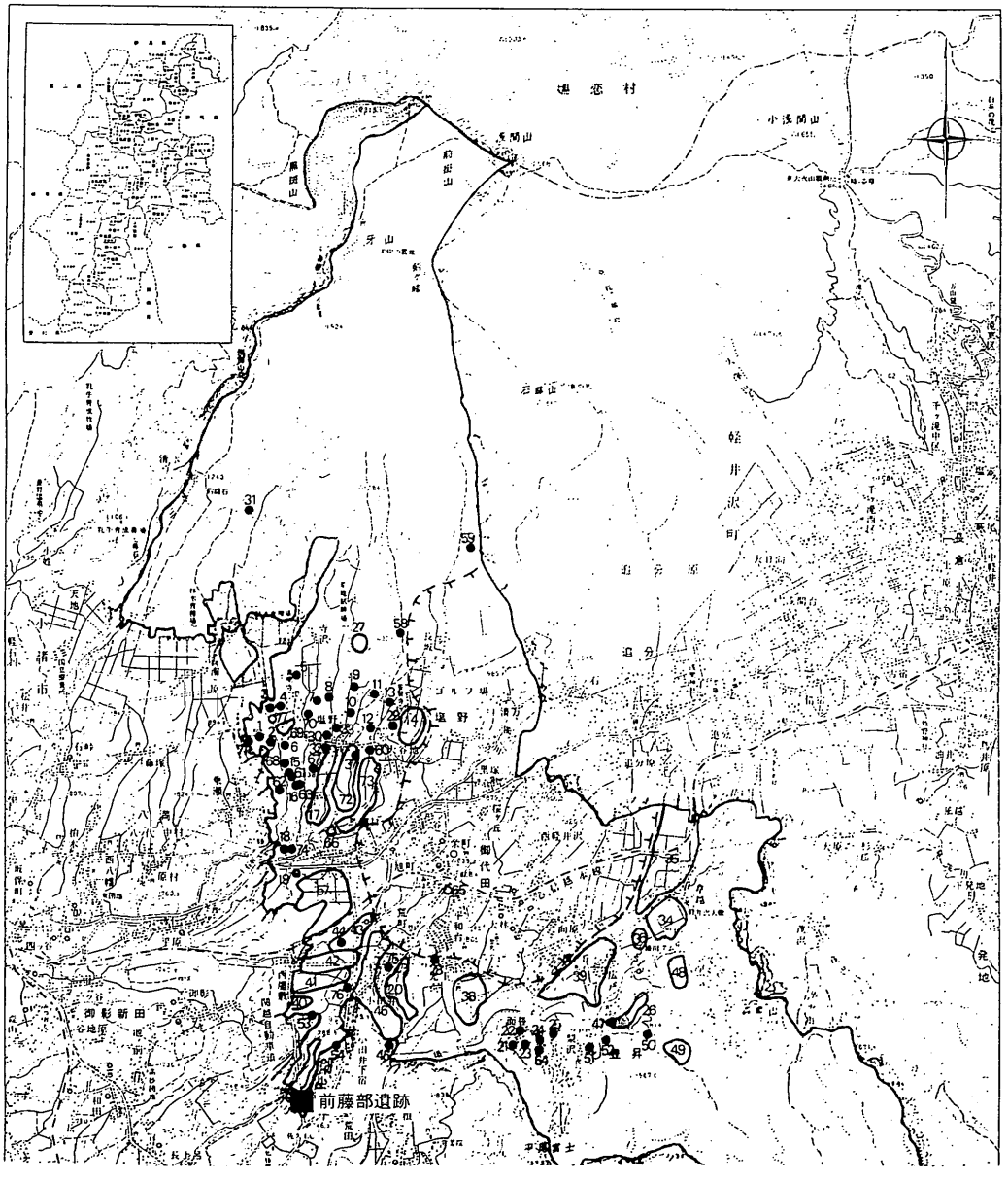
遺物の実測・トレース、版下の作成、遺物写真の撮影、属性表の作成、原稿執筆、報告書の編集作業。

入稿後は、校正作業等を行い、発掘調査報告書の刊行となる。

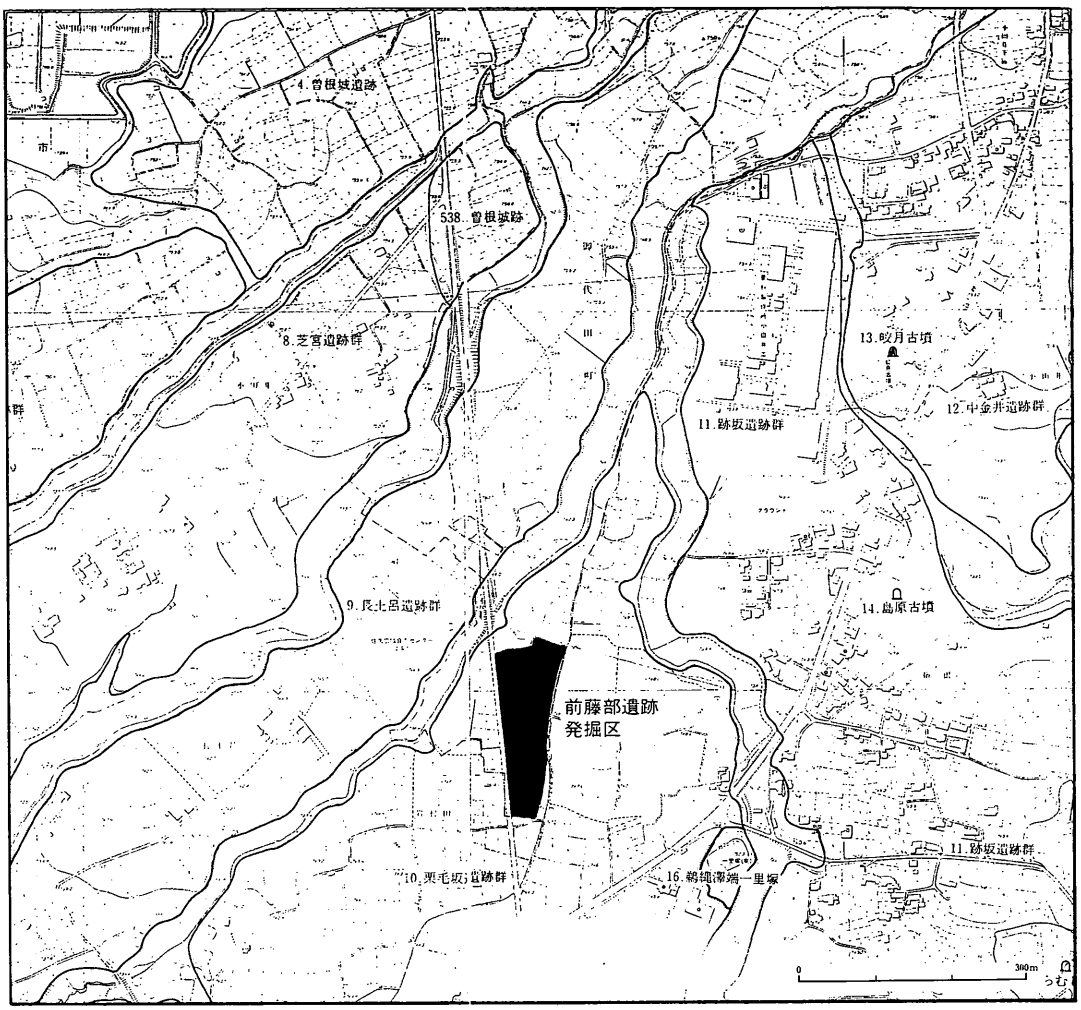
II
遺　跡
の環境

1　遺跡の環境

栗毛坂遺跡群は活火山浅間山の裾野から開けた盆地平坦部にあり、佐久平の中では東部に位置する。現在の行政区画では、佐久市、小諸市、御代田町の境界線が入り組む。遺跡群の形状は浅間山から放射状に発達する谷（「田切り地形」）に東西を仕切られているため南北1.6kmにわたって



第４図　栗毛坂遺跡群前藤部遺跡の位置（１：100,000）



第５図　前藤部遺跡と周辺の遺跡（１：5,000）

細長く発達する。

前藤部遺跡は栗毛坂遺跡群の北端に位置し、海抜747ｍ前後を測る。本遺跡を含むこの一帯は、上信越自動車道佐久インターチェンジ、北陸新幹線が隣接することから、大規模店舗の進出が著しい佐久平の開発拠点地域である。それに伴って緊急発掘調査も数多く行われ、この周辺の古代集落の実相が徐々に明らかになってきた。一例を挙げれば、佐久市と御代田町にまたがる長土呂遺跡群聖原遺跡では竪穴住居跡・掘立柱建物跡ともに1,000軒に迫る律令期をピークに集積された大規模集落跡が発見された。また、栗毛坂遺跡群も上信越自動車道建設に伴い大規模発掘が行われ、やはり律令期を中心とした集落跡のほか、縄文・弥生時代、古墳時代初頭の小規模集落跡が見つかった。以上の発掘成果を参考にすると前藤部遺跡は、律令集落の北の末端部にあたることが推測された。その予想はおおむね的中し、律令集落は希薄である傾向が見て取れた。しかし、室町時代を中心とする大規模な一般集落が眠っていたことは、誰にも予想できなかった。

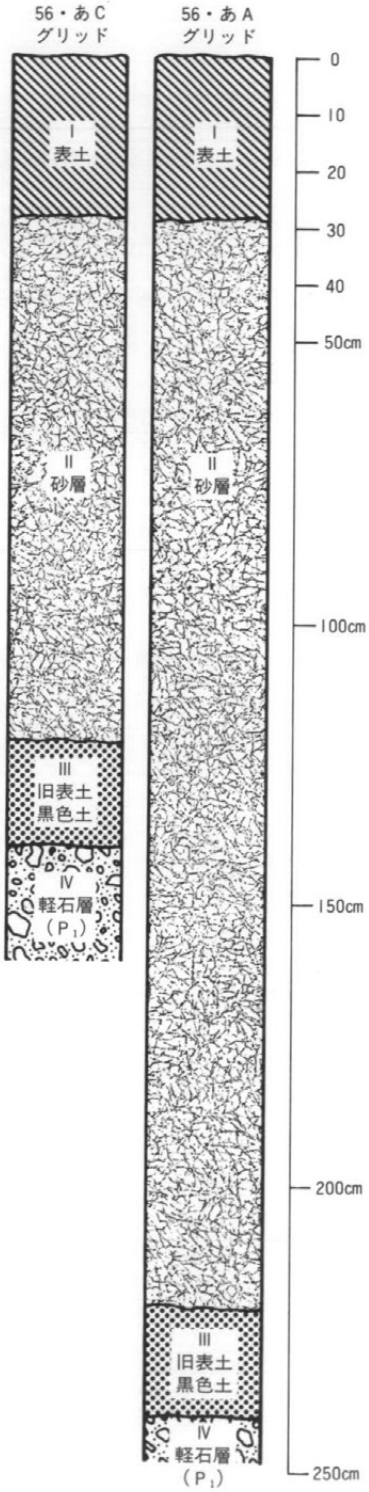
2　層　　序

今回発掘調査を行った前藤部遺跡は、砂層を基盤にする集落遺跡であった。

第７図　層序模式図で明らかなように表土下には、110cmから210cmの間の厚さで砂が幾重にも分厚く堆積していた。この砂層は西側からの洪水によって形成されたことは明らかで、その時期には興味が注がれる。

今回の発掘調査で砂層の上から検出されたもっとも古い時期の遺構は、11世紀後半から12世紀前半の竪穴住居跡４軒である。また、平成５年に道路を介して東側で北陸新幹線斜坑進入路設定のため実施された長野県埋蔵文化財センターの発掘調査では、平安時代９世紀前半～10世紀後半の竪穴住居跡が砂層上から検出された。よって、この砂層は９世紀前半段階以前に起こった洪水で、11世紀に成立した『類聚三代格』に記される仁和4（888）年の洪水よりも古い段階の洪水によって形成されたことになる。

第６図　55・あＡグリッドの砂の堆積



第７図　層序模式図

III

遺構と遺物

1　遺　　構

(1)　遺構の分類

前藤部遺跡の発掘調査で発見された遺構は平安時代から中世室町時代に及ぶが、中世室町時代の遺構が圧倒的に主体を占める。

検出された遺構は、時代にかかわらず平面形状が**方形を基調とする竪穴形式の遺構**（以下**竪穴遺構**とする）が主体を占める傾向が看取された。このため、竪穴遺構については以下のように時代別の略称を与えることにした。また、中世を中心とする室町時代の竪穴遺構はその諸属性により機能に差があることが推測され、さらに細分することができる。このことについては次章で順を追って説明する。

平安時代の竪穴住居跡　―　略称　H　　4基

室町時代の竪穴遺構　―　略称　C　　269基

また、詳細な時期判断はできないものの、おおむね中世室町時代とその前後につくられたと考えられる円形で概して小形の竪穴形式の遺構については土坑として一括した。

土　　坑　―　略称　D　　228基

そのほか、室町時代の鍛冶関連遺構、時期不明の溝状遺構なども検出された。

鍛冶関連遺構　―　略称　K　　2基

溝　状　遺　構　―　略称　M　　4基

(2)　古代の竪穴住居跡

遺構が密集しているなかにあっては重複関係の古い遺構で、やや不整ながら平面方形基調。長辺5ｍ内外と比較的大形で、床面上には炭化粒子、焼土の堆積が認められるなどの共通項をもつ遺構で竪穴住居跡と考えられる。

時期判定の根拠はＨ－１号竪穴住居跡から出土した平安時代・11世紀後半に比定される土師器の厚い底部の坏１点とわずかであるが、ここでは上述の共通項をもつ遺構４軒を古代遺構に括って報告する。

なお、中世遺構は暗褐色の覆土が多いのに対し、古代遺構のそれは黒褐色を呈することも特徴である。位置関係はＨ－１～３号竪穴住居跡が近い位置に存するのに対し、Ｈ－４号竪穴住居跡は離れた位置に存在する。

Ⅰ　Ｈ－Ⅰ号竪穴住居跡

遺　構（第８図）

本遺構は55・Ⅰ－こグリッド周辺から検出され、Ｃ－37・38号竪穴遺構、Ｄ－216号土坑と重複している。

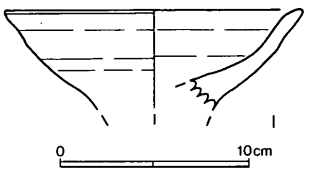
平面形状は538×494cmの隅丸方形を呈し、確認面からの深さは41cm、床面積は21.6m²を測る。

床面はロームを主体にした貼り床が施され、あまり堅固に敲き締められた痕跡はないが、平坦な面をなす。また、床面上には全体に焼土・カーボンが広がっていた。

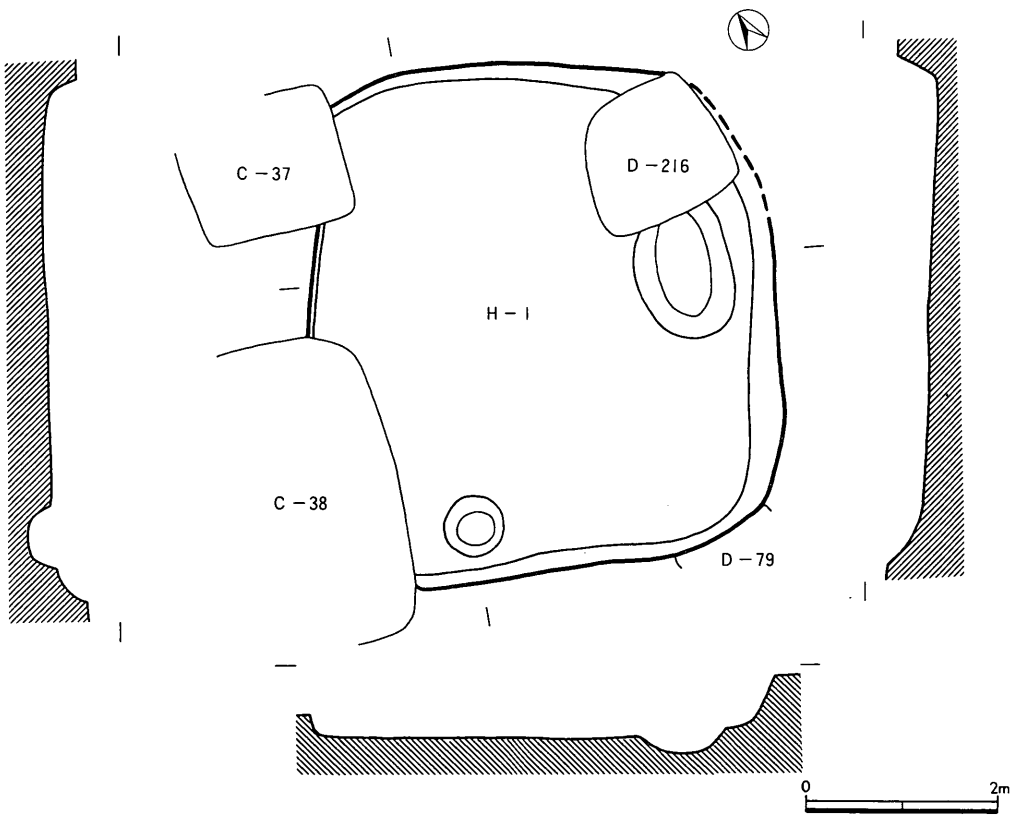
ピットは北東、南西側から各１個検出されたが、柱穴とは考えられず、機能については定かでない。カマドは検出されなかった。

遺　物（第９図）

土師器坏と須恵器胴部片が検出された。土師器坏１は推定口径15.6cmを測る底部の厚い坏である。



第９図　Ｈ－Ⅰ号住居跡出土土器



第８図　Ｈ－Ⅰ号竪穴住居跡

第２表　Ｈ－１号竪穴住居跡出土土器一覧表

挿図番号	器　種	法　量	器　形　の　特　徴	文様および調整	色　調　等
1	坏 (土)	(15.8) (6.0) (5.0)	口縁部内湾したのち、上位で外反する。底部は平底。	ロクロナデ。底部糸切り離しで未調整と考えられるが、欠損のため不明。	内　橙色５YR7/6 外　橙色５YR7/6 断面　橙色５YR7/6

時　期

土師器坏１をもって11世紀後半から12世紀に位置付ける。

2　Ｈ－２号竪穴住居跡

遺　構（第10図）

本遺構は、54・Ｉ－けグリッドにおいて検出された。遺構東側は現在の畑造成のためカットされていたため、その全容は明らかでない。

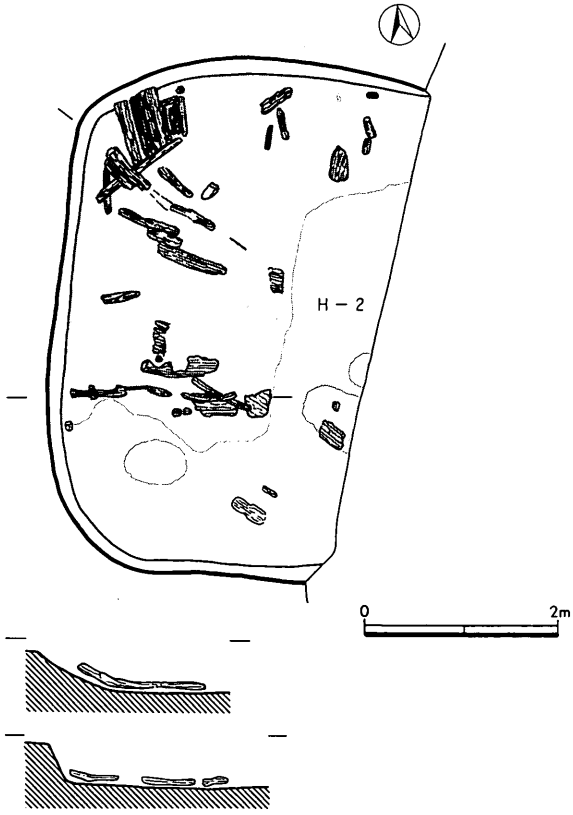
平面形状は南北550cmで隅丸方形を呈すると考えられる。確認面からの深さは42cmを測る。

床面はロームを主体にした貼り床が施され、あまり堅固に敲き締められた痕跡はないが、平坦な面をなす。また、火災を被ったのであろうか、住居廃絶後に火入れ行為を行ったのであろうか、カーボン粒と焼土が床面上・覆土内に濃密に分布していた。特に、住居北西側には粒子化していない炭化材が固まっている状態が数箇所で確認された。

ピット・カマドは検出されなかった。

遺　物

炭化材以外目立った遺物は検出されなかった。



第10図　Ｈ－２号竪穴住居跡

3　Ｈ－３号竪穴住居跡

遺　構（第11図）

本遺構は、55・Ｆ－かグリッドにおいて検出された。表面の削平が著しく、遺構確認時にはすでに床面が露出している箇所も認められた。また、南側は室町時代の遺構Ｃ－257号竪穴遺構などに破壊されていたため、その全容は明らかでない。

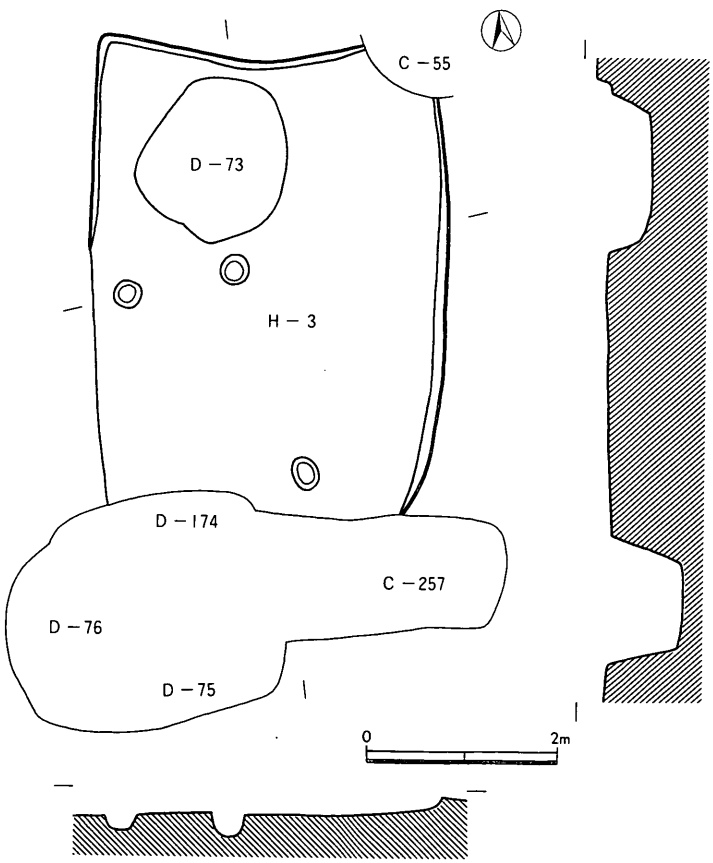
平面形状は東西376cm、南北はそれよりも遥かに長く500cm近くを測ると考えられ、隅丸長方形を呈する。確認面からの深さはほとんどない。

床面はロームを主体にした貼り床が施され、あまり堅固に敲き締められた痕跡はないが、平坦な面をなす。またカーボン粒と焼土が床面上に分布していた。

ピット・カマドは検出されなかった。

遺　物

カーボン以外目立った遺物は検出されなかった。



第11図　Ｈ－３号住居跡

4　Ｈ－４号竪穴住居跡

遺　構（第12図）

本遺構は、61・Ｊ－いグリッドにおいて検出された。他遺構との重複関係はない。

平面形状は東西450cm、南北440cmの隅丸方形を呈し、床面積は16.1m²を測る。

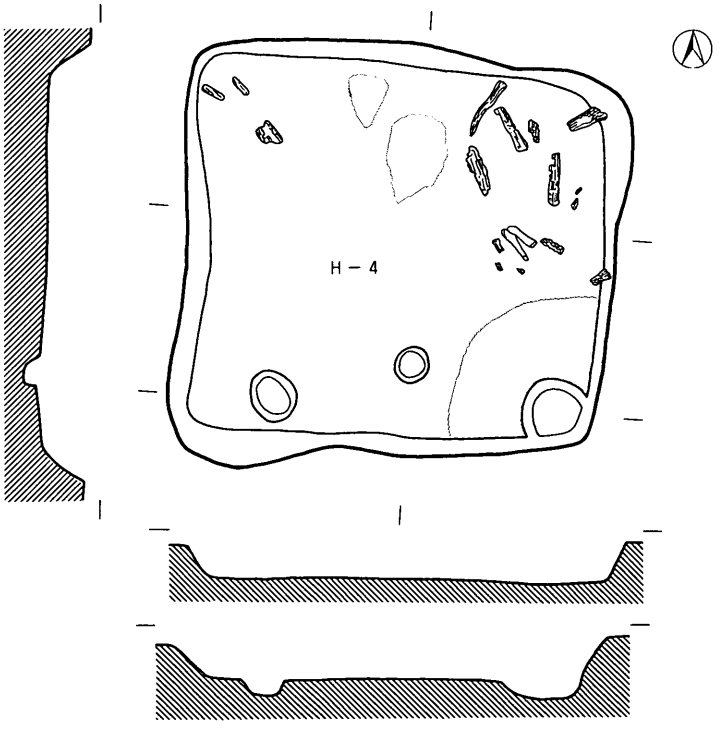
確認面からの深さは43cmを測る。

床面はロームを主体にした貼り床が施され、あまり堅固に敲き締められた痕跡はないが、平坦な面をなす。またカーボン粒・炭化材と焼土が床面上に分布していた。

ピットは南壁下から３個検出された。カマドは検出されなかった。

遺　物

馬の橈骨・上腕骨などが出土した。



第12図　Ｈ－４号住居跡

(3) 中世の竪穴遺構

1 C－1～12号竪穴遺構（中世の住居と考えられる竪穴遺構）

C－1～12号竪穴遺構の属性を列記する。

①掘り込みが擂り鉢状を呈するため、壁面の立ち上がりが緩やかである。

②堅く踏み締められた床面をもつものが多い。壁面も敲き締められ堅固である。

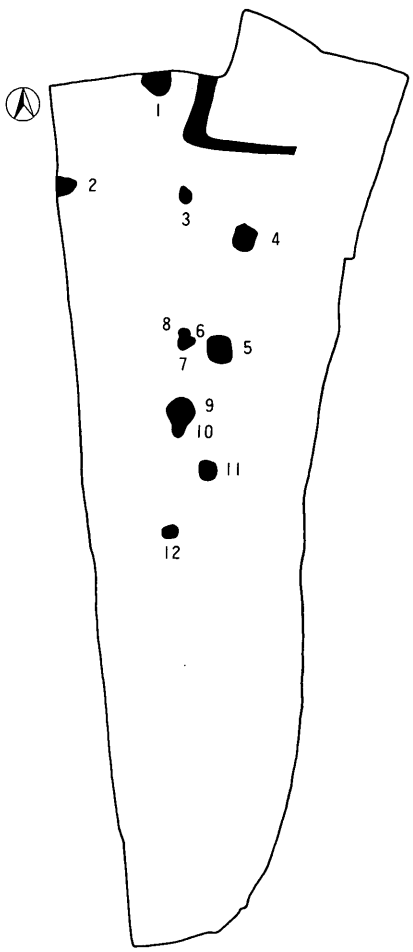
③不整円形・不整方形など平面形状がバラエティーに富む。

④柱穴をもつ場合がある。

⑤炉・カマドなどは持たない。

⑥調査区内北側の中世竪穴遺構群が密集するエリアに散在し、南側の竪穴遺構群が密集するエリアには存在しない。

以上の諸点、特に床面が他の中世竪穴遺構に比べ堅く踏み締まっている点を重視してC－1～12号竪穴遺構は中世の住居的色彩の強い遺構と判断する。これらはすべて同時期に構築されたものでなく、13～14世紀の間に時期を違えて順次建築されたものであると考えられるが、出土品が希薄であるため、構築の推移については明らかにできない。



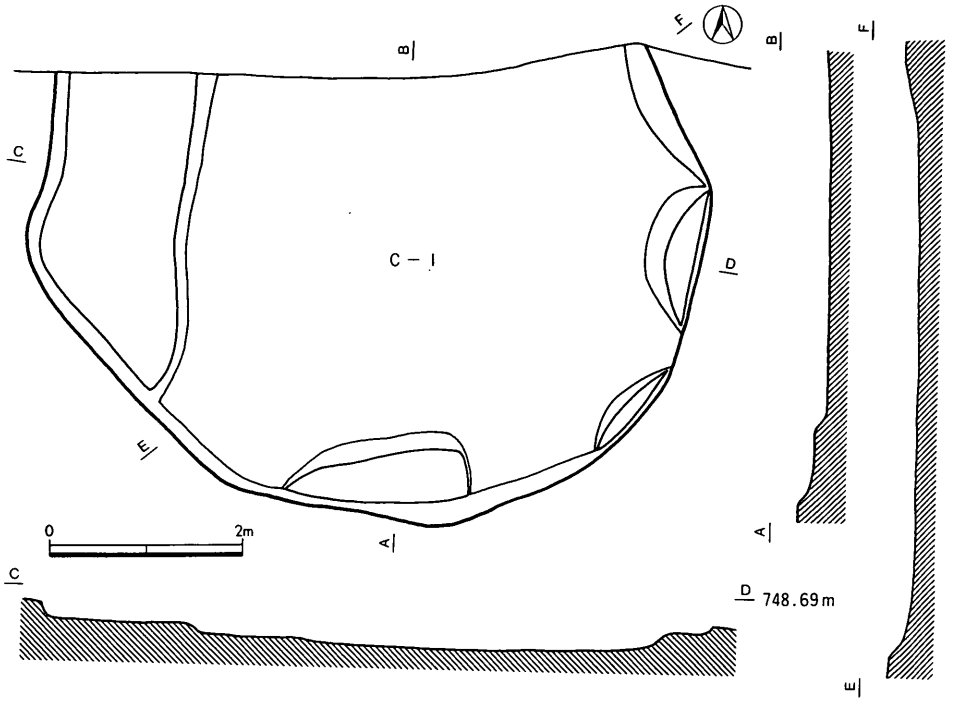
第13図　C－1～12号竪穴遺構の位置

C－1号竪穴遺構（第14図）

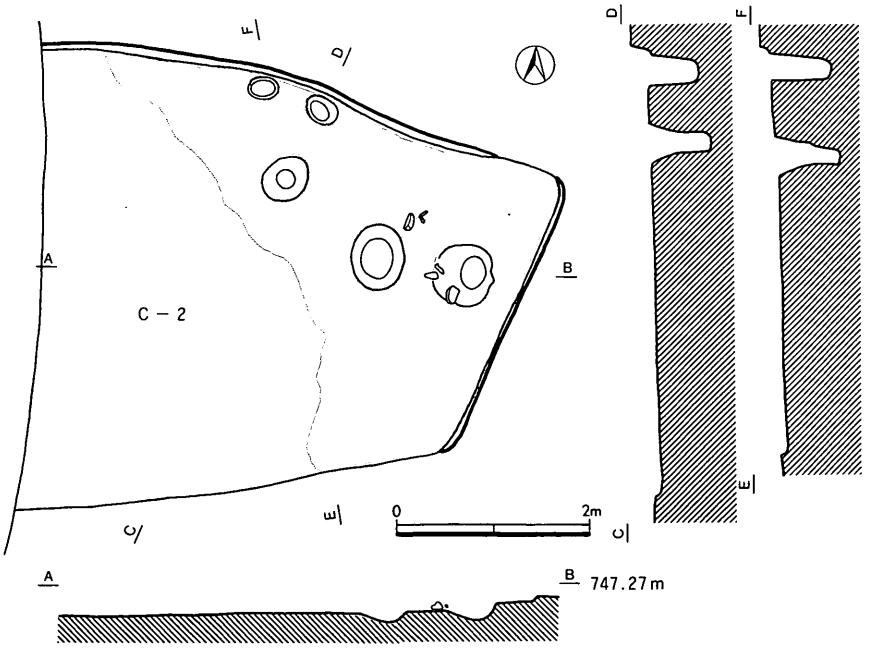
52・おGグリッドにおいて検出された。遺構北側は調査区外に食い込む。東西720cmで円形を呈する竪穴遺構と考えられ、床面・壁面ともに堅く締まっている。時期判定できる遺物には恵まれなかったが、巻き貝が出土した。

C－2号竪穴遺構（第15図）

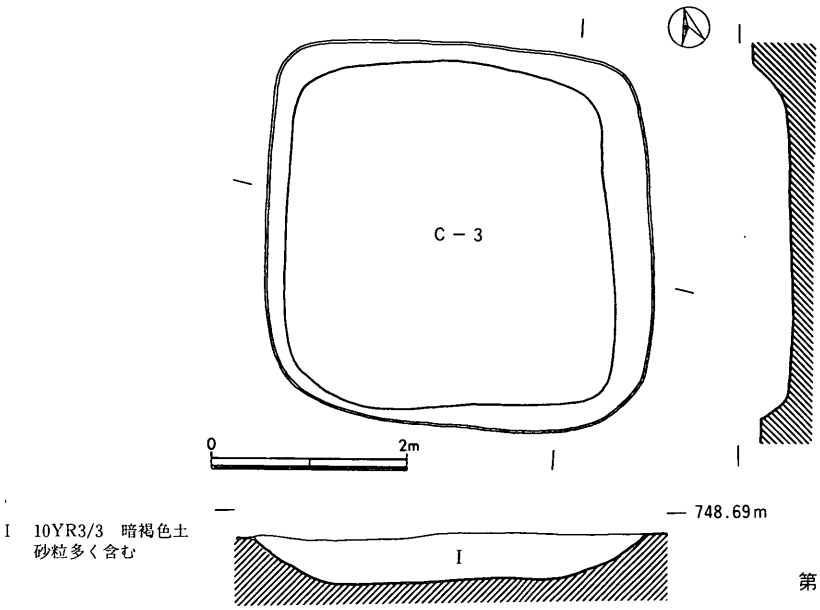
56・あDグリッドにおいて検出された。遺構東側は調査区外に食い込む。南北410cm、東西はそれよりもさらに長いことが予想され、不整ながらも長方形を呈する竪穴遺構であると考えられる。床面は堅く締まり、床上には炭化粒子が付着していた。また、床上にはピットが5個掘り込まれていた。柱穴とは考えられない。出土品は詳細な時期判定ができない常滑の甕の体部片と釘（第86図）が検出された程度である。



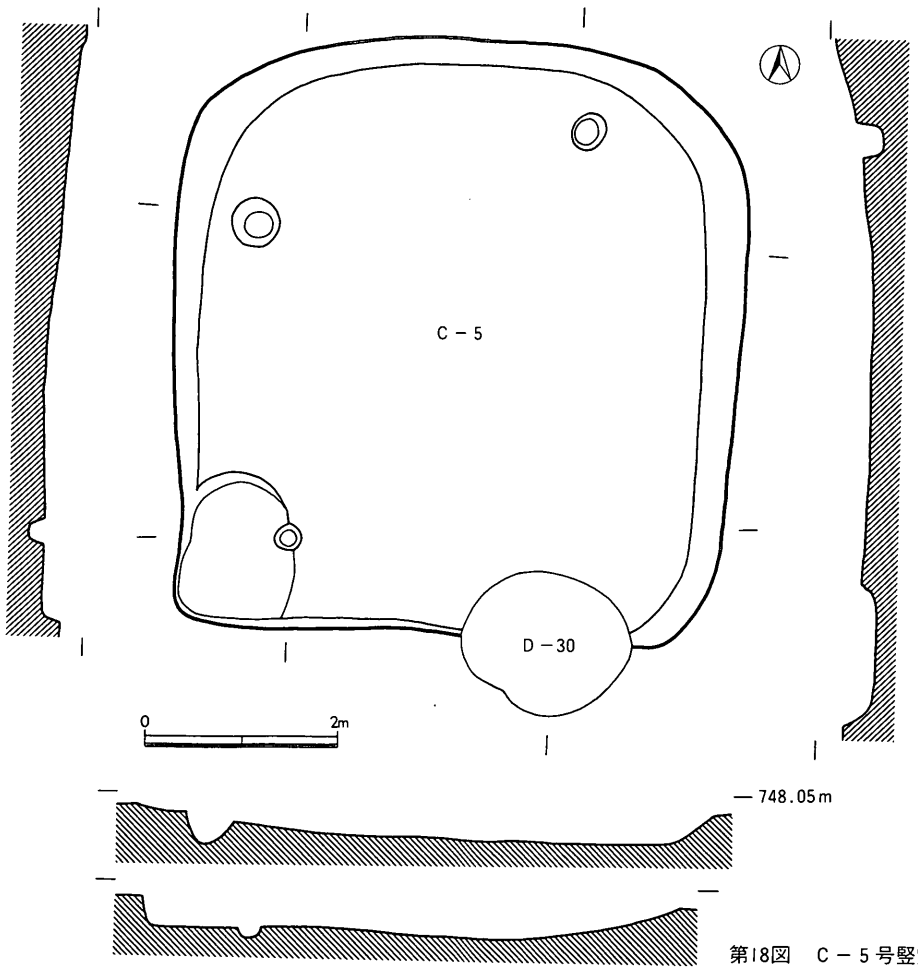
第14図　C－1号竪穴遺構



第15図　C－2号竪穴遺構



第16図　C－3号竪穴遺構



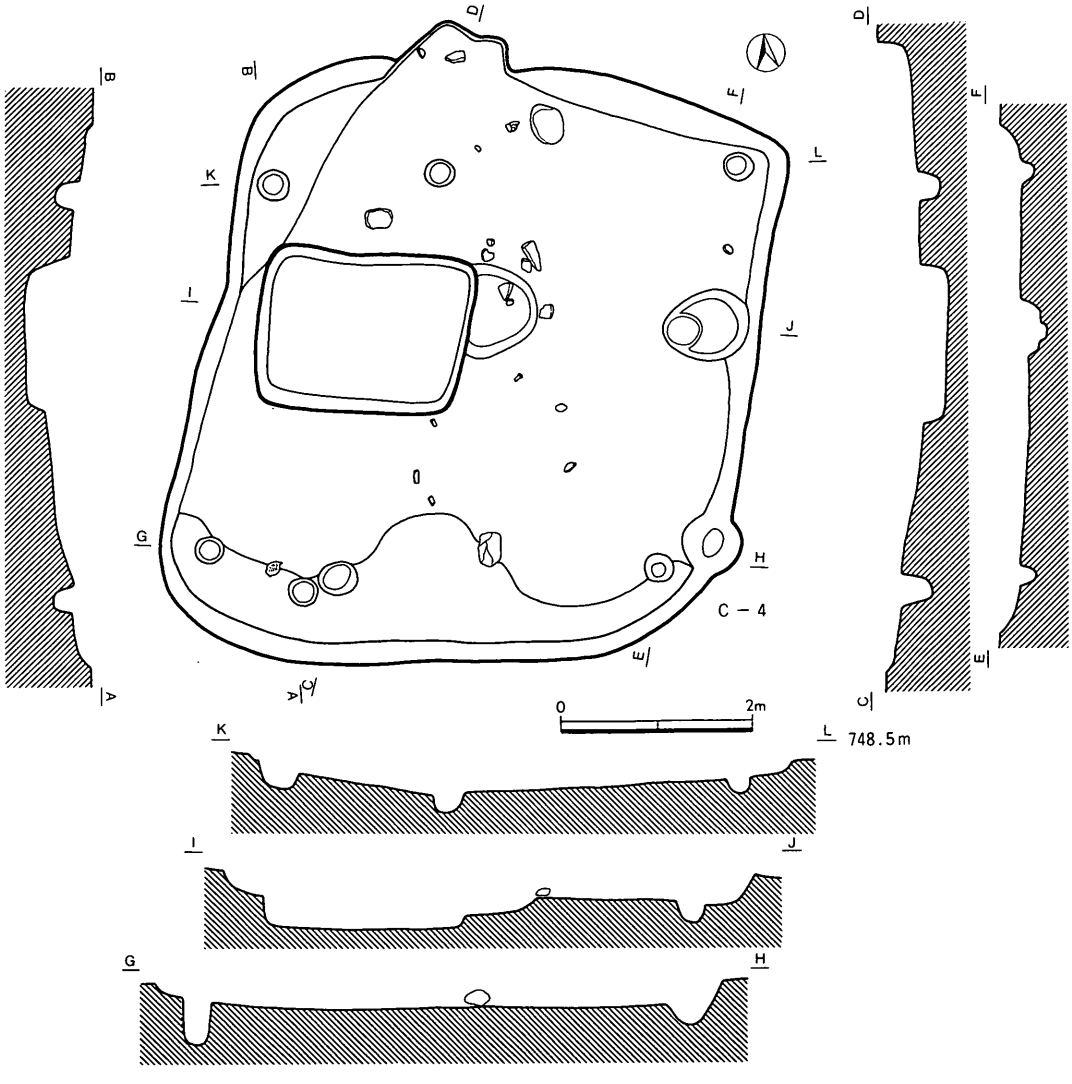
第18図　C－5号竪穴遺構

C－3号竪穴遺構（第16図）

55・うEグリッドにおいて検出された。今回掲載した図は遺構断面図から復原したもので、実際は調査時に重複関係が把握しきれず、大幅に破壊してしまった遺構である。したがって、床面の状態、ピットの有無等についてはわからない。壁面が緩く立ち上がることは確実なので住居的竪穴の中に含めた。

C－4号竪穴遺構（第17図）

54・けGグリッドにおいて検出された。南北670cm、東西610cm、床面積30.41m²を測り、擂り鉢状に掘り込まれた前藤部遺跡の中世集落に特徴的な竪穴遺構である。確認面からは遺構中央の最深部で48cmを測る。床面はかなり堅く踏み締められた状態であった。壁付近には柱穴と考えられ



第17図　C－4号竪穴遺構

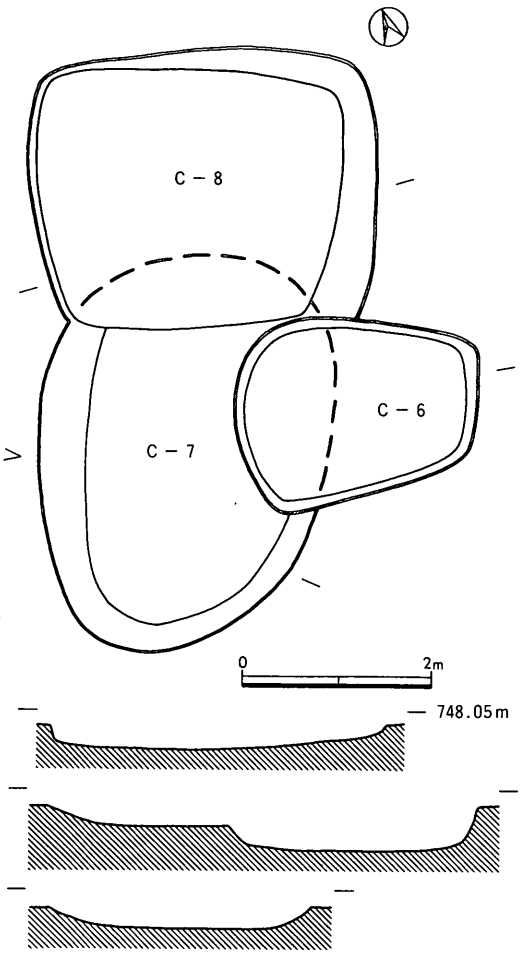
るピットが並び、また、床面中央には円形のピットが掘り込まれていた。出土品にはかわらけ（第84図１）、14世紀代と考えられる古瀬戸の瓶類、常滑甕体部、砥石、鹿の骨、巻き貝が検出された。

Ｃ－５号竪穴遺構（第18図）

58・あＥグリッドにおいて検出された。Ｃ－113・114号竪穴遺構、Ｄ－30・218号土坑などと重複するが、新旧関係については把握できなかった。南北624cm、東西600cm、床面積28.91m²を測る隅丸方形の竪穴で擂り鉢状の掘り込みを有する。ピットは３個検出されたが、柱穴と断ぜられない。古瀬戸の平碗・皿・瓶類など13～14世紀後半の製品のほか、かわらけ（第84図２）、常滑甕体部、巻き貝等も出土した。

Ｃ－６号竪穴遺構（第19図）

58・うＤグリッドにおいて検出された。Ｃ－７・８号竪穴遺構と重複するが、新旧関係は定かにできなかった。南北196cm、東西254cmを測り、床面積は3.44m²と小ぶりである。擂り鉢状の掘り込みを有する。出土品は常滑の甕体部片が出土した程度である。



第19図　Ｃ－６・７・８号竪穴遺構

Ｃ－７号竪穴遺構（第19図）

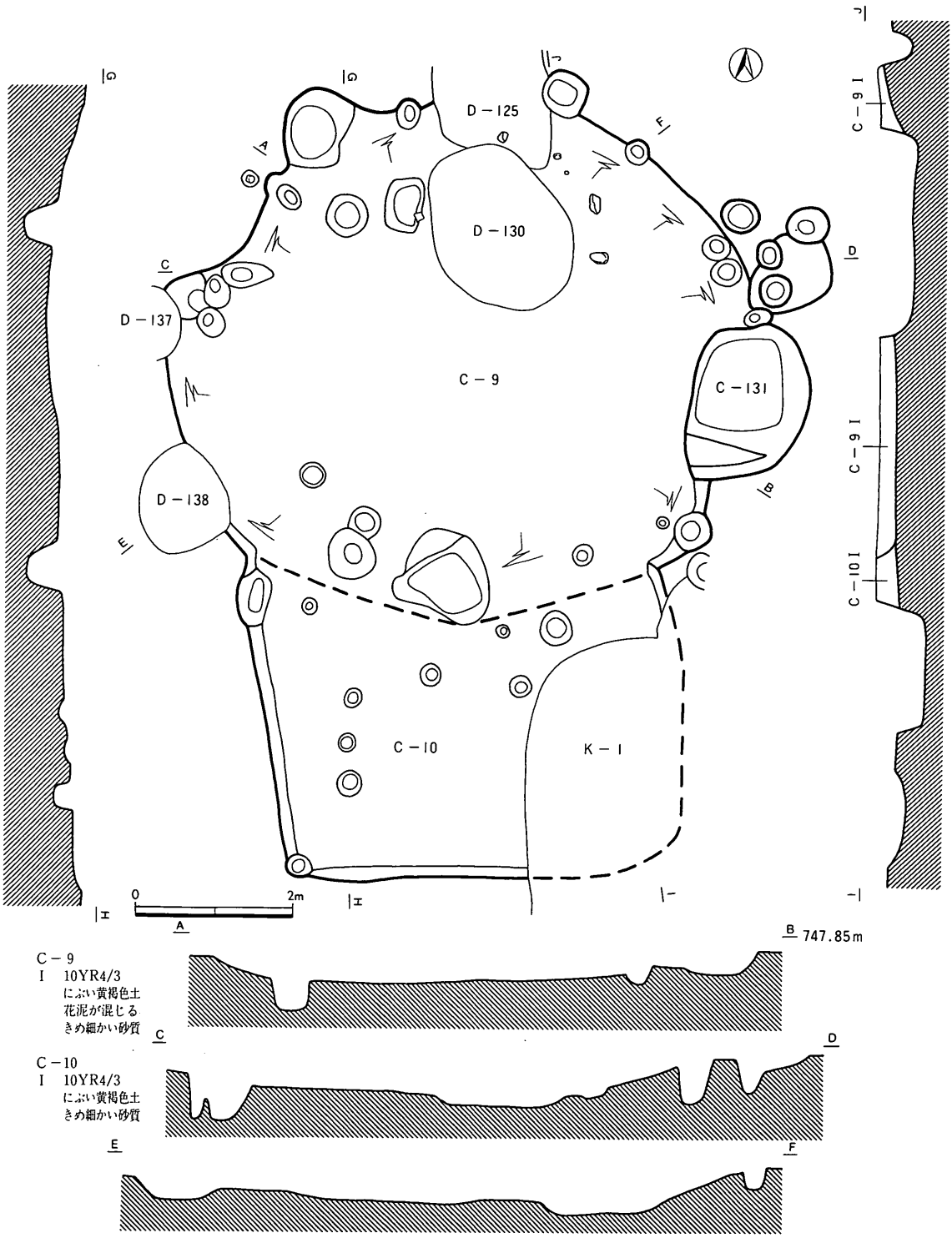
58・うＤグリッドにおいて検出された。南北420cm、東西306cm、床面積6.98m²を測る。擂り鉢状の掘り込みを有する。時期判定できる出土品には恵まれなかった。

Ｃ－８号竪穴遺構（第19図）

58・うＤグリッドにおいて検出された。南北370cm、東西310cm、床面積7.97m²を測り、擂り鉢状の掘り込みを有する。出土品は13世紀代の古瀬戸の瓶類のほか、詳細な時期判定できない中世常滑の甕の体部片が検出された。

Ｃ－９号竪穴遺構（第20図）

58・えＩグリッドにおいて検出された。Ｃ－10号竪穴遺構と重複し、これよりも新しい。また、周囲にはＣ－131、Ｄ－125・130・137・138等が絡み、新旧関係は大方が土坑の方が新しい。南北



第20図　C－9・10号竪穴遺構

650cm、東西740cmの円形を呈し、床面積は37.8m²を測る。床面から壁面にかけては緩く傾斜して立ち上がる典型的な擂り鉢状の掘り込みをもつ。遺構外周内外にはおそらく柱穴と考えられるピットが多量に掘り込まれていた。

覆土中から硯（第88図）の破片が出土した。また、13世紀後半の古瀬戸の平碗、常滑の甕の体部片、鹿の骨等が検出された。

C－10号竪穴遺構（第20図）

58・えIグリッドにおいて検出された。C－9号竪穴遺構、K－1号鍛冶炉等と重複し、これに破壊される。平面形状は方形を基調とする竪穴遺構であるが、全容は明らかでなく、東西540cmを測る大型の竪穴であることが推測されるに過ぎない。床面上からピットが検出されているが、この帰属性についても明らかにできない。

時期判定に有効な遺物は出土しなかったが、貝殻が出土した。

C－11号竪穴遺構（第21図）

61・いBグリッドにおいて検出された。D－150・151・223号土坑等と重複する。

平面形状は台形状を呈し、南北526cm、東西510cm、床面積12.74m²を測る。掘り込みは擂り鉢状を呈し、最深部の深さは48cmを測る。ピットは検出されなかった。

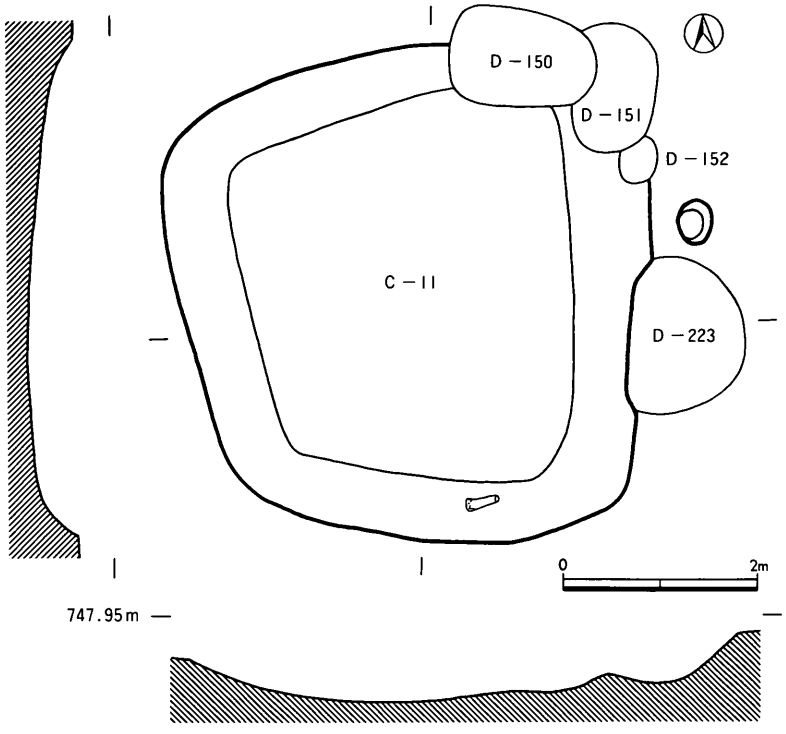
出土品には、13世紀代の龍泉窯系青磁碗、14世紀代の在地系須恵器質擂り鉢等がある。このほか、釘（第86図）・磨石（第90図）等も出土した。

C－12号竪穴遺構（第21図）

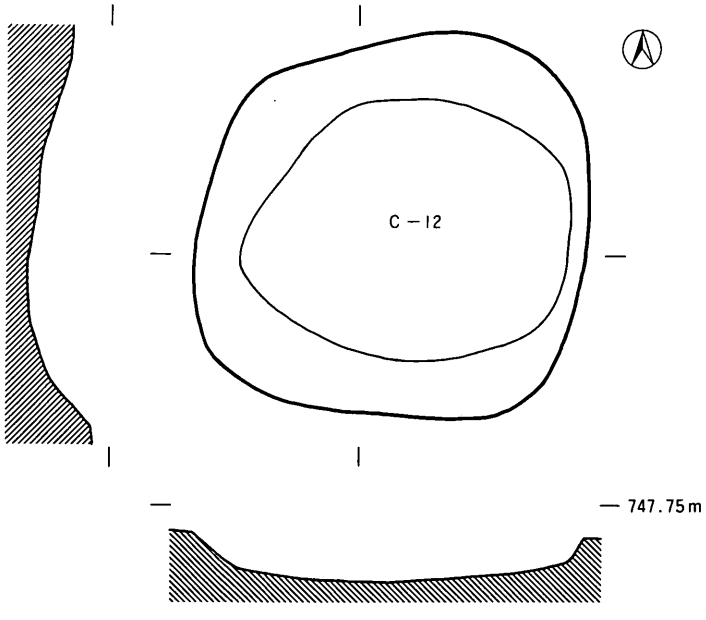
61・おGグリッドにおいて検出された。他遺構との重複関係はなく、単独で検出された。

平面形状は円形状を呈し、直径400cm前後、床面積7.56m²を測る。掘り込みは擂り鉢状を呈し、最深部の深さは60cmを測る。ピットは検出されなかった。

出土品には、13世紀後半代の古瀬戸瓶子、14世紀後半～15世紀前半の在地産須恵器系擂り鉢などや巻き貝がある。



第21図　C－11号竪穴遺構



第22図　C－12号竪穴遺構

2　C－13～23号竪穴遺構（中世の住居と考えられる竪穴遺構）

C－13～23号竪穴遺構の属性を列記する。

①掘り込みが浅い。

②堅く踏み締められた床面をもつものがある。

③不整円形・不整方形など平面形状がバラエティーに富む。

④柱穴をもつ場合がある。

⑤炉・カマドなどはもたない。

⑥調査区内北側の中世竪穴遺構群が密集するエリアに散在し、南側の竪穴遺構群が密集するエリアには存在しない。

以上のように掘り込みの違いを除けばC－1～12号竪穴遺構と共通要素ももつ。性格についても床面をもつことを重視して、住居的色彩の強い遺構と判断する。

C－13号竪穴遺構（第23図）

53・あJグリッドにおいて検出された。平面形状は方形基調で、南北310cm、東西336cm、床面積8.74m²を測る。ピットは検出されなかった。床面はかなり堅く踏み締められた状態であった。遺物は砥石（第89図）が1点出土した程度である。

C－14号竪穴遺構（第23図）

55・けAグリッドにおいて検出された。平面形状は長方形で、南北320cm、東西1,120cm、床面積24.94m²を測る。ピットは内外から4個検出されたが帰属するものであるか定かでない。床面はかなり堅く踏み締められた状態であった。遺物は硯の破片（第88図）、砥石の破片（第89図）、釘（第86図）などがある。

C－15号竪穴遺構（第23図）

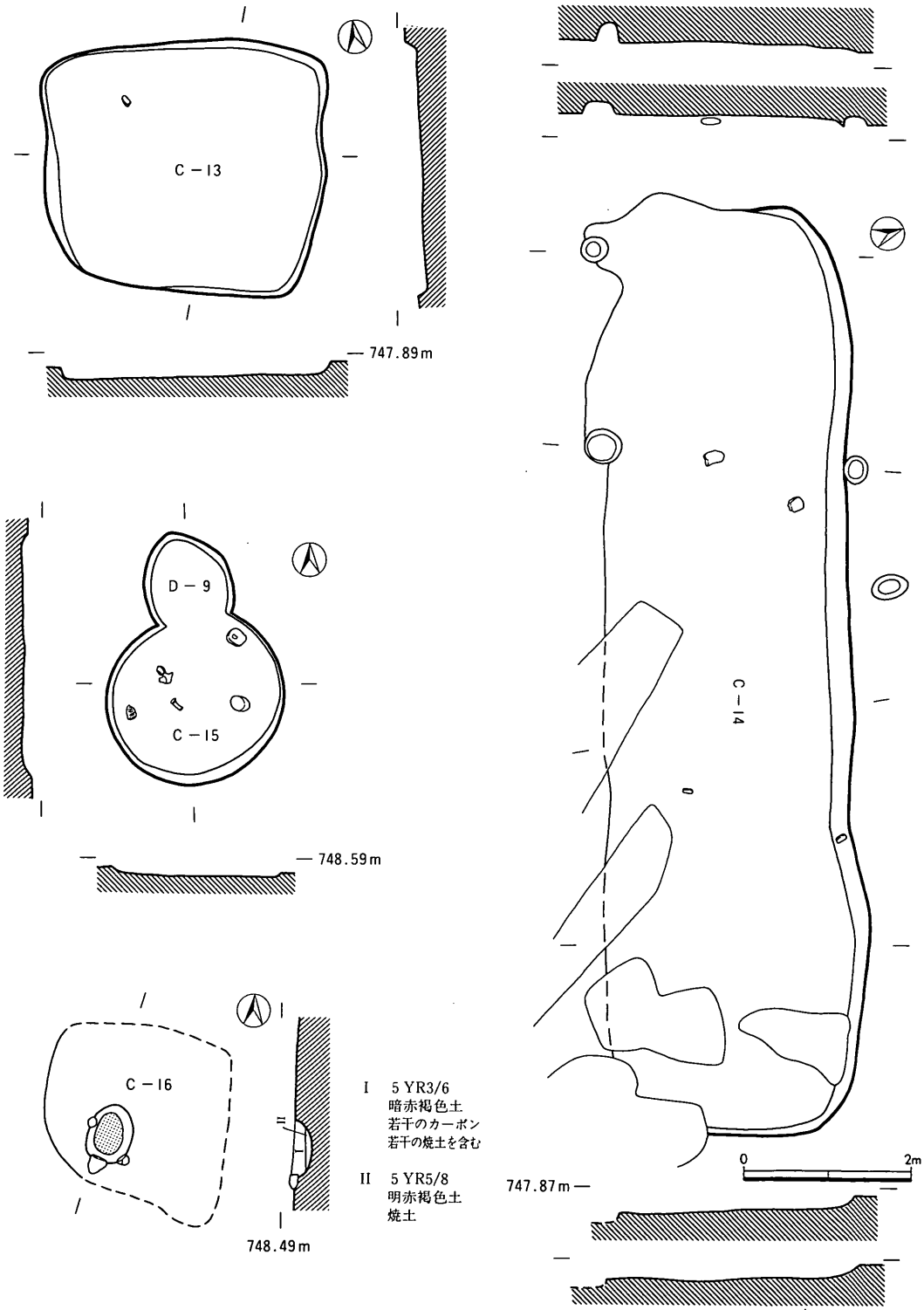
52・おJグリッドにおいて検出された。D－9号土坑と重複するが新旧関係については定かでない。平面形状は円形で、直径210cmを測る。ピットは検出されなかった。床面はかなり堅く踏み締められた状態であった。遺物は、13世紀の古瀬戸瓶子、14世紀後半から15世紀前半の在地産須恵器質擂り鉢、巻き貝が出土した。

C－16号竪穴遺構（第23図）

52・うIグリッドにおいて検出された。平面形状は方形基調で、南北210cm、東西220cm、床面積3.53m²を測る。ピットは検出されなかったが、中央から地床炉が検出された。床面はかなり堅く踏み締められた状態であった。時期判定できる遺物は検出されなかった。

C－17号竪穴遺構（第24図）

55・おAグリッドにおいて検出された。平面形状は長方形基調で、南北450cm、東西308cm、床



第23図　C－13～16号竪穴遺構

面積9.1㎡を測る。ピットは検出されなかった。床面はかなり堅く踏み締められた状態で、南に一段のテラスを有する。遺物は13世紀代の古瀬戸瓶類のみである。

C－18号竪穴遺構（第24図）

55・おAグリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形で、南北286cm、東西356cm、床面積6.82㎡を測る。ピットは検出されなかった。床面はかなり堅く踏み締められた状態であった。時期判定できる遺物は出土しなかった。

C－19号竪穴遺構（第24図）

55・おBグリッドにおいて検出された。平面形状は長方形基調で、南北460cm、東西は推定で386cm、床面積も推定で915.24㎡を測る。ピットは床面上から検出されたが柱穴か否かはわからない。床面はかなり堅く踏み締められた状態であった。時期判定できる遺物には恵まれなかった。

C－20号竪穴遺構（第24図）

51・けJグリッドにおいて検出された。平面形状は長方形で、南北310cm、東西326cm、床面積6.59㎡を測る。ピットは検出されなかった。床面はかなり堅く踏み締められた状態であった。時期判定できる遺物には恵まれなかった。

C－21号竪穴遺構（第25図）

51・くJグリッドにおいて検出された。平面形状は方形で、南北340cm、東西326cm、床面積8.99㎡を測る。ピットは検出されなかった。床面はかなり堅く踏み締められた状態であった。時期判定できる遺物には恵まれなかった。

C－22号竪穴遺構（第25図）

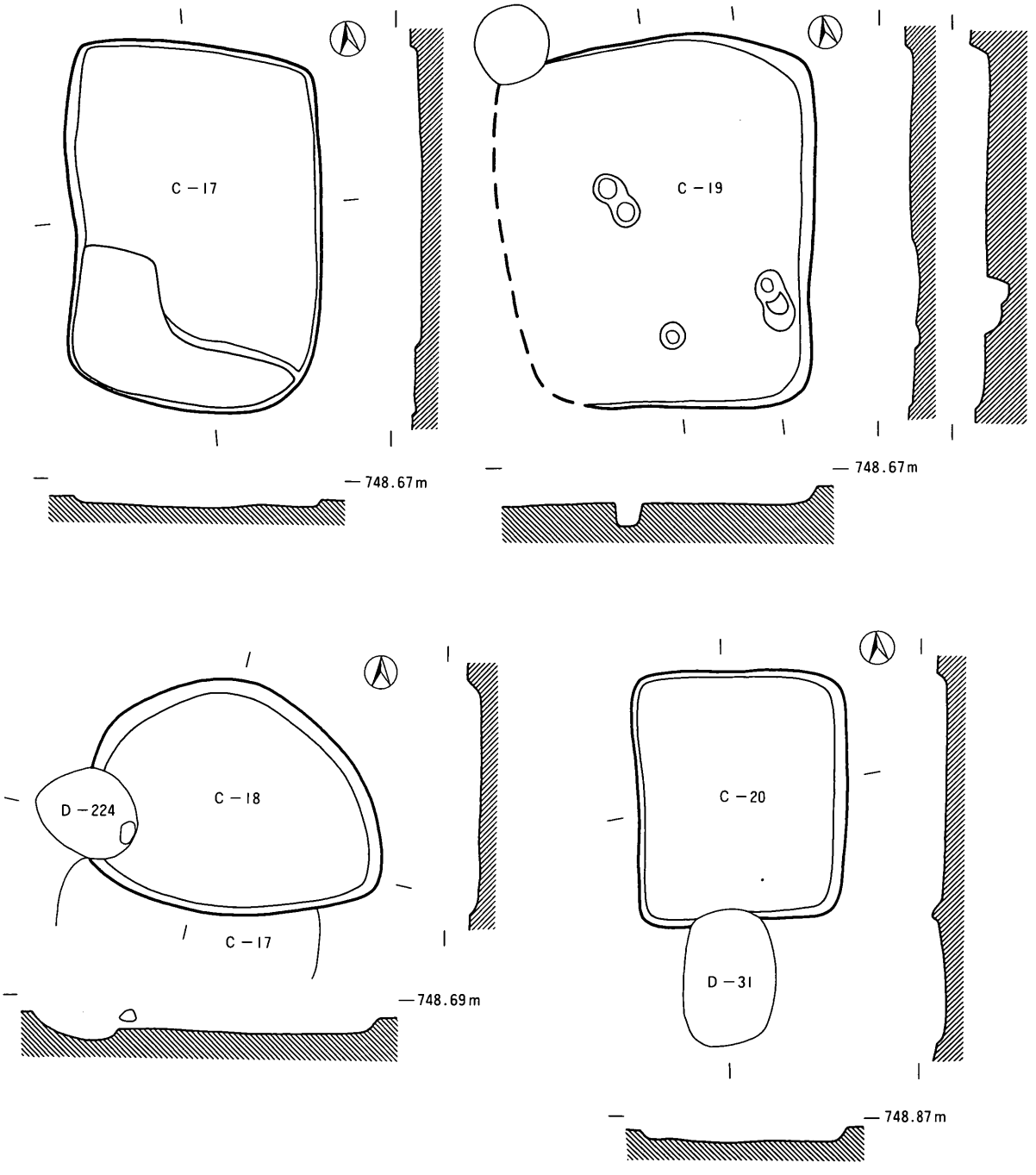
58・えAグリッドにおいて検出された。C－87号竪穴遺構ほか3基の土坑と重複するが、新旧関係については不明である。平面形状は長方形で、南北460cm、東西324cm、床面積612.27㎡を測る。ピットは検出されなかった。床面はかなり堅く踏み締められた状態であった。時期判定できる遺物には恵まれなかった。

C－23号竪穴遺構（第25図）

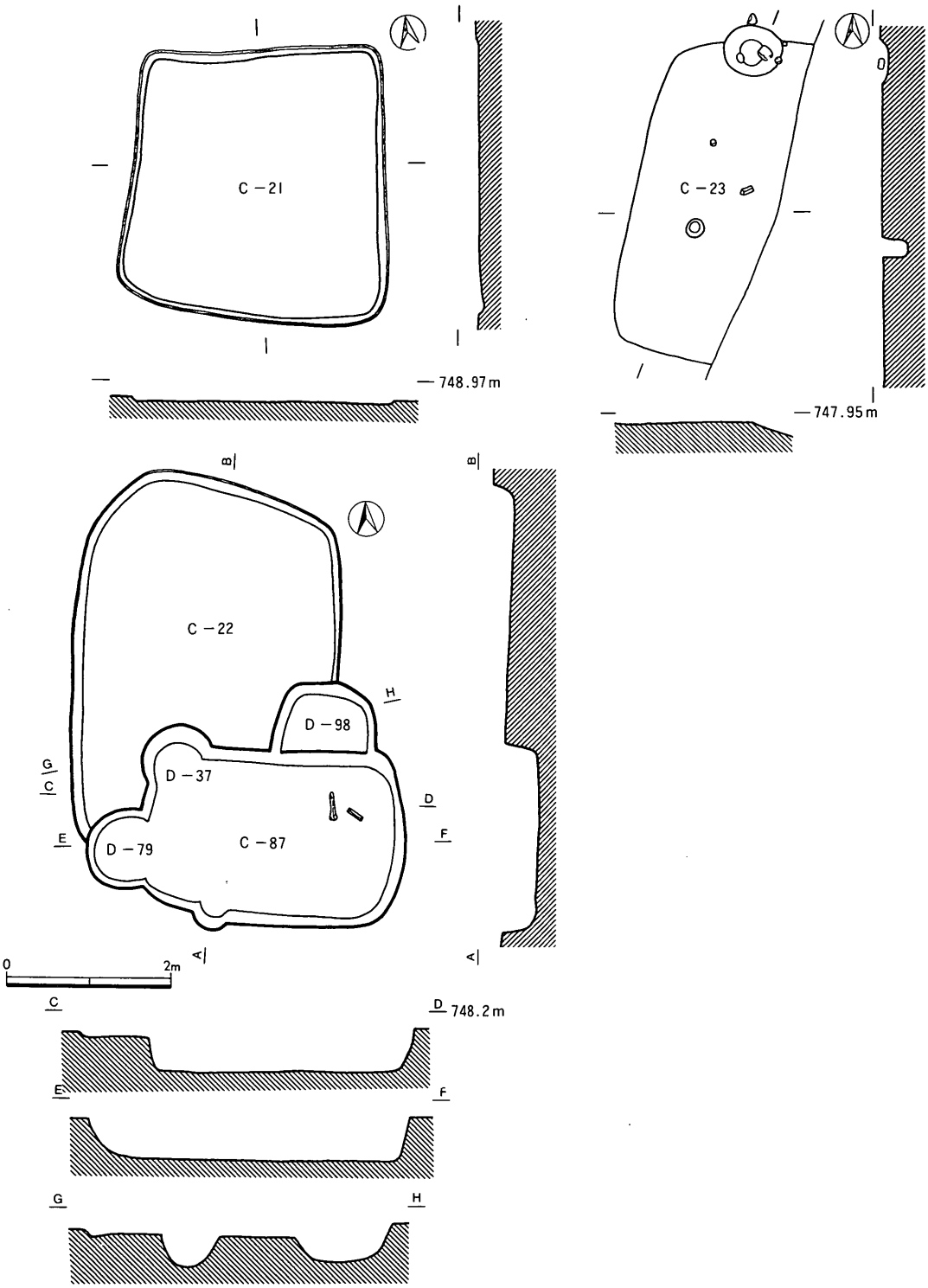
57・こFグリッドにおいて検出されたが東側は溝で破壊されていた。平面形状は方形基調と考えられ、南北390cmを測る。ピットは2個検出された。床面は非常にかなり堅く踏み締められた状態であった。遺物は14世紀末の古瀬戸の鉢が出土した。

3　C－24～267号竪穴遺構（中世の住居とは考えられない竪穴遺構）

以下に住居以外に機能したと考えられる竪穴遺構を羅列する。その特徴は平面形状が基本的に方形(長大なものや稀に円形等もある)、掘り込みが深く、底面からは垂直に立ち上がる。底面はC－1～23のように堅くなく脆弱。規模はかなり大きなものから小さなものまで様々であるが、

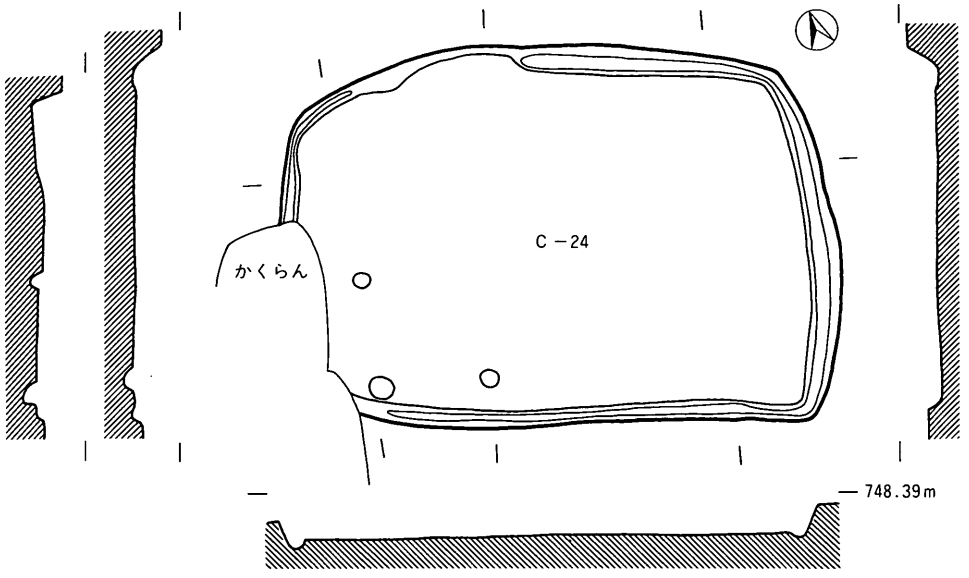


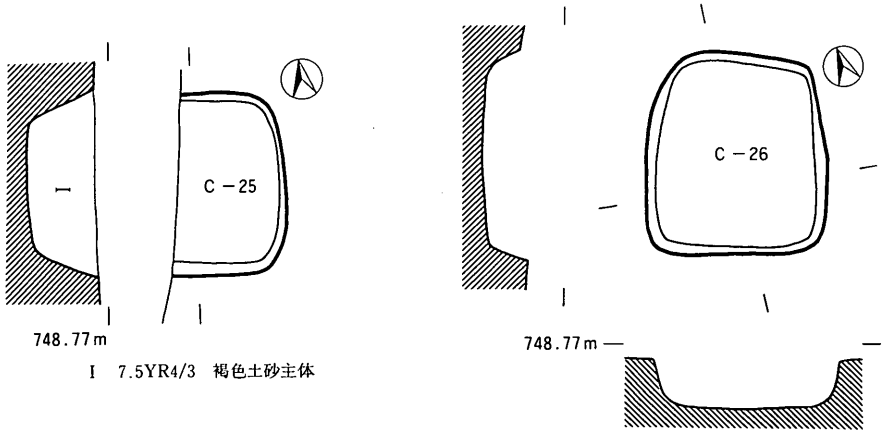
第24図　C－17～20号竪穴遺構



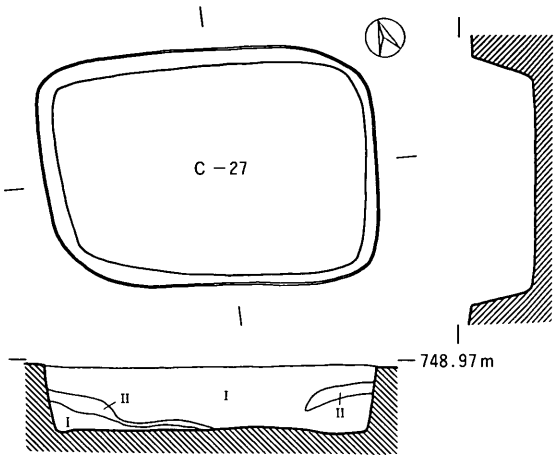
第25図　C－21～23号、C－87号竪穴遺構

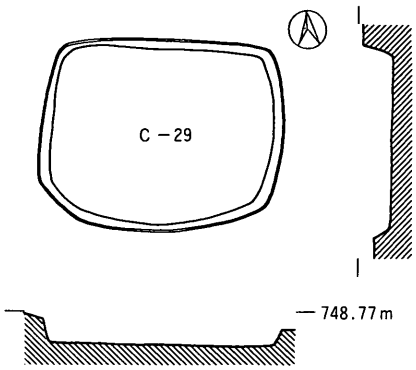
北側のまとまりが概して大きく、南側のまとまりは小さい傾向が指摘できる。その多くは、日常出入りの乏しい施設、倉庫的な性格を有すると考えられる。



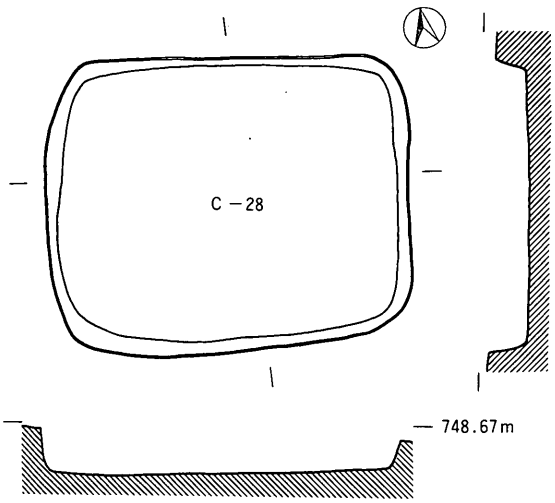


第26図　C－24～26号竪穴遺構

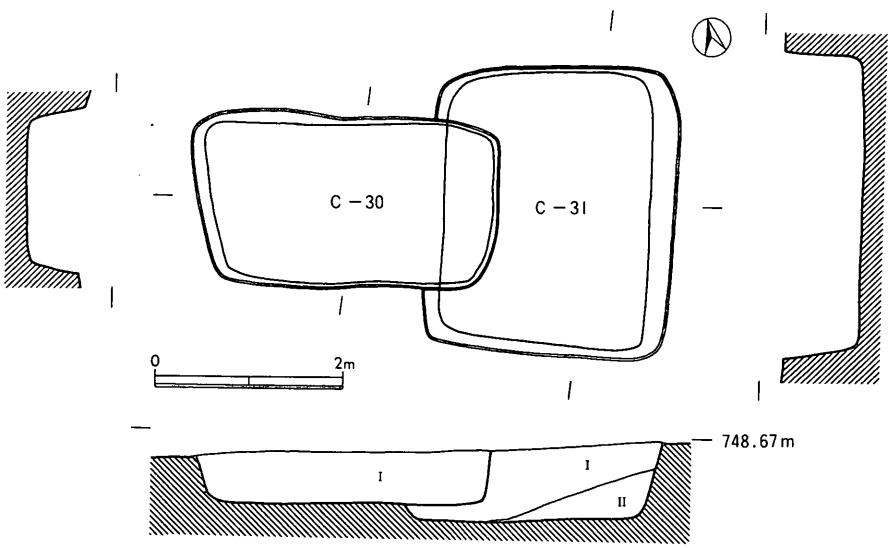




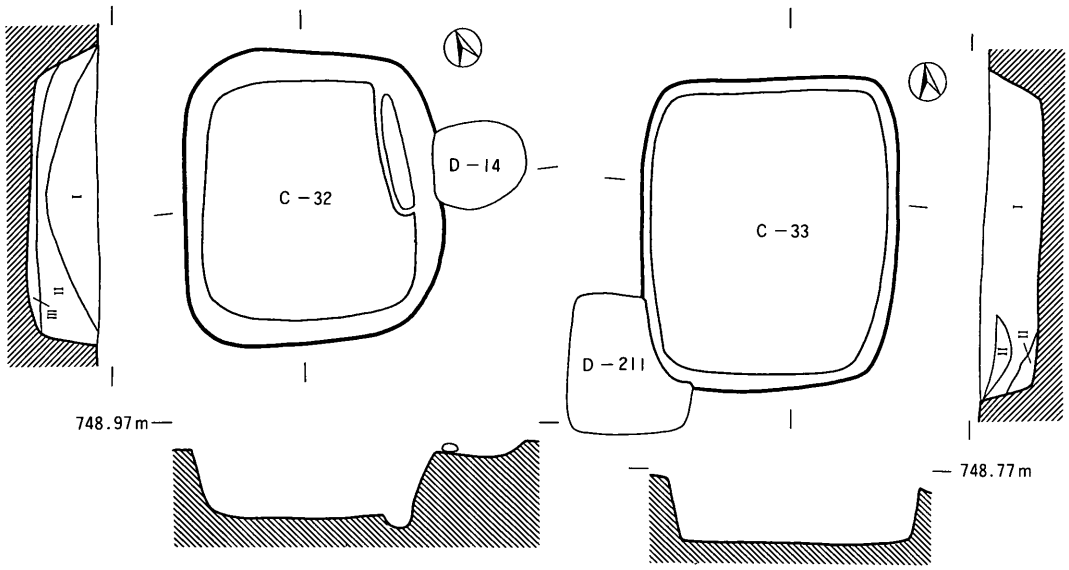
I　7.5YR3/4　暗褐色土、砂質
II　10YR5/6　黄褐色土、砂質ロームブロック主
（尾根の土か？）



C－30
I　10YR4/4　褐色土、砂主体、礫多く含む
C－31
I　7.5YR3/3　暗褐色土、砂多く混じる
炭化物少含、礫多
II　7.5YR4/4　褐色土、砂多量に含む

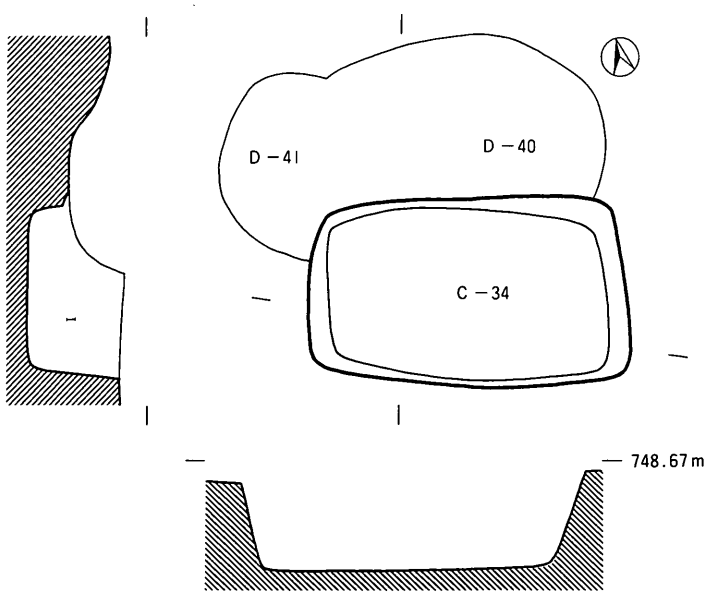


第27図　C－27～31号竪穴遺構



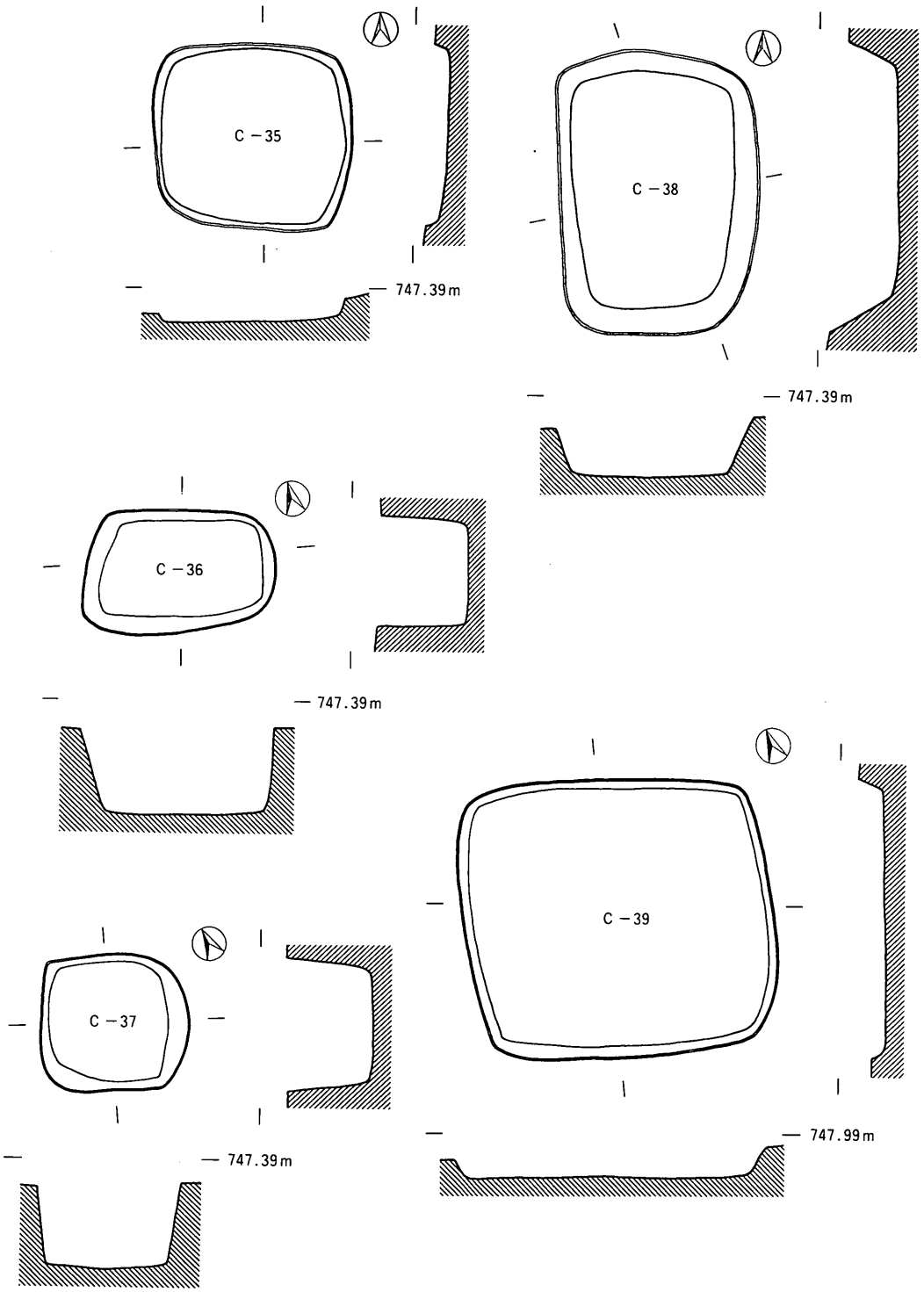
I　5YR4/4　にぶい赤褐色土、砂質、礫含む
II　5YR3/4　暗赤褐色土、シルト質、礫含む
III　5YR3/4　暗赤褐色土、シルト質、砂粒多く含む

I　7.5YR4/3　褐色土、砂質、φ1cm内外小石含む
II　7.5YR3/2　黒褐色土、砂質、φ2cm内外小石含む

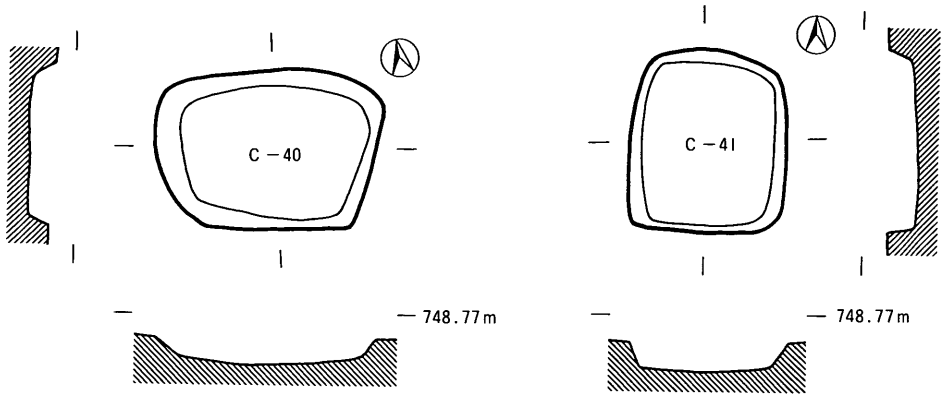


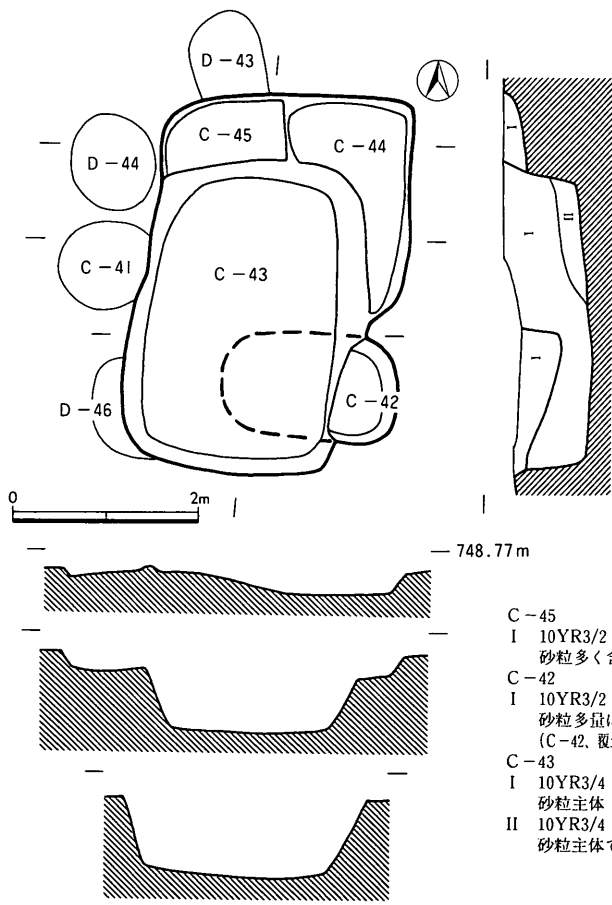
C－34
I　10YR4/3　にぶい黄褐色土、砂主体

第28図　C－32～34号竪穴遺構



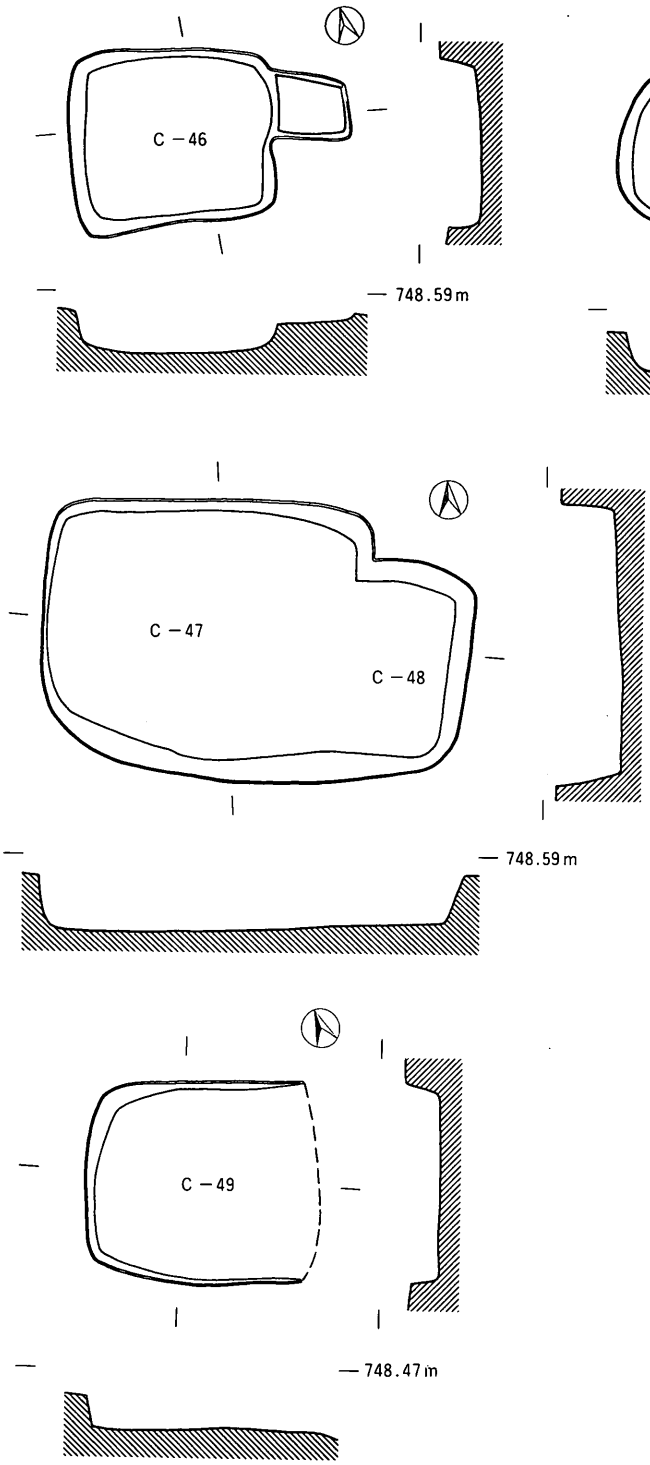
第29図　C－35～39号竪穴遺構



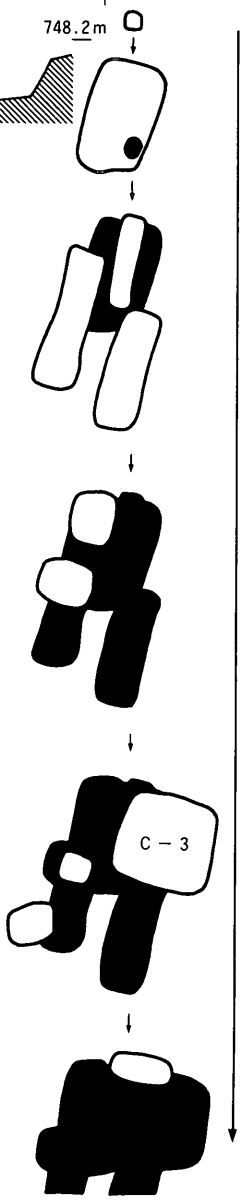


C－45
Ⅰ　10YR3/2　黒褐色土
　　砂粒多く含む
C－42
Ⅰ　10YR3/2　黒褐色土
　　砂粒多量に含む
　　(C－42、覆土)したがってC－42の方が新しい
C－43
Ⅰ　10YR3/4　暗褐色土
　　砂粒主体
Ⅱ　10YR3/4　暗褐色土
　　砂粒主体で礫が混ざる

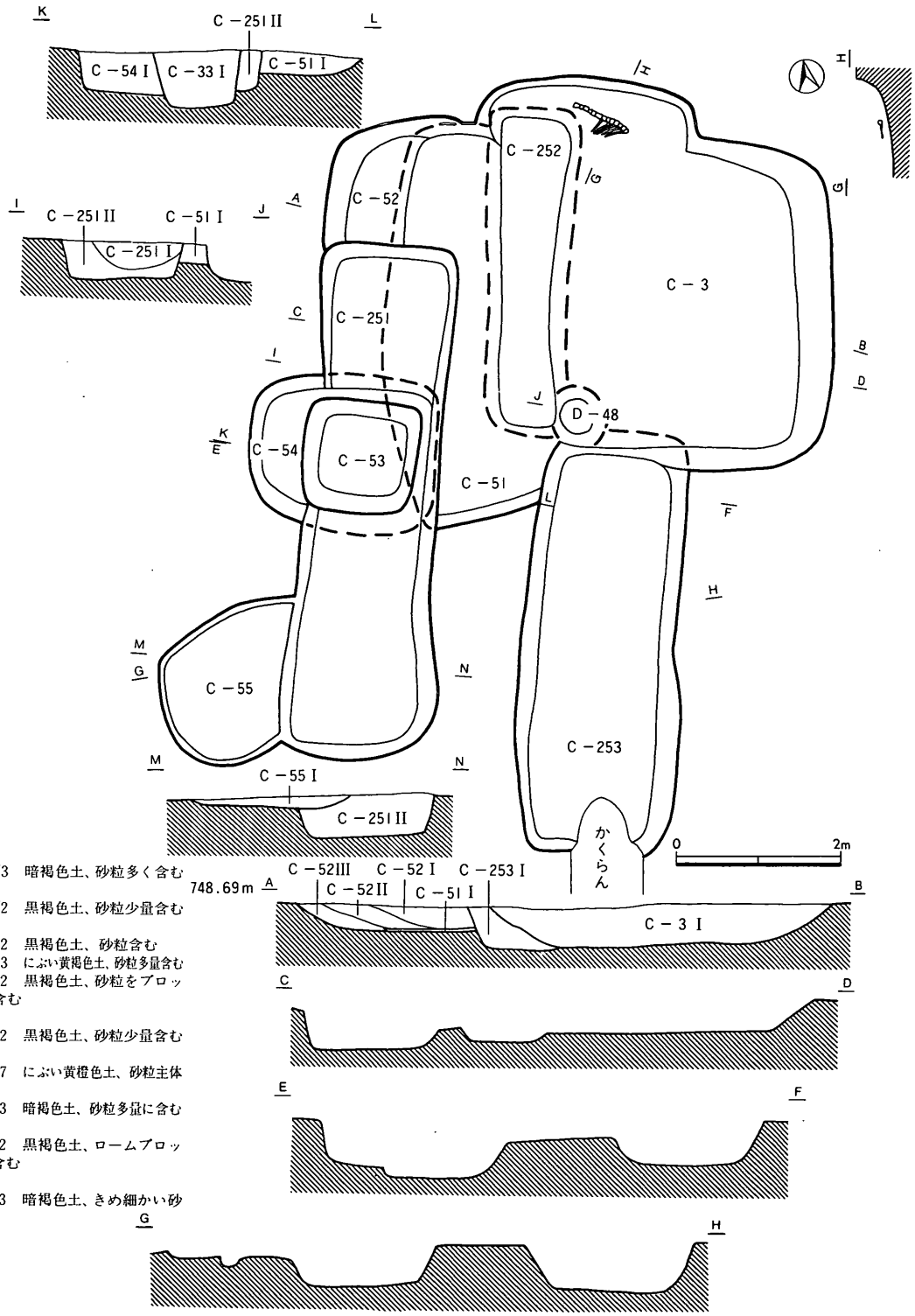
第30図　C－40～45号竪穴遺構



第31図　C－46～50号竪穴遺構

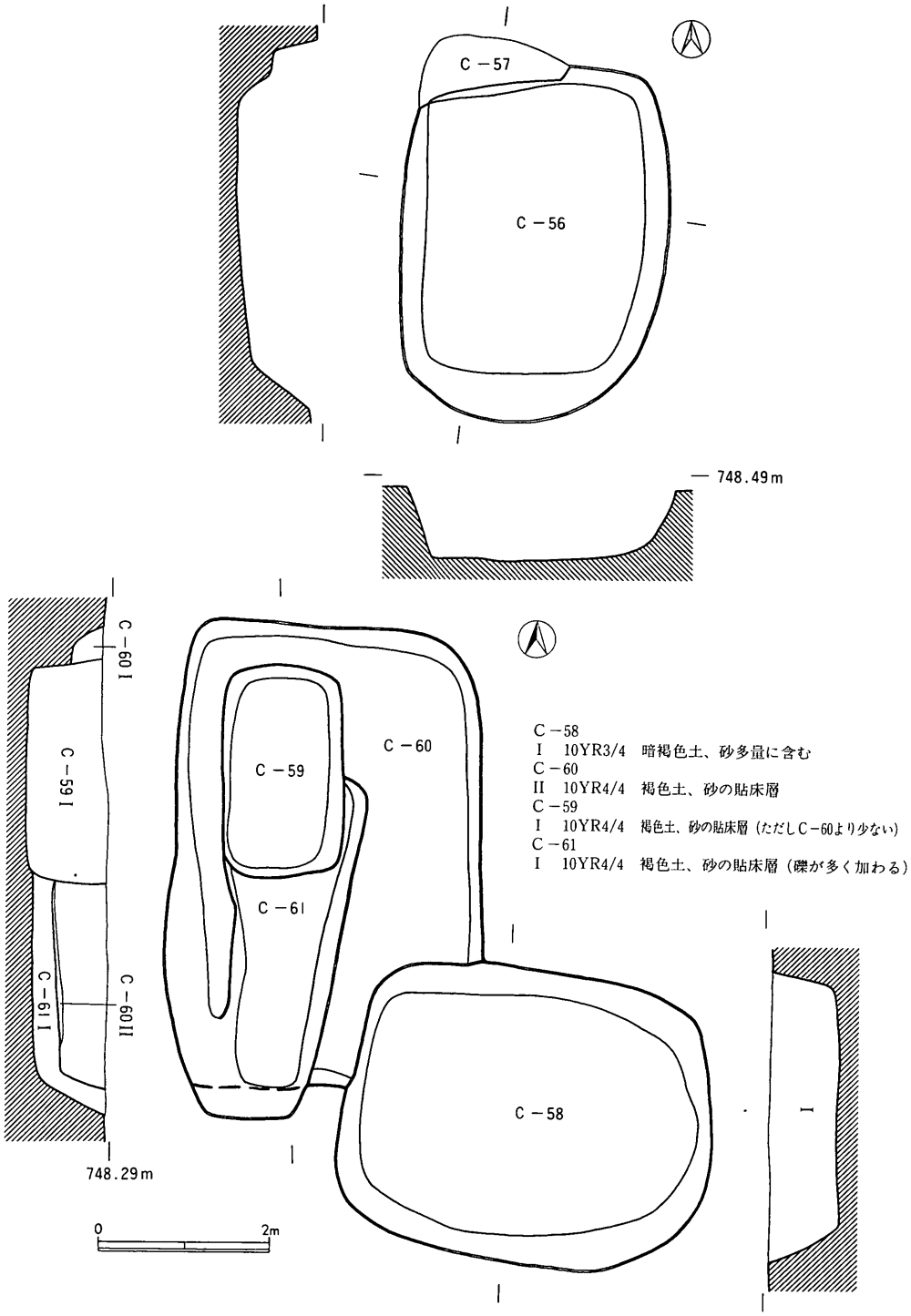


第32図　C－3周辺
構築順序

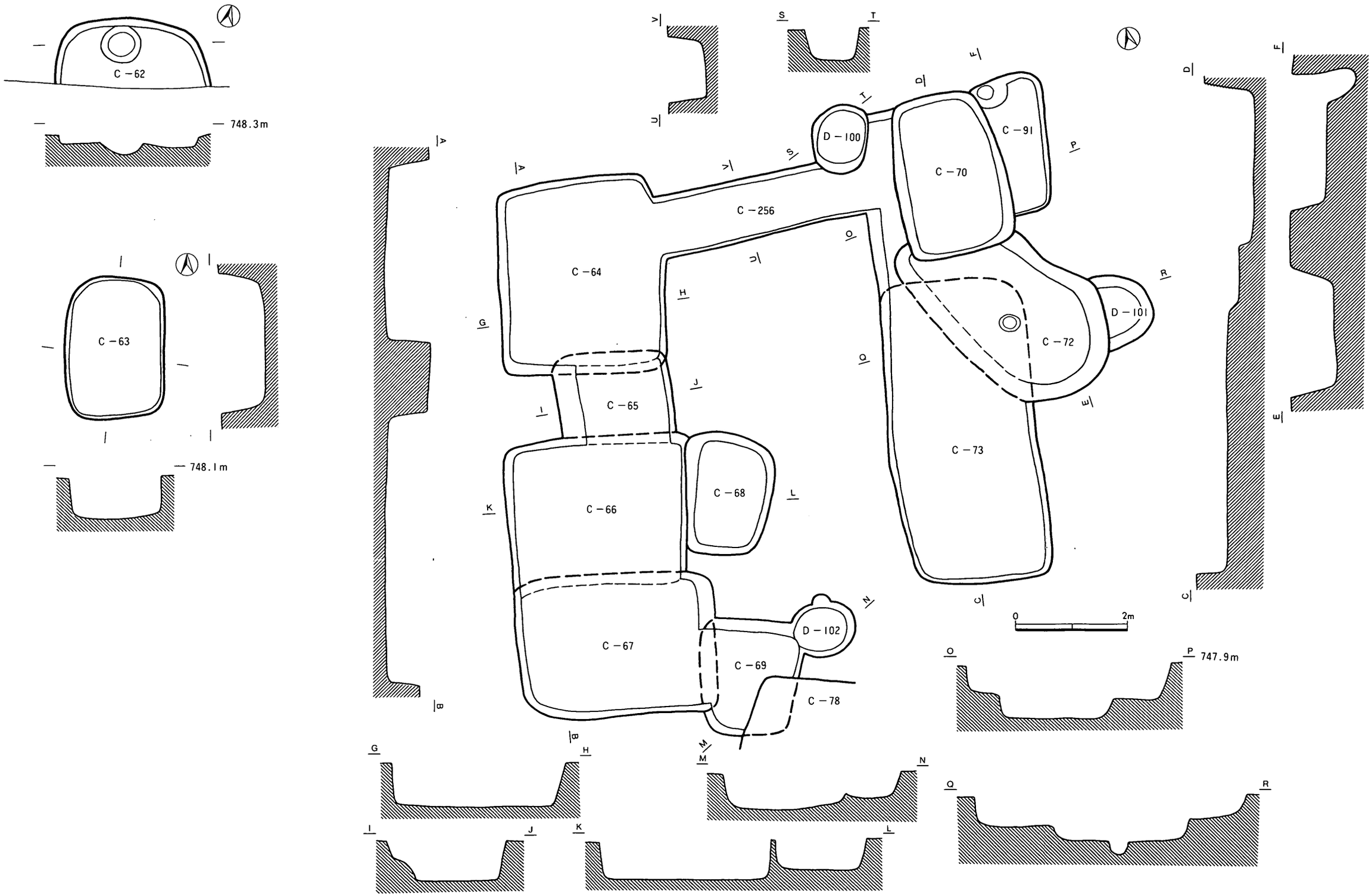


C－3
I　10YR3/3　暗褐色土、砂粒多く含む
C－252
I　10YR2/2　黒褐色土、砂粒少量含む
C－52
I　10YR3/2　黒褐色土、砂粒含む
II　10YR4/3　にぶい黄褐色土、砂粒多量含む
III　10YR2/2　黒褐色土、砂粒をブロック状に含む
C－251
II　10YR3/2　黒褐色土、砂粒少量含む
C－53
I　10YR4/7　にぶい黄橙色土、砂粒主体
C－54
I　10YR3/3　暗褐色土、砂粒多量に含む
C－51
I　10YR3/2　黒褐色土、ロームブロック砂粒含む
C－55
I　10YR3/3　暗褐色土、きめ細かい砂粒含む

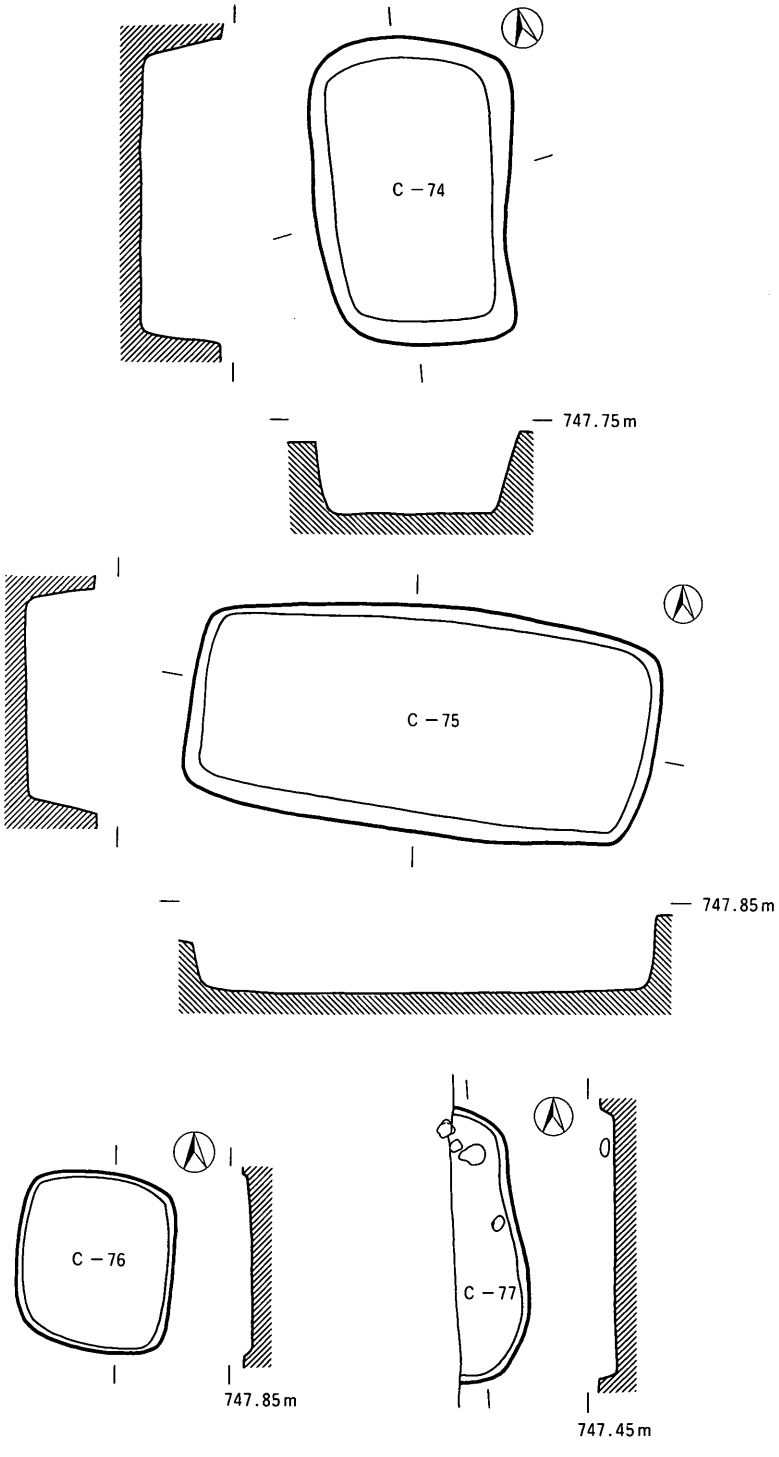
第33図　C－51～55号、C－251～253号竪穴遺構



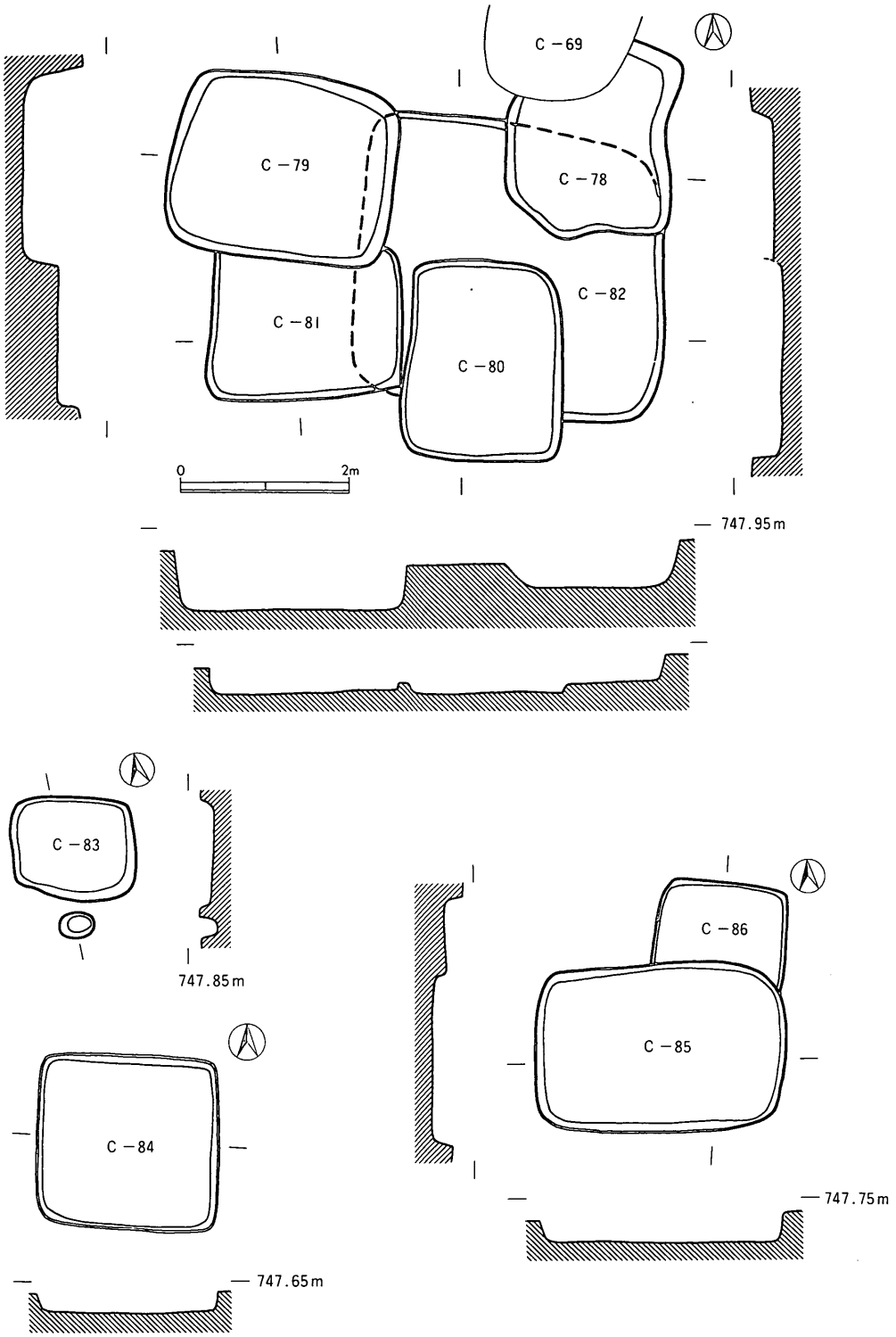
第34図　C－56～61号竪穴遺構



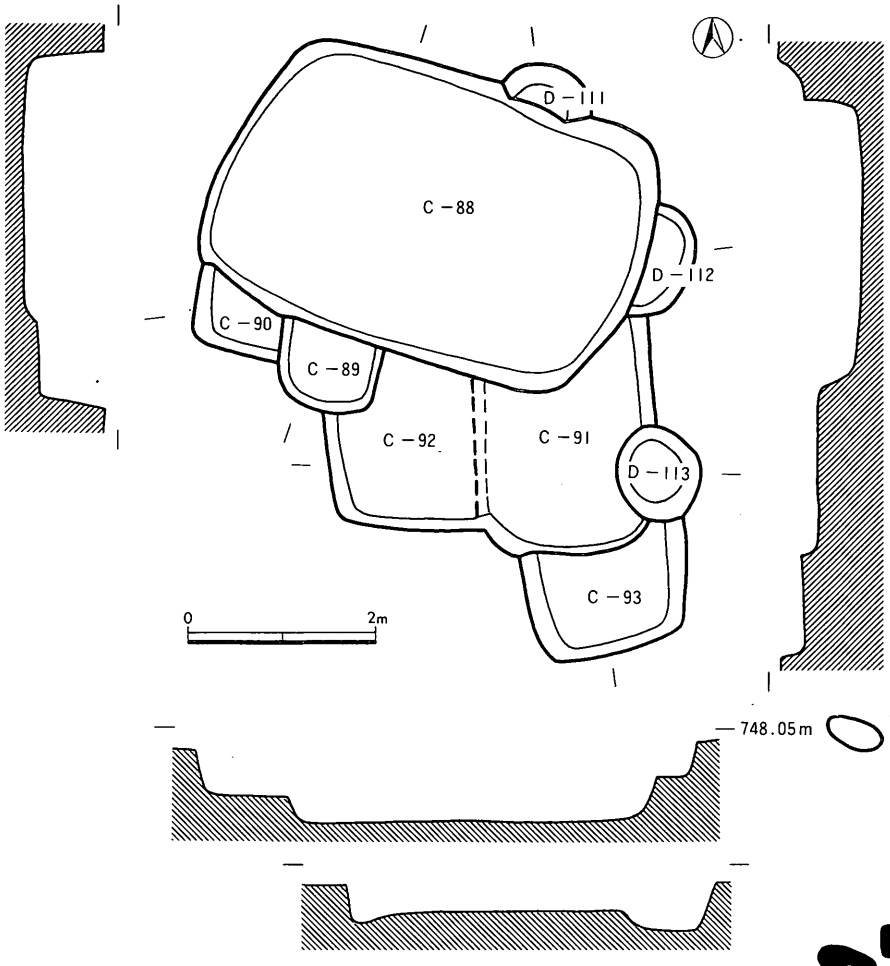
第35図　C－62～73号、C－256号竪穴遺構



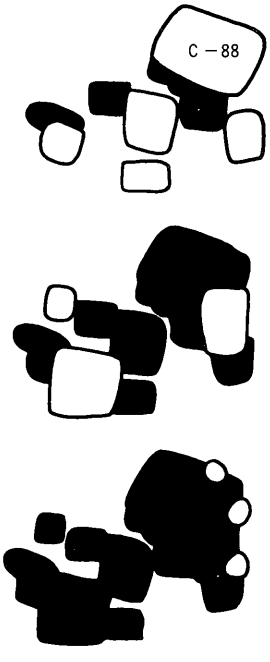
第36図　C－74～77号竪穴遺構



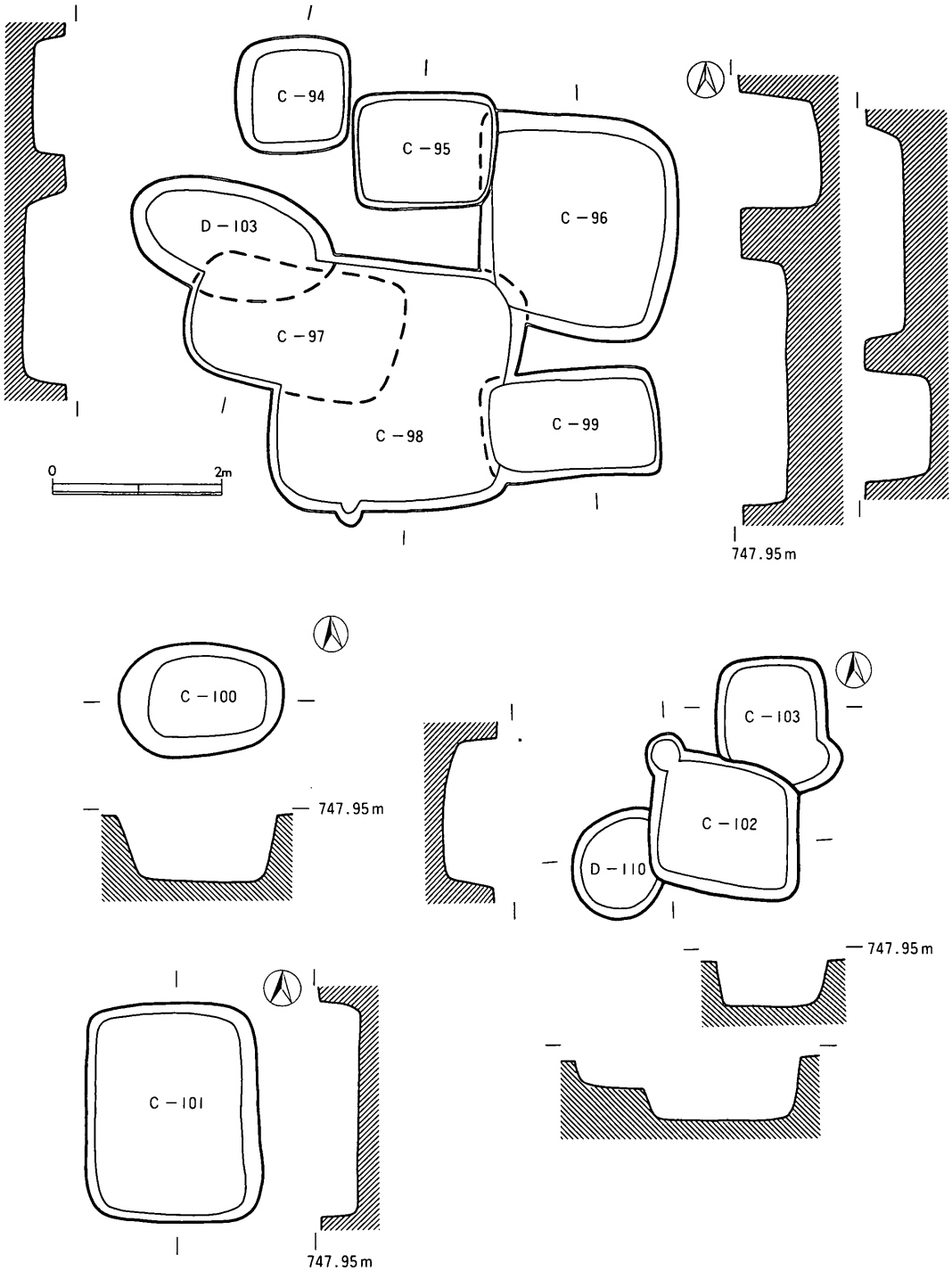
第37図　C－78～86号竪穴遺構



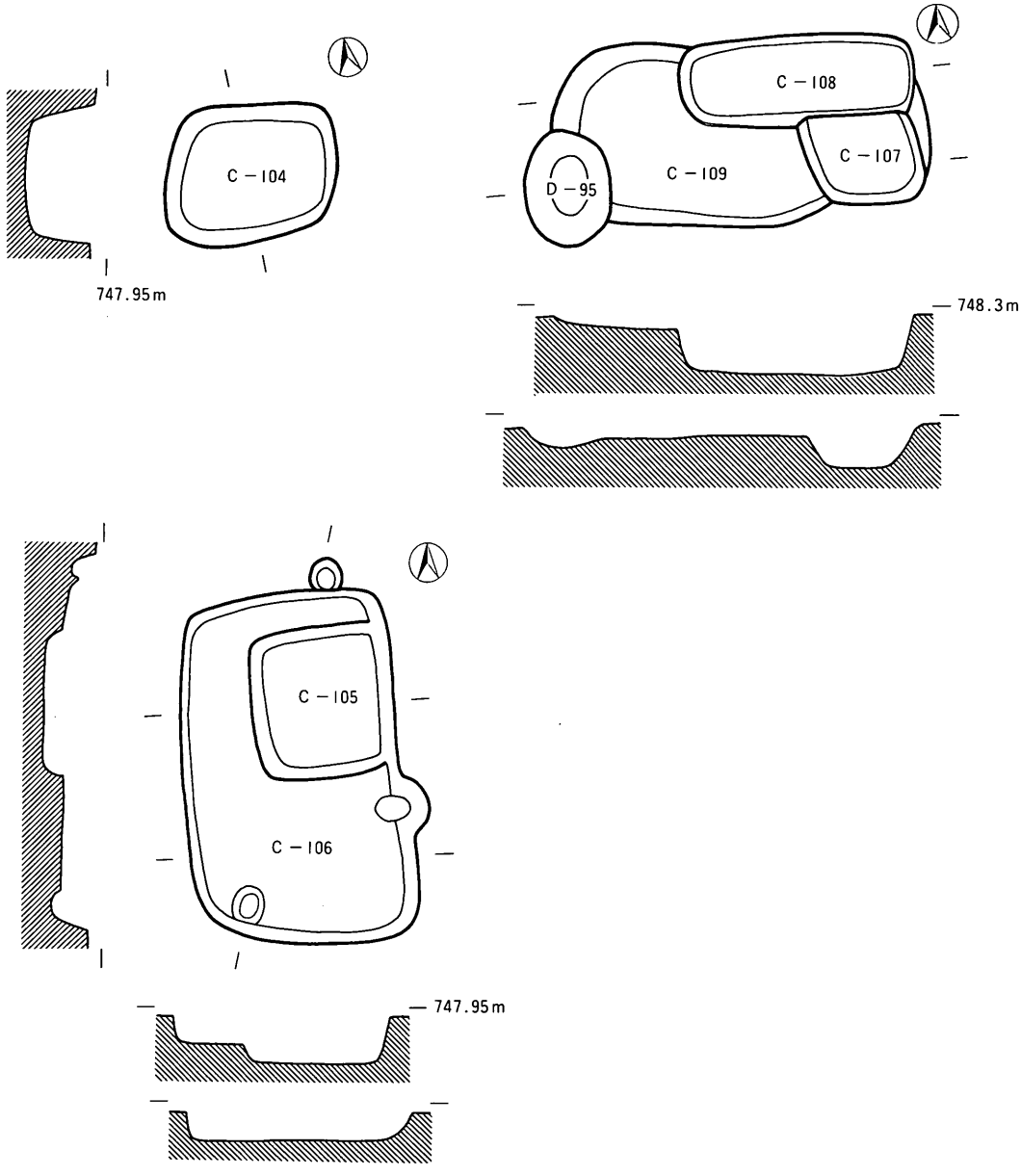
第38図　C－88～93号竪穴遺構



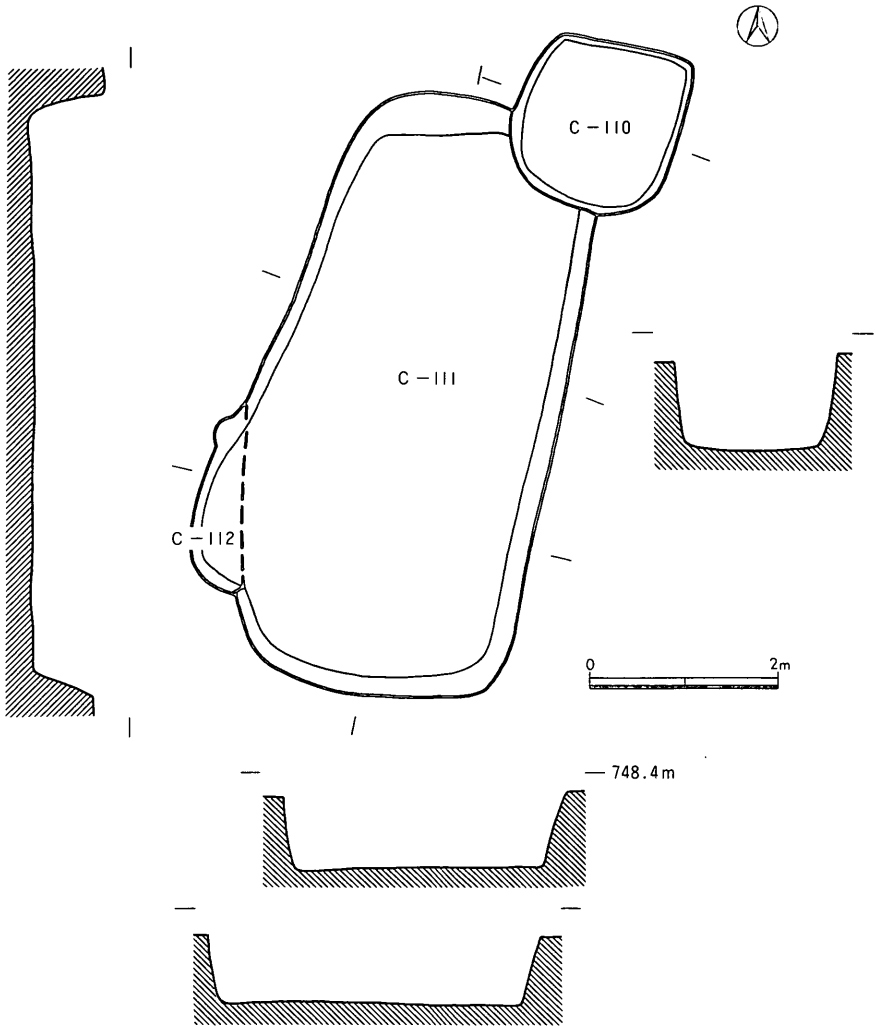
第39図　C－88周辺構築順序



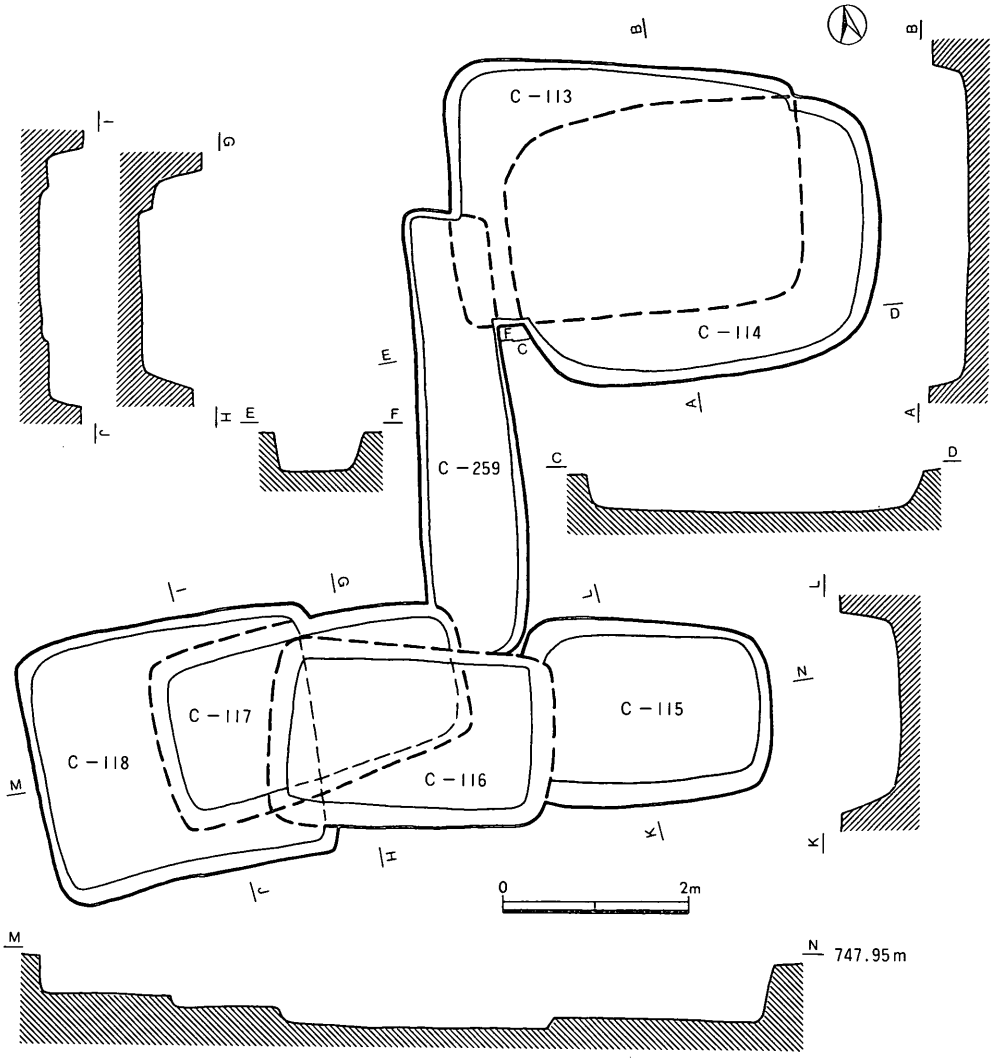
第40図　C－94～103号竪穴遺構



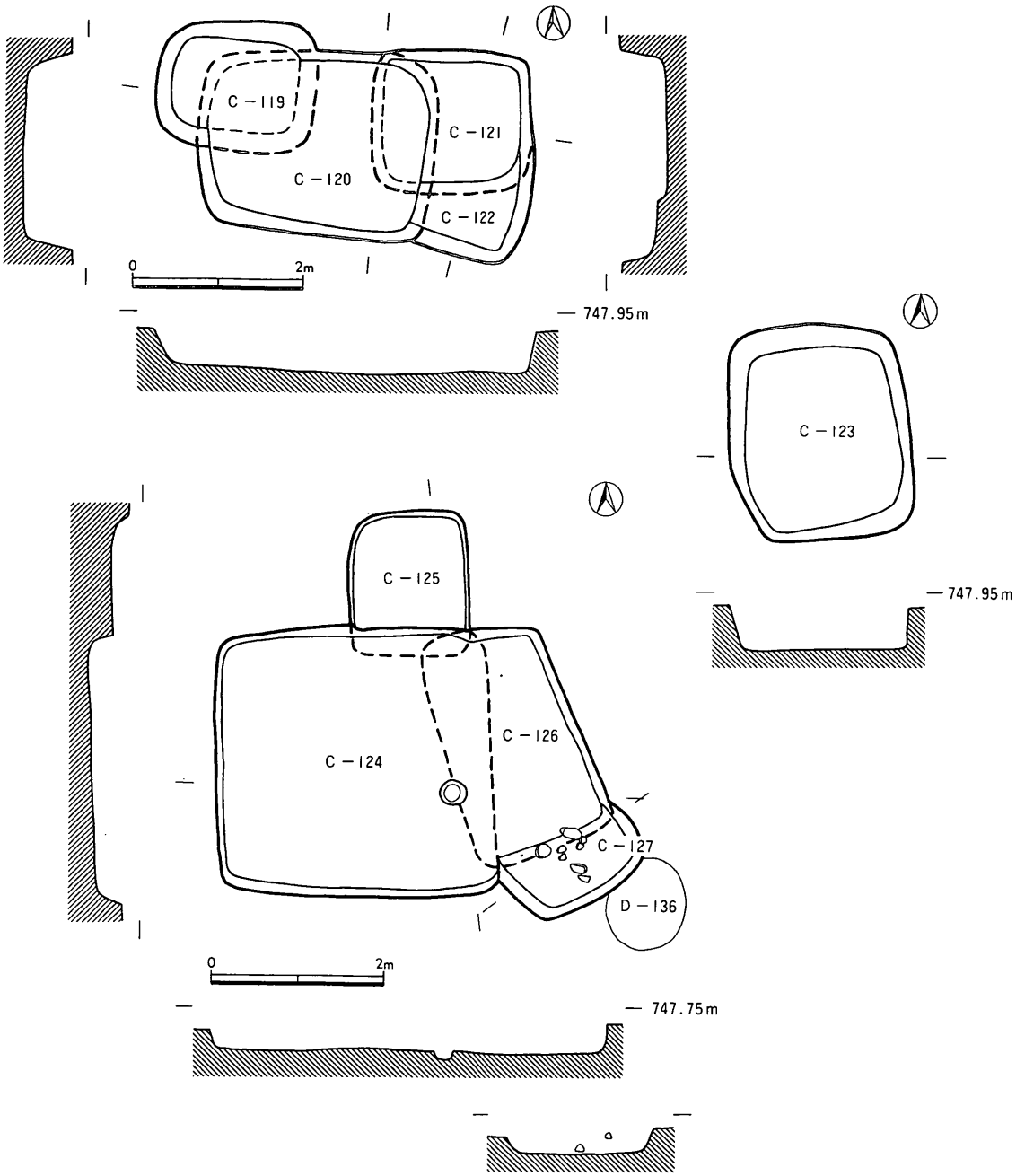
第41図　C－104～109号竪穴遺構



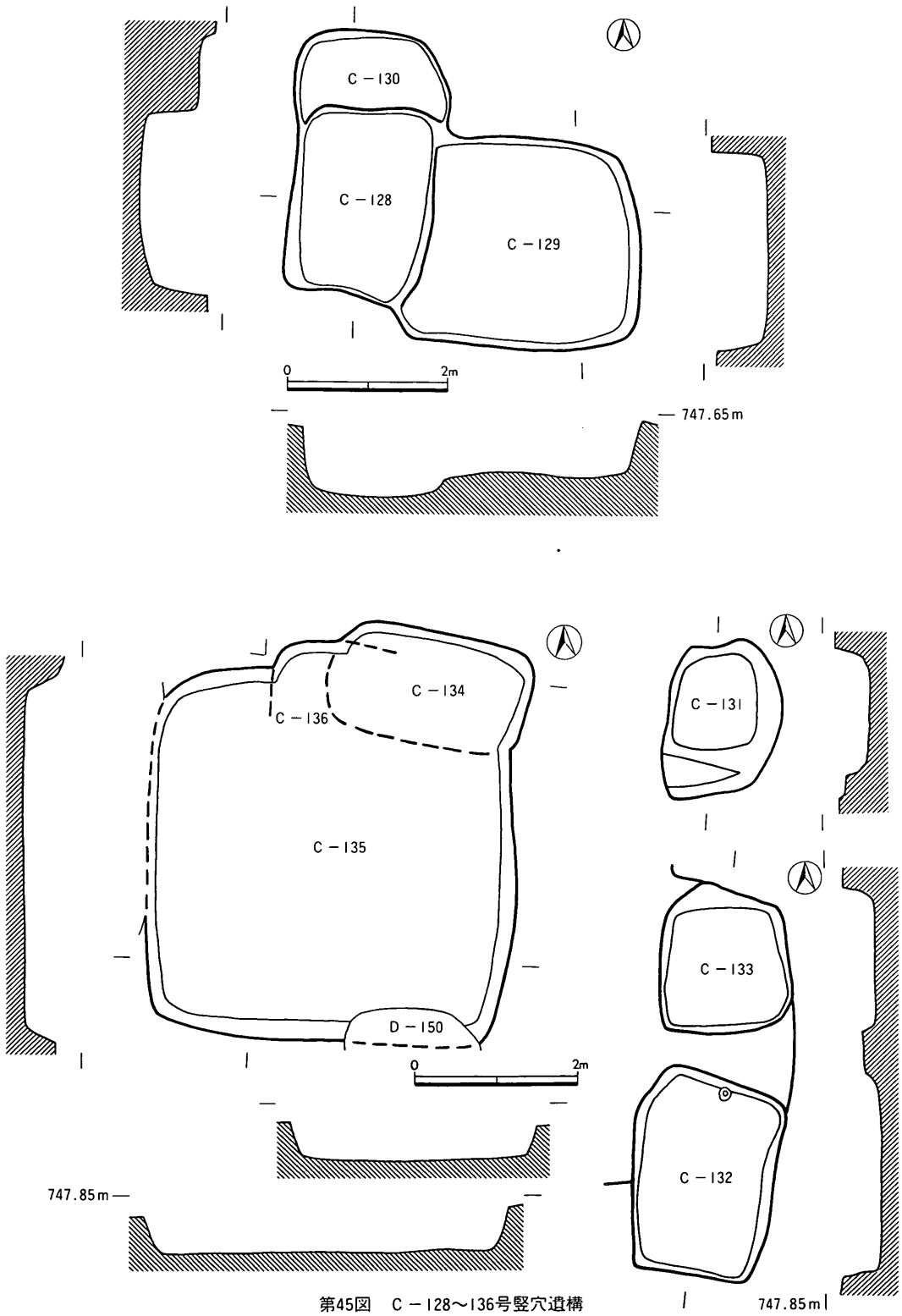
第42図　C－110・111・112号竪穴遺構



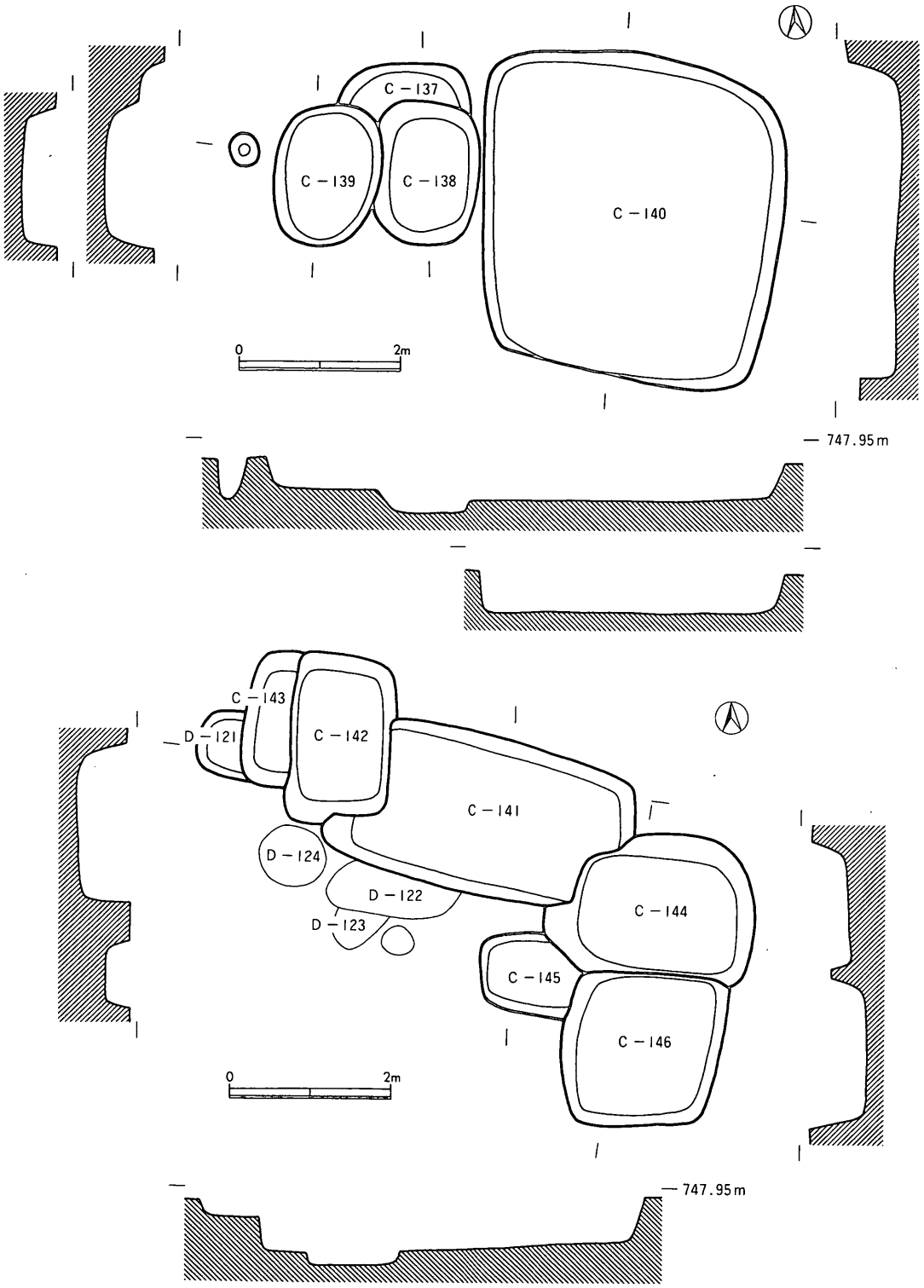
第43図　C－113～118号、C－259号竪穴遺構



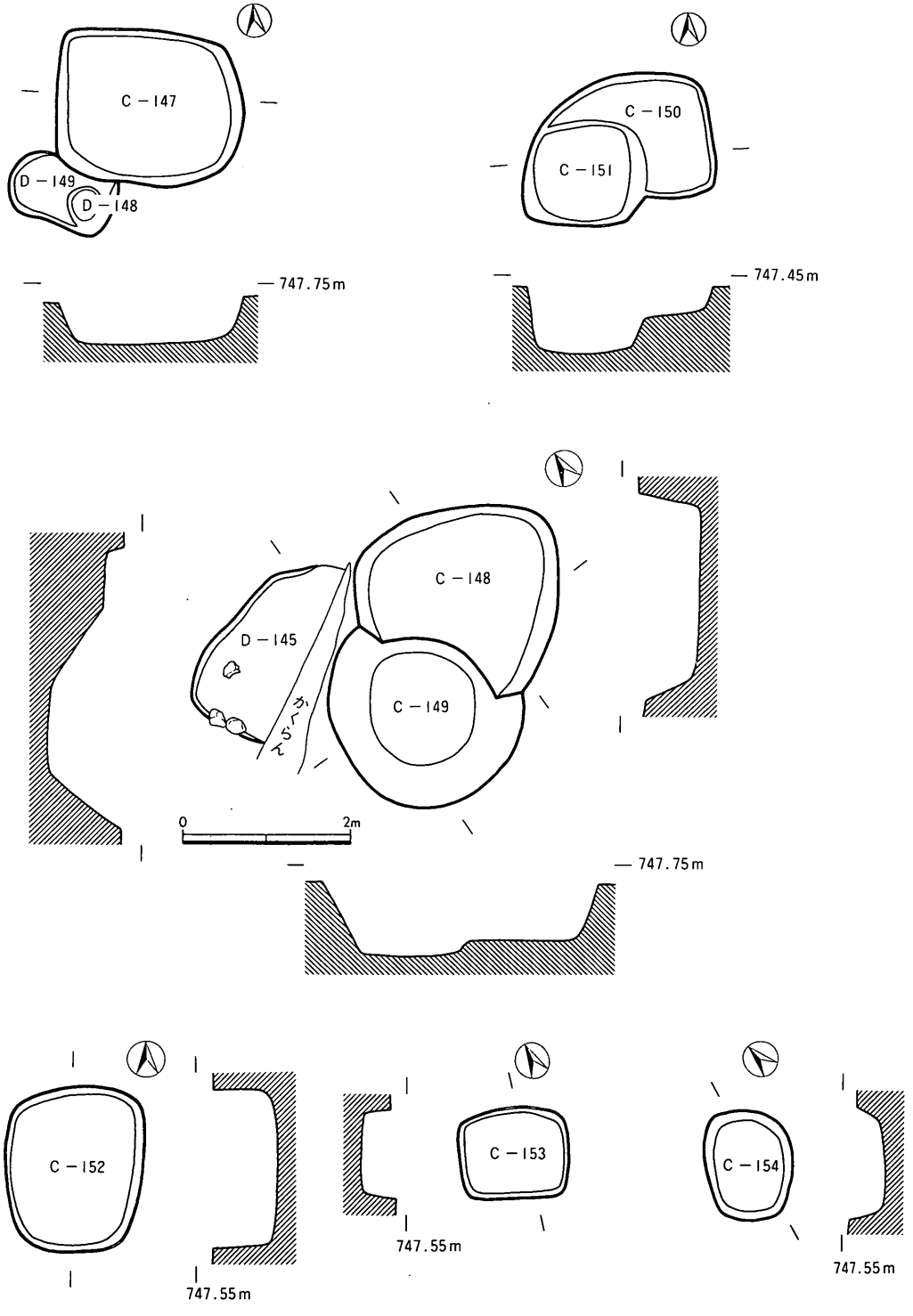
第44図　C－119～127号竪穴遺構



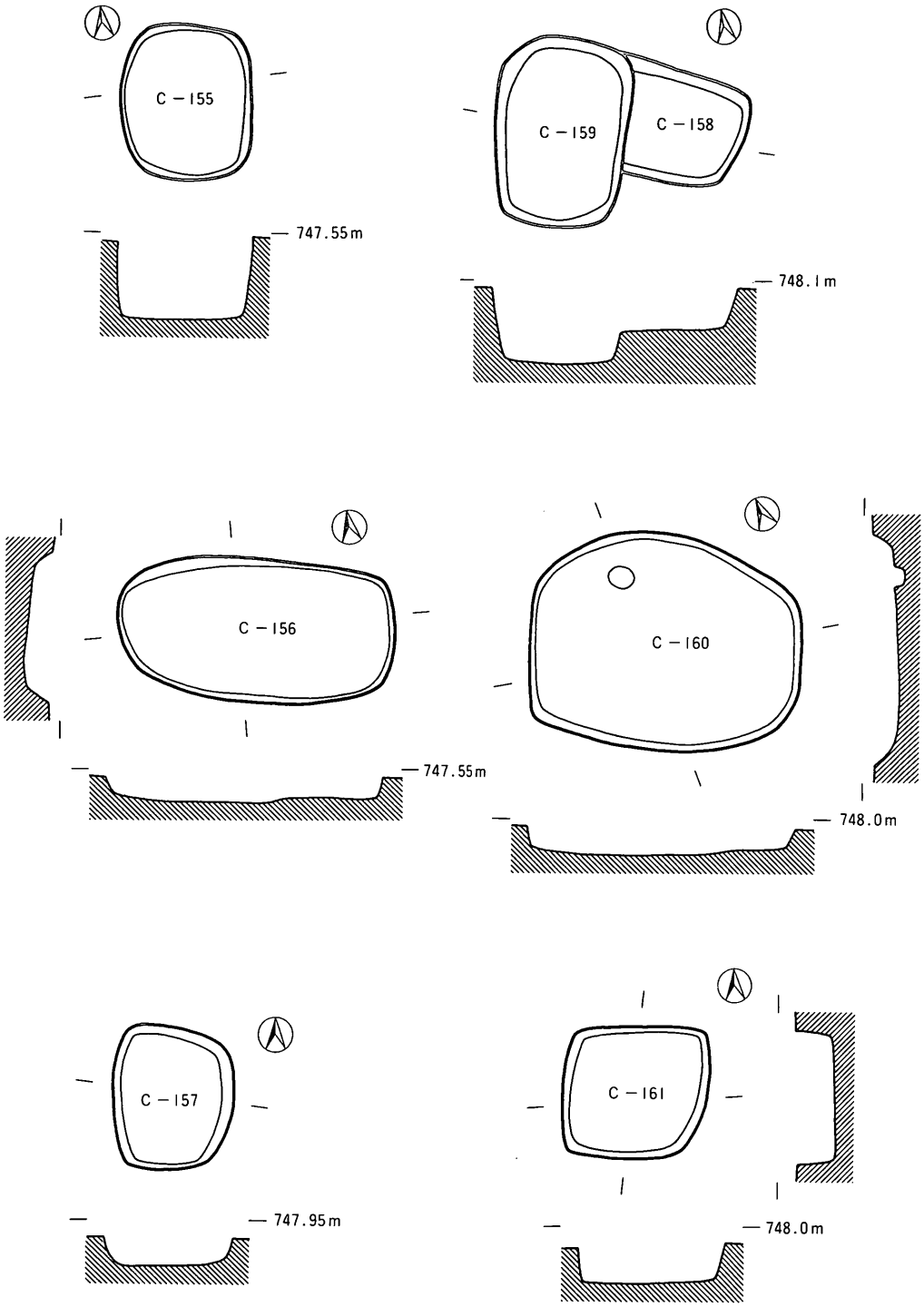
第45図　C－128～136号竪穴遺構



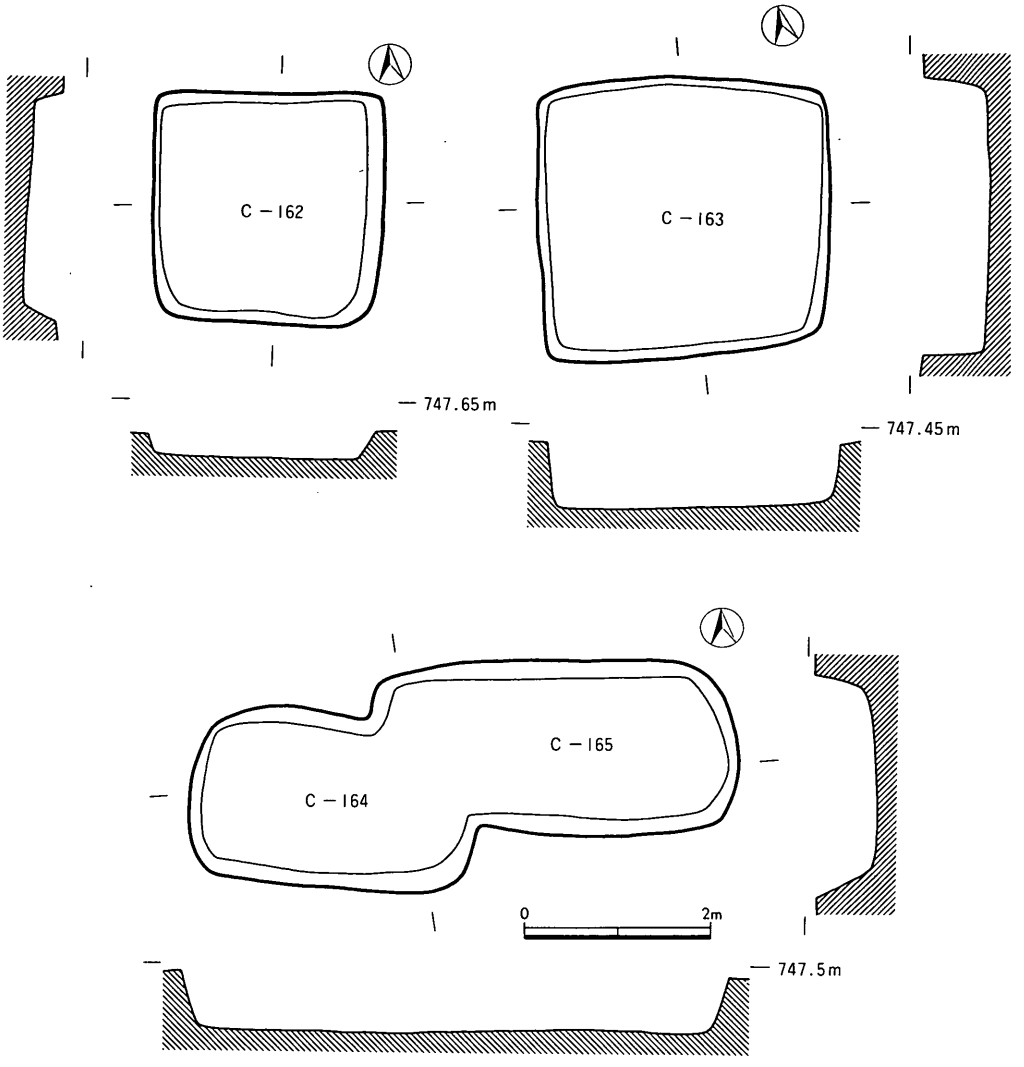
第46図　C－137～146号竪穴遺構



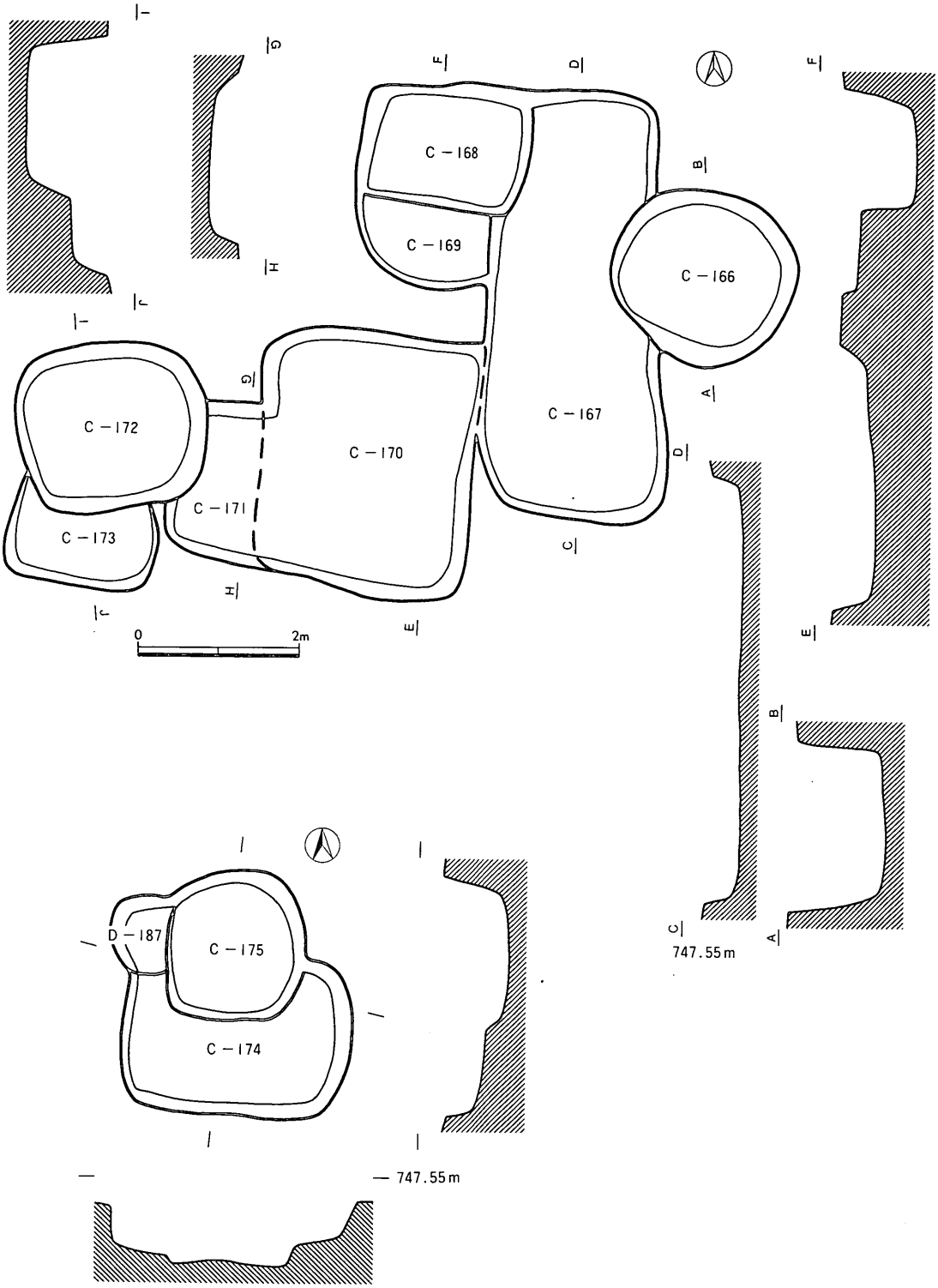
第47図　C－147～154号竪穴遺構



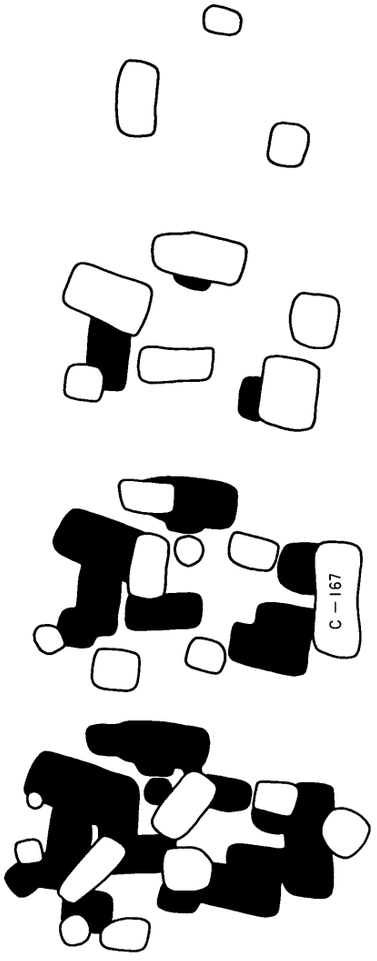
第48図　C－155～161号竪穴遺構



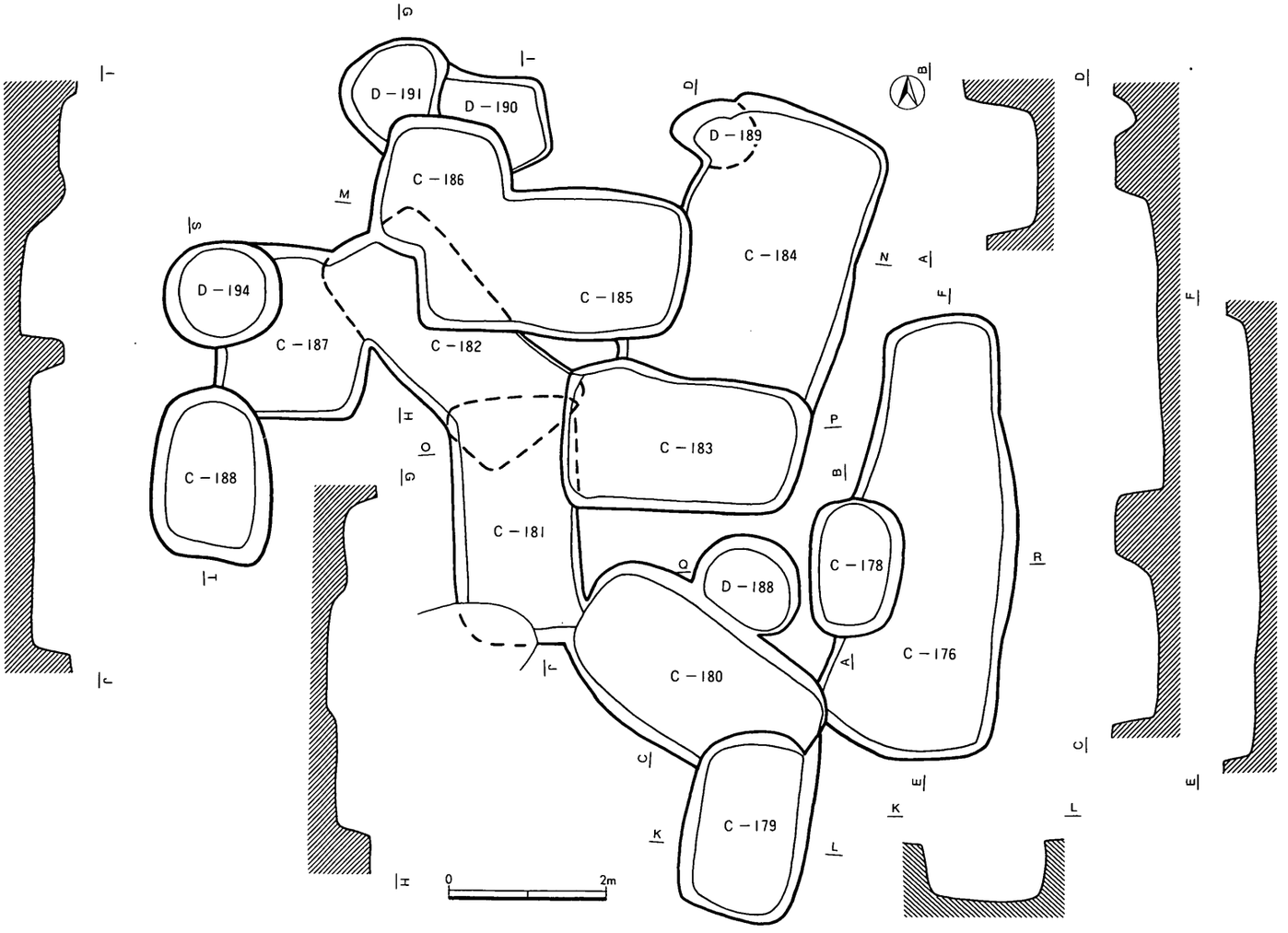
第49図　C－162～165号竪穴遺構

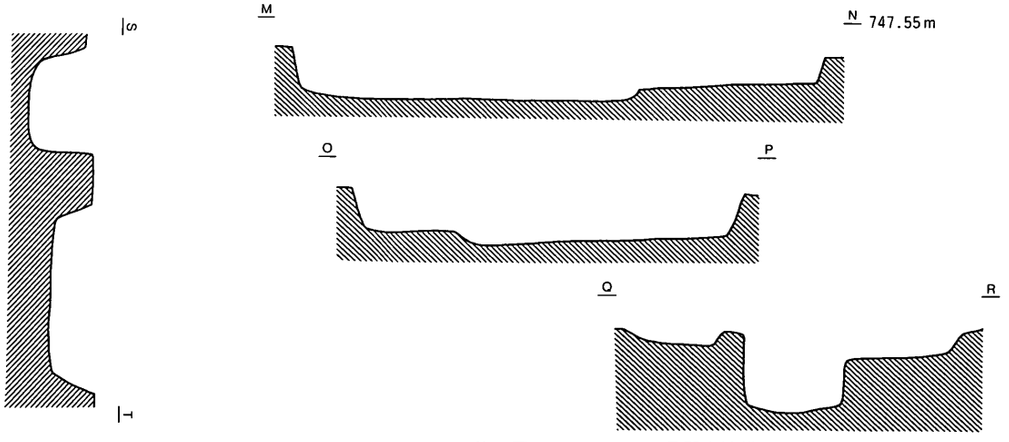


第50図　C－166～175号竪穴遺構

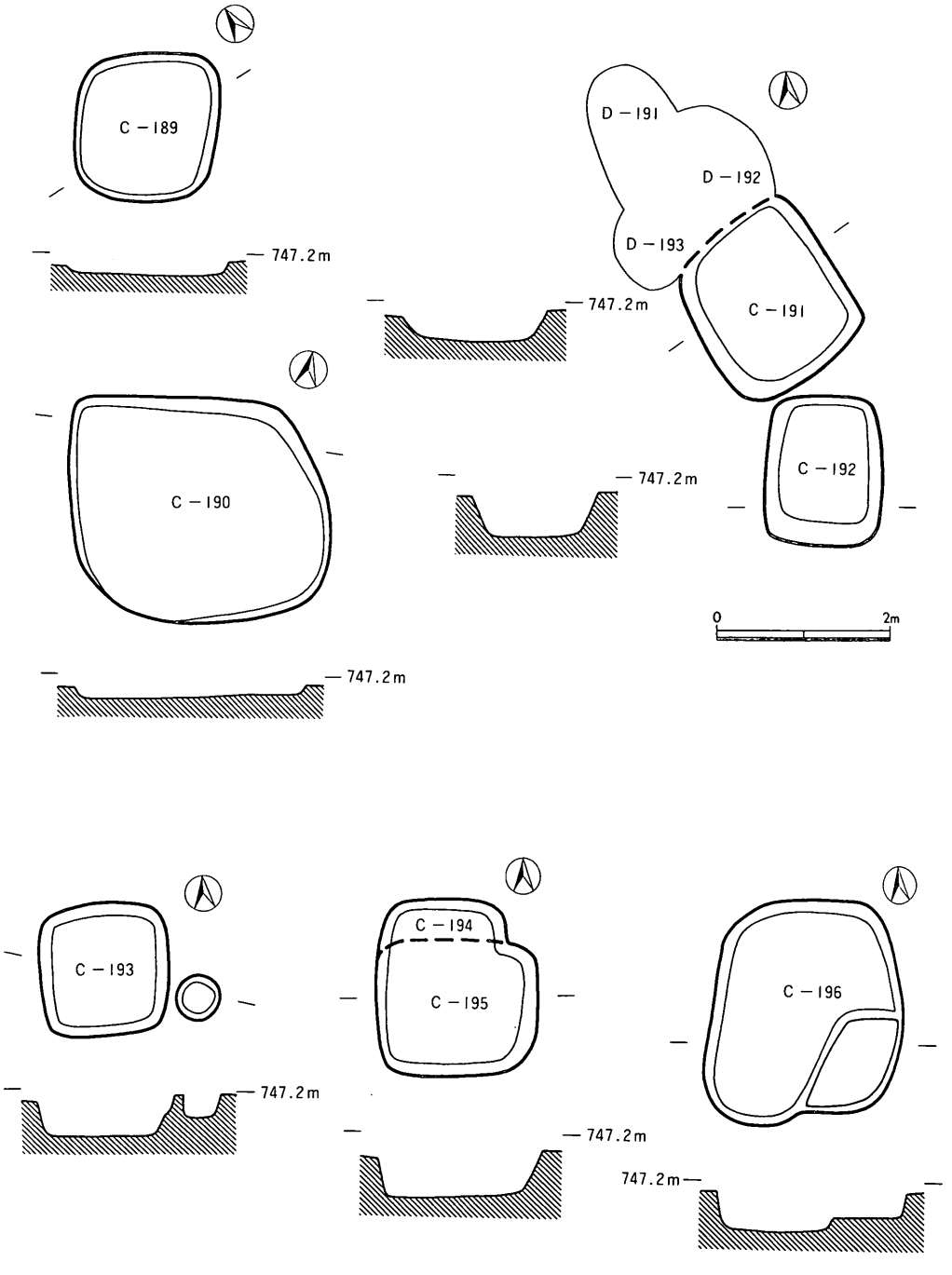


第51図　C－167周辺構築順序

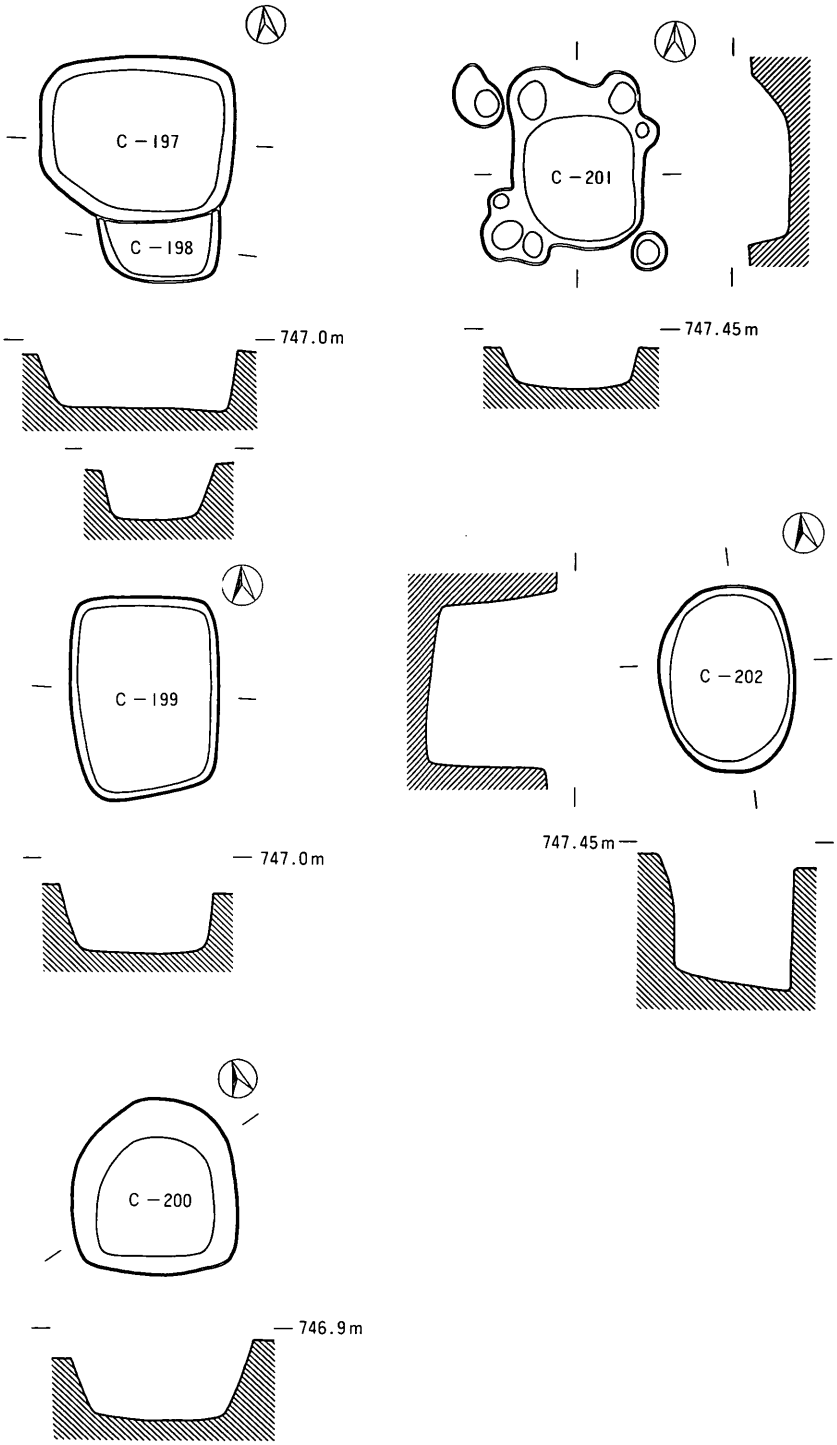




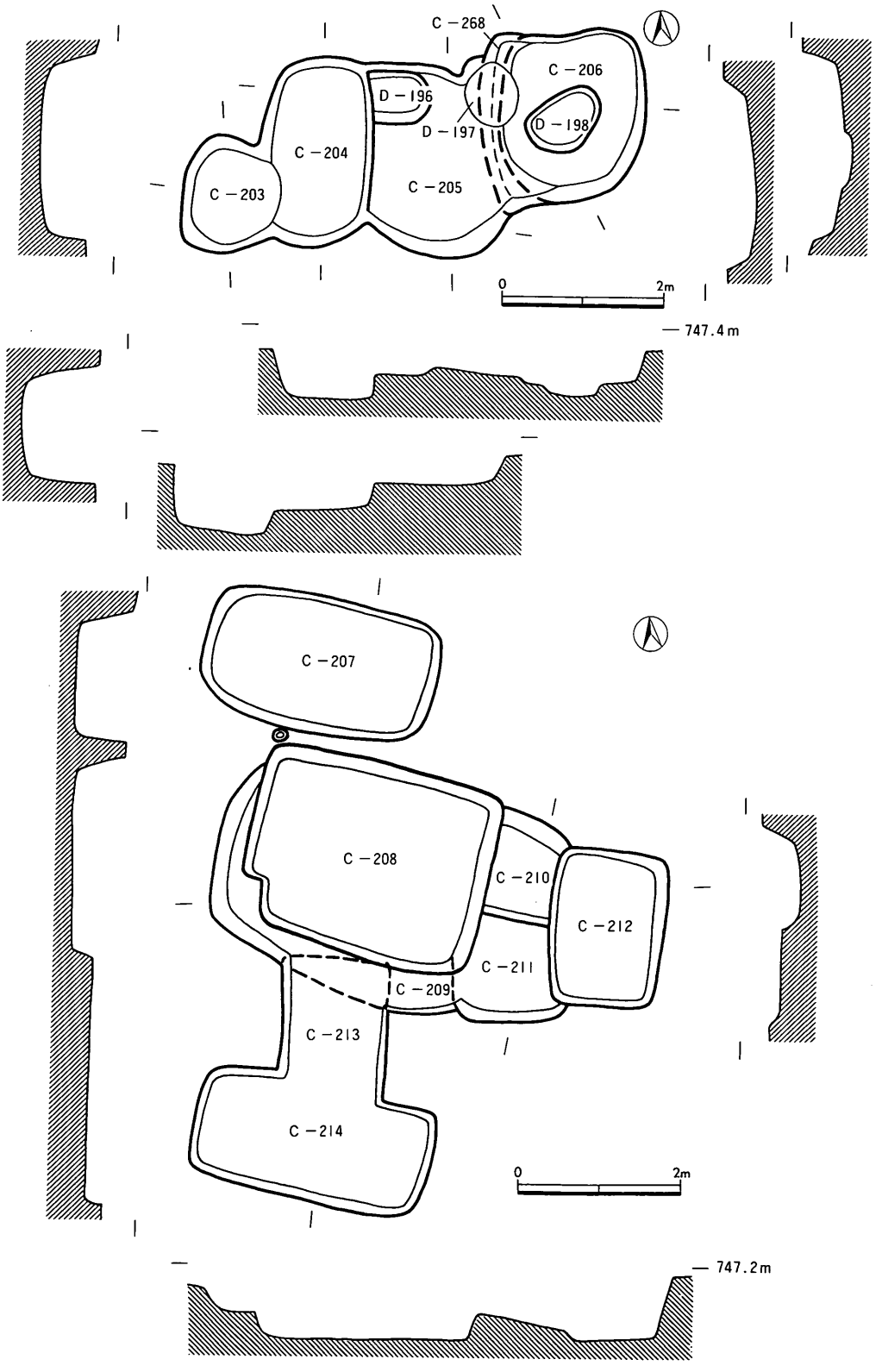
第52図　C－176～188号竪穴遺構



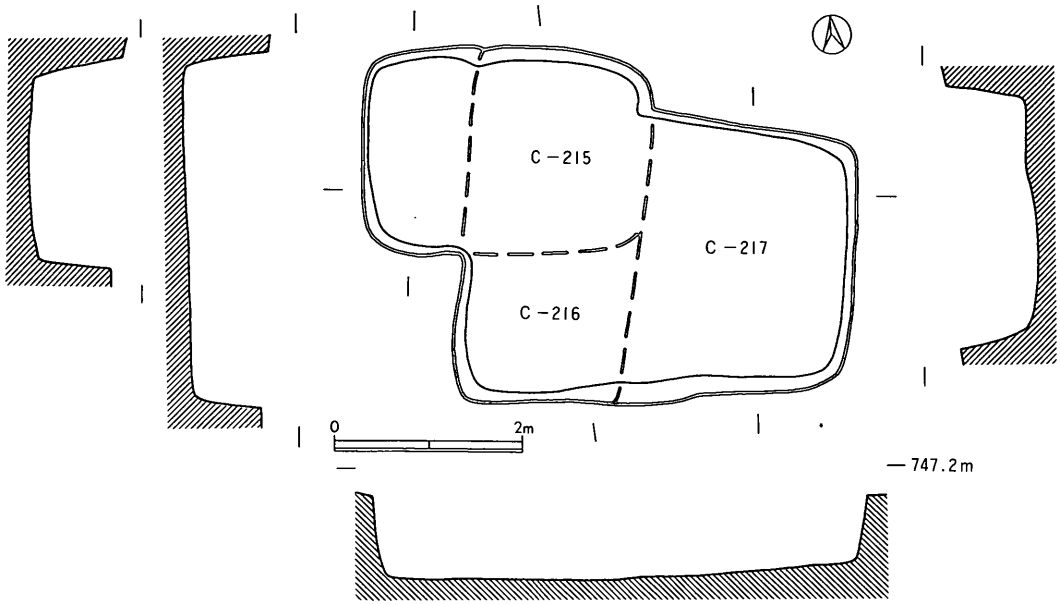
第53図　C－189～196号竪穴遺構

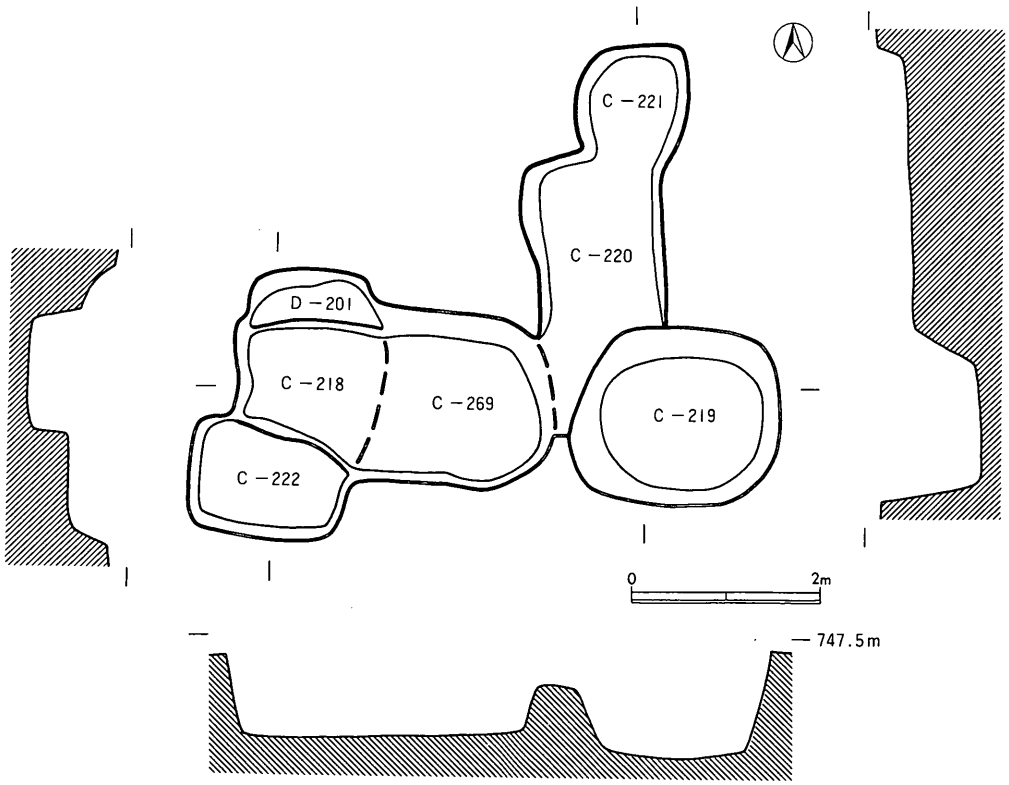


第54図　C－197～202号竪穴遺構

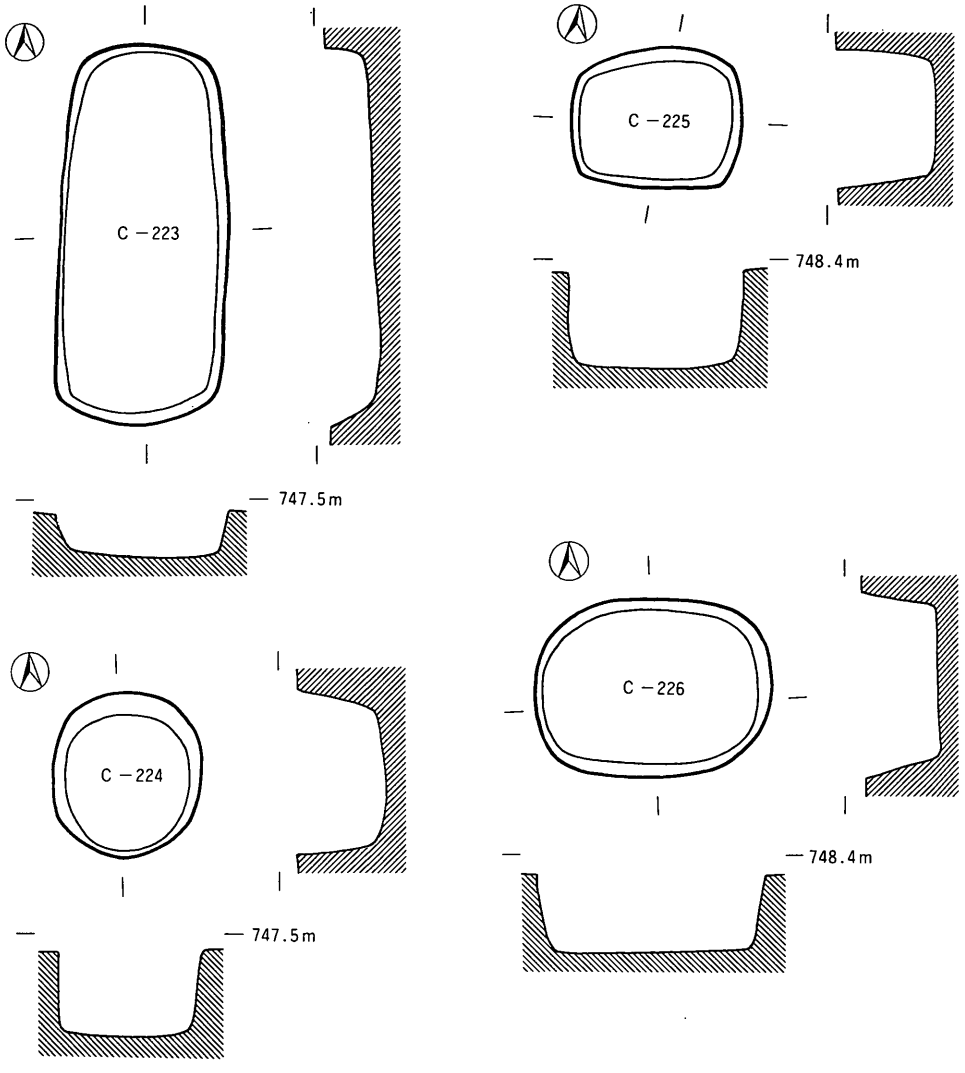


第55図　C－203～214号、C－268号竪穴遺構

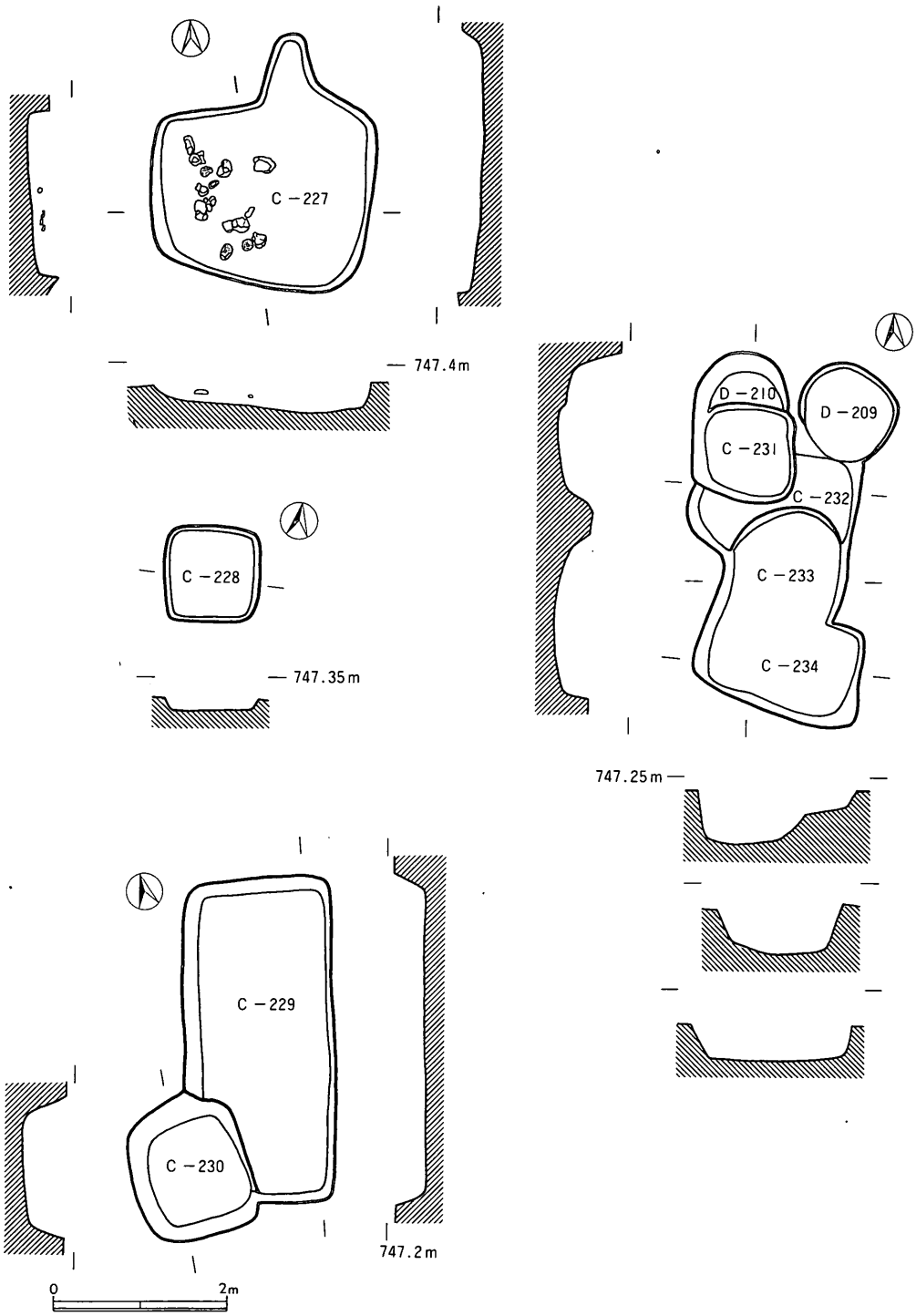




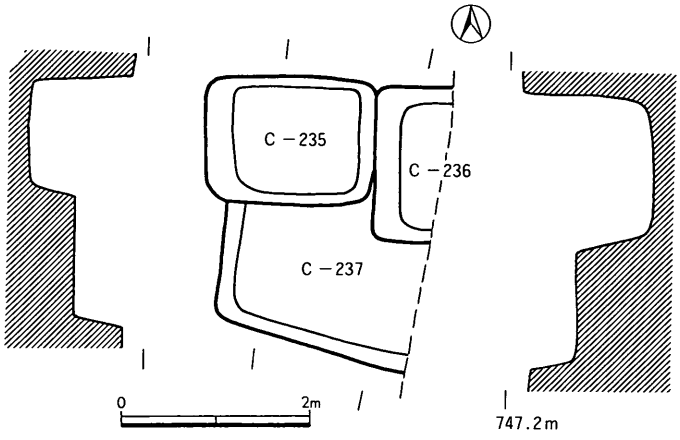
第56図　C－215～222号、C－269号竪穴遺構

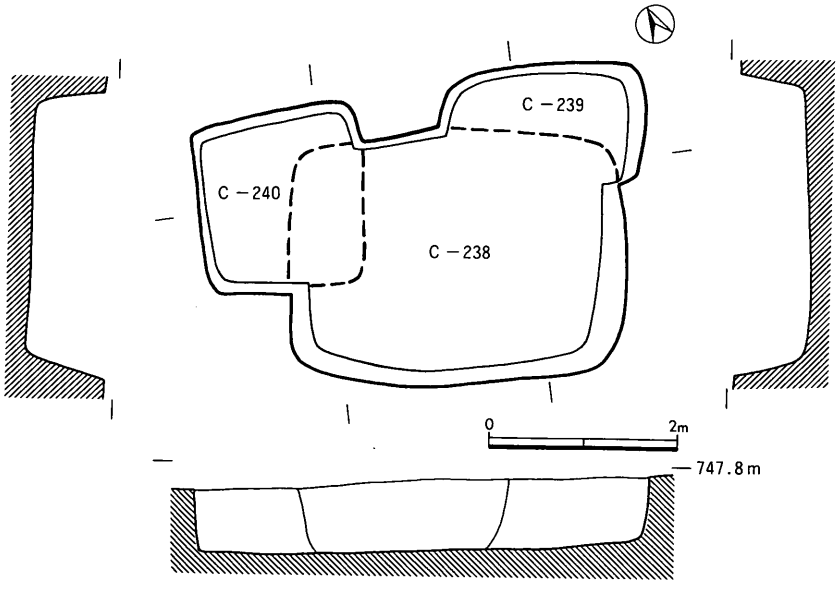


第57図　C－223～226号竪穴遺構



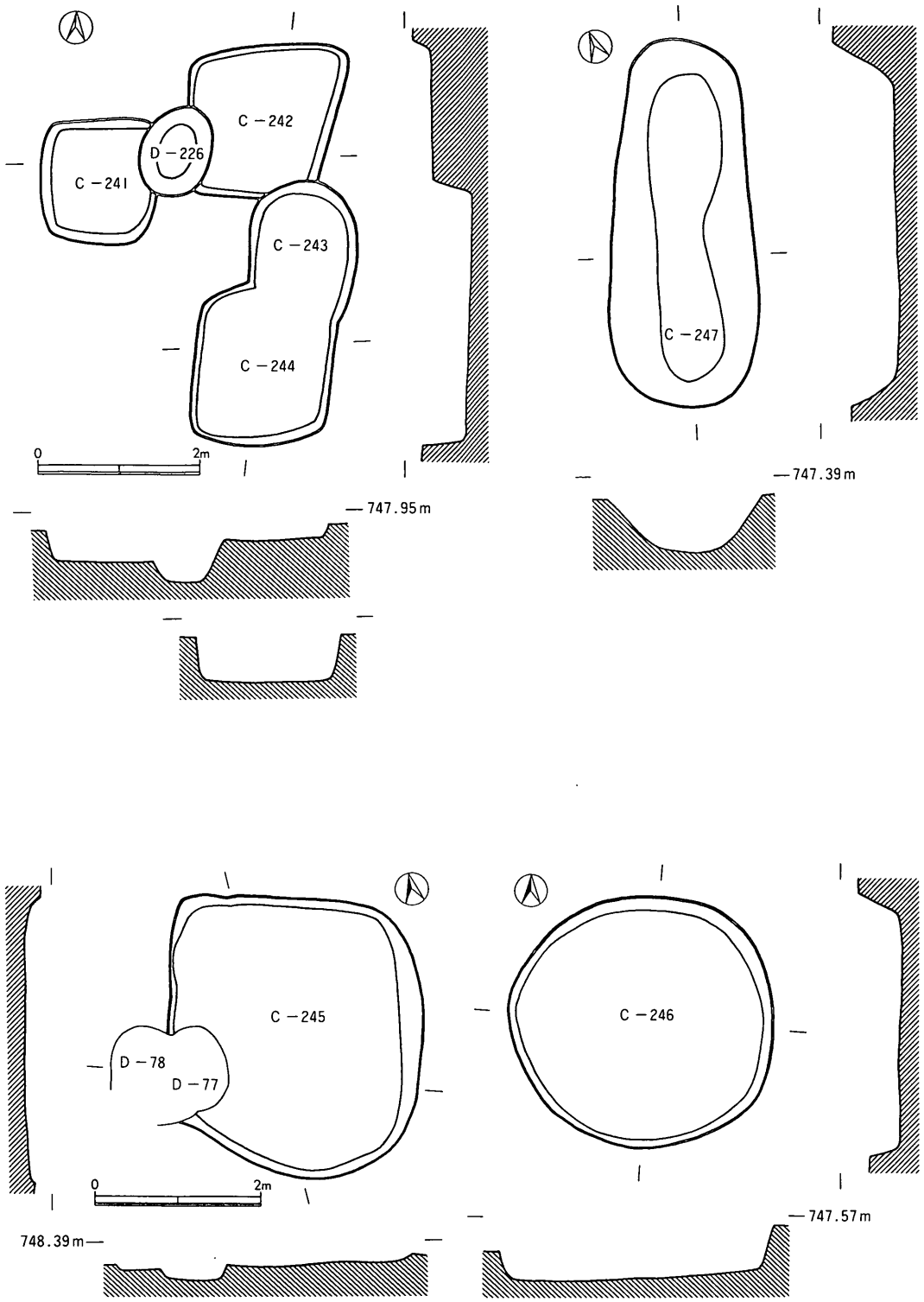
第58図　C－227～234号竪穴遺構



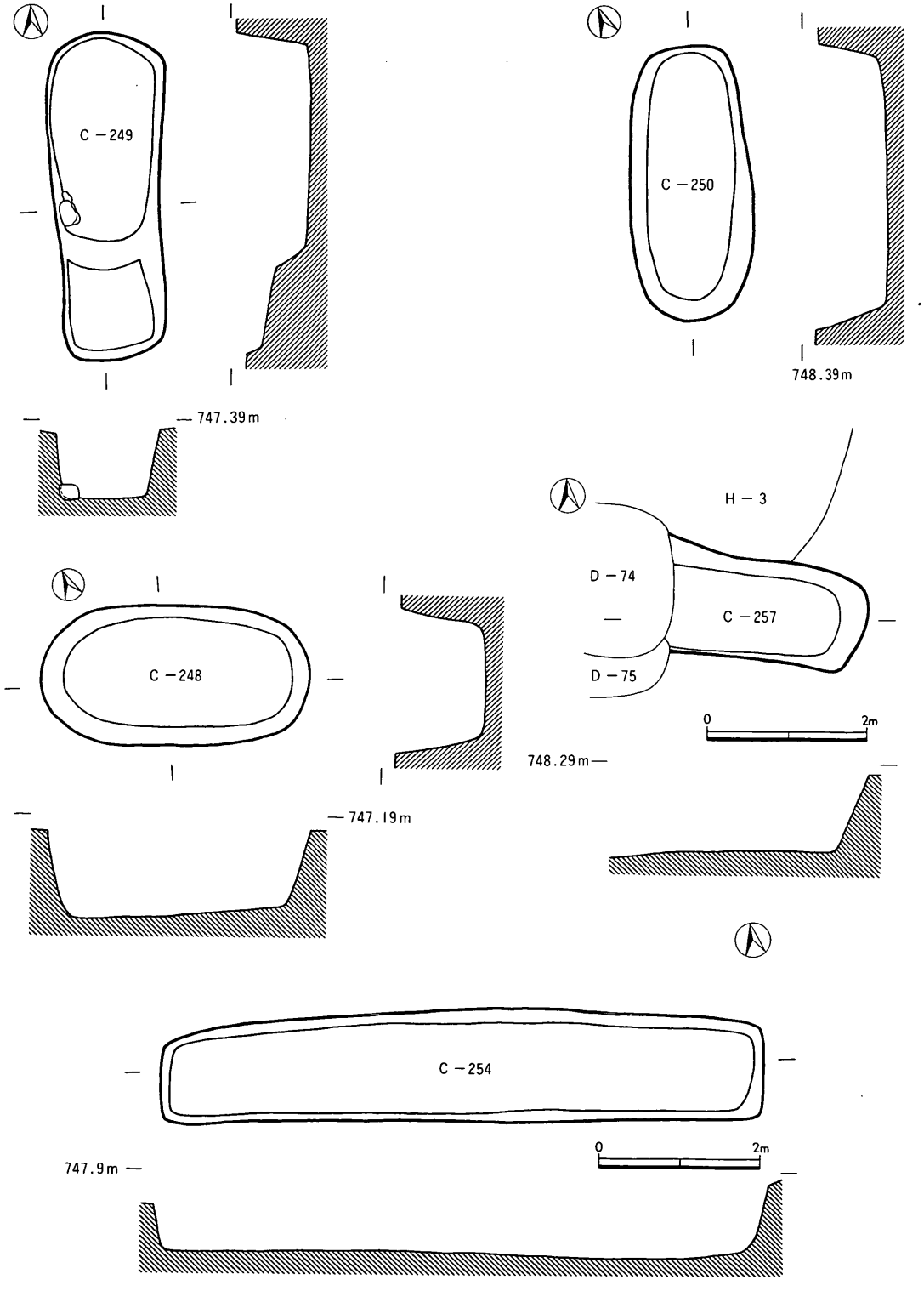


C－238　10YR3/4　暗褐色土、砂質、パミス含む
C－239　10YR3/3　暗褐色土、砂質、パミス含む
C－240　10YR3/3　暗褐色土、砂質、パミス含む

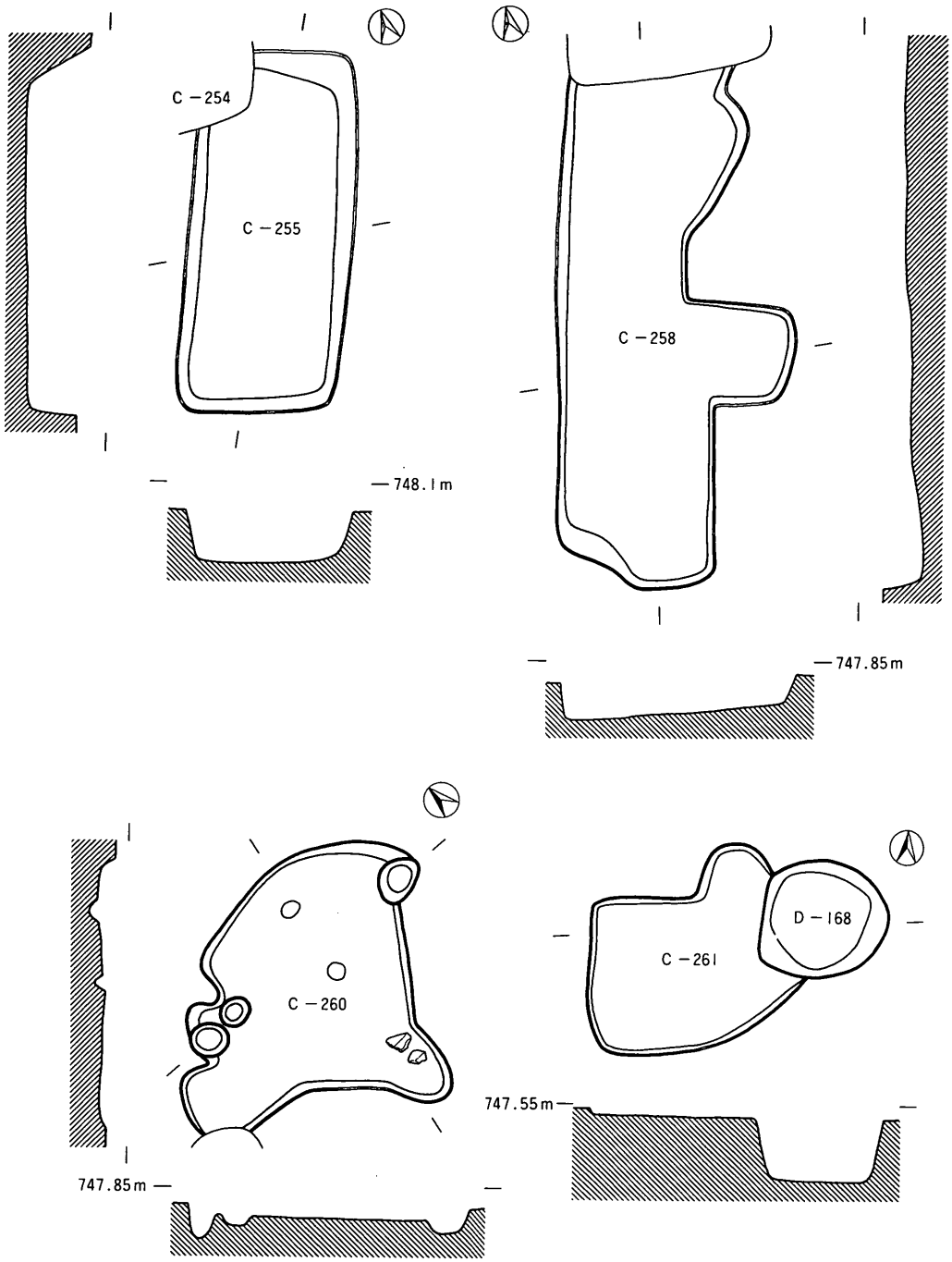
第59図　C－235～240号竪穴遺構



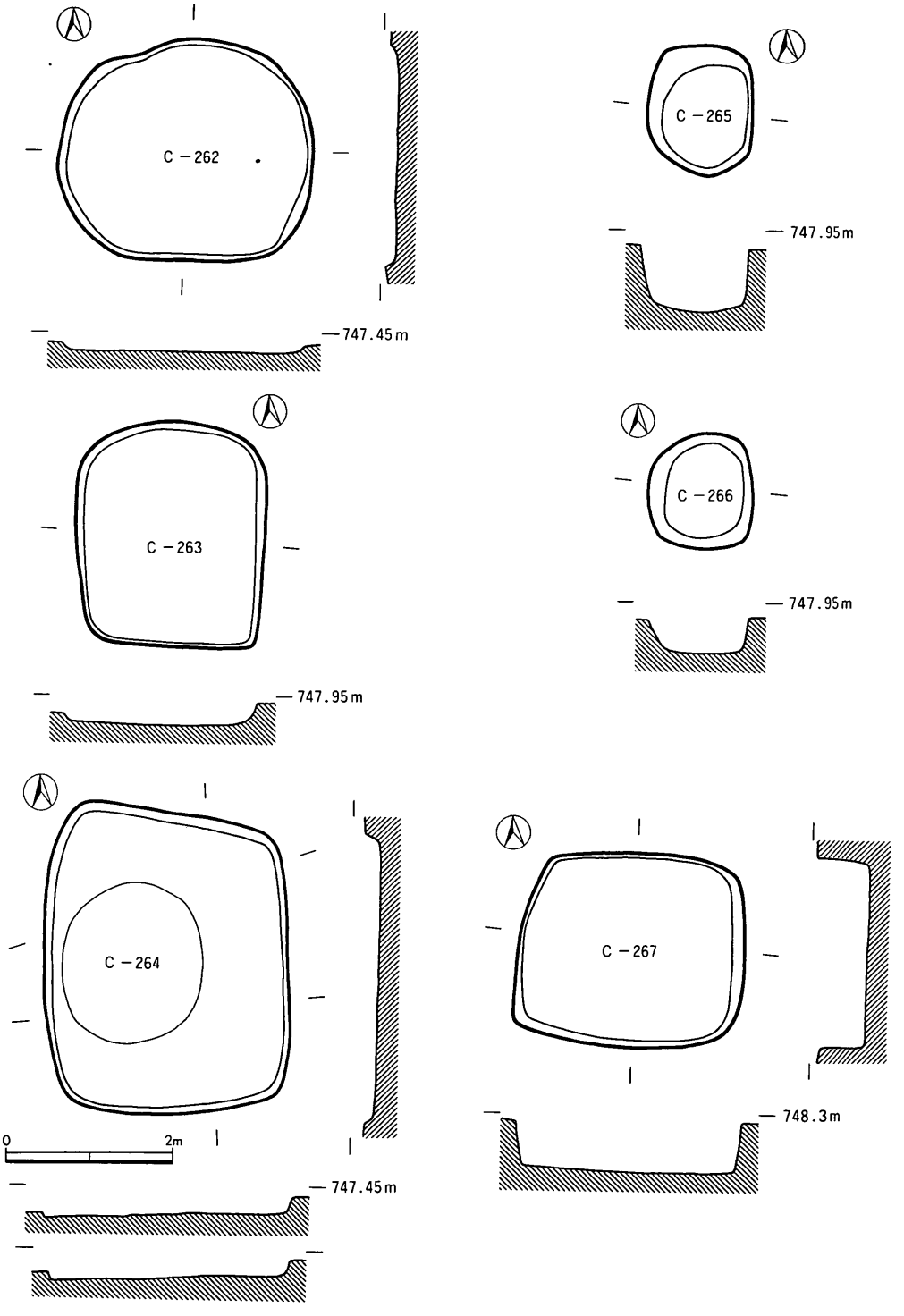
第60図　C－241～247号竪穴遺構



第61図　C－248～250号、254・257号竪穴遺構



第62図　C－255・258・260・261号竪穴遺構



第63図　C－262～267号竪穴遺構

第3表　竪穴住居跡・竪穴遺構属性表

遺構番号	長さ(cm)	幅(cm)	面積(㎡)	検出位置	出　土　品　等
H－1	538	494	21.60	55・こI	須恵器・甕
H－2	550	－	－	54・けI	須恵器・横瓶
H－3	(480)	376	－	55・かF	須恵器・高台坏
H－4	440	450	16.11	61・いI	須恵器・甕　常滑・甕　馬骨
C－1	(474)	720	(26.24)	52・おG	須恵器・高台坏　。
C－2	410	(550)	19.66	56・あD	常滑・甕　釘　貨幣　貝殻
C－3	400	400	11.75	55・うE	須恵器
C－4	670	610	30.41	54・けG	古瀬戸・瓶類14C？　常滑・甕体部かわらけ　砥石　凹石　鹿骨　貝殻
C－5	624	600	28.91	58・あE	古瀬戸・平碗　折縁深皿14C後　瓶類13C　常滑　かわらけ　貨幣　貝殻
C－6	196	254	3.44	58・うD	常滑・甕体部　馬骨
C－7	(420)	(306)	(6.98)	58・うD	
C－8	(310)	370	7.97	58・うD	常滑・甕体部　古瀬戸・瓶類13C　釘
C－9	(650)	740	37.80	58・えI	常滑甕口　古瀬戸・平碗口13C後　白磁碗－鉢？　11C後～12C前　硯　馬骨
C－10	－	(540)	－	58・えJ	貝殻
C－11	526	510	12.74	61・いC	在地産須恵器揺り鉢・14C　龍泉窯系青磁・碗13C　釘　磨石
C－12	408	414	7.56	61・えG	古瀬戸瓶子肩胴部13C後　在地産須恵器質揺り鉢14C後～15C前　貝殻
C－13	310	336	8.74	53・あJ	砥石
C－14	1120	320	24.94	55・くB	釘　硯　砥石
C－15	(210)	210	3.73	52・おI	常滑・甕口縁部14C後　古瀬戸・平碗口縁部14C末～15C前　貝殻
C－16	(210)	(220)	3.53	52・うH	鹿骨
C－17	450	308	9.10	52・えJ	古瀬戸・瓶類13C
C－18	286	356	6.82	52・えJ	須恵器
C－19	460	(386)	15.24	55・おB	
C－20	310	260	6.59	51・けJ	
C－21	340	326	8.99	51・くJ	
C－22	(460)	324	12.27	58・えA	須恵器？
C－23	390	－	－	57・こG	砥石　円版　馬骨
C－24	404	590	18.56	52・くI	須恵器
C－25	190	－	－	51・こD	
C－26	210	190	3.00	51・きD	常滑・甕体部
C－27	250	350	7.34	51・くE	常滑・甕体－口縁部14C後　古瀬戸・水注？　口縁部14C　貨幣
C－28	314	380	9.72	51・きF	
C－29	200	254	3.94	51・きG	
C－30	184	320	4.15	52・あG	
C－31	308	(260)	6.20	52・こG	
C－32	310	270	4.86	51・けH	常滑・甕体部　磨石
C－33	330	224	7.03	51・きH	灰釉陶器
C－34	198	338	4.82	55・うC	
C－35	218	234	4.15	55・くG	
C－36	150	228	2.08	55・こH	
C－37	164	176	1.82	55・こI	
C－38	340	240	5.05	56・あI	
C－39	336	370	10.23	55・きH	
C－40	170	240	2.33	55・あB	古瀬戸・天目茶碗14C後
C－41	190	164	2.22	54・こC	白磁・碗11C後～12C前　常滑・甕体部
C－42	110	(190)	－	55・あD	
C－43	330	250	5.24	55・いD	
C－44	238	(130)	－	55・あC	
C－45	－	(130)	－	55・いC	
C－46	190	220	2.98	55・いD	須恵器・坏　釘　硯
C－47	296	(340)	9.28	54・こE	常滑・甕体部　珠洲・壺体部　白磁・碗11C後～12C前
C－48	224	－	－	54・けE	
C－49	216	－	－	54・きE	青磁・碗体部　貨幣　馬骨
C－50	190	276	3.37	57・かE	須恵器・蓋－甕
C－51	470	－	－	55・えE	鹿骨
C－52	－	－	－	55・えD	
C－53	130	136	0.88	55・えE	須恵器・坏　灰釉陶器・皿か碗
C－54	180	(230)	－	55・えE	
C－55	170	－	－	55・おE	

第4表　竪穴住居跡・竪穴遺構属性表

遺構番号	長さ(cm)	幅(cm)	面積(m²)	検出位置	出　土　品　等
C－56	400	314	8.06	55・あF	
C－57	－	－	－	55・あF	
C－58	350	436	9.45	55・いH	
C－59	242	140	2.34	55・うG	
C－60	530	370	－	55・うG	
C－61	(400)	140	－	55・うH	
C－62	－	280	－	55・うJ	常滑・甕口縁部14C末～15C前
C－63	250	178	3.62	55・おJ	常滑・甕体－底部
C－64	340	300	(8.61)	58・きA	須恵器・坏
C－65	－	210	－	58・きA	
C－66	－	320	(7.43)	58・きB	須恵器・甕口縁部14C後
C－67	(254)	358	(6.82)	58・くB	須恵器・甕口縁部14C後
C－68	216	154	2.06	58・きB	
C－69	210	(180)	－	58・きB	かわらけ　釘
C－70	290	200	3.98	58・かA	
C－71	250	－	－	58・おA	
C－72	(410)	240	－	58・かA	常滑・甕体部　貨幣
C－73	(544)	262	－	58・かB	
C－74	320	216	4.12	55・けJ	須恵器・蓋　甕　坏　貝殻
C－75	240	496	9.03	58・けB	
C－76	160	154	2.42	58・くB	
C－77	290	－	－	58・こD	
C－78	228	190	－	58・きC	古瀬戸・平碗14C後～15C前　貝殻
C－79	220	270	4.41	58・くC	古瀬戸・平碗14C後～15C前　常滑・甕体部
C－80	234	196	3.74	58・きD	古瀬戸・瓶子体部14C
C－81	(196)	230	－	58・くD	古瀬戸・瓶子体部14C　釘
C－82	330	(370)	－	58・きD	古瀬戸・平碗体部14C後～15C前　青磁・盤口縁部13C龍泉窯系　釘
C－83	120	150	1.26	58・きD	
C－84	202	210	3.15	58・けE	白磁・碗11C後～12C前
C－85	200	298	4.52	58・くF	
C－86	(136)	160	－	58・くF	
C－87	218	(320)	5.20	58・えB	常滑・甕14C後　古瀬戸・平碗体部14C後～15C前　釘　磨石　馬骨
C－88	310	450	10.81	58・えB	白磁・碗11C後～12C前　中津川・甕体部13C後～14C前　須恵器　釘　貨幣
C－89	－	110	－	58・おC	
C－90	－	－	－	58・おC	
C－91	－	190	－	58・えC	常滑・甕体部
C－92	－	－	－	58・おC	
C－93	－	180	－	58・えC	
C－94	134	132	1.12	58・かC	
C－95	132	170	1.87	58・かC	
C－96	260	236	4.18	58・おC	
C－97	(156)	(250)	－	58・かD	
C－98	290	280	－	58・かD	
C－99	128	(210)	2.04	58・おD	
C－100	134	190	1.14	58・おE	古瀬戸・水注口縁部14C
C－101	256	208	3.95	58・えD	
C－102	160	178	2.06	58・かE	
C－103	(160)	146	－	58・かD	
C－104	154	186	1.66	58・おF	釘
C－105	170	150	1.64	58・えE	
C－106	386	240	7.53	58・えE	常滑・甕体部　釘
C－107	－	130	－	57・こA	
C－108	100	260	1.72	58・あA	
C－109	200	－	－	58・あA	
C－110	190	180	2.36	57・こA	
C－111	640	330	(15.24)	57・こB	須恵器・甕　灰釉陶器・碗　貝殻
C－112	－	－	－	58・あB	
C－113	(270)	(370)	－	57・こE	
C－114	(300)	(390)	－	57・こE	白磁・碗11C後～12C前

第5表　竪穴住居跡・竪穴遺構属性表

遺構番号	長さ(cm)	幅(cm)	面積(m²)	検出位置	出　土　品　等
C－115	200	270	(3.43)	57・こF	常滑・甕底部
C－116	(190)	(300)	3.86	58・あF	須恵器・坏
C－117	(190)	(330)	(4.27)	58・あF	
C－118	286	(310)	(7.30)	58・いF	
C－119	140	(174)	(1.48)	58・あG	
C－120	220	250	(4.50)	58・あG	
C－121	164	(190)	(2.23)	57・こG	
C－122	－	－	－	57・こG	
C－123	252	214	3.54	58・えF	かわらけ
C－124	320	(324)	(9.15)	58・かH	須恵器・坏　石擂り鉢　貝殻
C－125	(170)	138	(1.94)	58・おG	
C－126	(270)	(170)	(3.38)	58・おH	
C－127	－	(170)	－	58・おH	
C－128	240	180	3.37	58・かJ	須恵器・甕　古瀬戸・平碗14C後～15C前
C－129	260	(310)	－	58・おJ	古瀬戸・おろし皿14C
C－130	－	194	－	58・かI	
C－131	190	196	1.08	58・うI	
C－132	246	(180)	3.43	61・うA	青磁・盤13C　須恵器・坏　中国陶器・薬入れ14C以降　釘　砥石
C－133	186	166	2.02	58・いJ	
C－134	140	260	－	61・あA	常滑・甕体部
C－135	460	460	－	61・いA	貝殻
C－136	－	－	－	61・いA	
C－137	－	－	－	58・あI	
C－138	174	130	1.22	58・あJ	
C－139	170	130	1.37	58・いJ	
C－140	408	372	11.92	58・あJ	須恵器・甕
C－141	200	386	5.04	58・あH	
C－142	210	128	1.52	58・あH	
C－143	166	－	－	58・あH	
C－144	180	256	2.59	57・こI	
C－145	104	－	－	58・あI	
C－146	186	200	2.53	57・こI	須恵器・蓋
C－147	182	220	2.91	61・えB	貝殻
C－148	－	240	－	61・うB	
C－149	－	230	1.46	61・うC	在地産須恵器系　擂り鉢13C　常滑・甕体部　かわらけ　砥石　貝殻
C－150	148	－	－	61・おE	灰釉陶器　須恵器・坏
C－151	126	146	1.12	61・かE	
C－152	190	162	2.23	61・くE	
C－153	106	126	1.06	61・くE	
C－154	128	100	0.72	61・けE	貝殻
C－155	180	150	1.94	61・けF	
C－156	166	318	3.47	58・Jき	古瀬戸・平碗体部14C後～15C　貝殻
C－157	166	140	1.52	61・うG	灰釉陶器・碗　貨幣
C－158	－	130	－	57・おF	
C－159	220	154	2.30	57・おF	
C－160	250	312	5.92	57・きG	釘
C－161	150	168	1.81	57・きI	古瀬戸・瓶子14C
C－162	240	242	4.65	62・くD	常滑・甕体部
C－163	294	306	7.55	62・きF	貨幣
C－164	190	300	8.23	62・くH	白磁・磁11C後～12C前　須恵器・坏　珠洲・壺　釘
C－165	182	380	－	62・きH	須恵器・蓋　古瀬戸・四耳壺？13C
C－166	216	230	2.64	62・けH	灰釉陶器・瓶類　常滑・甕底部　須恵器・坏
C－167	530	238	－	62・けH	
C－168	150	210	2.16	62・けH	常滑・甕体部
C－169	－	－	－	62・けH	
C－170	330	(260)	－	62・こI	常滑・甕体部
C－171	－	－	－	62・こI	
C－172	210	234	2.93	62・こI	常滑・甕体部

第6表　竪穴住居跡・竪穴遺構属性表

遺構番号	長さ(cm)	幅(cm)	面積(㎡)	検出位置	出　土　品　等
C－173	－	184	－	62・こI	
C－174	－	280	－	62・こG	常滑・甕体部　灰釉陶器・碗
C－175	190	170	2.03	62・こG	
C－176	220	－	－	63・あG	
C－177	146	－	－	63・あG	
C－178	114	176	1.17	63・あG	
C－179	160	240	2.40	62・こH	
C－180	340	182	－	62・こH	
C－181	160	－	－	63・あH	
C－182	150	－	－	63・あI	
C－183	310	186	4.07	63・あH	須恵器・甕
C－184	260	－	－	63・いH	
C－185	340	194	6.50	63・いH	中津川・甕体部13C後～14C前
C－186	170	(180)	－	63・いI	
C－187	(190)	220	－	63・あI	
C－188	150	216	1.82	63・あI	山茶碗系・捏ね鉢13C後
C－189	166	160	1.95	63・えH	
C－190	260	290	5.68	63・えJ	
C－191	190	170	2.21	63・いJ	東海系・山茶碗13C後～14C前
C－192	170	130	1.20	63・いJ	
C－193	150	148	1.32	63・いJ	須恵器
C－194	－	(144)	2.37	65・いA	
C－195	(154)	130	－	65・いA	
C－196	250	212	3.12	65・うB	鹿または山羊の骨
C－197	(170)	204	3.00	65・いB	
C－198	－	126	－	65・いC	
C－199	210	154	2.52	65・うC	白磁・口剝げの皿13C後～14C後
C－200	186	172	1.32	65・いC	瓷器系・甕
C－201	170	140	1.36	62・こJ	
C－202	194	144	1.82	62・こJ	青磁・甕
C－203	140	120	0.92	65・あA	
C－204	230	(140)	2.01	65・あA	須恵器・坏？
C－205	230	－	－	65・あA	常滑・甕口縁部12C後
C－206	208	(180)	2.43	64・こA	須恵器・坏　馬骨
C－207	170	290	3.52	65・あB	
C－208	242	300	5.38	65・あC	須恵器・壺類　瓷器系？
C－209	－	－	－	65・あC	
C－210	130	－	－	64・こC	
C－211	－	－	－	64・こC	
C－212	190	140	1.97	64・こC	
C－213	－	130	－	65・あC	
C－214	(150)	290	－	65・あC	
C－215	218	(300)	13.68	64・けC	
C－216	370	(190)	－	64・けD	
C－217	(320)	－	－	64・けD	白磁・碗体部　須恵器　釘　貨幣
C－218	130	(160)	3.78	62・けJ	
C－219	188	220	1.95	62・くJ	
C－220	(300)	150	－	62・くI	
C－221	－	120	－	62・くI	
C－222	(120)	170	－	62・けJ	
C－223	400	180	5.71	62・きJ	
C－224	176	160	1.56	62・くJ	
C－225	150	176	1.83	64・くA	
C－226	190	248	3.23	64・くA	
C－227	220	250	4.68	64・けA	常滑・甕底部　山茶碗系・捏ね鉢13C後
C－228	110	110	0.90	64・こB	
C－229	376	170	(4.79)	64・かB	砥石
C－230	162	134	1.08	64・かB	
C－231	110	120	0.91	64・くC	

第７表　竪穴住居跡・竪穴遺構属性表

遺構番号	長さ(cm)	幅(cm)	面積(㎡)	検出位置	出　土　品　等
C－232	－	200	－	64・くC	
C－233	－	144	2.94	64・くC	常滑・甕体部　須恵器・甕
C－234	(120)	196	－	64・くD	
C－235	124	180	1.46	64・きC	
C－236	166	－	－	64・かC	
C－237	－	－	－	64・きC	近代瀬戸美濃19C以降　常滑・甕体部
C－238	274	356	10.27	55・きJ	
C－239	(140)	220	－	55・かI	
C－240	190	(176)	－	55・きJ	貝殻
C－241	150	134	(1.45)	58・かE	古瀬戸・平碗14C後～15C前
C－242	186	180	(2.54)	58・おE	
C－243	－	130	3.82	58・おF	貨幣
C－244	(200)	166	－	58・おF	古瀬戸・おろし皿15C前
C－245	338	300	(7.71)	55・おG	
C－246	310	330	6.66	55・くD	
C－247	446	180	2.57	55・くE	常滑・甕体部　近代
C－248	170	334	3.30	55・こG	かわらけ　釘
C－249	410	150	2.79	59・あB	須恵器・坏　土師（内黒）・坏
C－250	146	152	2.90	55・えH	
C－251	616	151	(7.71)	55・えE	
C－252	(398)	(100)	2.77	55・えD	
C－253	(500)	194	6.42	55・えF	
C－254	140	750	7.48	55・かI	
C－255	408	182	(5.42)	55・かJ	
C－256	110	－	－	58・かA	須恵器・甕
C－257	130	－	－	55・おG	
C－258	－	180	－	58・くD	須恵器・坏
C－259	460	114	－	58・あE	
C－260	280	250	5.88	61・えA	
C－261	180	－	－	61・くF	
C－262	260	300	5.89	61・かF	古瀬戸・瓶子14C　貝殻
C－263	264	222	4.73	61・いF	土師（内黒）・坏　青磁・碗13C　釘　砥石　貨幣
C－264	356	284	8.57	58・くJ	古瀬戸・水注－平碗体部14C前
C－265	150	120	0.96	61・いG	
C－266	134	120	0.85	61・うG	
C－267	226	266	4.89	57・きB	
C－268	210	(200)	2.92	65・あA	
C－269	180	－	C-218と一緒で	62・けJ	常滑・甕体部　須恵器・甕　灰釉陶器・長頸瓶

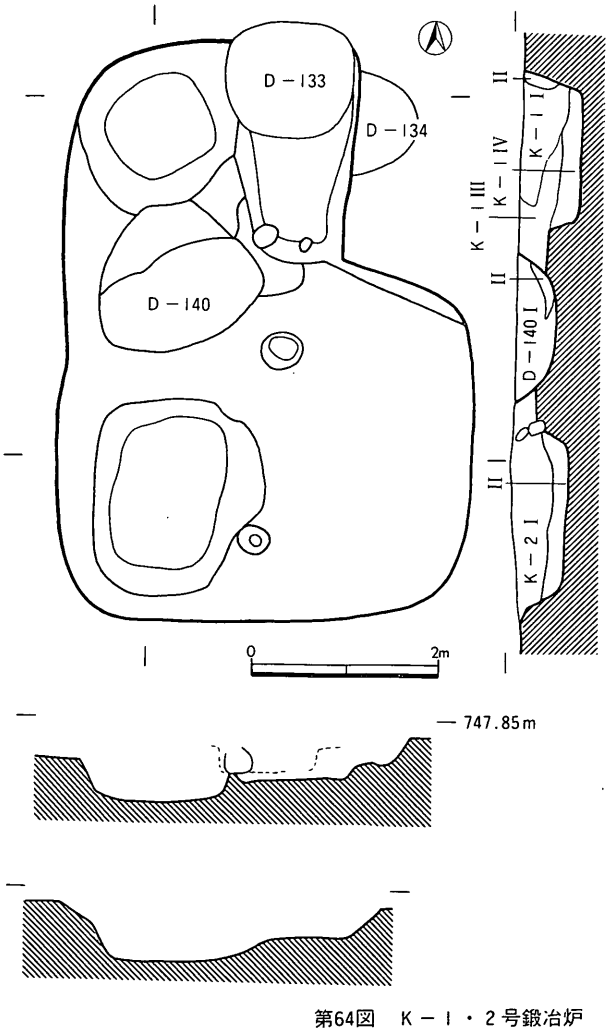
(4) 中世の鍛冶関連遺構

Ⅰ　K－Ⅰ・2号鍛冶炉

遺　構（第64図）

58・うＪグリッドから検出された。Ｃ－10号竪穴遺構と重複しこれを破壊する。

遺構が密集する地点に構築されていたため、全容について明瞭にできないが、およそ第64図のような鉤状に折れ曲がった平面形状の掘り込みをもつ竪穴構造の鍛冶遺構であったと考えられる。この遺構の長軸方位はほぼ真北を向く。この鉤状の掘り込みの西側の南北に円形・方形の穴が各１個さらに深く掘り込まれ、鍛冶炉となっている。Ｋ－１号鍛冶炉は直径170cm前後、Ｋ－２号鍛冶炉は一辺208cmを測る。



K－1
I　10YR4/4　褐色土
　花泥混
II　10YR3/3　暗褐色土
　きめ細かい砂質
III　10YR3/4　暗褐色土
　IIよりきめ細かい
　黒色土ブロック・炭化物含む
IV　10YR3/2　黒褐色土
　カーボン粒・灰多量に含む
K－2
I　10YR3/4　暗褐色土
　きめ細かい砂質
II　10YR3/2　黒褐色土
　カーボン粒・灰多量に含む
D－140
I　10YR3/4　暗褐色土
　きめ細かい砂質
II　10YR2/2　黒色土

第64図　Ｋ－Ⅰ・２号鍛冶炉

1・2号ともに底面のローム層は真っ赤に焼け込んだ状態で、その上にはカーボン粒・灰の厚い堆積が認められた。また、1・2号の中間に位置するD－140号土坑や鍛冶遺構の南側にあるD－130号土坑には鉄滓が多量に放り込まれていた。位置から見てD－130号土坑は捨て場であった可能性が高い。

遺　物

K－1・2号鍛冶炉からは13世紀代の古瀬戸の四耳壺、13世紀後半から14世紀前半の珠洲の擂り鉢、14世紀後半から15世紀前半の中国青磁の碗、古瀬戸の平碗・鉢が出土した。また、K－2覆土中からは小刀（第87図）が出土した。

(5)　土　　坑

遺　構

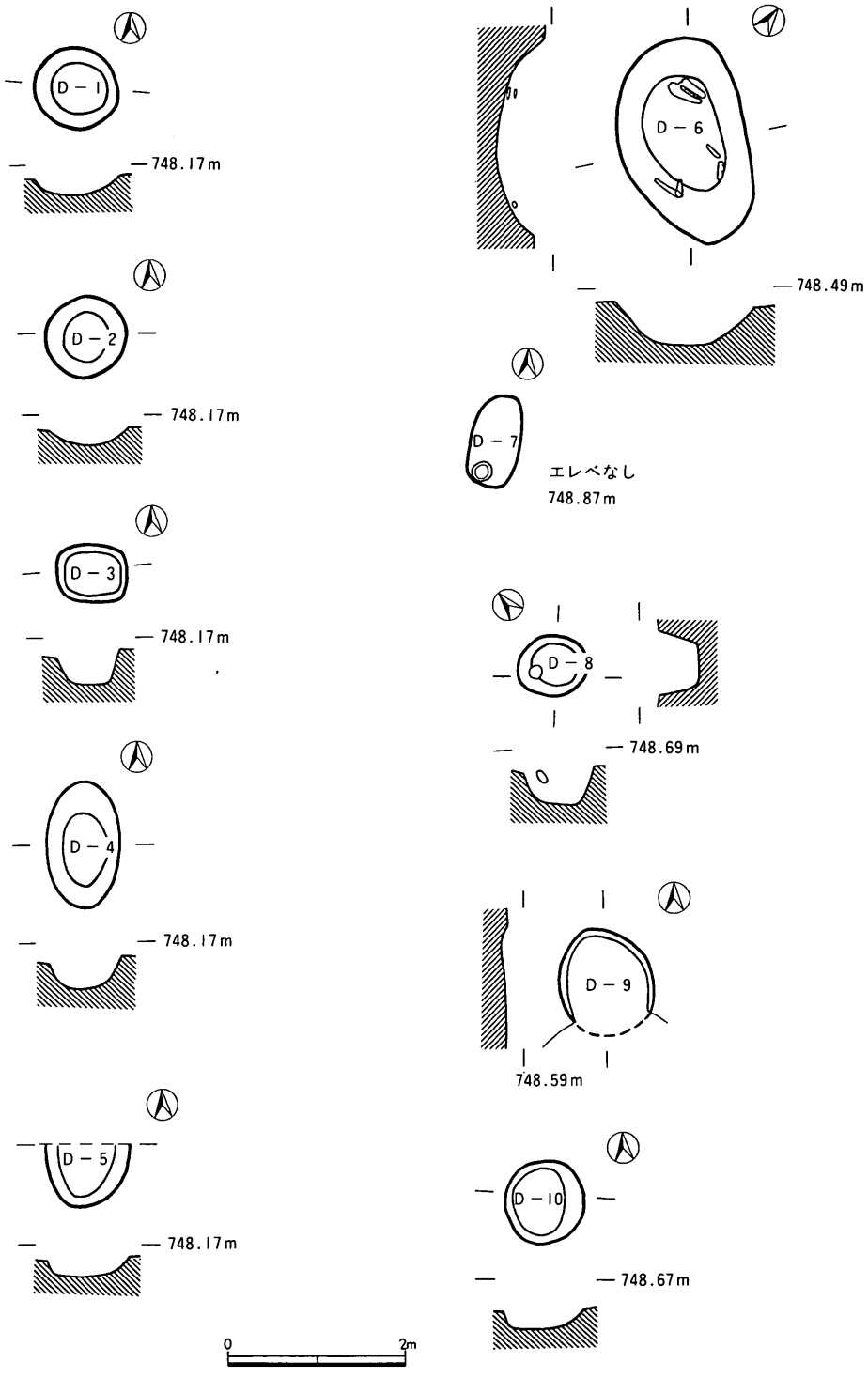
竪穴遺構よりも概して小規模、平面形状は、方形基調のものもあるが大概は円形基調、底面が丸みを帯びるか、なべ底状を呈する遺構を土坑と総称する。性格については、人の埋葬に供されたもの（D－152)、馬の埋葬に供されたもの（D－6・47）などやD－130のように鉄滓の捨て場になったものもあるが、わからないものが多い。特にD－211～224のような坑の上場の縁に火山弾を主とした配石を施した14基の土坑は、何の目的で作られたのか全くわからない。はっきりしているのはこの遺構が、前藤部遺跡でもっとも新しい時代に作られたものであること、その年代は出土した土鍋（第84図）から15世紀中頃以降になりそうであることなどである。

(6)　溝

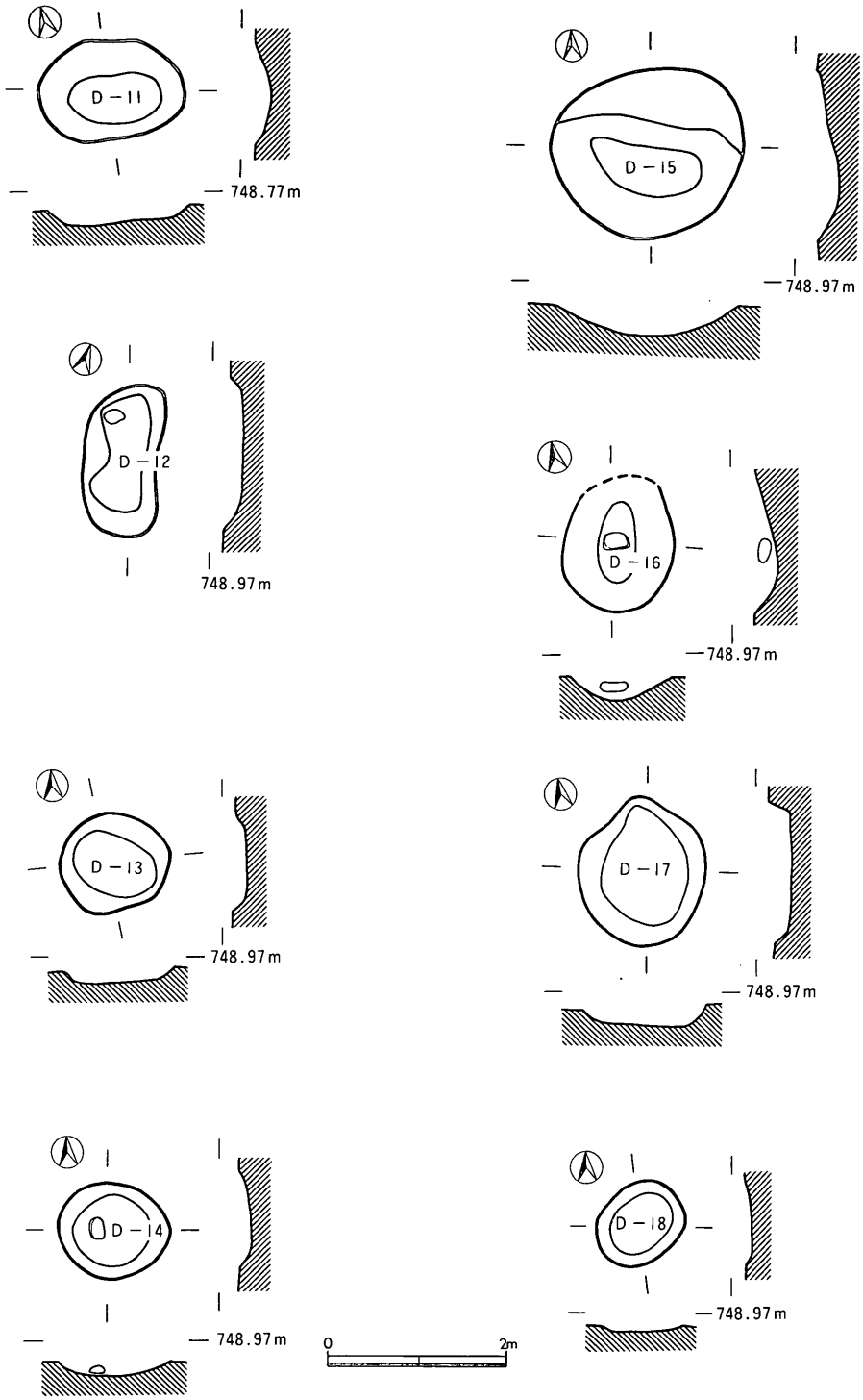
全体図参照

調査区北東の51グリッド周辺から検出された囲郭溝は、中世竪穴遺構群との重複がみられない。言い換えれば一部の中世遺構群を囲うために掘削された溝ということができる。囲郭されたエリアについては、遺構・遺物の両面で他のエリアと比べ、取りたてて特殊性は認められないが、何らかの理由でこのエリアを隔絶する必要に迫られて掘削された溝と考えられる。

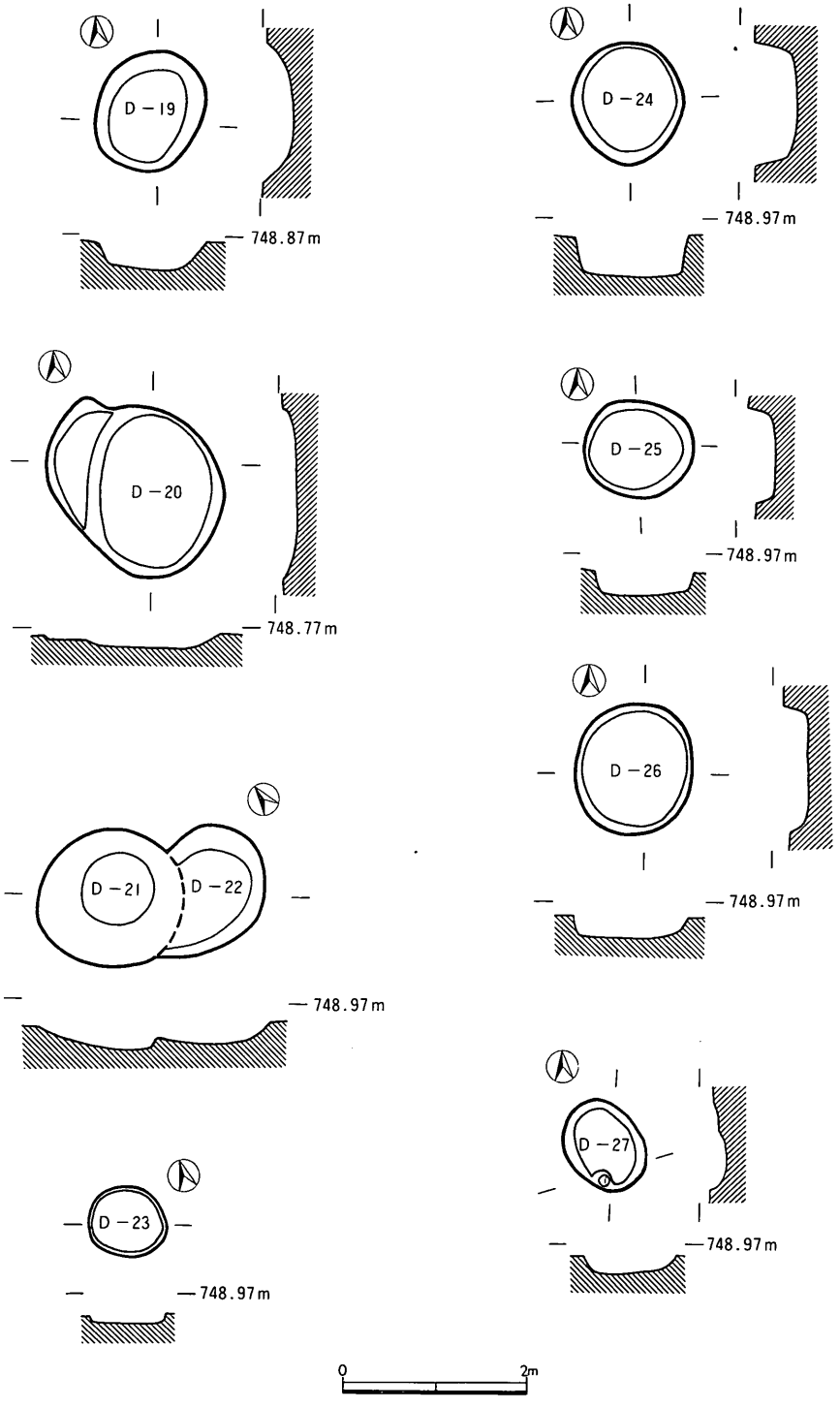
このほか、調査区内には3条の縦走する溝が走るが、時期については明瞭にできなかった。



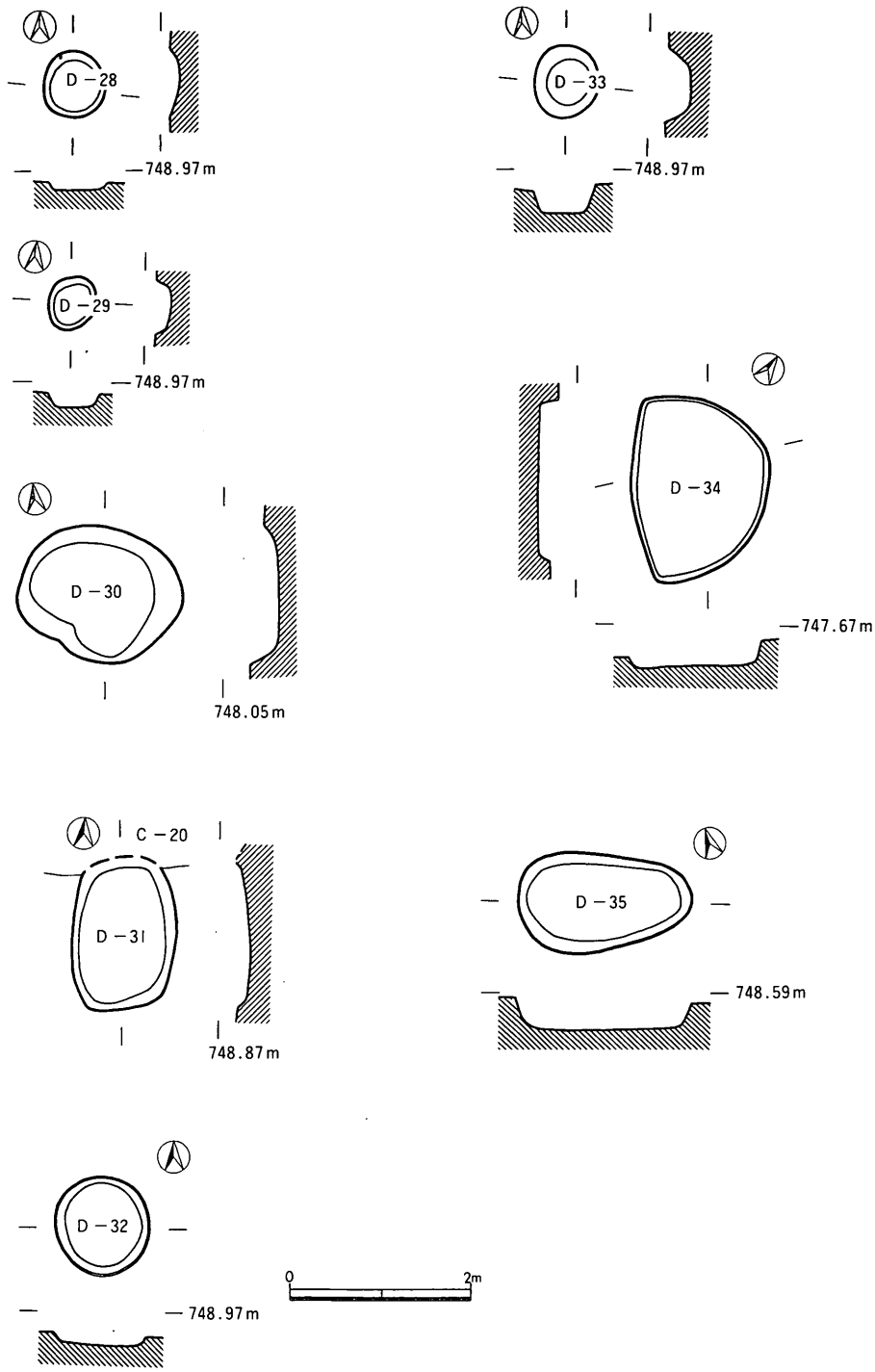
第65図　D－1～10号土坑



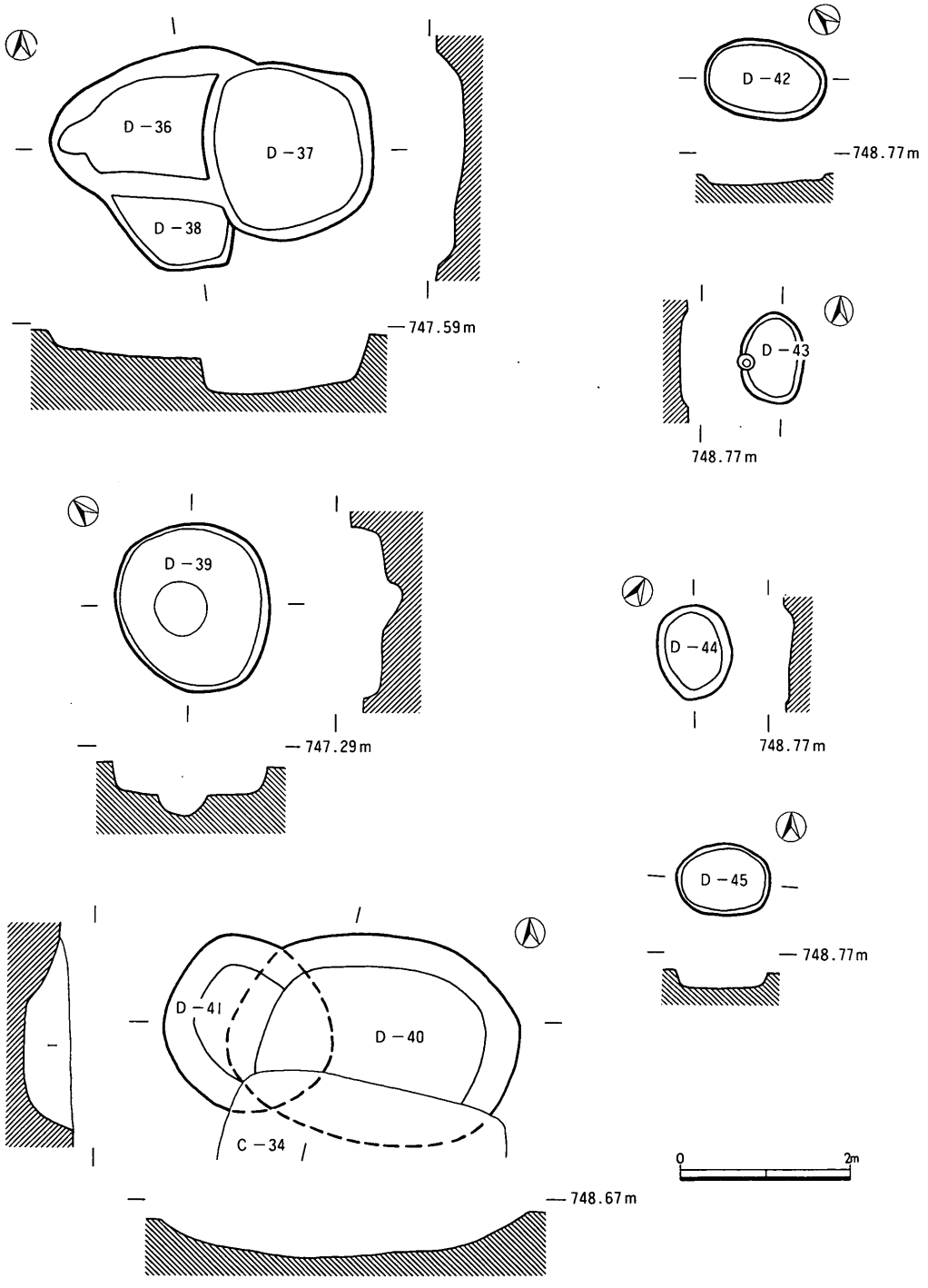
第66図　D－11～18号土坑



第67図　D－19～27号土坑

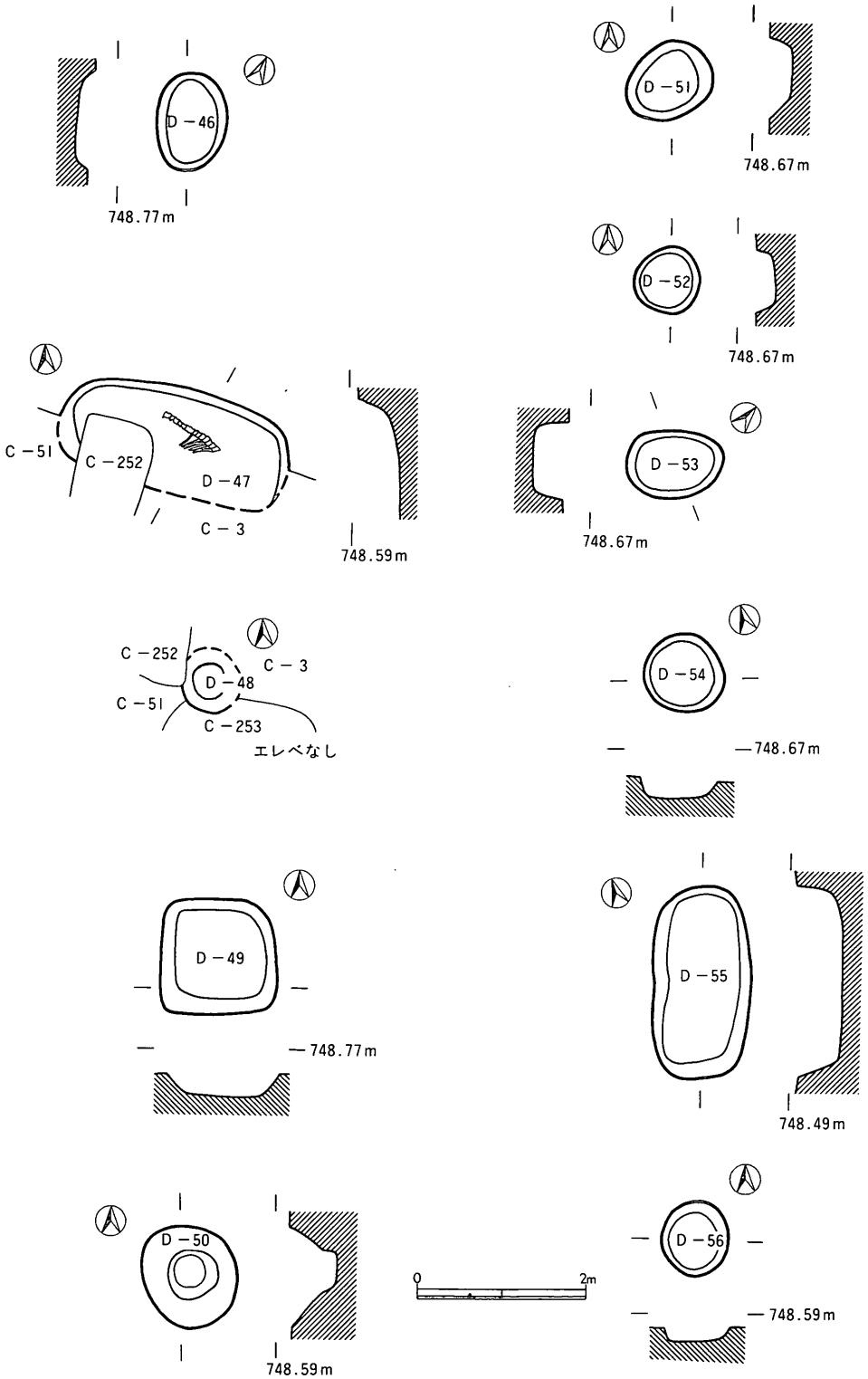


第68図　D－28～35号土坑

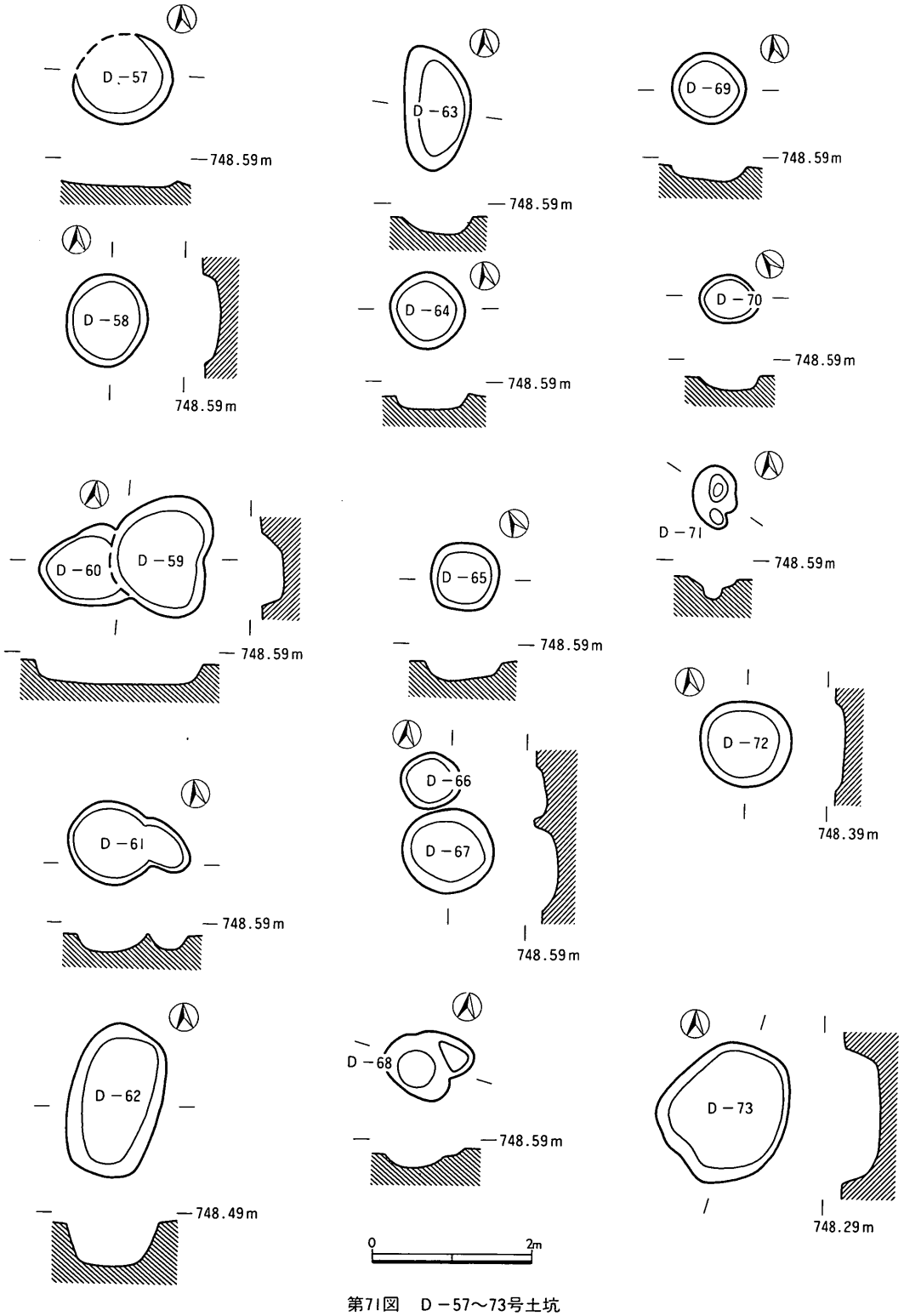


I　10YR2/2　黒褐色土
　　砂を少量含む

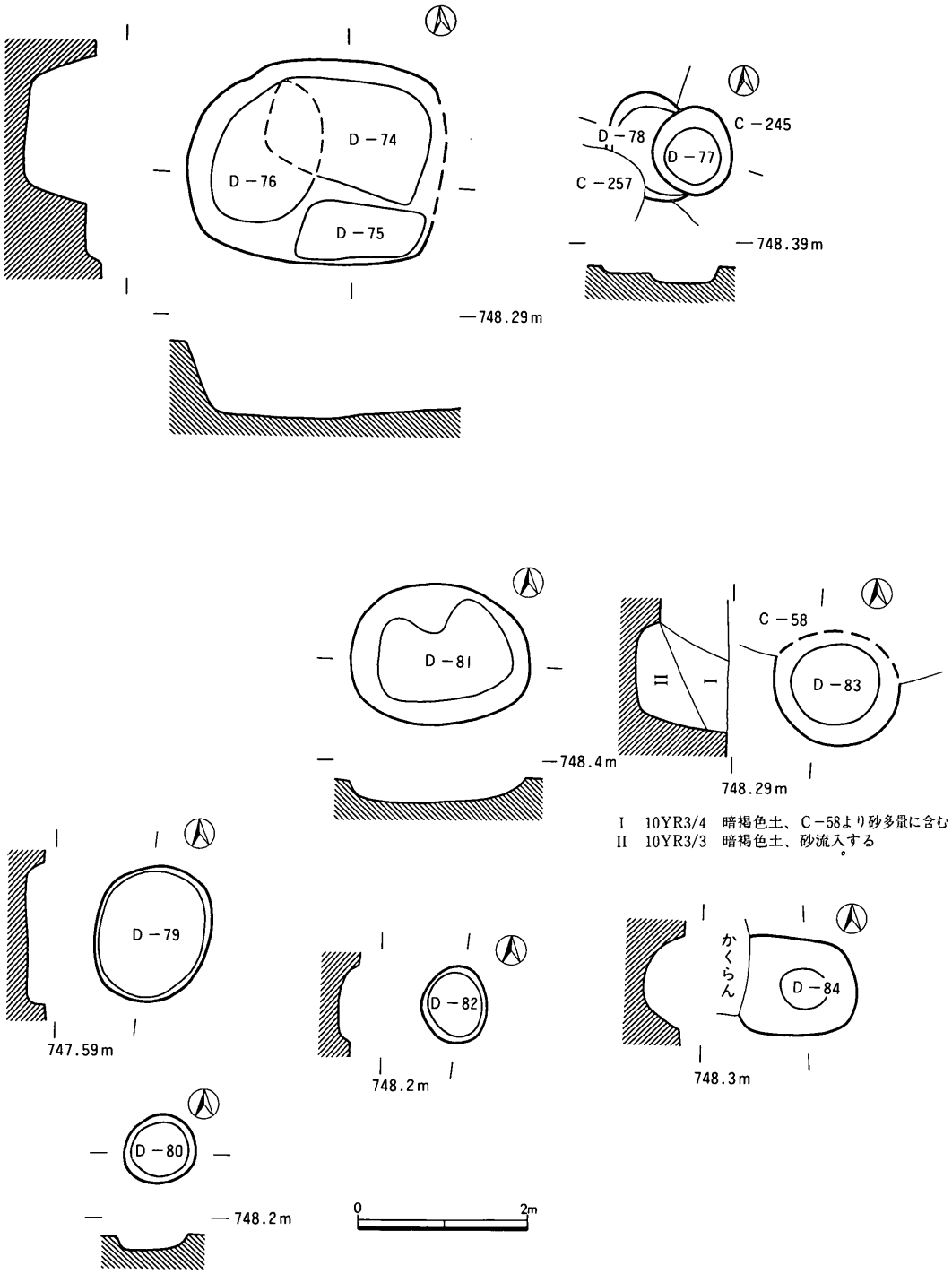
第69図　D－36～45号土坑



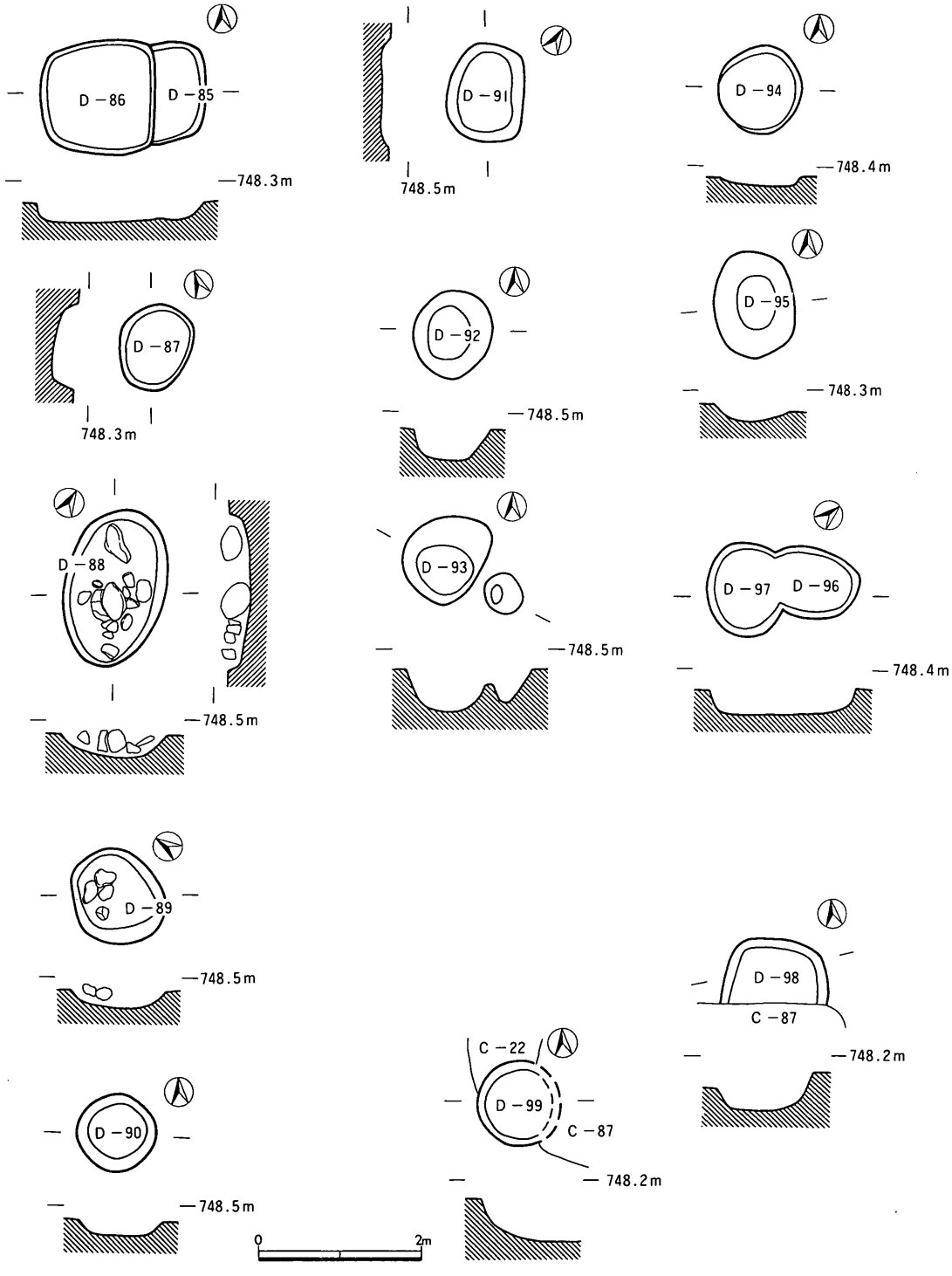
第70図　D－46～56号土坑



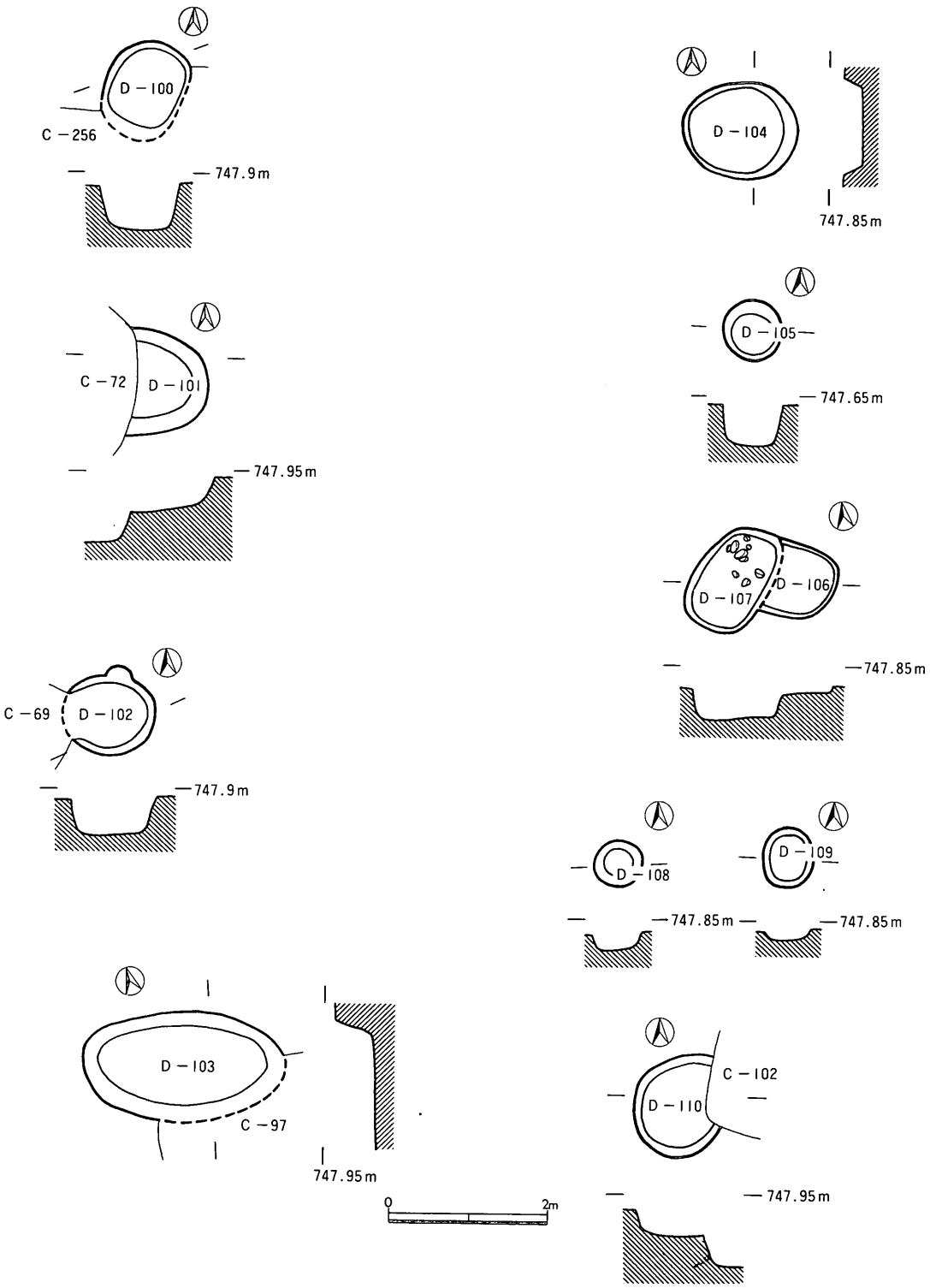
第71図　D－57～73号土坑



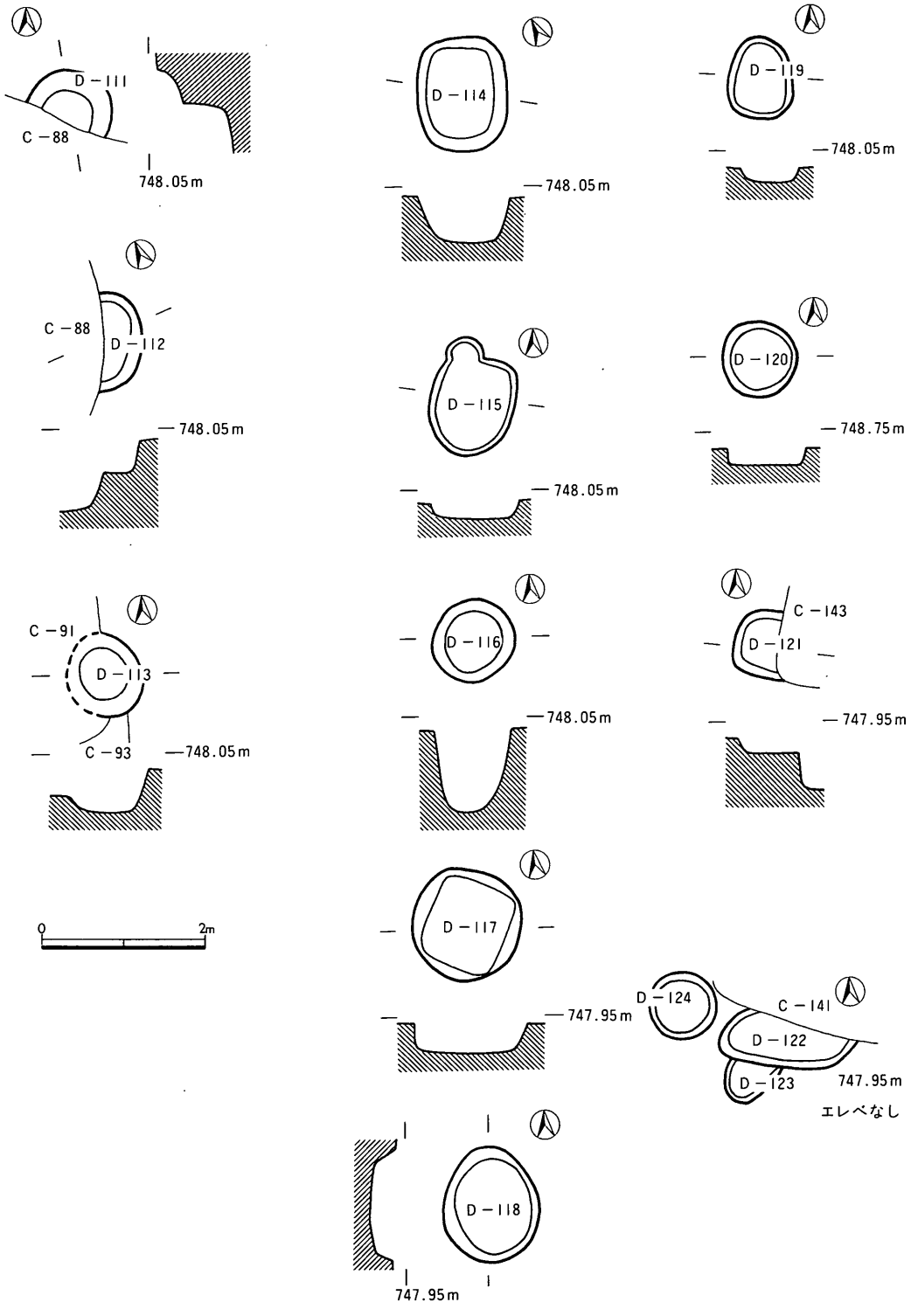
第72図　D－74～84号土坑



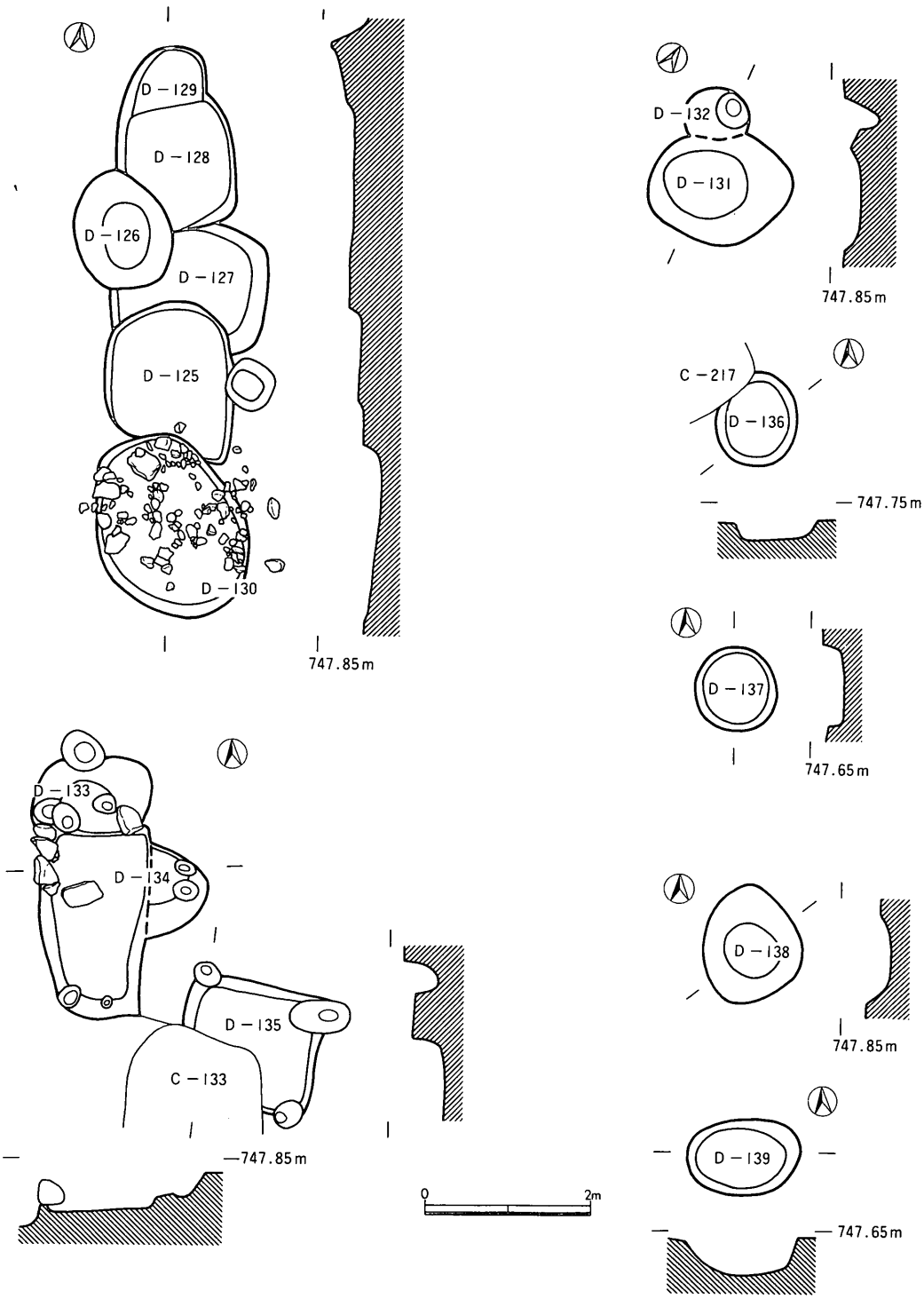
第73図　D－85～99号土坑



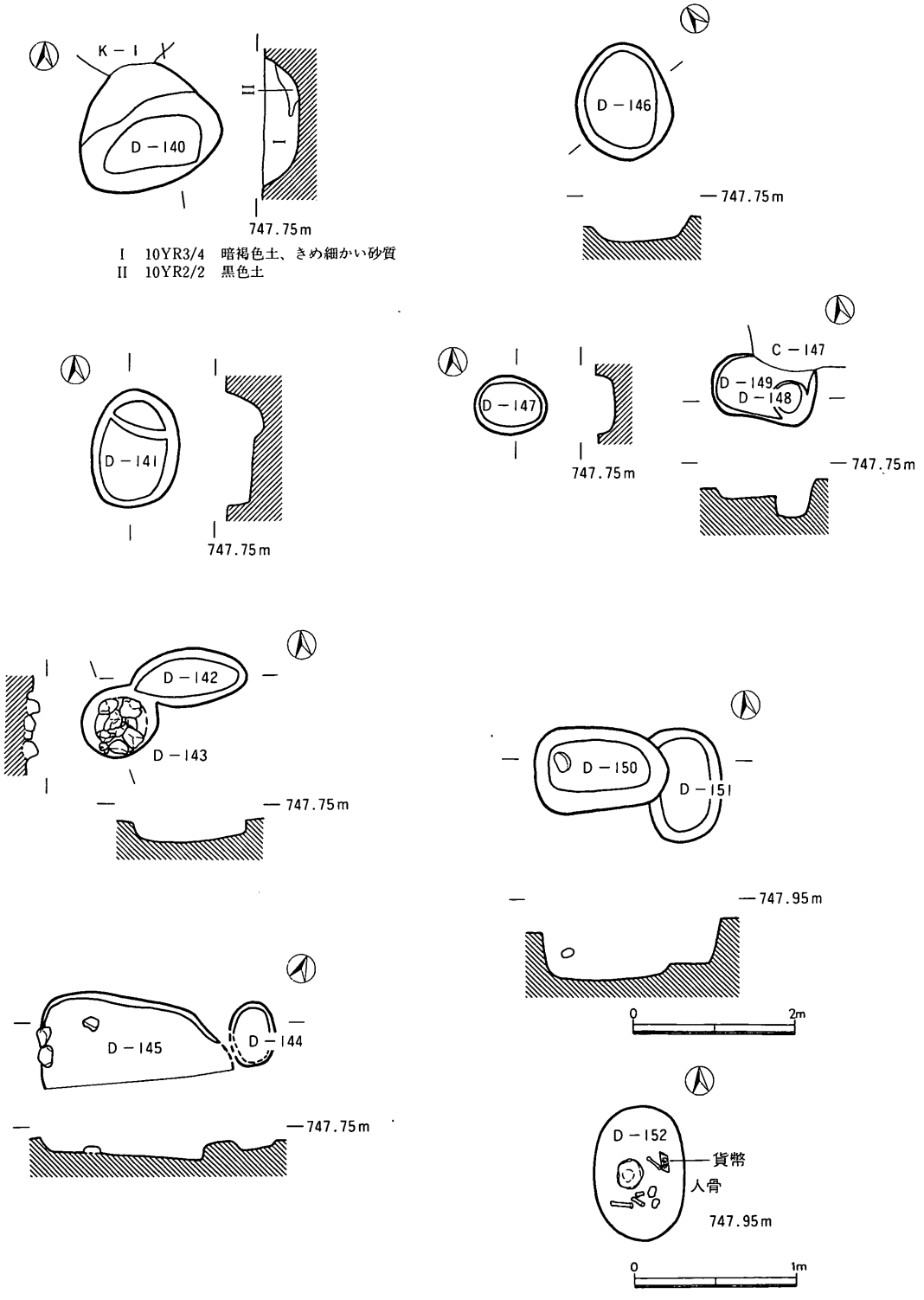
第74図　D－100～110号土坑



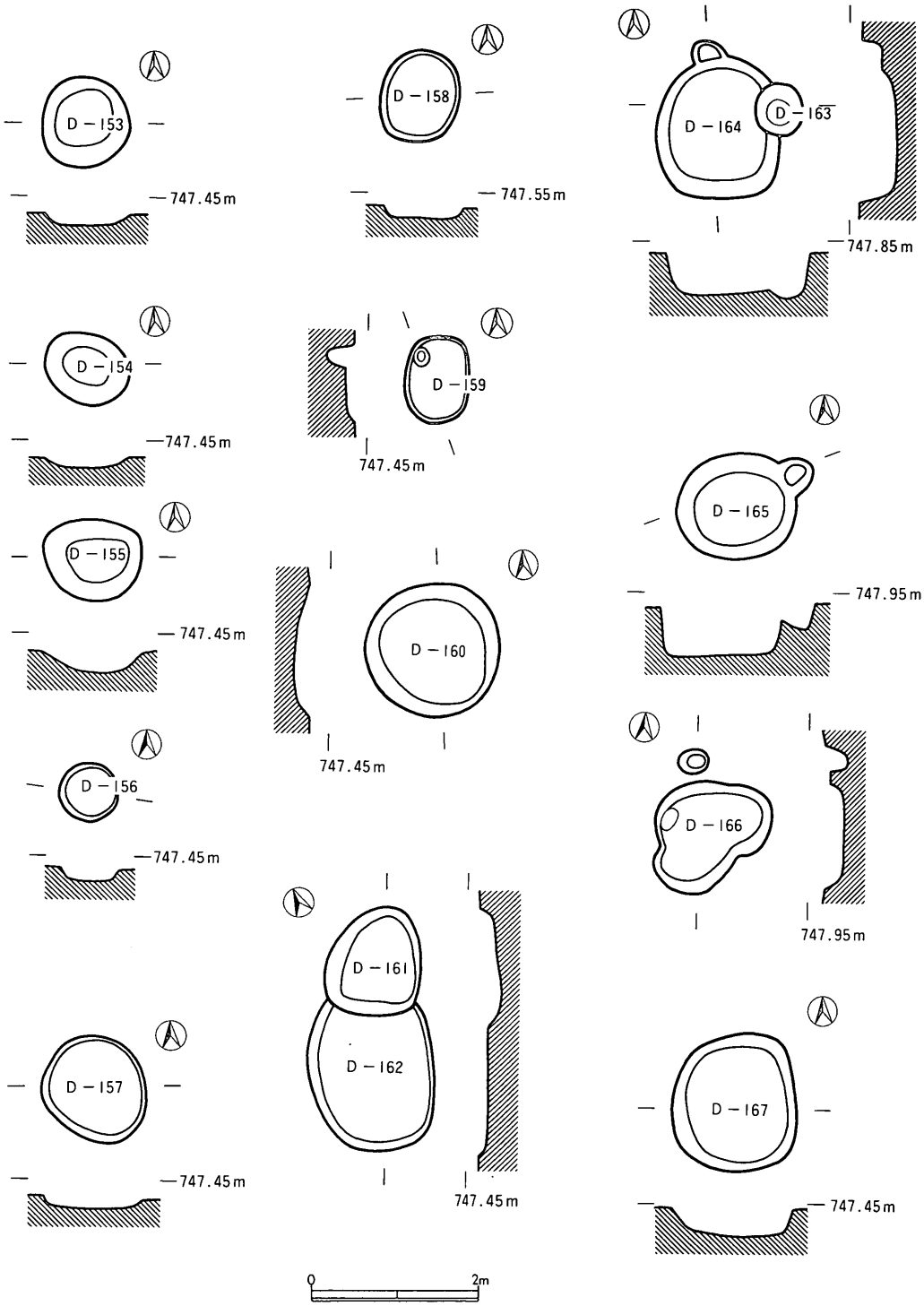
第75図　D－111～124号土坑



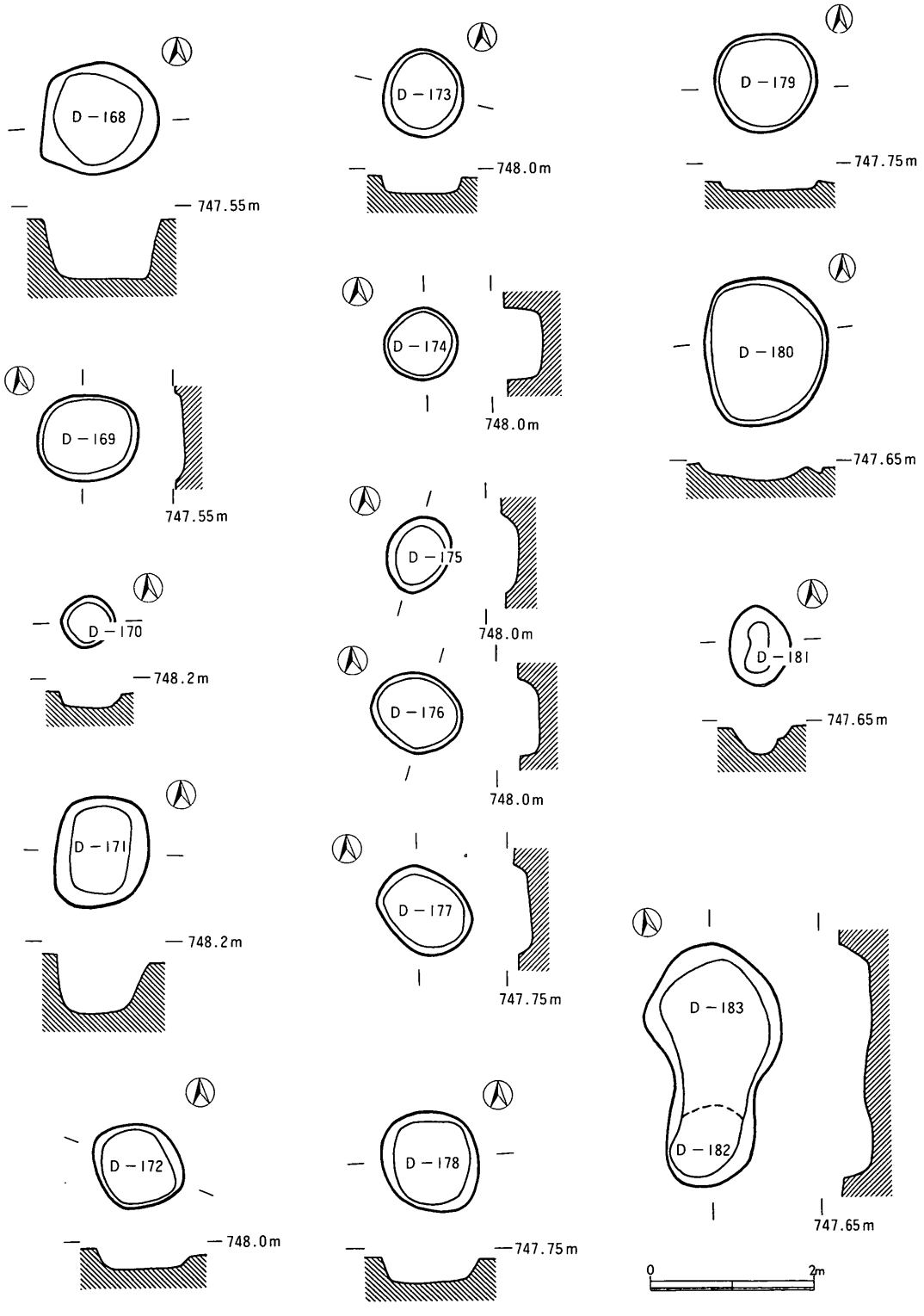
第76図　D－125～139号土坑



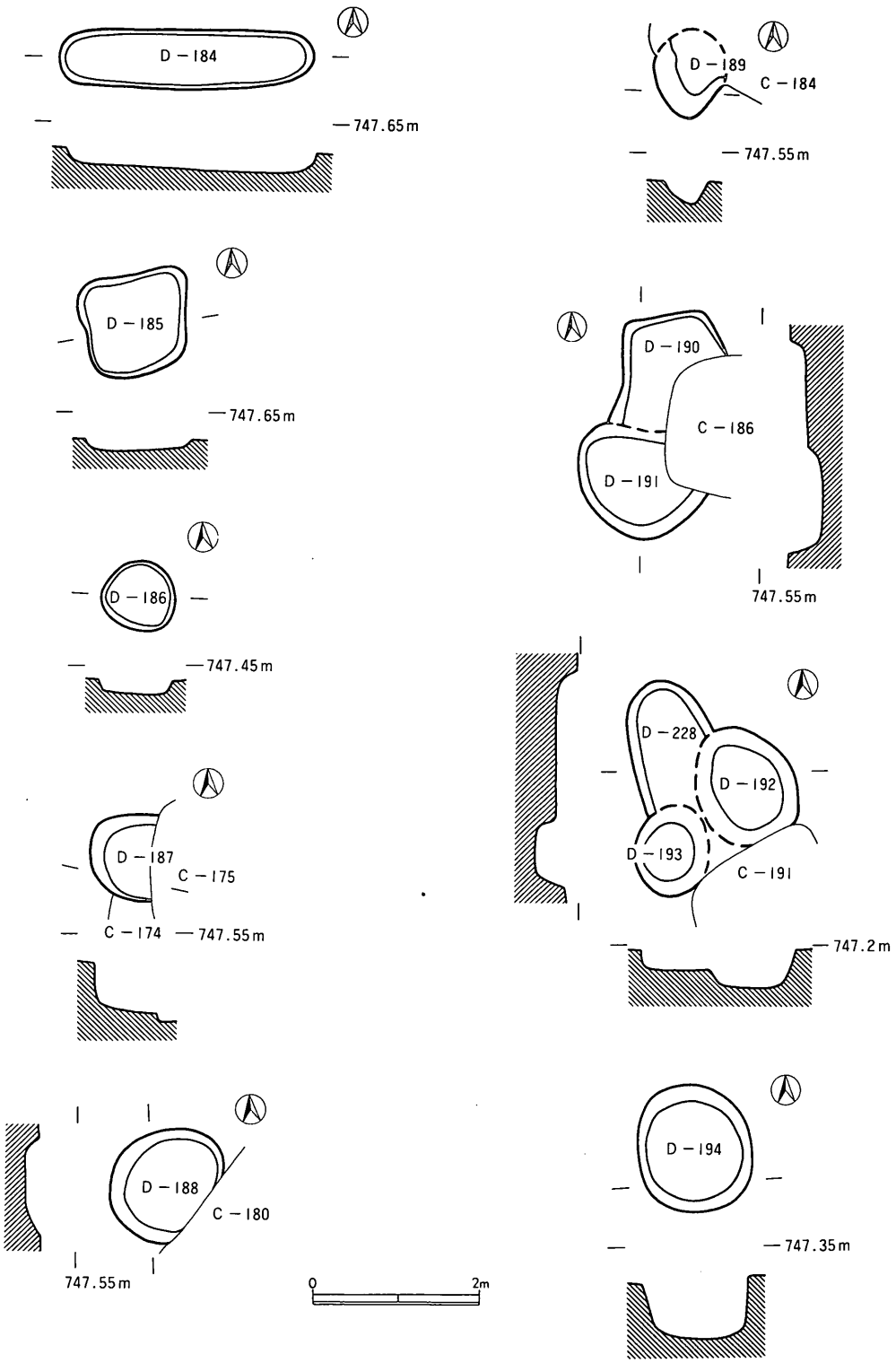
第77図　D－140～152号土坑



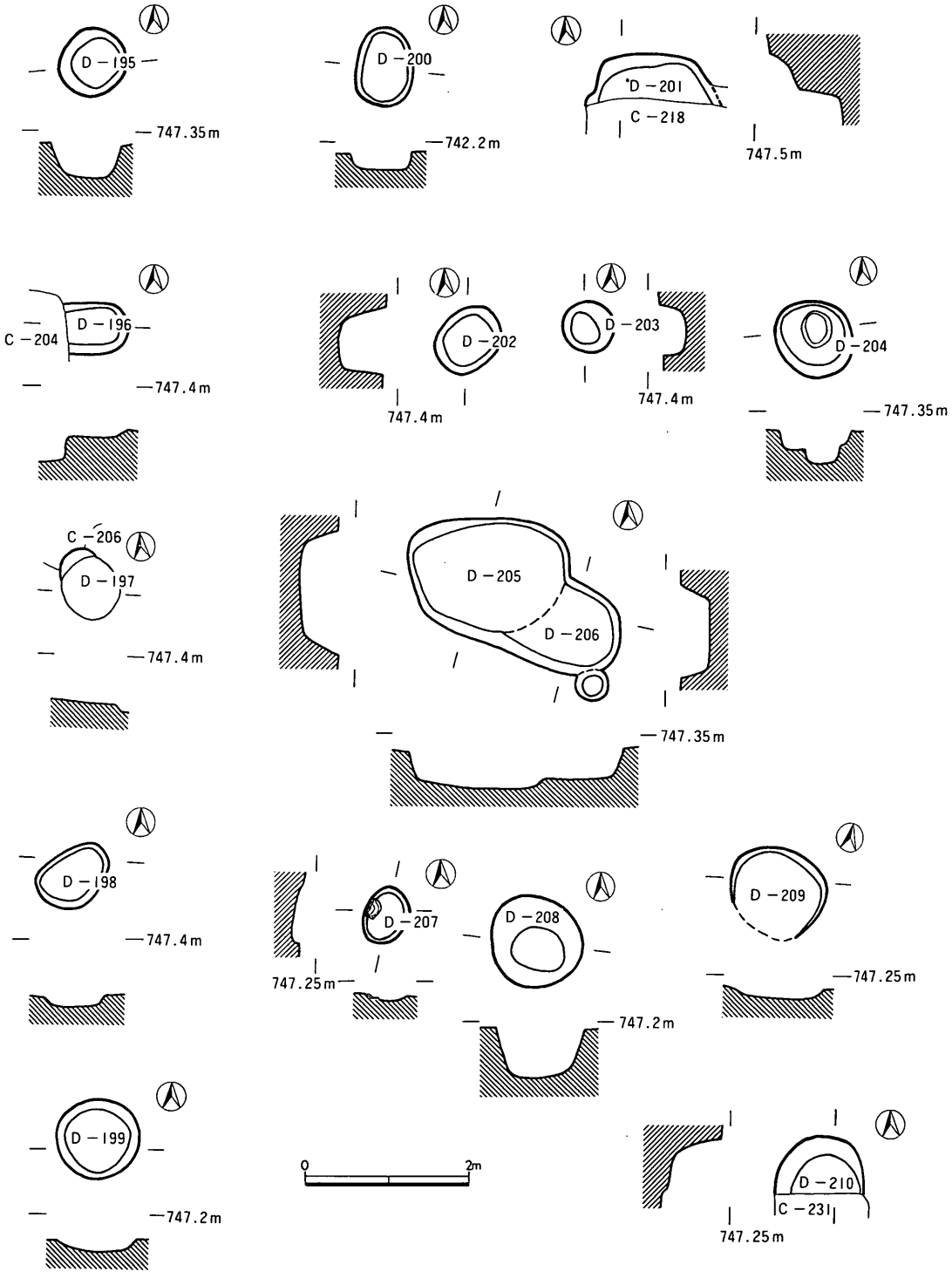
第78図　D－153～167号土坑



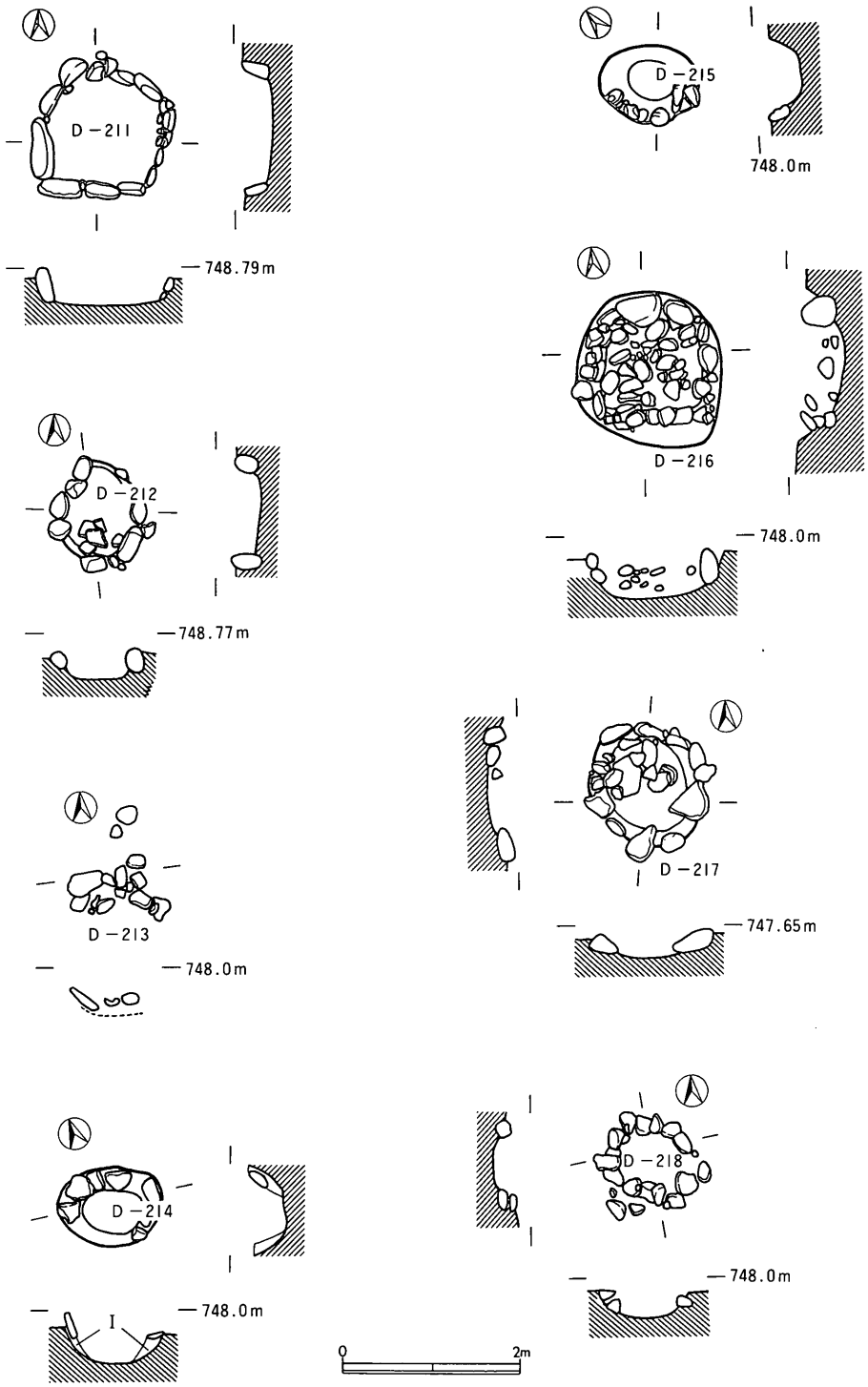
第79図　D－168～183号土坑



第80図　D－184～194号・228号土坑

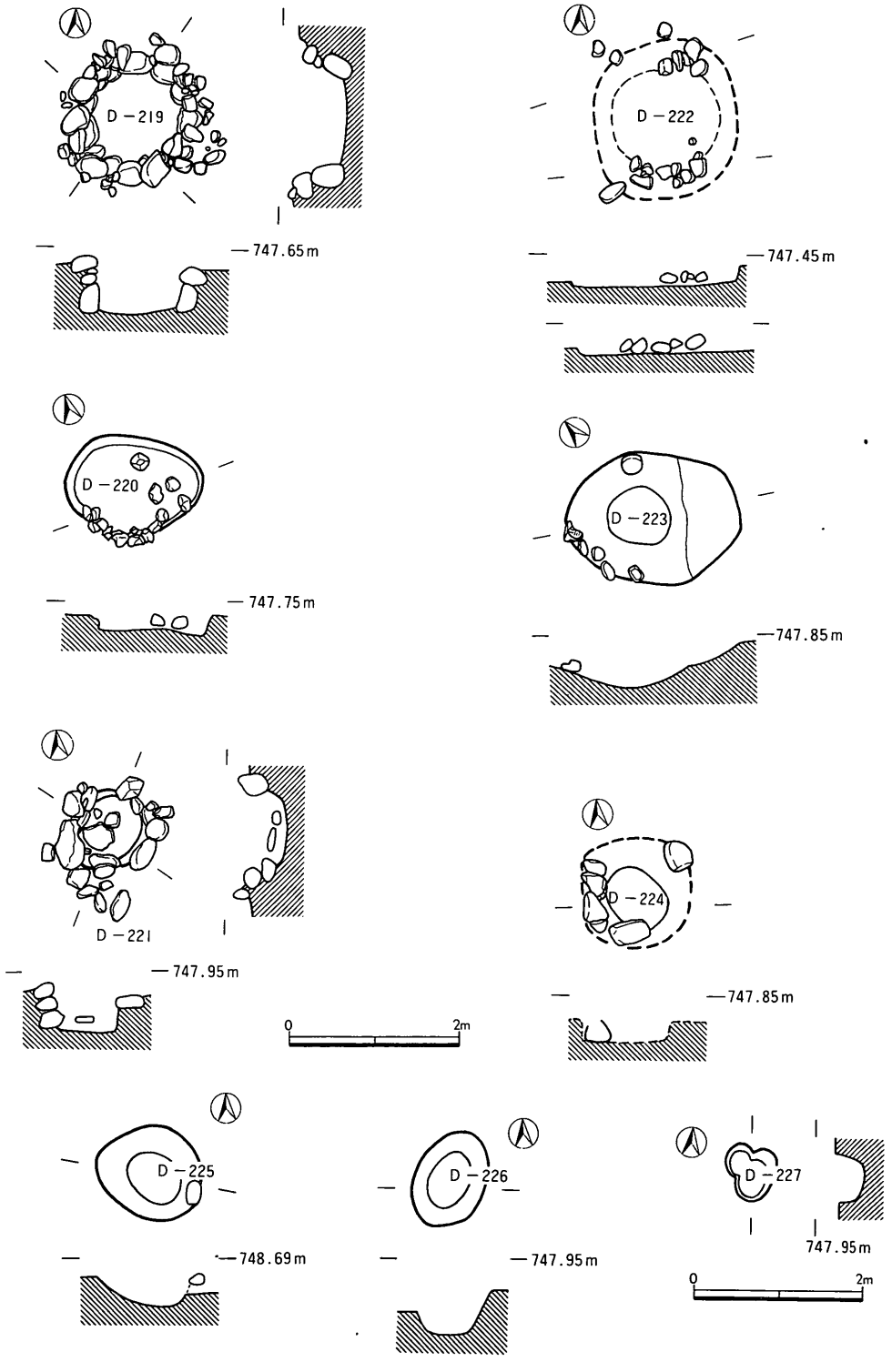


第81図　D－195～210号土坑



I　10YR2/3　黒褐色土、きめ細かい

第82図　D－211～218号土坑



第83図　D－219～227号土坑

第8表　土坑属性表

遺構	長さ(cm)	幅(cm)	出土品等
D－1	92	92	内耳鍋
D－2	90	90	
D－3	78	78	
D－4	140	84	
D－5	－	94	
D－6	236	142	
D－7	106	54	須恵器・突帯付四耳壺　かわらけ
D－8	70	82	近代
D－9	－	104	
D－10	90	90	
D－11	108	158	
D－12	170	80	
D－13	110	120	
D－14	108	124	
D－15	186	212	
D－16	－	120	
D－17	160	140	
D－18	92	98	
D－19	132	116	
D－20	170	200	
D－21	150	158	古瀬戸・おろし皿　14C～15C
D－22	130	－	
D－23	70	82	
D－24	136	120	
D－25	104	118	
D－26	140	130	
D－27	104	84	
D－28	70	66	
D－29	50	50	
D－30	150	78	須恵器・坏
D－31	(164)	114	
D－32	106	102	
D－33	80	68	
D－34	198	148	
D－35	110	192	
D－36	174	－	
D－37	200	194	
D－38	－	－	
D－39	200	178	
D－40	(240)	(330)	常滑・甕底部　甕器系甕？　磨石
D－41	200	(200)	
D－42	90	140	
D－43	104	72	
D－44	110	90	
D－45	84	106	
D－46	110	80	
D－47	(120)	266	
D－48	(70)	(70)	
D－49	130	130	
D－50	116	108	
D－51	90	100	
D－52	86	70	
D－53	76	110	
D－54	90	90	
D－55	220	110	
D－56	86	74	
D－57	110	120	
D－58	114	94	

遺構	長さ(cm)	幅(cm)	出土品等
D－59	150	(112)	
D－60	94	－	
D－61	104	110	
D－62	186	110	
D－63	150	80	
D－64	100	90	
D－65	84	80	
D－66	70	76	
D－67	104	110	
D－68	90	70	
D－69	90	90	
D－70	60	70	
D－71	60	50	
D－72	102	110	
D－73	170	110	
D－74	－	－	
D－75	280	(300)	
D－76	－	－	
D－77	100	84	
D－78	－	－	
D－79	160	130	
D－80	76	80	
D－81	168	206	釘
D－82	84	76	
D－83	(130)	140	
D－84	110	－	
D－85	120	－	
D－86	140	134	
D－87	100	84	磨石（台）
D－88	190	120	石擂り鉢
D－89	118	100	
D－90	92	92	
D－91	118	90	
D－92	104	92	
D－93	110	90	
D－94	102	100	
D－95	124	92	
D－96	80	－	
D－97	110	－	
D－98	－	120	
D－99	100	(96)	
D－100	(124)	(96)	
D－101	130	－	常滑・甕体部
D－102	100	(110)	
D－103	130	(248)	刀子
D－104	120	138	
D－105	74	70	
D－106	90	－	
D－107	136	92	
D－108	60	60	
D－109	76	60	
D－110	120	－	
D－111	－	100	
D－112	120	－	
D－113	100	(90)	
D－114	140	110	
D－115	120	100	
D－116	100	100	中津川甕　13C後～14C前　砥石　貨幣

第9表　土坑属性表

遺構	長さ(cm)	幅(cm)	出土品等
D－117	130	130	須恵器　足金物
D－118	140	110	
D－119	100	76	
D－120	90	90	
D－121	80	－	
D－122	－	150	
D－123	－	50	
D－124	80	80	古瀬戸・天目茶碗体部　石擂り鉢
D－125	190	150	
D－126	134	110	
D－127	－	180	須恵器
D－128	－	130	
D－129	－	90	
D－130	228	170	常滑・甕　内耳鍋　羽口　釘
D－131	130	170	砥石　凹石　石擂り鉢
D－132	－	74	
D－133	－	130	
D－134	110	－	青磁・碗口縁
D－135	146	160	
D－136	108	94	近代？　甕
D－137	98	90	近代？　甕
D－138	138	114	凹石
D－139	90	130	須恵器・坏　磨石　凹石
D－140	150	170	須恵器　常滑・甕口縁14C　凹石
D－141	140	106	土師器（内黒）・坏　かわらけ
D－142	70	140	
D－143	80	94	
D－144	78	56	
D－145	－	210	
D－146	146	110	
D－147	70	84	
D－148	50	44	
D－149	176	122	鞴の羽口
D－150	100	160	
D－151	136	140	
D－152	(80)	(50)	貨幣
D－153	100	100	
D－154	80	94	
D－155	90	110	
D－156	64	66	
D－157	120	118	
D－158	104	90	
D－159	100	74	砥石
D－160	154	158	
D－161	120	110	
D－162	－	140	
D－163	60	50	
D－164	160	140	釘　磨石　貨幣
D－165	120	132	
D－166	138	120	
D－167	160	140	鑿
D－168	136	140	
D－169	104	120	
D－170	60	64	
D－171	134	110	
D－172	100	100	青磁・碗　14C後～15C前
D－173	110	100	
D－174	84	90	

遺構	長さ(cm)	幅(cm)	出土品等
D－175	90	78	
D－176	100	112	
D－177	120	92	
D－178	120	120	
D－179	116	120	
D－180	180	194	常滑・甕体部
D－181	100	70	
D－182	(106)	100	
D－183	－	164	
D－184	70	290	
D－185	118	104	
D－186	80	84	
D－187	100	－	
D－188	134	124	須恵器・甕　常滑・甕体部
D－189	(100)	(90)	東海南部尾張山茶碗　青磁・碗
D－190	－	－	
D－191	(130)	(144)	青磁・碗　瓷器系・甕
D－192	140	(116)	
D－193	110	(92)	
D－194	148	130	
D－195	90	82	
D－196	64	－	
D－197	(86)	(70)	
D－198	94	64	
D－199	100	100	
D－200	94	66	
D－201	－	140	
D－202	80	80	
D－203	62	62	
D－204	94	90	
D－205	150	192	
D－206	－	110	
D－207	70	50	古瀬戸・折縁深皿口～底部　14C後
D－208	110	106	
D－209	110	112	
D－210	－	106	
D－211	160	110	古瀬戸・天目茶碗口縁部　15C中
D－212	130	120	内耳鍋
D－213	－	－	在地産須恵器・擂り鉢14C　内耳鍋　凹石
D－214	90	120	
D－215	90	110	
D－216	170	170	磨石（台もあり）
D－217	150	140	
D－218	120	130	
D－219	200	200	
D－220	130	150	
D－221	170	150	石臼未製品
D－222	(190)	(170)	
D－223	150	－	
D－224	220	126	須恵器・長頸瓶　釘　石臼(上)
D－225	110	120	常滑捏ね鉢14C　古瀬・平碗
			14C後　白磁皿体部14C後～
			15C前　かわらけ　在地産擂り鉢　毛針
D－226	114	82	常滑・甕体部　貨幣
D－227	60	40	
D－228	－	100	

2　遺　　物

本遺跡からはかわらけ・内耳鍋などの素焼きの土器、常滑・中津川・古瀬戸・珠洲等の国内陶磁器、中国龍泉窯系の青磁などの焼き物、鉄・銅製品などが出土した。一部平安時代にさかのぼる遺物も混じるが、主体を占める中世の遺物を中心として記載する。

(1)　かわらけ（第84図）

発掘調査では、11点の図上復原できるかわらけが出土した。発掘面積・検出された遺構数から考えれば決して多い出土量とはいえない。岩手県柳の御所などで知られるように通常、城館跡など高級武士の館などからは大量のかわらけが発見されるケースが多い。それに比すればかなり貧弱な保有率ということになり、前藤部の集落が、城館とは違ったものであったことを示唆している。年代は14世紀後半から15世紀前半に特徴的な、見込み部を押さえる特徴を有するもの(2)と16世紀代の特徴を有する(9)等が認められる。今回は、分析資料が少ないためこれ以上詳細な検討は行わない。

(2)　内耳鍋・擂り鉢（第84・85図）

内耳鍋は、鉄滓の捨て場となっていたD－130号土坑から出土した12･13、配石遺構から出土した14・15が図上復原できた。現在の研究では口縁部が折れ曲がって開く12・15は15世紀中頃、直線的に立つ14は16世紀代と考えられている。

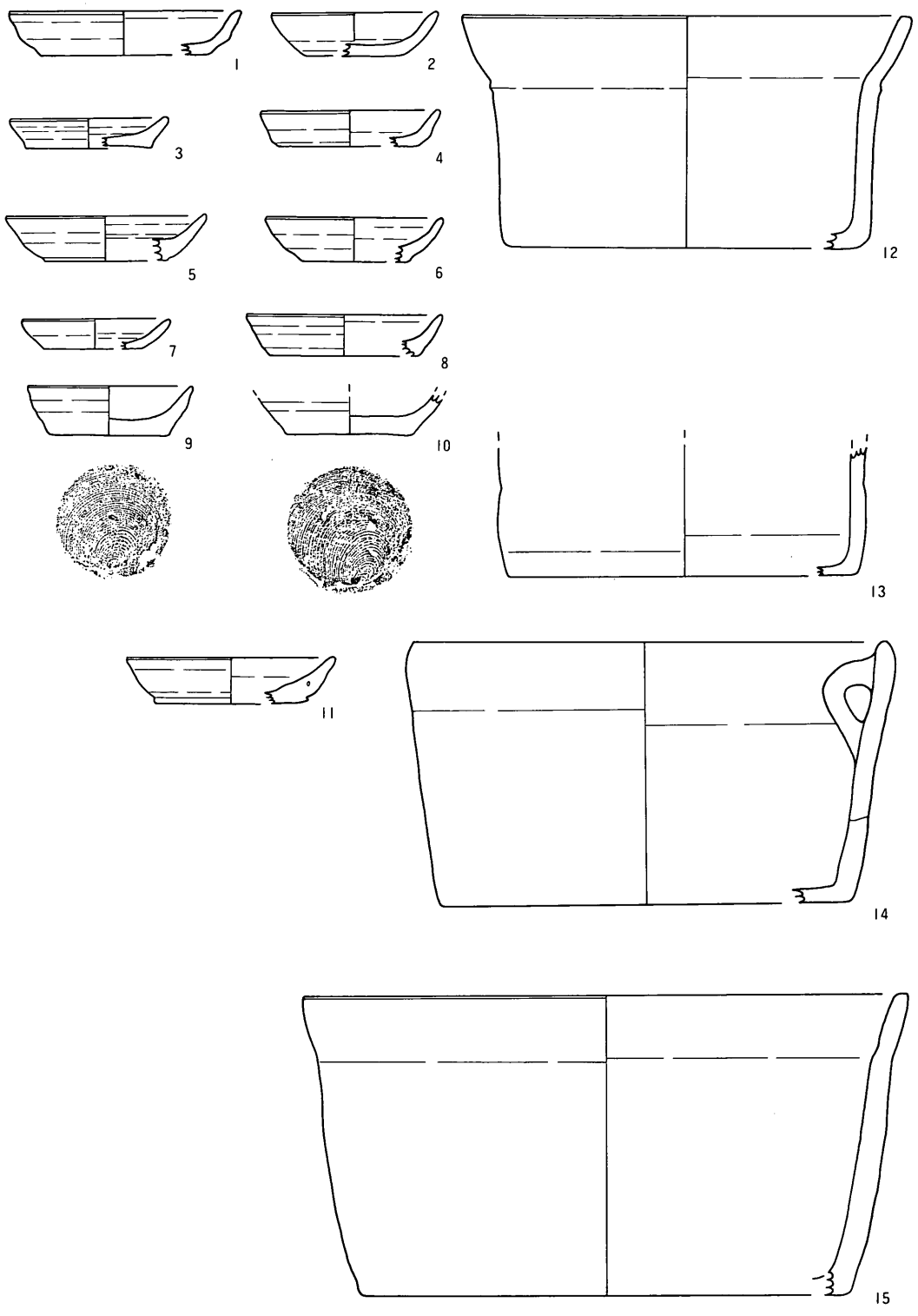
また、擂り鉢16は在地産須恵器質擂り鉢の後を受けて15世紀中頃に登場する素焼きの製品で、珠洲焼きの製作技法を継承しているものであるという。

内耳鍋・擂り鉢は前藤部遺跡の中世集落のなかで、もっとも新しい時期を構成する要素の一つである。

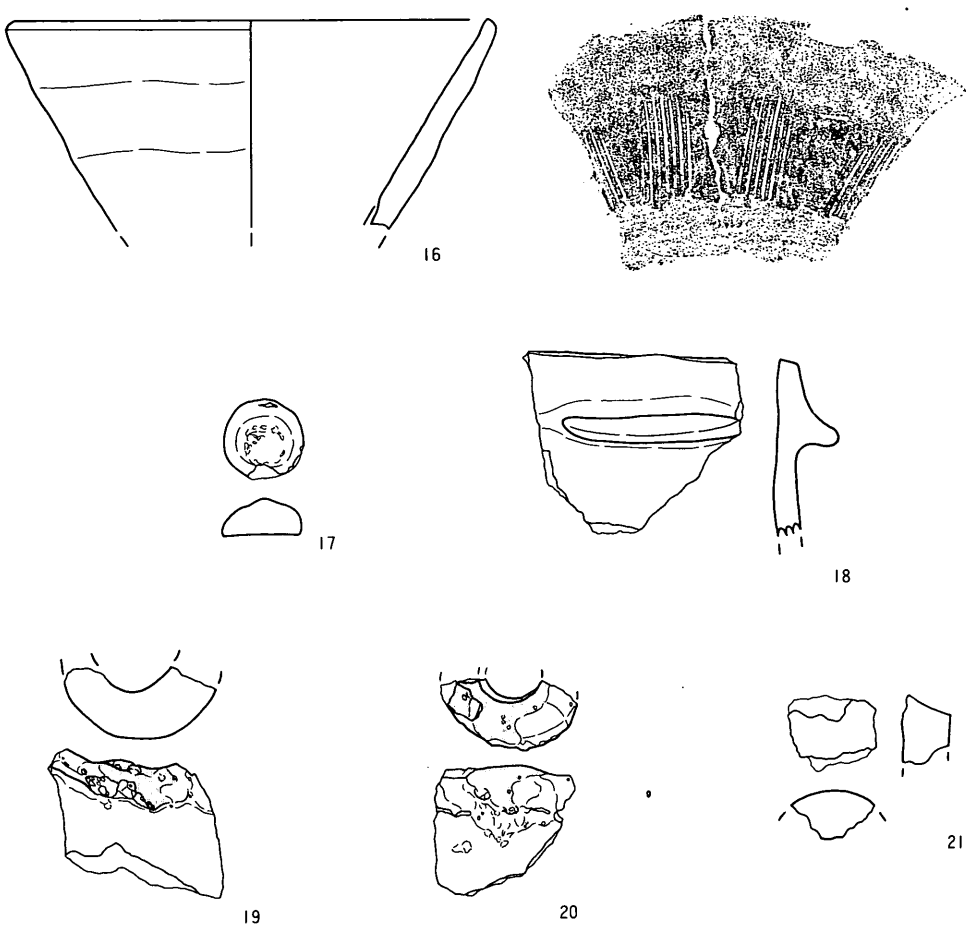
(3)　その他の素焼き製品（第85図）

1　羽釜・円版・羽口

このほか、平安時代9世紀後半～10世紀代の内黒土師器が散見された。中世の素焼きの製品は何に使われたのかわからない円版17、11世紀後半から12世紀前半の所産の羽釜18、鍛冶炉と関連の深い鞴の刃口19～21が出土した。また、13世紀後半と14世紀後半～15世紀前半の在地産須恵器系擂り鉢（巻頭図版５）や瓦質の風炉（巻頭図版５）なども出土した。



第84図　かわらけ・内耳鍋（1：4）



第85図　擂り鉢・円版・羽釜・羽口（1：4）

(4) 陶 磁 器（巻頭図版1～7）

もっとも古い陶磁器は古代にさかのぼり、東濃産灰釉陶器で9世紀後半から10世紀にかけて製作された製品が散見された。しかし、該期の遺構は検出されなかった。次は11世紀後半～12世紀前半の中国産白磁（巻頭図版3）で大宰府IV類と分類されるものである。該期の遺構は、H－1～4号竪穴住居跡がある。12世紀後半になると単品ではあるがC－205から常滑の甕口縁部片（巻頭図版3－2の20）が検出された。たいへん珍しい製品である。

13世紀以降になると陶磁器製品が増加する。12世紀後半～13世紀の製品は中国産龍泉窯系の青磁（大宰府I－5b類に分類　巻頭図版3）がある。13世紀代の製品は東海南部尾張の山茶碗（13世紀前半　巻頭図版5）、古瀬戸の瓶類（巻頭図版2）・四耳壺（巻頭図版2）、おろし皿（巻頭図版2）などがあり、とりわけ13～15世紀にかけて瓶類が多い点が特徴として挙げられる。

13世紀後半から14世紀前半は前藤部遺跡の中世集落がピークを迎える段階である。古瀬戸の平

第10表　かわらけ・内耳鍋・擂り鉢属性表

番号・出土地	器　種	法　量	器形の特徴	調　整	色調等
1 C－4	かわらけ (土)	(13.8) 2.7 (10.0)	口縁部内湾したのち、上位で外反する。 底部は平底。	ロクロナデ。底部糸切り離しで未調整。	内　明赤褐色2.5YR5/6 外　明赤褐色2.5YR5/6 断面　明赤褐色2.5YR5/6
2 C－5	かわらけ (土)	(10.0) 2.7 (6.7)	口縁部内湾して開く。 底部は平底。	ロクロナデ。底部糸切り離し。 油煙付着。	内　にぶい黄橙色10YR6/3 外　褐灰色10YR5/1 断面　にぶい黄橙色10YR6/3
3 C－69	かわらけ (土)	(9.5) 1.8 (7.6)	口縁部直線的に開く。 底部は平底。	ロクロナデ。底部糸切り離しで未調整。 見込み部に押さえあり。	内　橙色5YR6/6 外　橙色5YR6/6 断面　橙色5YR6/6
4 C－123	かわらけ (土)	(10.8) 2.3 (8.4)	口縁部内湾して開く。 底部は平底。	ロクロナデ。底部糸切り離しで未調整。	内　橙色7.5YR6/6 外　橙色7.5YR6/6 断面　橙色7.5YR6/6
5 C－142	かわらけ (土)	(11.9) 2.7 (7.4)	口縁部内湾して開く。 底部は平底。	ロクロナデ。底部糸切り離しで未調整。	内　にぶい橙色7.5YR7/4 外　にぶい橙色7.5YR7/4 断面　にぶい橙色7.5YR7/4
6 C－149	かわらけ (土)	(10.5) 2.6 (6.3)	口縁部内湾して開く。 底部は平底。	ロクロナデ。底部糸切り離しで未調整。	内　にぶい橙色5YR7/4 外　にぶい橙色5YR7/4 断面　にぶい橙色5YR7/4
7 C－263	かわらけ (土)	(9.0) 1.9 (6.0)	口縁部直線的に開く。 底部は平底。	ロクロナデ。底部糸切り離しで未調整。	内　橙色5YR6/6 外　橙色5YR6/6 断面　橙色5YR6/6
8 D－7	かわらけ (土)	(11.7) 2.4 (9.0)	口縁部直線的に開く。 底部は平底。	ロクロナデ。底部糸切り離しで未調整。	内　にぶい黄橙色10YR6/3 外　にぶい黄橙色10YR6/3 断面　にぶい黄橙色10YR6/3
9 D－7	かわらけ (土)	(10.5) 2.8 (7.0)	口縁部直線的に開く。 底部は平底。	ロクロナデ。底部糸切り離しで未調整。	内　にぶい黄橙色10YR6/3 外　にぶい橙色10YR7/3 断面　にぶい黄橙色10YR6/3
10 D－225	かわらけ (土)	－ － (7.4)	底部は平底。	ロクロナデ。底部糸切り離しで未調整。 油煙付着。	内　にぶい黄橙色10YR6/3 外　にぶい橙色10YR7/3 断面　にぶい黄橙色10YR6/3
11 61えD 溝	かわらけ (土)	(12.5) 2.9 (9.2)	口縁部内湾して開く。	ロクロナデ。底部糸切り離しで未調整。	内　にぶい橙色7.5YR7/4 外　にぶい橙色7.5YR7/4 断面　にぶい橙色7.5YR7/4
12 D－130	内耳鍋 (土)	(27.0) 14.0 (21.0)	口縁部屈曲し内湾気味に開く。 底部は平底。	ナデ。 外面煤付着。	内　灰黄褐色10YR5/2 外　灰黄褐色10YR5/2 断面　灰黄褐色10YR5/2
13 D－130	内耳鍋 (土)	－ － (21.0)	底部は平底。	ナデ。 外面煤付着。	内　灰黄褐色10YR5/2 外　灰黄褐色10YR5/2 断面　灰黄褐色10YR5/2
14 D－212	内耳鍋 (土)	(28.5) 16.0 (25.0)	口縁部直線的に立ち上がる。 底部は平底。	ナデ。 外面煤付着。	内　にぶい褐色7.5YR6/3 外　にぶい褐色7.5YR6/3 断面　にぶい褐色7.5YR6/3
15 D－213	内耳鍋 (土)	(36.5) 28.2 (29.5)	口縁部緩く外反する。 底部は平底。	ナデ。 外面煤付着。	内　灰黄褐色10YR5/2 外　灰黄褐色10YR5/2 断面　灰黄褐色10YR5/2
16 D－225	擂り鉢 (土)	(25.0) － －	逆ハの字状に開く。	ロクロナデ。	内　橙色7.5YR6/6 外　橙色7.5YR6/6 断面　橙色7.5YR6/6

碗（巻頭図版２）、瓶子（巻頭図版２）、中津川の甕（巻頭図版３）、東海産山茶碗系捏ね鉢（巻頭図版５）、珠洲の擂り鉢（巻頭図版３）、白磁皿（巻頭図版３）などがある。

14世紀から15世紀前半では、古瀬戸の水注（巻頭図版２の49）・瓶類（巻頭図版２）・平碗（巻頭図版２）・折り縁深皿（巻頭図版２）・鉢（巻頭図版２）・天目茶碗（巻頭図版２）・おろし皿（巻頭図版２）、常滑の甕・捏ね鉢（巻頭図版３・４）、青磁碗（巻頭図版３）、白磁皿（巻頭図版３）、また、時期不明瞭ではあるが、中世の天目茶碗（巻頭図版３）もある。

珍品では14世紀遺構の中国産茶入れ（巻頭図版５）がある。

このように13～15世紀前半までは陶磁器が主体を占めるが、15世紀中頃を境として16世紀に至る時期になると前藤部遺跡では遺構数の減少とあいまって陶磁器数も減少する。代わって登場するのは前述第84・85図の内耳鍋、擂り鉢である。

(5) 鉄・銅製品

1 釘（第86図）

竪穴遺構を中心として合計30本の釘が出土した。特に釘がまとまって出土した遺構はない。

2 足金物・柄頭・鑿・刀子・毛針（第87図）

銅製品も少量ながら出土した。刀の鞘の足金物（第87図１）、刀の柄頭（同図２）など武器類に装着したものである。

同図３は鉄製の鑿、４から６は鉄製の刀子あるいは小刀、７・８は編物などに使う毛針で２本まとまって出土した。

(6) 石 製 品

1 硯（第88図）

竪穴遺構を中心として４点の硯が出土した。いずれも粘板岩で製作された四角い硯で海をもつ。また、すべて欠損品であるため、全体の大きさはわからないが、１は幅6.3cm、４は幅12cm以上の大形品である。

2 砥　　石（第89図）

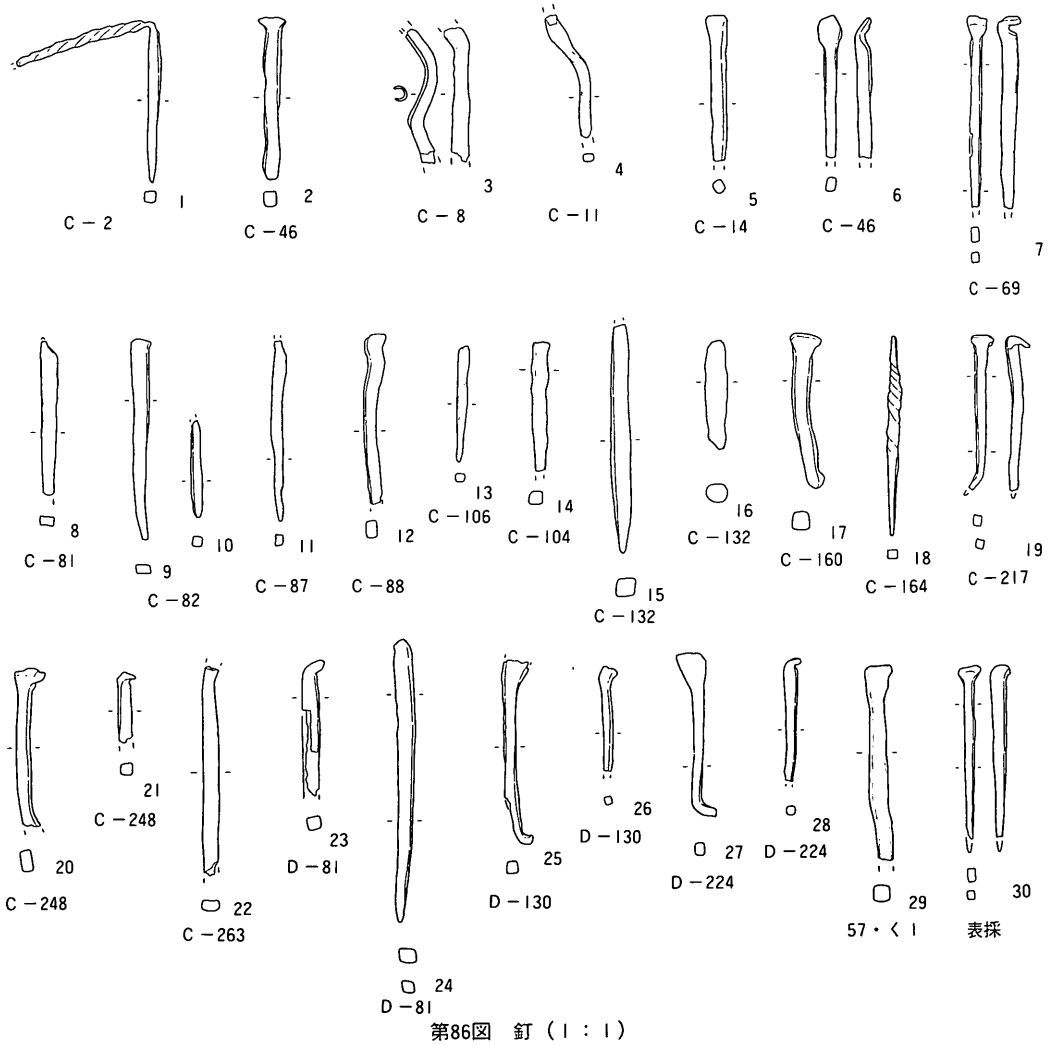
竪穴遺構・土坑などから18点の砥石が出土した。すべて凝灰岩製である。薄い端正な作りの８は特にきめの細かい良質な石で作られており、重要品の仕上げに使われたと考えられる。

3　磨　　石（第90図）

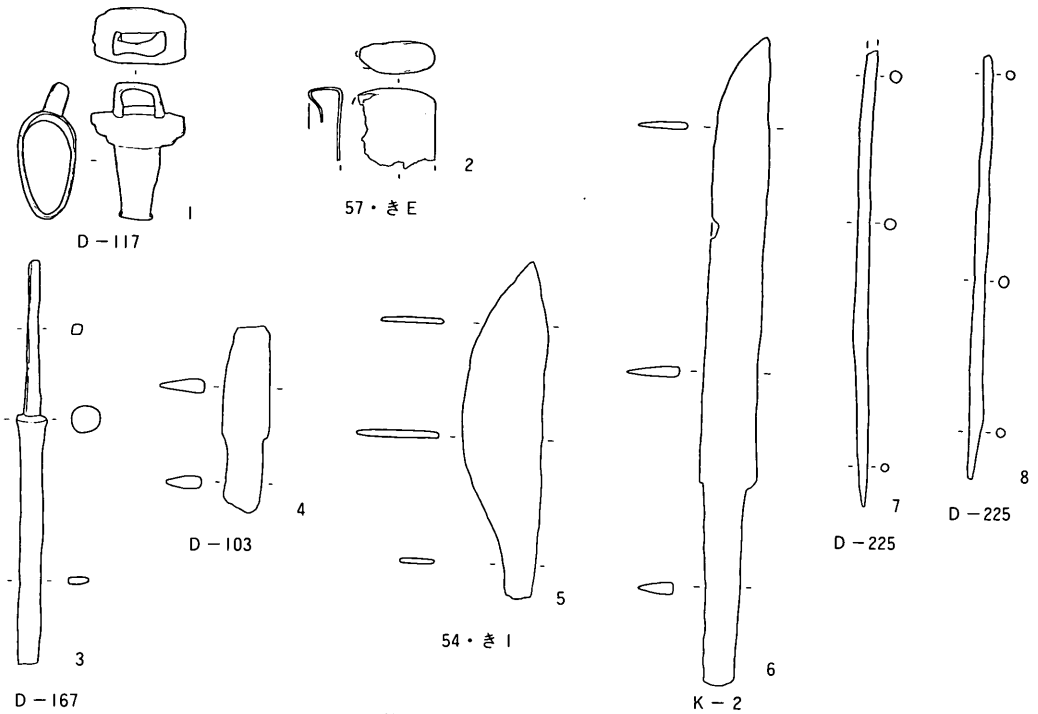
第90図１・３・５・８・９は安山岩製、６・７は軽石製で食料等を磨り潰すための道具と考えられる。第90図10、第92図２はものを磨り潰す際に台として使用されたと考えられ、安山岩製である。第90図２は軽石製の円版、４は滑石製の有孔円版で用途は不明。

4　凹石・石擂り鉢（第91･92･93図）

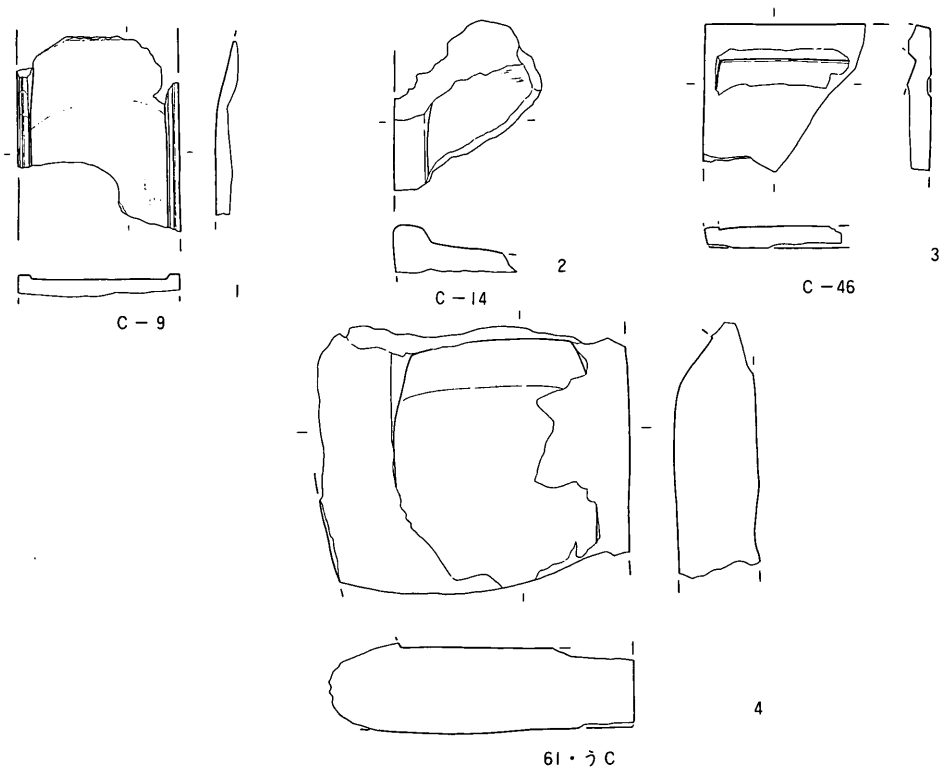
食料等を搗くための道具か。第91図１・２・４、第92図１・６は軽石製、第91図３、第92図３は安山岩製で気密の粗い石を利用している。石擂り鉢は、食料等を擂るか、捏ねる石のうつわで第92図４・５、第93図４などが該当する。



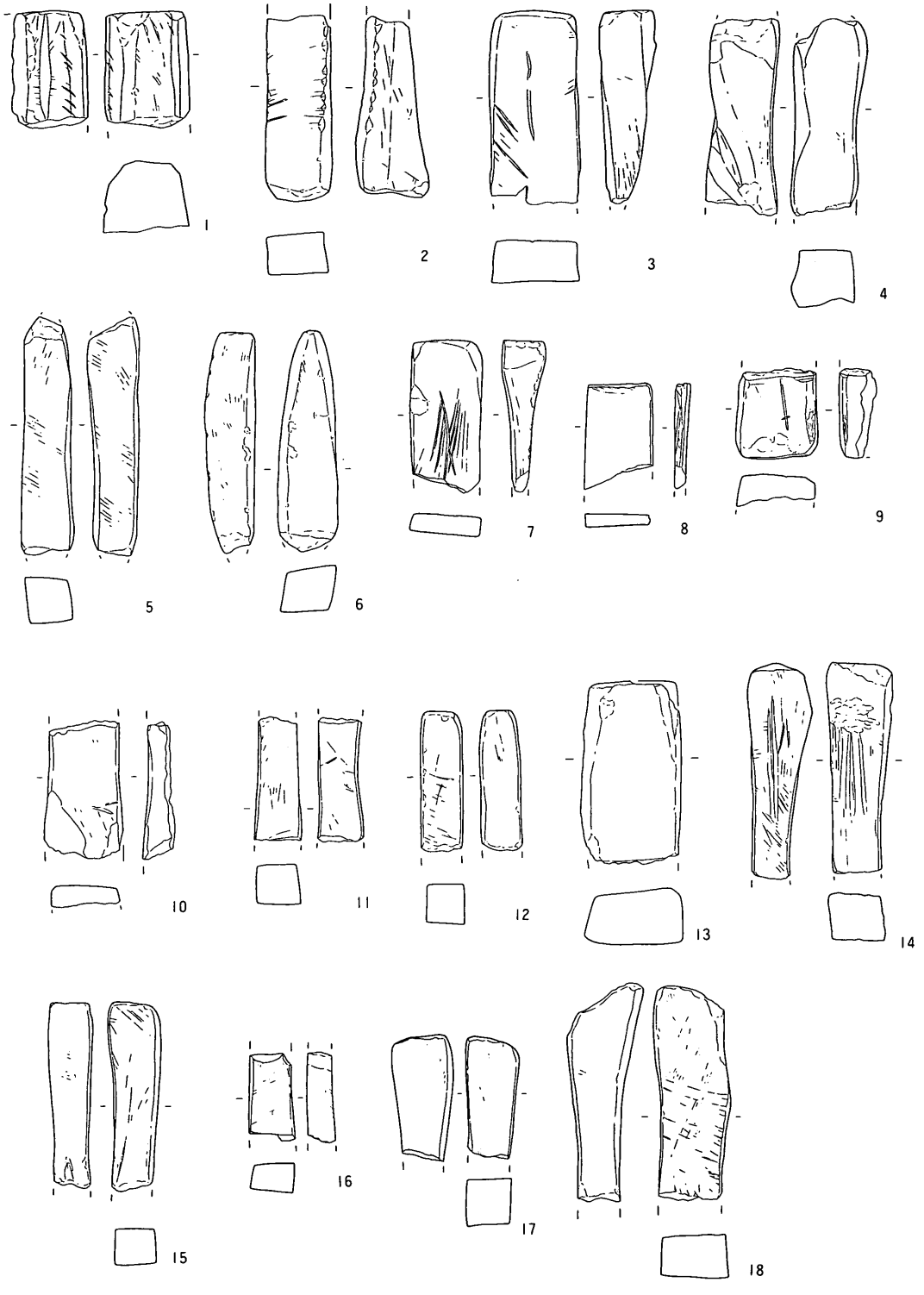
第86図　釘（１：１）



第87図　銅・鉄製品（1：3）



第88図　硯（1：3）



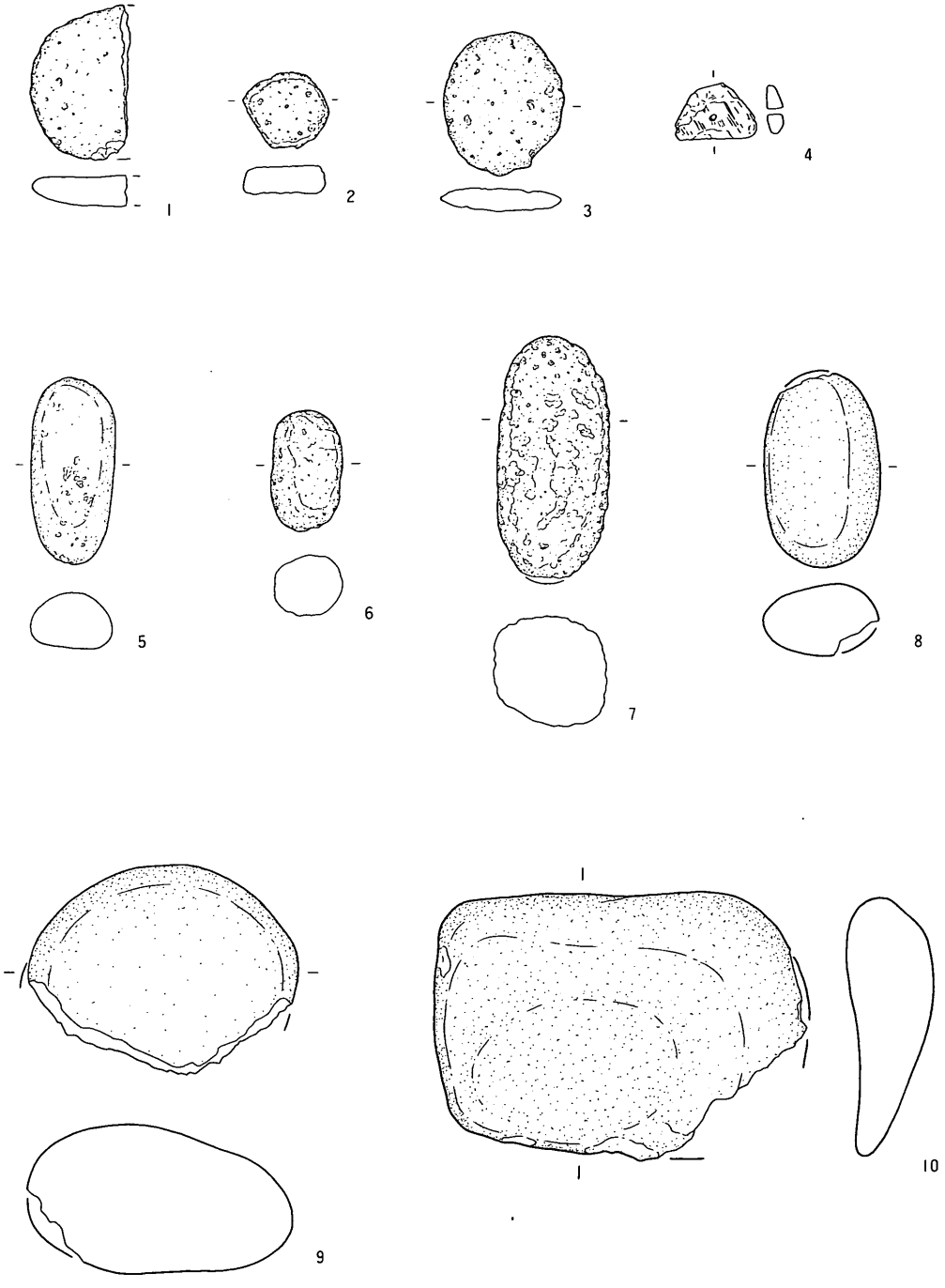
第89図　砥石（1：3）

第11表　砥石属性表

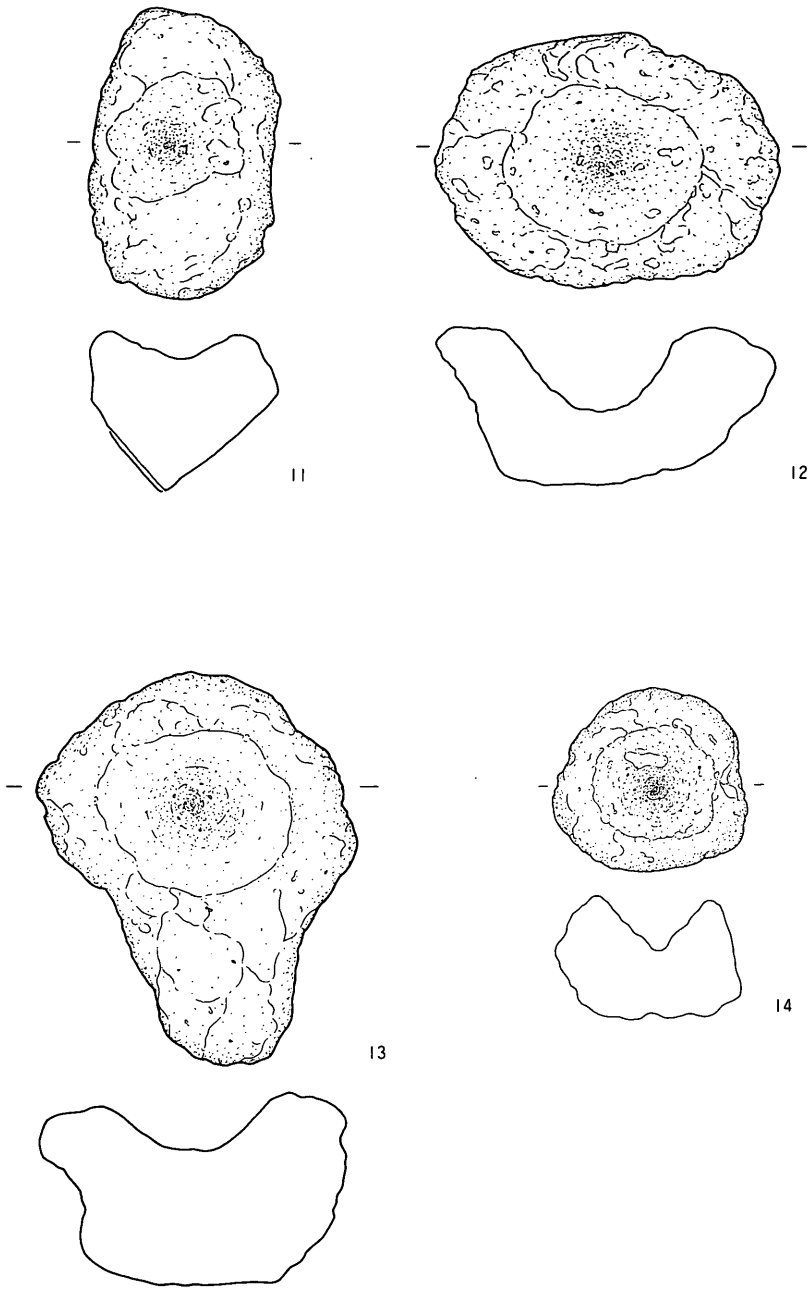
挿図番号	材　質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	遺　構	挿図番号	材　質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	遺　構
1	凝灰岩	5.4	3.9	3.1	110.9	C－4	10	凝灰岩	6.2	3.6	1.6	36.1	C－229
2	凝灰岩	8.4	3.1	3.4	108.7	C－4	11	凝灰岩	5.7	2.2	2.1	40.8	C－263
3	凝灰岩	8.9	4.1	2.6	120.7	C－13	12	凝灰岩	6.4	1.9	1.9	43.3	D－116
4	凝灰岩	9.1	3.4	3.3	149.5	C－23	13	凝灰岩	8.3	4.6	2.9	158.5	D－130
5	凝灰岩	11.0	2.4	2.3	103.1	C－14	14	凝灰岩	10.0	3.2	2.9	122.5	D－159
6	凝灰岩	10.3	3.0	2.3	93.6	C－132	15	凝灰岩	8.8	2.4	1.9	68.4	55・かC
7	凝灰岩	7.0	3.2	2.1	55.9	C－149	16	凝灰岩	4.2	2.1	1.5	19.2	56・あC
8	凝灰岩	4.8	3.1	0.7	14.7	C－149	17	凝灰岩	5.7	2.6	2.6	61.1	57・くI
9	凝灰岩	4.1	3.8	1.8	35.8	C－149	18	凝灰岩	10.2	3.3	3.0	142.8	60・けA

第12表　磨石・凹石・石擂り鉢・石臼・茶臼属性表

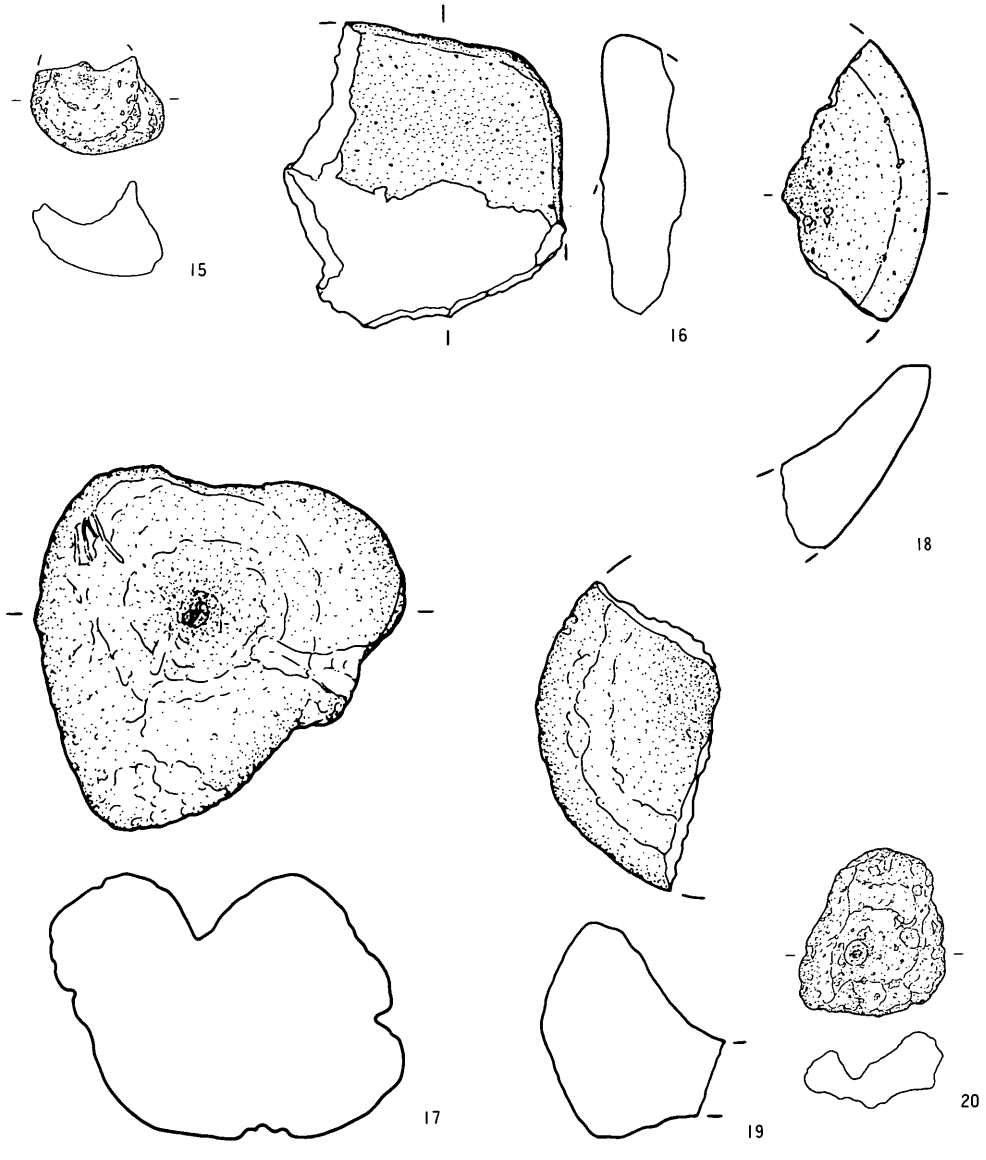
挿図番号	器種材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	遺　構	挿図番号	器種材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	遺　構
1	磨石　安山岩	8.7	5.5	1.9	113.8	C－11	13	凹石　安山岩	20.8	16.4	10.5	2,210.0	D－213
2	円版　軽石	4.3	4.4	1.7	16.1	C－23	14	凹石　軽石	9.7	10.1	6.6	226.0	D－140
3	磨石　安山岩	8.3	6.9	1.5	62.8	C－32	15	凹石　軽石	5.2	7.3	5.0	50.3	C－4
4	有孔円版滑石	2.5	3.4	0.7	9.5	D－164	16	磨石　安山岩	16.4	14.8	4.4	1,370.0	C－87
5	磨石　安山岩	10.3	4.8	3.5	217.0	C－87	17	凹石　安山岩	19.4	19.0	14.5	1,740.0	D－130
6	磨石　軽石	6.9	4.0	3.7	42.6	C－87	18	石擂り鉢安山岩	15.1	10.1	4.9	450.7	C－124
7	磨石　軽石	14.2	6.9	7.2	313.1	D－139	19	石擂り鉢安山岩	16.3	9.5	11.4	970.0	D－130
8	磨石　安山岩	10.9	6.5	4.0	385.6	D－216	20	凹石　安山岩	9.0	7.7	4.5	83.3	D－130
9	磨石　安山岩	11.8	15.0	5.2	1,760.0	D－40	21	石臼　安山岩	17.4	30.2	11.7	8,300.0	D－224
10	磨石　安山岩	15.0	29.0	5.1	2,290.0	D－216	22	石臼未製品安山岩	29.0	28.8	12.6	11,700.0	D－221
11	凹石　軽石	15.4	9.7	9.1	422.8	D－138	23	茶臼　安山岩	23.1	21.6	13.1	4,170.0	D－223
12	凹石　軽石	17.9	13.5	8.3	396.1	D－139	24	石擂り鉢安山岩	40.3	22.3	18.5	5,800.0	D－88



第90図　磨石・石製品（1：4）



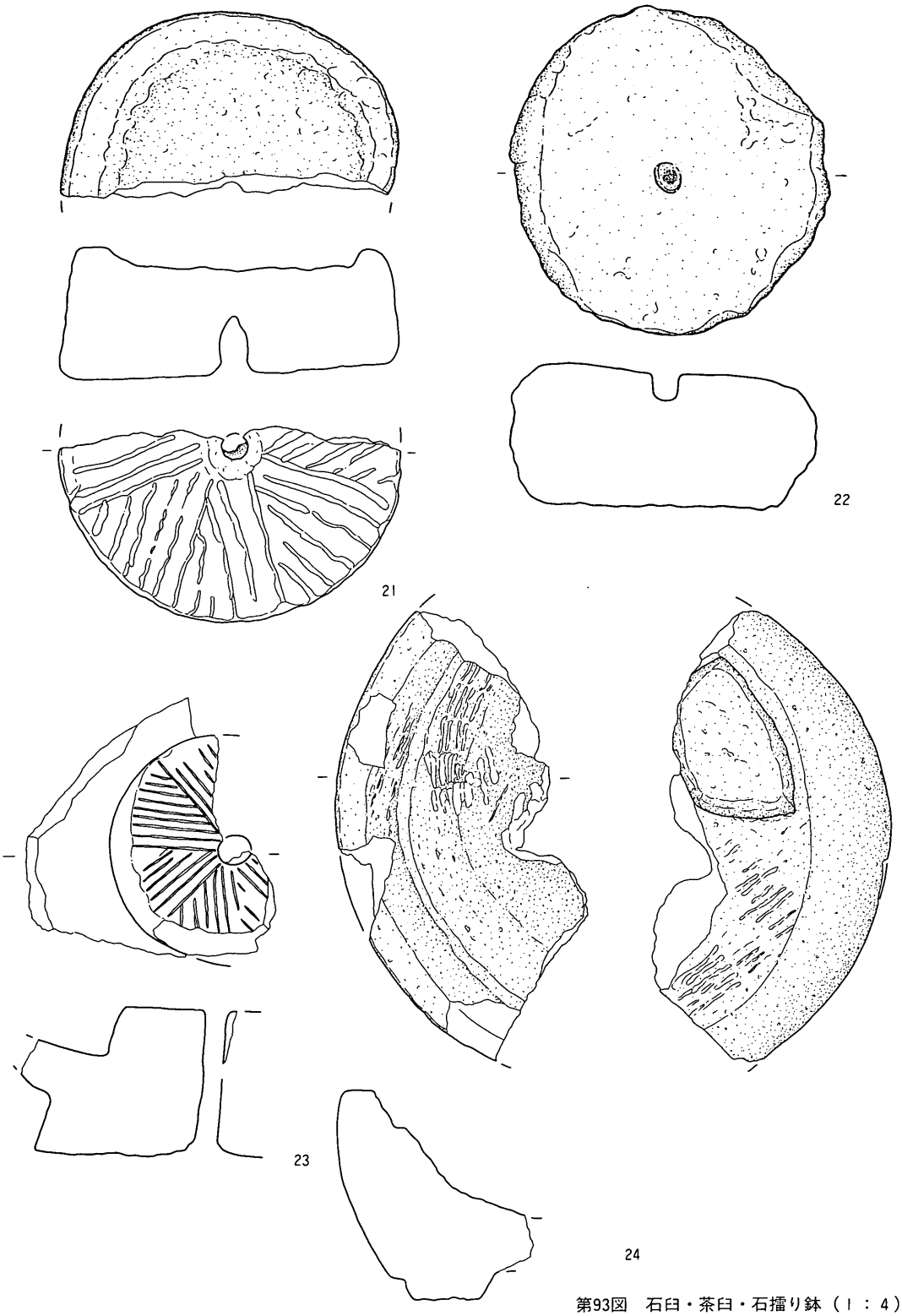
第91図　凹石（1：4）



第92図　石擂り鉢・凹石（1：4）

5　石臼・茶臼（第93図）

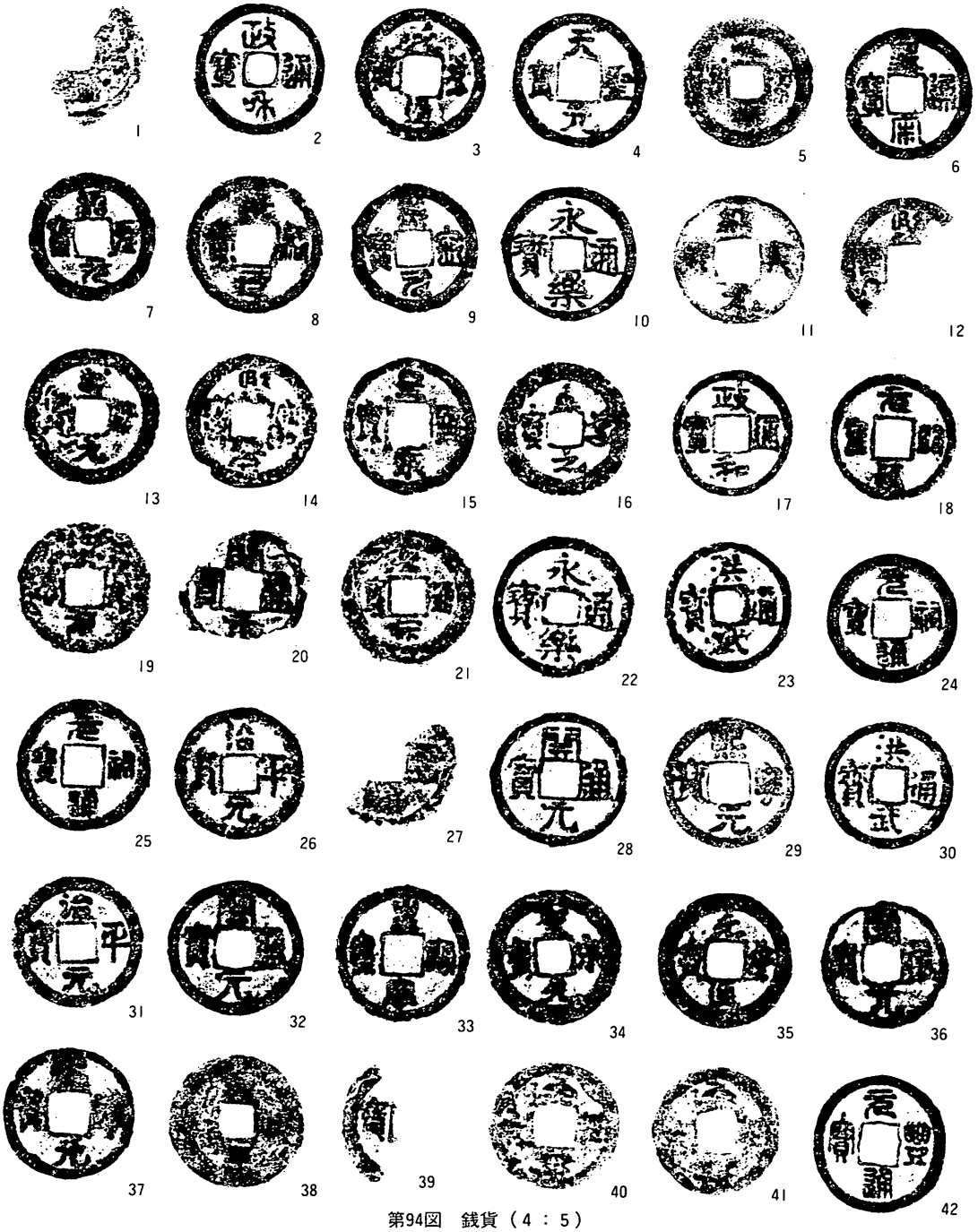
石臼は1で上臼部分。米・麦・そば等穀物の粉を碾く道具。茶臼は3で下臼部分。御抹茶を碾く道具。2は石臼の未製品。いずれも安山岩製である。石臼・茶臼ともに出土量が少ないのは時代性を反映するのであろうか。



第93図　石臼・茶臼・石擂り鉢（1：4）

(7) 貨　　幣（第94図）

合計で42枚の銭貨が出土した。判読できないものもあるが、おおむね中世日本の流通貨幣、中国からの輸入銭である。



第94図　銭貨（4：5）

第13表　出土貨幣一覧表

番号	貨　幣	出土地	番号	貨　幣	出土地	番号	貨　幣	出土地	番号	貨　幣	出土地
1	開元通宝	C－2	12	熙寧元宝	C－163	23	洪武通宝	D－152	34	聖宋通宝	55・けG
2	政和通宝	C－5	13	紹聖元宝	C－217	24	元祐通宝	D－164	35	元豊通宝	55・けG
3	元豊通宝	C－27	14	熙寧元宝	C－243	25	元祐通宝	D－164	36	開元通宝	55・けG
4	天聖元宝	C－49	15	皇宋通宝	C－263	26	治平通宝	55・けG	37	熙寧元宝	55・けG
5	?	C－72	16	?	C－263	27	開元通宝	55・けG	38	?	55・けG
6	皇宋通宝	C－72	17	政和通宝	K－1	28	開元通宝	55・けG	39	?	55・きA
7	紹聖元宝	C－72	18	元祐通宝	K－2	29	熙寧元宝	55・けG	40	?	表採
8	景徳元宝	C－72	19	?	K－2	30	洪武通宝	55・けG	41	?	表採
9	熙寧元宝	C－88	20	開元通宝	D－116	31	治平通宝	55・けG	42	元豊通宝	表採
10	永楽通宝	C－157	21	皇宋通宝	D－152	32	開元通宝	55・けG			
11	紹熙元宝	C－163	22	永楽通宝	D－152	33	皇宋通宝	55・けG			

(8)　人　　骨（第77図・図版21・33）

群馬県立大間々高校宮崎重雄先生に鑑定を依頼した結果は別ページに記す。

本調査区では長径80cmの小形のD－52号土坑から唯一の人骨が出土した。宮崎先生の鑑定では2才程度の幼児ということである。遺体が木棺に納められていたことは、副葬された貨幣下に木質が残っていたことからも明らかである。副葬貨幣には、永楽通宝（初鋳1408年）、洪武通宝（初鋳1368年）などがあり、中世でも後半に埋葬されたことが推測される。

(9)　獣　　骨（図版33・34）

群馬県立大間々高校宮崎重雄先生に鑑定を依頼した結果は別ページに記す。

本調査区からは馬・鹿などの獣骨が出土した。獣骨は焼かれたものは少なく、生の骨が多い。また、明らかに埋葬されたD－6号土坑の馬（中世末から近世の馬か）を除くといずれも部分的な骨が出土した程度である。

(10)　貝（図版34）

竪穴遺構を中心としてアカニシと考えられる巻き貝が多量に出土した（ただし、貝の種類については正式な鑑定結果を踏まえたものでない）。巻き貝はまとまって出土することはなく、各遺構から1・2個出土する程度であったので、単純に食用に供された後、ゴミ穴に廃棄されたものとは考えがたい。貝殻が出土した遺構は下記のとおり。C－2・4・5・10・12・15・74・78・111・124・135・147・149・154・156・240・262、D－27・130・145、K－2。

D－152号土坑出土人骨について

群馬県立大間々高等学校　宮崎重雄

岩様部を含む脳頭蓋片、肢骨片、乳歯・永久歯が残存する。歯以外はきわめて保存不良で詳細は不詳である（図版33）。

歯は左上顎中切歯をのぞき、すべて遊離歯になっている。

左上顎中切歯は、上顎骨内に未萌出歯とし残存し、上顎間縫合の縫合面から観察される。歯冠部はすでに完成し、歯根も僅かながら形成されている。この上顎第２切歯を含む永久歯はすべて未咬耗で、歯根は第１大臼歯ではほとんど形成されていなく、上顎犬歯・上顎第１小臼歯では歯冠部がほぼ完成した段階で、歯根は全く形成されていない。

乳歯は、いずれも歯根が完成し、歯根の吸収は始まっていない。乳歯の咬耗は中切歯や犬歯では点状に象牙質が露出しているが、臼歯ではエナメル質だけがわずかに咬耗されている。

このような歯の咬耗度や生え替わりの様子から、この個体は４―５才で、犬歯・第１大臼歯をはじめとする歯の大きさは、女性と思わせる。

上顎第１大臼歯には結節状のカラベリー結節が発達している。上顎第２乳臼歯には舌側咬頭歯冠部にＣ３の齲蝕があり、下顎第２乳臼歯には咬合面に点状のＣ２の齲蝕がある。第２乳臼歯は２才頃に萌出するといわれ、萌出後２―３年ですでにひどい齲歯になったことを示している。中世末の幼児にすでにかなりひどい齲歯があることに驚かされる。

引用・参考文献

Brothell. D. R.,　1981　Digging up bones. pp208, British Museum of Natural　History, London.

藤田恒太郎（1949）　歯の計測基準について．人類学雑誌，61：27－32.

上條雍彦（1995）　「日本人永久歯解剖学」．アナトーム社，東京.

片山一道（1990）　「古人骨は語る―骨考古学ことはじめ」．同朋出版，東京.

北村宗一（1942）　歯牙萌出の時期及び順序に関する研究．歯科学報、47：274－287，352－368.

瀬田季茂・吉野峰生（1990）「白骨死体の鑑定」．令文社，東京.

D－152

ヒトの歯の計測値

	全長	近遠心径	頬舌径	歯冠長	齲蝕	咬耗度	歯根の様子	備考
上顎乳中切歯	17.3	6.4	4.6	6.2	なし	切縁に線状に象牙質露出	完成	
下顎乳側切歯	15.4	4.9	3.9	6.3	なし	エナメルわずか咬耗	完成	左右残存
上顎乳犬歯	17.8	7.4	5.6	7.5	なし	尖頭部にごく小さく点状に象牙露出	完成	
下顎乳犬歯	17.6	5.2＋	4.7	6.6	なし	尖頭部に点状象牙質露出	完成	
上顎第1乳臼歯	13.7	7	8.5	5.4	なし	一部象牙質小さな点状露出	完成	
上顎第2乳臼歯	15.2	8.8	9.6	5.5	舌側咬頭にC3の齲蝕	エナメルわずか咬耗	完成	
下顎第2乳臼歯	14.8	9.3＋	8.2	8.6	点状にC2の齲蝕	エナメルわずか咬耗	完成	
上顎第中歯					なし	未萌出		歯槽内にあり
上顎犬歯		7.3	7	8.6	なし	未萌出		歯冠部ほぼ完成
上顎第1小臼歯		7.3	9.2	6.5	なし	未萌出		歯冠部ほぼ完成
上顎第1大臼歯		9.3	10.7	6.8	なし	未萌出	形成初期	結節状のカラベリー結節あり
下顎第1大臼歯		11.2	9.7	6.5	なし	未萌出	形成初期	左右残存

前藤部遺跡出土骨一覧表

発掘区	番号	種類	部位	計測値	備考
H－4	No.1	ウマ	左上腕骨	滑車幅66.4	破片多数
H－4	No.2	ウマ	左橈骨	別表	
H－4	No.3	ウマ	後肢基節骨	別表	
H－4	No.3	ウマ	後肢中節骨	別表	
H－4	No.3	ウマ	左橈骨	別表	
H－4		ウマ	後肢中足骨	別表	
C－4	No.14	シカ	右踵骨	保存長70.5，最大幅28.4，最大径32.6	
C－4	No.14	シカ	前位肋骨		
C－4	No.14	シカ	肋骨片	保存長43.4	打ち欠いたチップ状
C－4	No.3	シカ	左下顎第3後臼歯	歯冠長25.0，歯冠幅11.7，歯冠高16.7	ウマの肢骨片，頭蓋片あり
C－4		シカ	右肩甲骨	保存長75.6，関節窩長径33.1，関節窩幅30.0	
C－6		ウマ	部位不明		
C－9		シカ	肢骨片	保存長46.2	
C－16		シカ	角片	保存長52.0	
C－23		ウマ	左大腿骨	骨頭からの長さ335.0，近位最大幅98.6e	
C－49		ウマ	右上顎臼歯		歯冠部機械的にひどく破損
C－51		シカ	角	長38.6，径26.7×19.6＋	
C－87	No.1	ウマ	右橈骨	保存長280.0＋，中央幅36.7，中央径26.3	遠位骨端離脱
C－87		ウマ	左中手骨	別表	
D－6	一括	ウマ	全身あり	右下顎全臼歯列長168.0e，左上顎全臼歯列長145.0	
D－6	一括	ウマ	左距骨	滑車内側長50.2＋，滑車最大長48.2	
D－6	一括	ウマ	上腕骨	保存長136.0，骨体中央幅36.7，同最小径40.0	
D－6	一括	ウマ	大腿骨	保存長165.0＋	
D－6	一括	ウマ	中足骨	全長275.0	
D－6	一括	ウマ	右上顎第2切歯	歯冠長16.2，歯冠幅13.0，歯冠高54.3	
D－6	一括	ウマ	右下顎第1切歯	歯冠長13.0，歯冠幅12.6，歯冠高52.7	
D－99		ウマ	右橈骨片	保存長74.5＋	
D－127		ウマ	左距骨	滑車内側長49.7，滑車最大長40.8	
D－130		ウマ	右上顎第2前臼歯	歯冠高45.4	13宝塚より1才程度年長
D－152		ヒト	乳歯と永久歯	幼児	
C－196		シカ又はヤギ	上腕骨？	保存長63.0＋，径22.4×16.4	シカよりかなり小さい
C－206		ウマ	右上顎第1切歯	歯冠長18.4，歯冠幅9.2，歯冠高55.7	歯根完成間もない
なし	No.20	シカ	左下顎第3後臼歯	歯冠長27.0，歯冠幅13.1，歯冠高13.8	
57LH	No.53	ウマ又はウシ	椎体	保存長47.4mm	

御代田町前藤部遺跡出土の獣骨

群馬県立大間々高等学校　宮崎重雄

前藤部遺跡では、平安時代の竪穴住居址からウマが、中世の竪穴住居址からシカやウマが、中世～近世の土坑からはウマが、中世末の土坑からはヒトが出土している。

Ⅰ　平安時代竪穴住居跡

(1)　H－4号住居跡（図版33の3）

この住居跡からは、ウマの左上腕骨、左橈骨、後肢中足骨、後肢基節骨、後肢中節骨が出土している。馬骨の中で最も風化に強い歯牙が1片も検出されていないのは、この竪穴住居跡内には最初から頭部は持ち込まれていなかったのであろう。

肢骨のサイズは、馬格が南西諸島の宮古島に飼育されている宮古ウマに匹敵することを示し、120cm代の体高を推定させる。当時としてはごく普通の体高のウマである。

残存部位で見る限り骨端の離脱はなく、成馬ではあるが、性別は不明である。

Ⅱ　中世竪穴住居跡

(1)　C－4号竪穴遺構（図版33の4）

シカの右肩甲骨片（保存長75.6mm、関節長3.1mm、関節窩幅30.0mm）、左下顎第3後臼歯（歯冠長25.0mm、歯冠幅11.7mm、歯冠高16.7mm）、肋骨2片、右踵骨片（保存長70.5mm、最大幅28.4mm、最大径32.6mm）が出土している。重複部位がないことから、同一個体のものと思われる。

肢骨の大きさは足尾山地産の現生ニホンジカの雄に匹敵する体格であることを示している。角が検出されていないため、雌雄は不明である。

(2)　C－6号竪穴遺構

ウマの骨と推定されるが、詳細は不詳である。

(3)　C－9号竪穴遺構

シカの肢骨片であることはわかるが、詳細は不詳である。保存長は46.2mmである。

(4)　C－16号竪穴遺構

保存長52.0mmのシカの角片であるが、保存不良で詳細は不詳である。

(5)　C－23号竪穴遺構

ウマの左大腿骨である。骨頭からの長さは335.0mmで、近位端最大幅は98.6mmである。大腿骨の

サイズから推定される馬格は南西諸島の与那国島に生息する与那国馬ほどで、110cm代の体高が推定される。

(6)　C－49号竪穴遺構

馬の右上顎臼歯であるが、歯冠部の破損がひどく詳細は不詳である。

(7)　C－51号竪穴遺構

シカの角片で、破断面の径は26.7×19.6＋mm、長さ38.6mmである。

(8)　C－87号竪穴遺構

ウマの右橈骨と左中手骨が出土している．橈骨の遠位骨端は離脱している。この部位が癒合するのは3.5才とされ、中手骨の癒合が1.5才とされていることから、この個体は2―3才と思われる。

中手骨全長から推定される体高は141.2cmで、大きめの中型在来馬相当であり、中世馬としては最大級に属す。

(9)　C－196号竪穴遺構

シカ又はヤギの上腕骨と思われる骨片で、保存長63.0mm、骨体中央部の径は22.4×16.4mmである。

(10)　C－206号竪穴遺構

ウマの右上顎第1切歯で、歯冠長18.4mm、歯冠幅9.2mm、歯冠高55.7mmである。年令は5―6才と思われる。

III　中世―近世土坑

(1)　D－6号土坑（図版33の2）

ウマが1頭分土坑中から出土した。破損著しく全長が計測されるのは唯一中足骨のみで、275.0mmの値を得た。この値から推定される体高は136.3cmで、中型在来馬並みである。

切歯の咬合面の模様から推定される年令は13―15才で、老齢馬に近い。

このウマは異常咬耗が著しく、右下顎臼歯では咬耗面が第1後臼歯の中央で上方に尖り、第2後臼歯で急傾斜して下降し、第3後臼歯でほぼ水平になる。左上顎では、第2前臼歯の近心半でエナメル質が咬耗しつくされ、咬合面が急傾斜している。第2後臼歯・第3後臼歯の接触部付近で下方に尖り、第3後臼歯の遠心部は急傾斜している。上顎第3前臼歯・第4前臼歯では前小窩、後小窩が咬耗しつくされている。第1後臼歯はエナメル質が咬耗しつくされ、咬合面が凹湾している。右の上顎臼歯も異常咬耗の様子、咬耗度とも左とほとんど同様である。

左下顎全臼歯列長は160.0mmで、左上顎全臼歯列長は145.0mmである。

(2)　D－99号土坑

ウマの右橈骨片が出土している。保存長は74.5㎜である。

(3)　D－127号土坑（時代不明）

ウマの左距骨で、滑車内側長は49.7㎜、滑車最大長は40.8㎜である。この大きさは小型在来馬のトカラ馬相当である。

(4)　D－130号土坑

多量の鉄くずとともに右上顎第2全臼歯が出土した。歯冠高は45.4㎜で5―6才と思われる。

Ⅳ　グリッド・表面採集

(1)　57・くHグリッド

ウマ又はウシの椎体で、保存長は47.4㎜である。

(2)　表面採集

シカの左下顎第3後臼歯で歯冠長27.0㎜、歯冠幅13.1㎜、歯冠高13.8㎜である。

参考文献

Goubaux A. and Barrier G. (1892) The Exterior of the Horse. J.B. Lippincott Co.

林田重幸・山内忠平（1957）　馬における骨長より体高の推定法．鹿児島大學農学部学術報告，6，146－156.

林田重幸（1978）　「日本在来馬の系統に関する研究」．日本中央競馬会

西中川駿・松元光春（1991）　遺跡出土骨同定のための基礎的研究―とくに在来種および現代種の骨、歯の計測値の比較―「遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路の関する研究」，平成2年度文部省科学研究費補助金（一般研究B）研究成果報告書．164－188.

大泰司紀之（1980）　遺跡出土ニホンシカの下顎骨による性別・年齢・死亡季節査定法．考古学と自然科学，13，51－72.

Levine M (1982) The use of crown height measurements and eruption-wear sequences to age horse teeth. In Wilson B., Grigson C. and Payne S. eds. Ageing and Sexing Animal Bones from Archaeological Sites. Bar British Series 109,223-250.

Silver I. A. (1971) The Ageing of Domestic Animals. In Brothwell D. and Higgs E. eds. Science in Archaeology. Thames and Hudson,283-302.

馬骨計測値

	MTB.H-4,No. 2	MTB.H-4,No. 1	MTB.H-4,No. 3	MTB.H-4,No. 3	MTB.C-87
	左 橈 骨	中 足 骨	後肢基節骨	後肢基節骨	左中手骨
全長	257.0+	186.0+	80.0	40.2+	232.1
近位端横径	72.3		48.8	44.0	46.8+
近位端矢状径	43.8		33.4	28.2	34.9
骨体中央横径	35.3	28.9	28.6		31.4+
骨体中央矢状径	24.2	23.4	21.5		25.9
遠位端横径		45.2	42.3		42.9+
遠位端矢状径		32.8	20.9		30.0+

馬歯計測値

上顎臼歯

	MTB.C-3 第3前臼歯 左	MTB.C-262 第4前臼歯
歯冠長	27.1	24.2
歯冠幅	21.8	24.6
原錐幅	12.8	8.2
歯冠高（頬側）	70.0+	25.2
歯根の状況	歯髄開放	咬耗進行

下顎臼歯

		MTB.C-15 第1乳臼歯	MTB.H-1 第2乳臼歯	MTB.H-1 第3乳臼歯	MTB表採 第1後臼歯	MTB表採 第2後臼歯	MTB表採 第3後臼歯
歯冠長	咬合面	35.2	29.7	34.7	25.4	27.0	
〃	歯根から3cm		※28.3	※29.8	24.7	25.3	31.1
歯冠幅	咬合面	※12.0	※14.0	※13.0	13.7	12.9	
〃	歯根から3cm		※13.1	※12.7	13.9	12.9	10.8+
歯冠高	頬 側	20.1	20.9	25.6	71.6	75.2+	52.0+
〃	舌 側		19.4	25.7	72.6	81.0+	57.4+
下後錐谷長		9.6	10.1	9.0		9.2	
下内錐谷長		15.0	11.7	10.8	10.3	11.9	
double knot長	咬合面	15.3	9.1	13.9	14.4	13.3	12.6
下内錐幅		5.6	4.8	4.1	4.3	4.1	
歯根の状況		歯髄腔閉鎖	歯髄腔閉鎖	歯髄腔閉鎖	分岐直後	歯髄開放	最後葉未萌出
備考		左右あり					

3　遺構と遺物のまとめ

前藤部遺跡の発掘調査の成果・課題を列挙する。

1　室町時代　14世紀後半から15世紀前半を中心とする中世集落の様子が垣間見えた。佐久市の調査分も含めて考えると実に広大な集落であったようだ。また、集落内の鍛冶屋さんの役割を果たしたと考えられる鍛冶遺構も発見された。

2　城館跡以外でも中世に竪穴住居が流行していた。佐久市大井城・金井城跡の調査でも明らかなように、戦国時代を中心とする城館跡では倉庫や野営地的な性格の強い竪穴遺構が群在していた。今回、時代がやや先行する前藤部遺跡の集落跡では倉庫的な竪穴遺構のほか、明らかに住居として機能した竪穴遺構が併存することが判明した。

3　配石土坑の性格については、15世紀以降すなわち本遺跡でも新しい時期に形成されたことがわかったほかは明らかにできなかった。

4　生活用品に多量の陶磁器が含まれていた。その産地・窯については国内は古瀬戸、中津川、常滑、珠洲、国外は中国など広域からもたらされたものであった。

5　城館跡で多く発見されるかわらけが少ない半面、古瀬戸の瓶類の出土が多いなどの一般集落にはみられない特殊性も見られた。これは何を意味するのであろうか。

6　人骨は幼児の遺体が埋葬されたD－152号土坑のみ、墓域として利用されることは少なかったようである。

7　遺構内覆土から、獣骨の断片や貝殻の出土が目立った。何らかの理由で獣骨や貝殻を保持する習慣が前藤部の中世集落にあったのか。

課題ばかり列挙した。今後佐久市発掘分も含めてこの大きな中世集落の分析を試みたい。

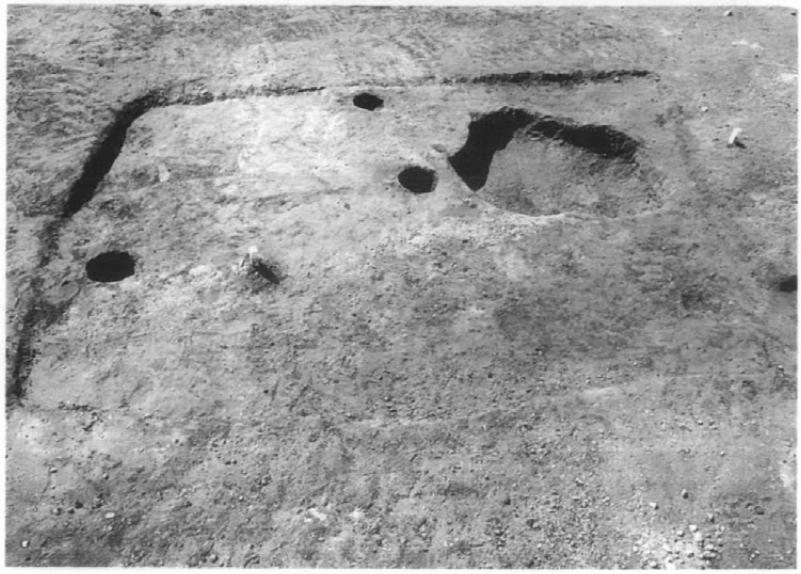
最後に、緊急性の高い調査であったため、作業員ならびにシルバー人材センター派遣職員の皆さんに大変なご苦労をいただいた。時に過労で目がくらむ事もしばしばであった。過酷な調査に参加いただき、多大な成果を上げることができた。ここに皆さんのご協力に対し、幾重にも感謝申し上げる。

IV

写真図版

1．H－1号住居跡

2．H－2号住居跡



3．H－3号住居跡

図版 2

1．H－4号住居跡

2．C－1号竪穴遺構

3．C－2号竪穴遺構

1．C－3号竪穴遺構

2．C－4号竪穴遺構

3．C－5号竪穴遺構

図版 4

1．C－6号竪穴遺構

2．C－7号竪穴遺構

3．C－8号竪穴遺構

4．C－9号竪穴遺構

5．C－10号竪穴遺構

1．C−11号竪穴遺構

2．C−12号竪穴遺構

3．C−13号竪穴遺構

図版 6

1．C－14号竪穴遺構

2．C－15号竪穴遺構

3．C－16号竪穴遺構

1．C−17号竪穴遺構

2．C−18号竪穴遺構

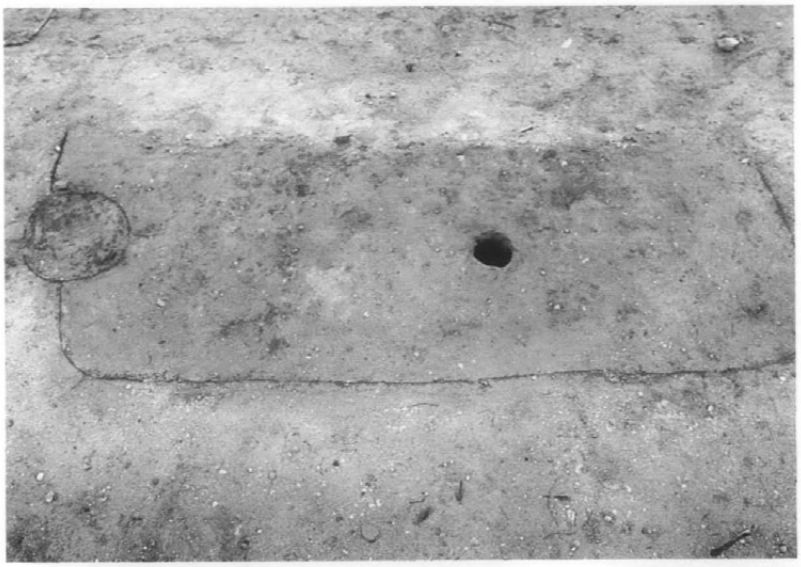
3．C−19号竪穴遺構

図版 8

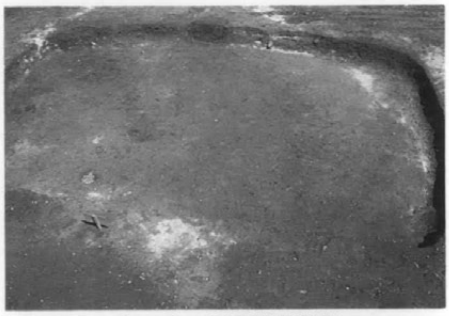
1．C－20号竪穴遺構

2．C－21号竪穴遺構

3．C－22号竪穴遺構



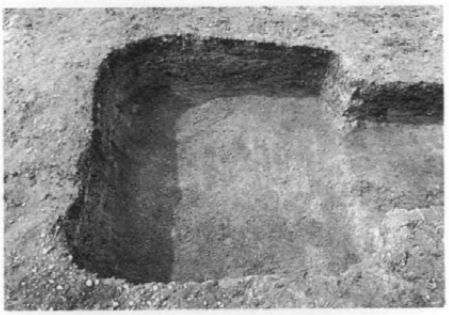
1．C－23号竪穴遺構



2．C－24号竪穴遺構

3．C－28号竪穴遺構

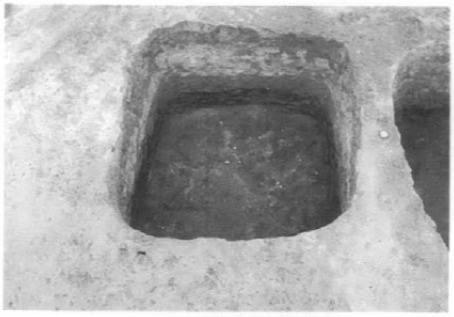
4．C－29号竪穴遺構



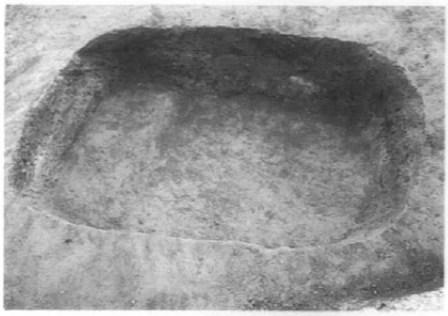
5．C－31号竪穴遺構

6．C－35号竪穴遺構

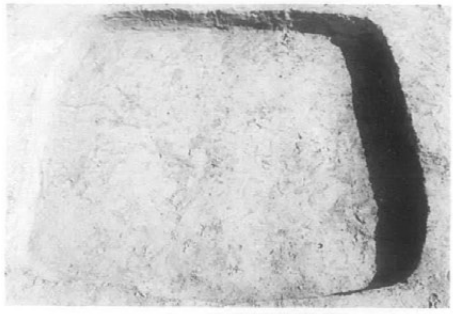
7．C－36号竪穴遺構



1．C－37号竪穴遺構

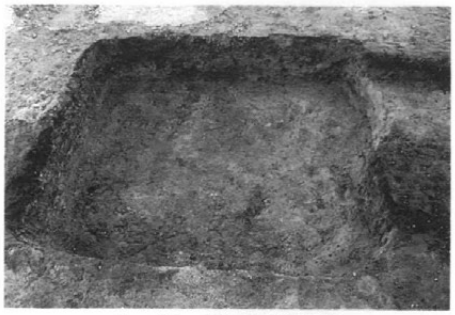


2．C－38号竪穴遺構



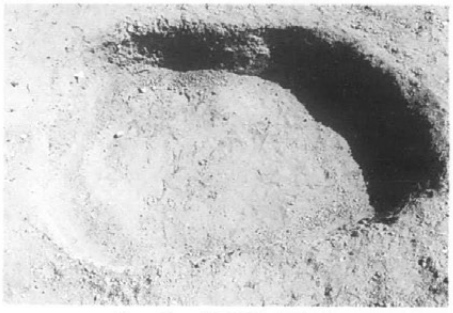
3．C－39号竪穴遺構

4．C－43号竪穴遺構



5．C－46号竪穴遺構

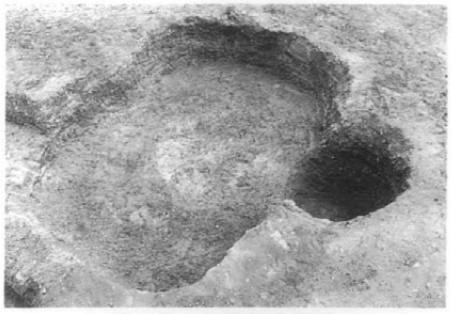
6．C－47号竪穴遺構



7．C－50号竪穴遺構

8．C－51号竪穴遺構

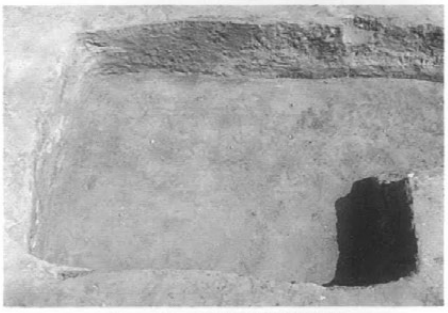
9．C－56・57号竪穴遺構



10．C－58号竪穴遺構

1．C－61号竪穴遺構

2．C－63号竪穴遺構



3．C－64号竪穴遺構

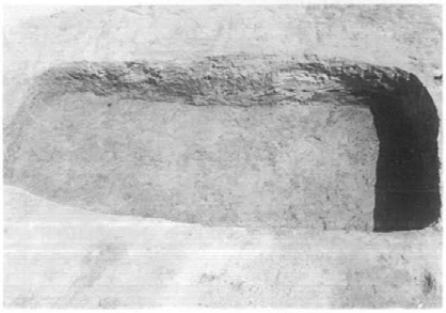
4．C－66～69号竪穴遺構

5．C－70・71号竪穴遺構

6．C－72号竪穴遺構

7．C－73号竪穴遺構

8．C－74号竪穴遺構

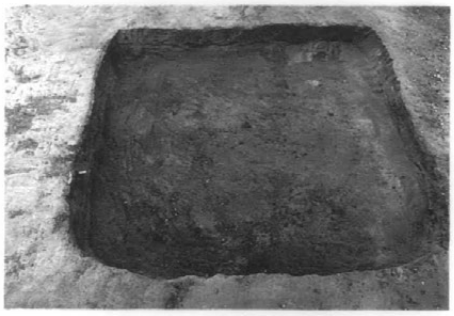


9．C－75号竪穴遺構

10．C－79号竪穴遺構

1．C－80号竪穴遺構

2．C－83号竪穴遺構



3．C－84号竪穴遺構

4．C－85・86号竪穴遺構

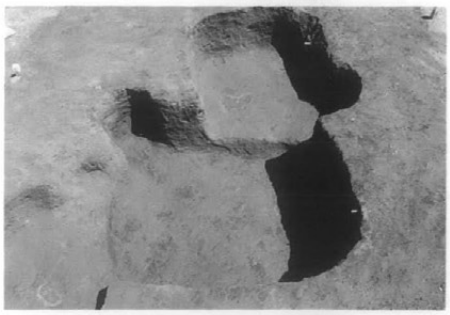
5．C－87号竪穴遺構

6．C－88号竪穴遺構

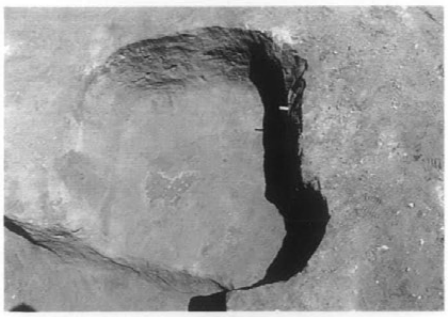
7．C－94～97号竪穴遺構

8．C－98号竪穴遺構

9．C－99号竪穴遺構



10．C－102号竪穴遺構



1．C－103号竪穴遺構

2．C－104号竪穴遺構

3．C－106号竪穴遺構

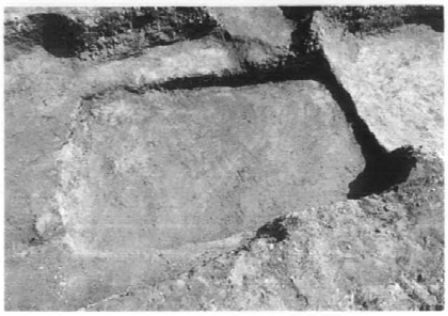
4．C－107・108号竪穴遺構

5．C－109号竪穴遺構

6．C－111・112号竪穴遺構

7．C－114号竪穴遺構

8．C－115号竪穴遺構



9．C－116号竪穴遺構

10．C－118号竪穴遺構

1．C－121号竪穴遺構

2．C－124号竪穴遺構

3．C－126号竪穴遺構

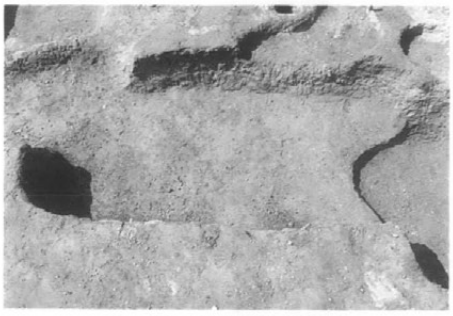
4．C－128号竪穴遺構

5．C－130号竪穴遺構

6．C－135号竪穴遺構

7．C－139号竪穴遺構

8．C－140号竪穴遺構



9．C－141号竪穴遺構

10．C－147号竪穴遺構

1．C－148号竪穴遺構

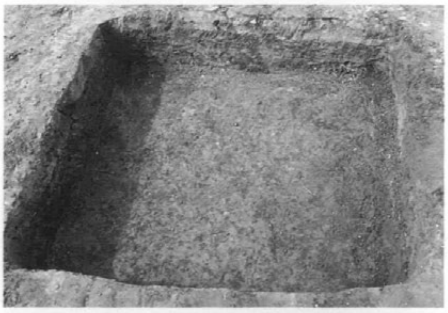
2．C－150・151号竪穴遺構

3．C－152号竪穴遺構

4．C－153号竪穴遺構

5．C－156号竪穴遺構

6．C－158・159号竪穴遺構

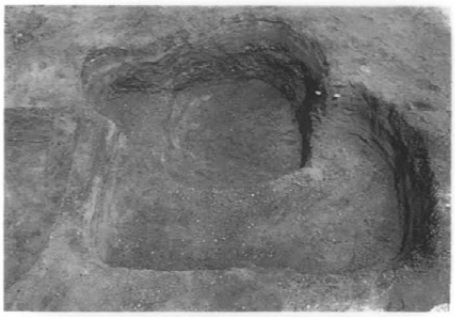


7．C－163号竪穴遺構

8．C－164号竪穴遺構

9．C－165号竪穴遺構

10．C－166・167号竪穴遺構

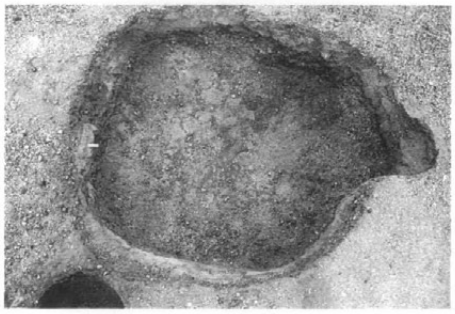


1．C－174・175号竪穴遺構

2．C－176～178号竪穴遺構

3．C－180号竪穴遺構

4．C－187号竪穴遺構



5．C－193号竪穴遺構

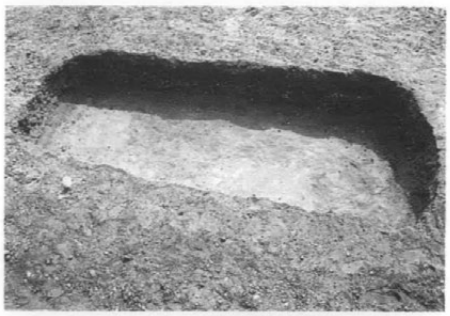
6．C－194・195号竪穴遺構

7．C－196号竪穴遺構

8．C－199号竪穴遺構

9．C－204号竪穴遺構

10．C－208～214号竪穴遺構



1．C－223号竪穴遺構

2．C－226号竪穴遺構

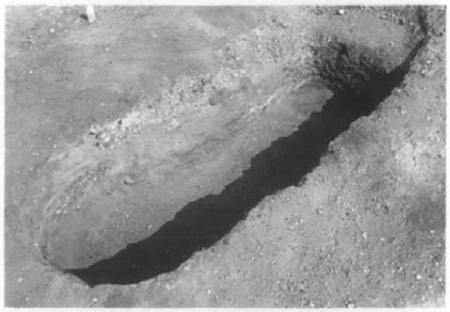
3．C－227号竪穴遺構

4．C－229・230号竪穴遺構

5．C－238～240号竪穴遺構

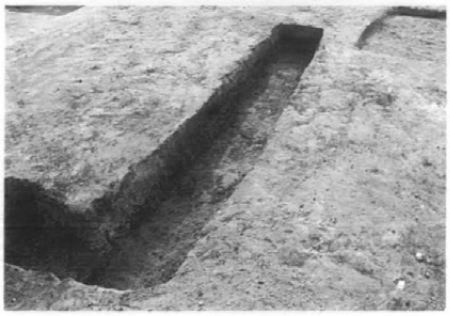
6．C－248号竪穴遺構

7．C－249号竪穴遺構



8．C－250号竪穴遺構

9．C－253号竪穴遺構



10．C－254号竪穴遺構

図版18

1．C－255号竪穴遺構

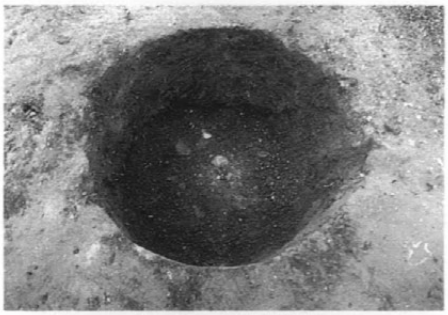
2．C－256号竪穴遺構

3．C－258号竪穴遺構

4．C－259号竪穴遺構

5．C－260号竪穴遺構

6．C－264号竪穴遺構



1．D－33号土坑

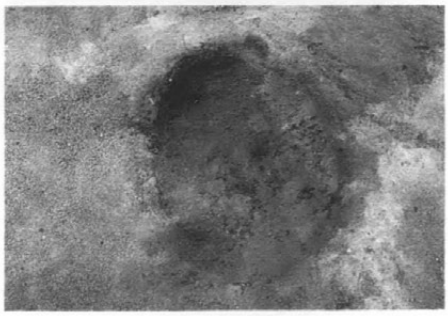
2．D－39号土坑

3．D－47号土坑

4．D－88号土坑

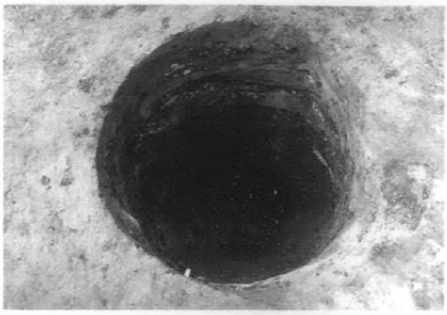
5．D－89号土坑

6．D－106・107号土坑



7．D－109号土坑

1．D－114号土坑



2．D－116号土坑

3．D－118号土坑

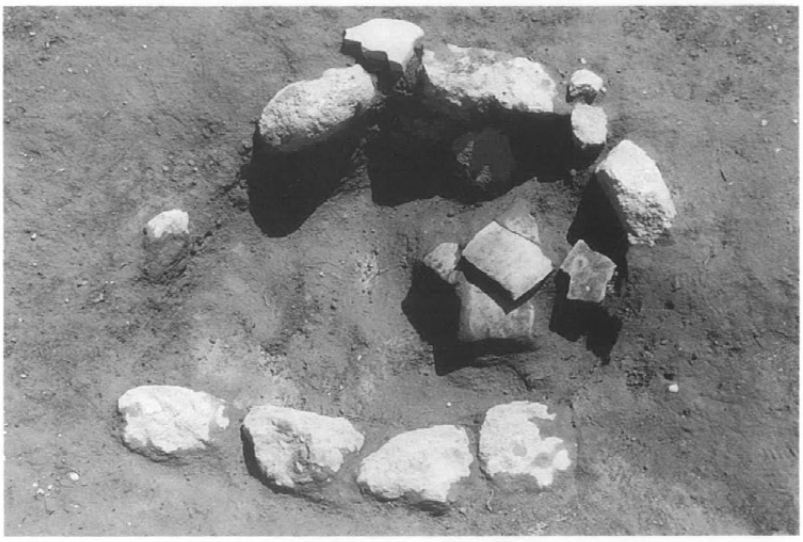
4．D－202号土坑

5．D－130号土坑

1．D－152号土坑

2．D－207号土坑

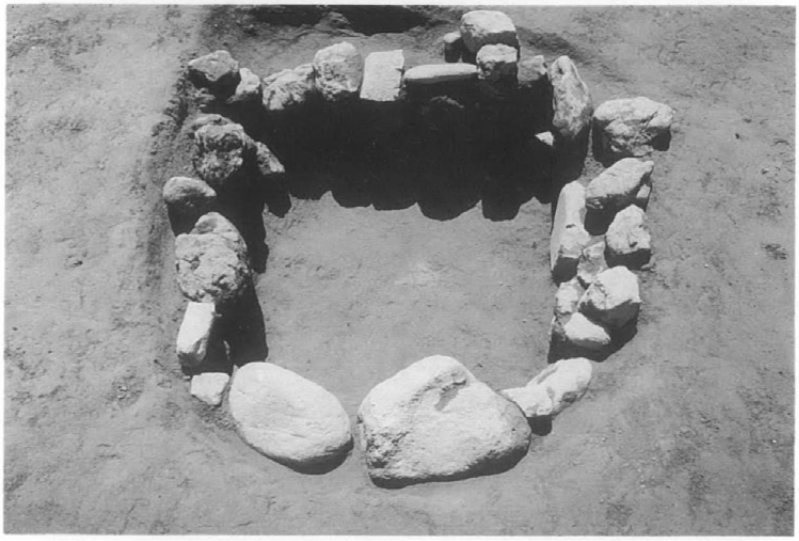
1．D－211号土坑



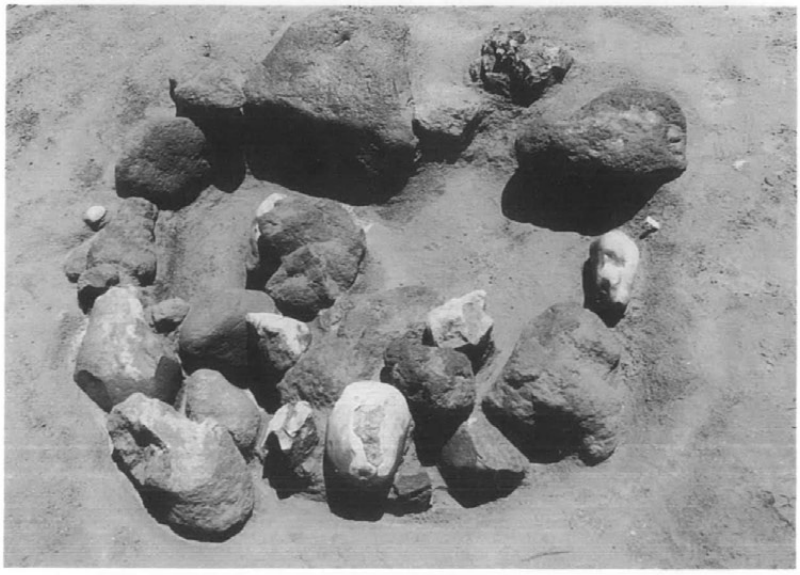
2．D－212号土坑

3．D－214号土坑

1．D－215号土坑



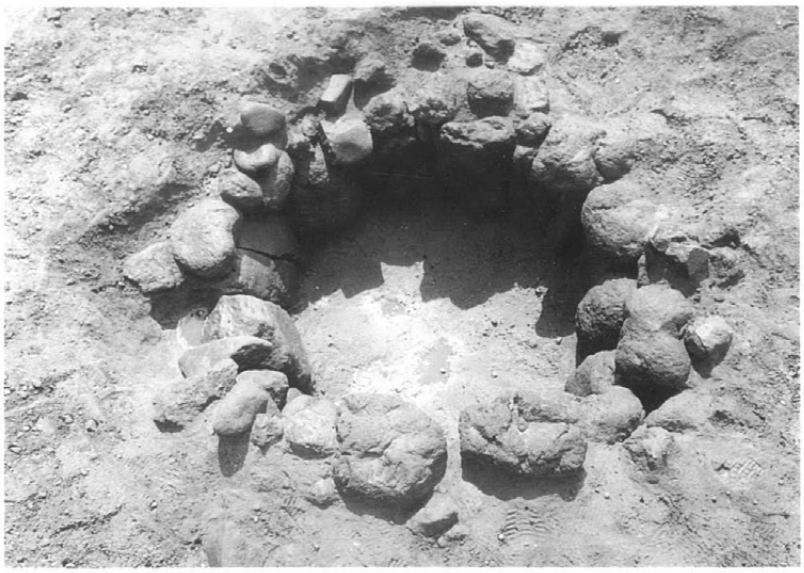
2．D－216号土坑



3．D－217号土坑

図版24

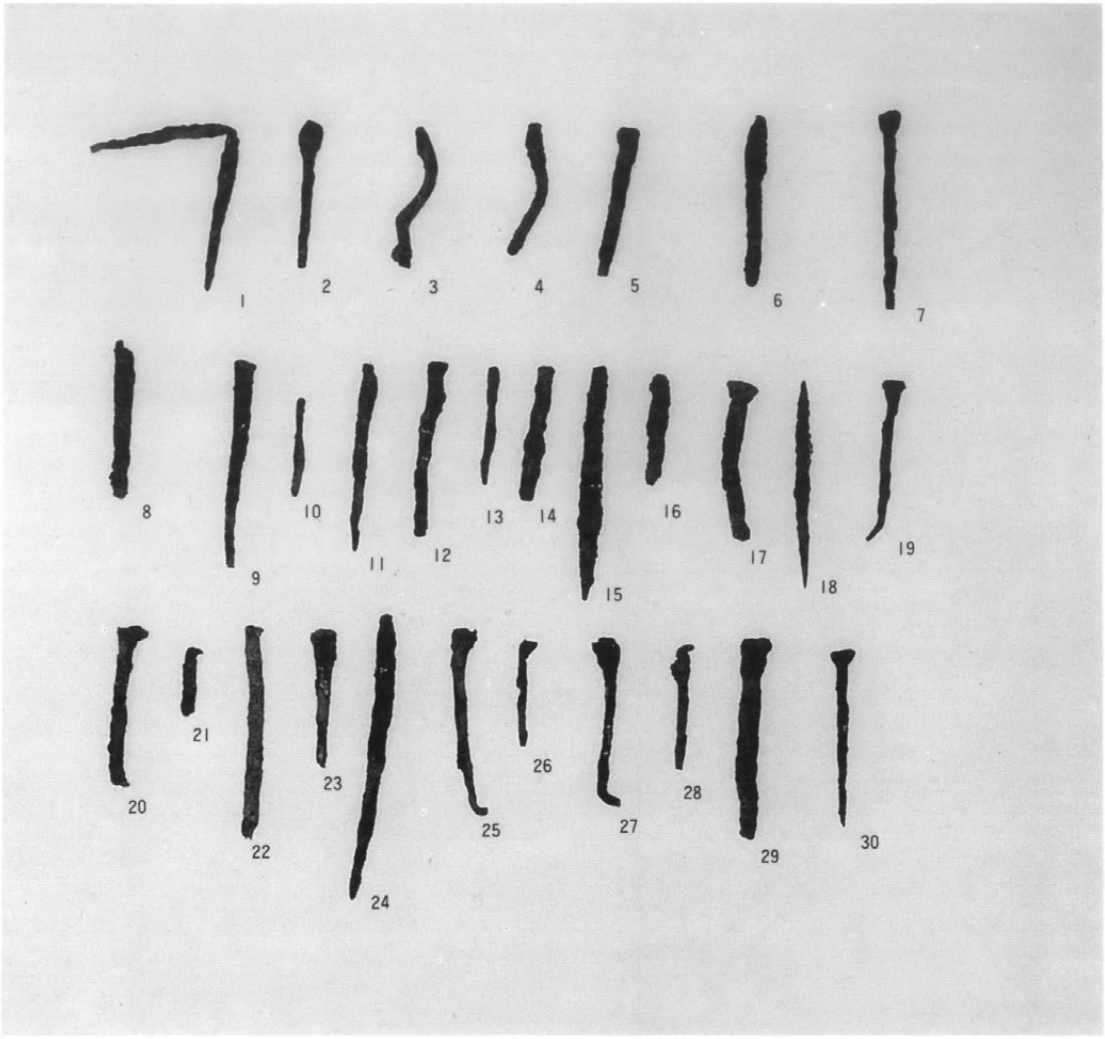
1．D－218号土坑



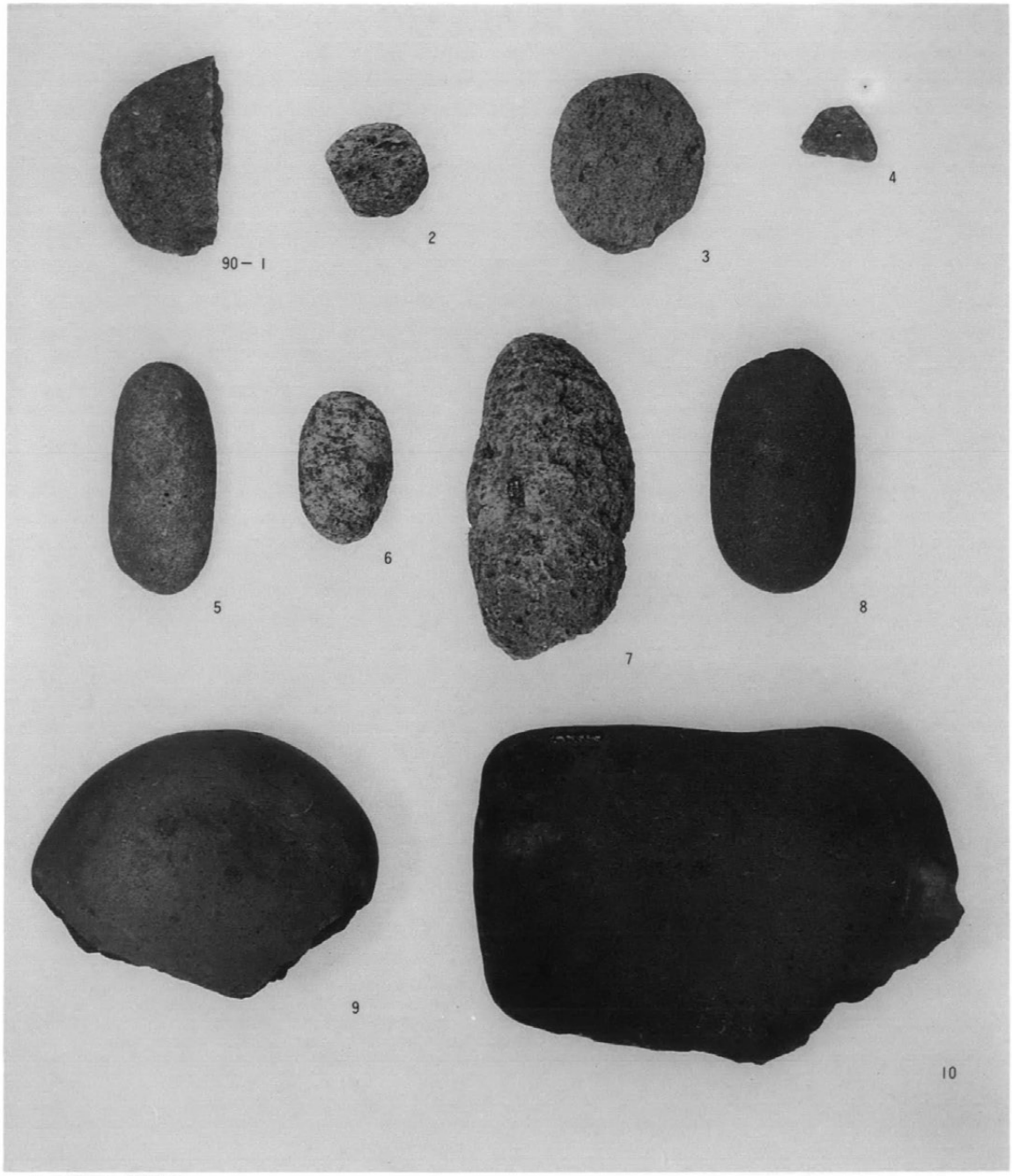
2．D－219号土坑

1．内耳鍋

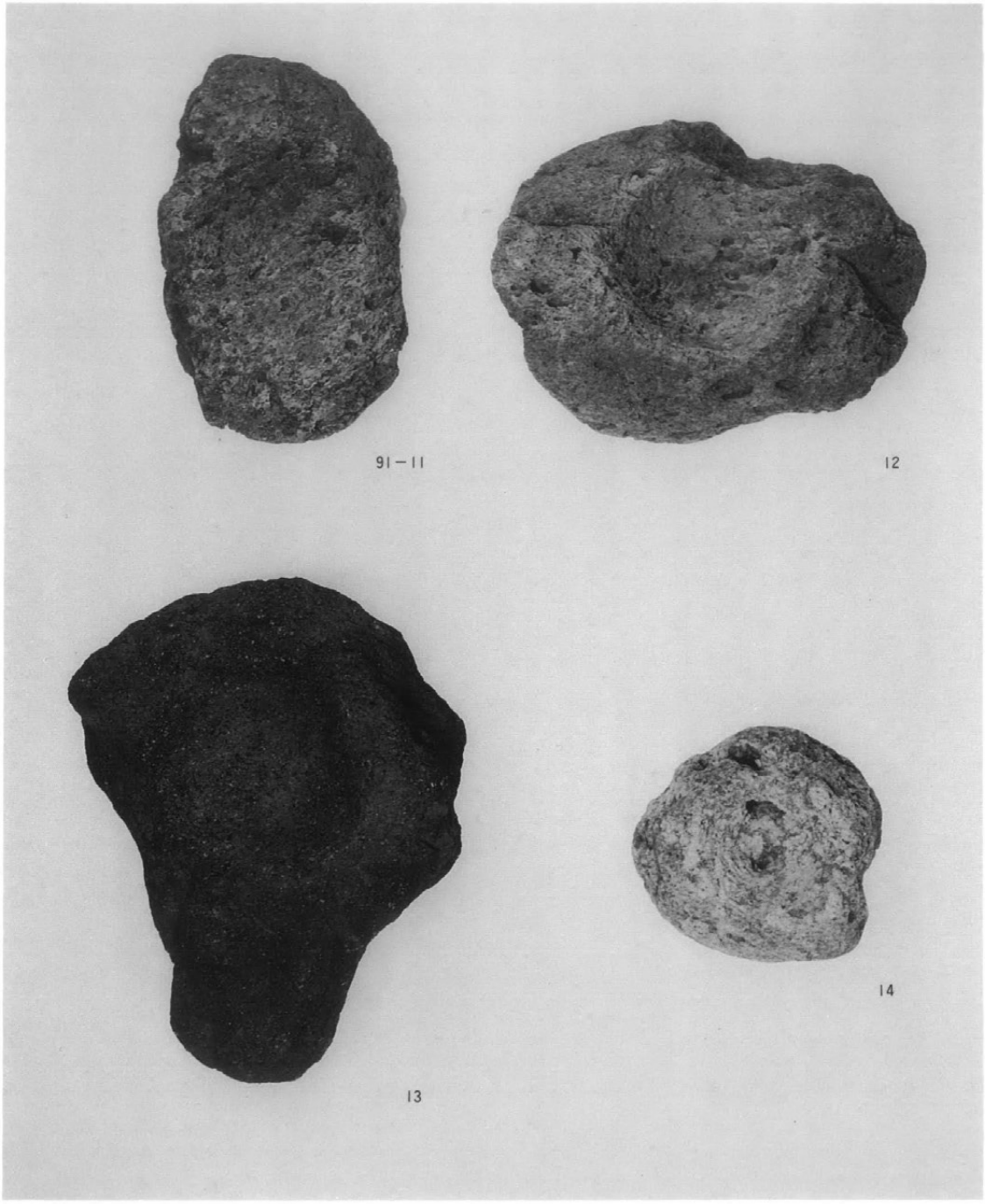
2．かわらけ


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

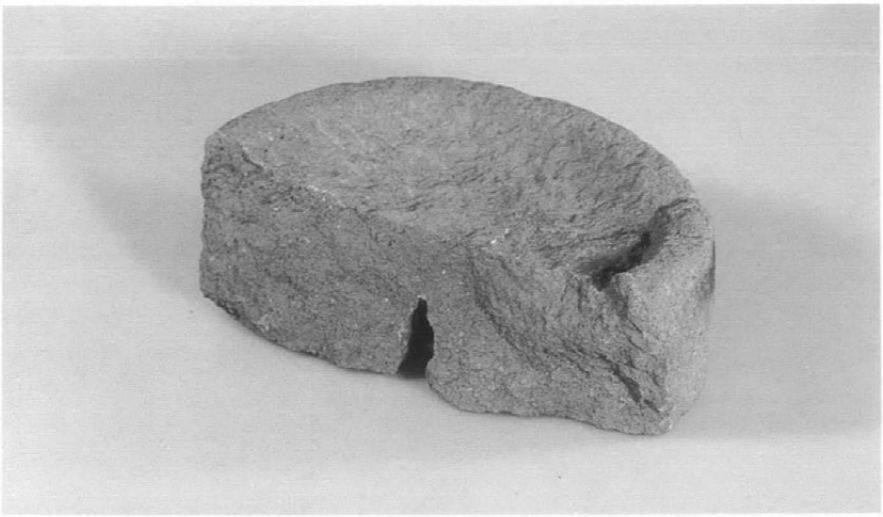
1．釘



1．磨石・石製品



1．凹　石



1．石臼（上臼）93－21

石臼裏面93－21

凹石92－20

凹石
92－17

2．石臼・凹石

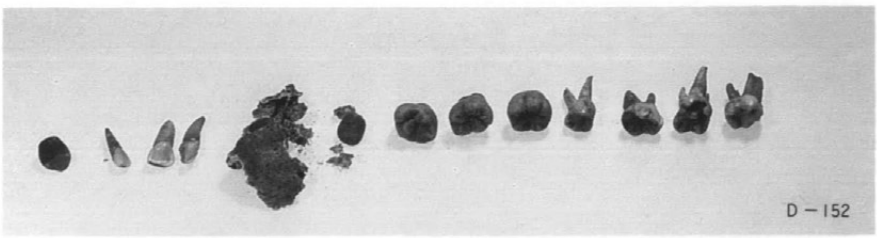
1．茶臼（下臼）

2．茶臼（下臼）

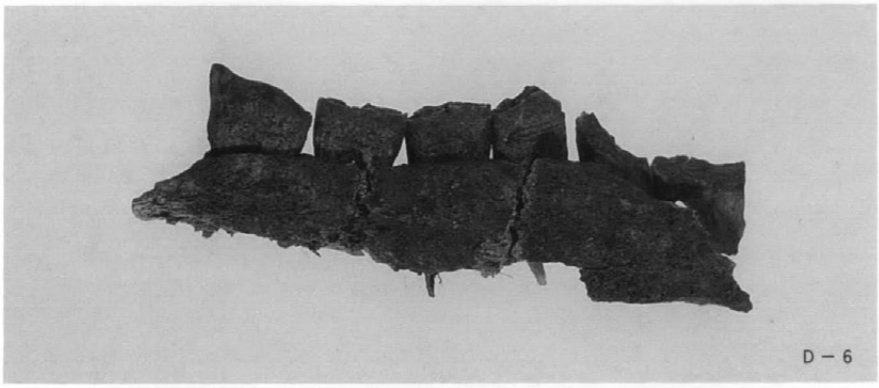
1．石臼未製品

1．石擂り鉢

2．石擂り鉢

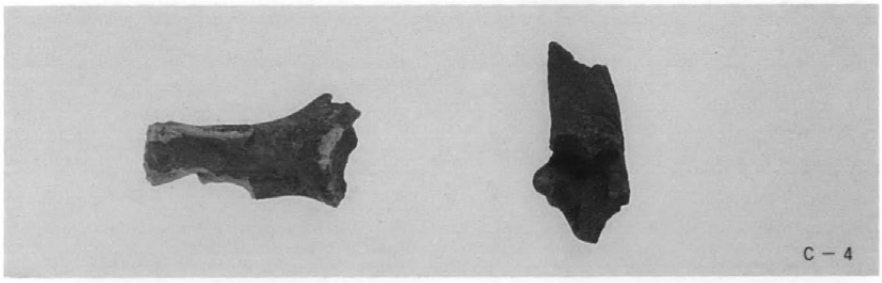


1．人骨
幼児の乳歯

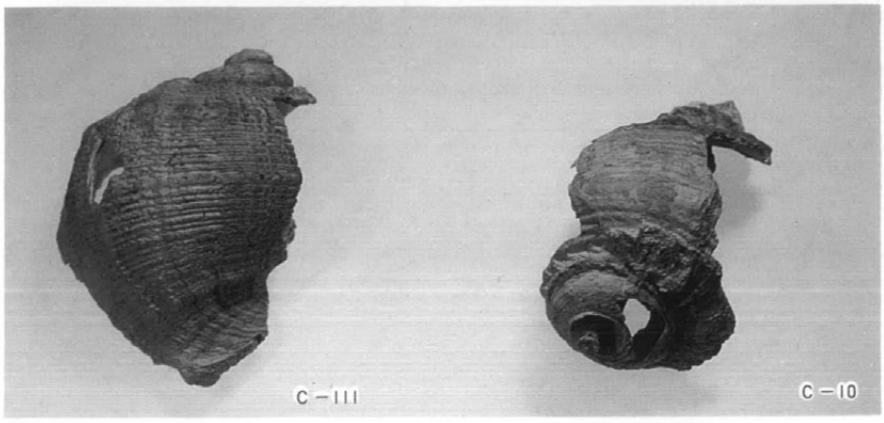


2．馬骨
右下顎骨

3．馬骨
左橈骨



4．鹿
右踵骨、右肩甲骨



5．骨殻
アカニシ

1．整理スナップ

2．整理スナップ

報告書抄録

ふりがな	まえとうぶいせき
書名	前藤部遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	御代田町埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第２６集
編著者名	小山岳夫
編集機関	御代田町教育委員会
所在地	〒389－0206　長野県北佐久郡御代田町大字御代田2464-2　TEL 0267（32）3111
発行年月日	1999年　3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	調査期間	調査面積	調査原因
前藤部遺跡（まえとうぶいせき）	御代田町（みよたまち） 大字御代田（みよた） 字前藤部（まえとうぶ）	1,323	平成９年２月27日 ～６月６日	12,600㎡	小田井ショッピングセンター建設のため

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
前藤部遺跡	集落跡	平安後期 中世 室町	竪穴住居跡　４軒 竪穴遺構　269軒 土坑　228軒 鍛冶遺構	土師器 かわらけ・石臼 陶磁器等	城館とは異なる中世集落の大規模調査。中世の竪穴住居・倉庫を多数検出。

御代田町の埋蔵文化財発掘調査報告書

第１集	御代田町教育委員会	1975	『馬瀬口下原古墳群』
第２集	御代田町教育委員会	1985	『野火付遺跡』
第３集	御代田町教育委員会	1985	『宮平平―遺構編―』
第４集	御代田町教育委員会	1986	『大沼遺跡』
第５集	御代田町教育委員会	1987	『前田遺跡』
第６集	御代田町教育委員会	1988	『十二遺跡』
第７集	御代田町教育委員会	1989	『根岸遺跡』
第８集	御代田町教育委員会	1989	『広畑遺跡』
第９集	御代田町教育委員会	1990	『聖原Ⅱ遺跡』
第10集	御代田町教育委員会	1991	『川原田・城之腰遺跡発掘調査概要報告書』
第11集	御代田町教育委員会	1992	『城之腰遺跡』
第12集	御代田町教育委員会	1992	『細田・塚田・下荒田遺跡発掘調査概要報告書』
第13集	御代田町教育委員会	1993	『川原田遺跡―平安・中世編―』
第14集	御代田町教育委員会	1993	『細田遺跡』
第15集	御代田町教育委員会	1993	『滝沢遺跡調査概要報告書』
第16集	御代田町教育委員会	1993	『西駒込・東二ッ石・湧玉遺跡』
第17集	御代田町教育委員会	1994	『下弥堂遺跡』
第18集	御代田町教育委員会	1994	『塚田遺跡』
第19集	御代田町教育委員会	1994	『前藤部・聖原Ⅱ・清水平・上屋敷・湧玉遺跡』
第20集	御代田町教育委員会	1995	『下荒田遺跡』
第21集	御代田町教育委員会	1995	『東荒神・下大宮・関屋・中屋際遺跡』
第22集	御代田町教育委員会	1997	『川原田遺跡』
第23集	御代田町教育委員会	1997	『滝沢遺跡』
第24集	御代田町教育委員会	1998	『めがね塚１号古墳』
第25集	御代田町教育委員会	1998	『町内遺跡'97』
第26集	御代田町教育委員会	1999	『前藤部遺跡』
第27集	御代田町教育委員会	1999	『町内遺跡'98』

前藤部遺跡

長野県北佐久郡御代田町前藤部遺跡発掘調査報告書

1999年３月31日　発行

編　集　御代田町教育委員会
発　行　御代田町教育委員会
印　刷　ほおずき書籍株式会社

㈱オークサ・マテックス　御代田町教育委員会

佐久　インターウェーブ空中写真